

1. DEFINITION

001 Philosophy has been defined as the love of wisdom. A systematic general conception of principle as applied to a philosophy of life. The knowledge of the cause of all phenomena both of mind and matter.

第1章 定義

001 哲学とは英知を愛することと定義されて来ました。それは人生観に適用される系統立った原理の一般的な概念です。また、それは心と物質の両面に関する全ての現象の因への知識でもあります。

【解説】

哲学(philosophy)の語源はphilo(愛する) +soph (智恵) から成るとされており、本文中の記述は著者がそのことを述べているものと思われます。また、人生観あるいは人生哲学という内容もphilosophyの語感には含まれています。

また系統立った原理の説明がなされて行くとされていることも、この「宇宙哲学」の特徴です。

本講座で、アダムスキー氏の哲学3部作全てに取り組むこととなりました。一段落ずつ読んで行きますので、お付き合い下さい。

なお、原文では章番号はありませんが、整理の都合上、章番号を加えてありますので、ご注意下さい。

002 Cosmic philosophy embraces the Universe conceived as an orderly and harmonious system complete in itself.

002 宇宙哲学は整然として調和が保たれ、それ自体で完結している一つお体系として理解される宇宙を奉じるものです。

【解説】

この宇宙哲学は1961年の著作とされています。他の2部作と取り扱う角度が若干異なり、系統立った原理の理解に主眼を置いています。その為、本項ではそもそもこれから始まる「宇宙哲学」とはどのようなものを対象とするのか、どのような視点を構えているのかを明らかにすることから始めています。

まずは、大宇宙自体は決して混沌としたものではなく、整然と調和がとられた世界なのだということ、それ自体に全てがあることを認識して欲しいと述べられています。

とかく私達は宇宙空間が無秩序な偶然が支配する、互いにばらばらは空間だと思いがちですが、実際、そのような世界は長続きしない訳で、少なからず一定の法則の下、調和的な活動が行なわれていると思ふべきです。これは私達の身体の諸活動を見れば明らかで、このような互いに連携し調査した活動があつてはじめて永続性が保たれる訳です。

お知らせ [2010-12-12]

いつも、ご覧戴きありがとうございます。

実は先週後半から、若干体調を崩しております。

症状は軽い食当たりなのですが、海外出張中のことでもあり、大事をとって土日はホテルで休養しております。

連夜の仕事の疲れもあったかと思えます。

その為、体調が元に戻るまで、しばらくの間、本講座の更新をお休みしますので、ご了承下さい。

なお、徐々に回復基調にありますので、ご安心下さい。

12月12日

竹島 正

再開のお知らせ [2010-12-15]

皆様にご心配かけましたが、体調も回復した為、
本日より、再開致します。

ご心配をかけてしまい、申し訳ありませんでした。
今後とも宜しく願いいたします。

12月15日

竹島 正（於 中国雲南省昆明）

003 Our present perception of mind and matter must be expanded to the realm of Cause in order to understand and take our place in the class room of everlasting learning.

003 私達の現在の心と物質に関する知覚力を理解の為に因の領域にまで広げ、永遠の学習の教室における私達の席を手に入れなければなりません。

【解説】

ここで注目したいのは、心も因の領域との関係で理解せよと言っている点です。言い換えれば、心自体も因によって生まれた一つの結果と言うことが出来るのではないのでしょうか。いわゆる「放蕩息子」の例えです。

私達は表面的な結果、更にはその時々身体の調不調時の苦痛も含めて、結果に振り回されて来ましたが、その現実を否定することなく、しかしその奥に働く原理を洞察し、その根本原因に気付こうとすることが大切だということです。

現実に現れた諸現象から何を観て、何を感じるか、私達が現象をもたらした内奥の原因にまで気付くようにならないと、他の惑星人と交流できるレベルには達しないということでしょう。

004 Observation is our greatest teacher but we must learn to see the Cause or the related purpose of all forms or manifestations.

004 観察は私達の最大の教師ですが、私達は因あるいは、全ての形あるもの・創造の現れ、の相互に関連した目的を観るよう学ばなければなりません。

【解説】

先ずは観察からなのですが、この「観察」、単に物体や現象を眺めよという訳ではありません。物事を観察する時には、その物事が他とどのように関連しており、他のものとの関わりにおいてどのような意義や役割があるのかを観るよう努めよと言っているのです。

この物事の間に関連性を「因」という概念に相当すると著者は説いているように思われます。

もちろん、冷静な立場、感情のレベル段階から離れて、客観的に観察することは大切です。本項では更に深く、広く、物事の相互関係、相互依存を洞察出来るよう、観察力を養えと述べています。

005 Principle, or source of origin, and nature's laws remain forever the same for they are immutable. Man's concept of the law expands as he desires to know more and more of his purpose in relation to the Cosmos.

005 原理、あるいは起源の源と自然の諸法則は永遠に同じであり続けます。何故なら、それらは不変であるからです。人のその法則に対する概念は、その人が自らの存在目的を大宇宙に関連して知ろうとすればするほど、広がって行きます。

【解説】

ここでは「原理」と「自然の諸法則」は永遠に変わらないものだと説いています。この内、原理とは、「原則」や「方針」、「本源」や「主義」を示唆し、文字通りの物事の有り様の原則を意味しています。また、諸法則とは、「法律」や「(科学の)法則」、「(宗教上の)おきて」等、具体的な作用原理を指すものと思われず。これらは太古から現在、更に未来まで変わることはないと言っています。

宇宙とは、そうした未来永劫、同じ原理が働いている創造的空間と言えるでしょう。私達が把握する範囲は限られた内容ですが、知ろうとすればするほどに、私達の知覚できる範囲は広がって行くことでしょう。

丁度、太古の人達が同じ空を見ても、現代の私達とは違うイメージを持っていたことは想像に難くありません。それと同様に、進化した他惑星人達の宇宙に対する概念は現代の私達とは随分異なるものであろうと思われず。

創造的宇宙空間の中では、何一つ、存在理由や存在目的を有しないものはありません。私達の一人一人の存在意義と期待される役割について、気付こうとすることが大切です。

006 Our neighbors on the sister planets of our solar system came to the realization a long time ago that every minutest particle in the Cosmos is inter-related with every other particle. Thereby in order to have even a small perception of the purpose of life, each phase must be studied in relation to the Whole. They shared a theory with all who were interested and gradually theories grew into facts as they explored further and further and unified all life. A humble reverence and love for All Knowing Intelligence as It expressed in every living form became their inspiration. Human relationship and behaviorism was taught to their children to aid them in individual expression of their own divinity.

006 私達の太陽系の姉妹惑星群上の隣人達は、遠い昔に大宇宙の中の一つ一つの極微細な粒子も他の一つ一つの微粒子と相互に関連しているとする認識に至りました。それ故、生命の目的に対する例え小さな理解を得るためにも、一つ一つの側面を全体との関連において学ばなければならないのです。彼らは一つの理論に関心のある者全てと分かち合い、次第に諸理論は、彼らが進んで探求し、全ての生命を統一するに至って、発展し、諸事実になったのです。一つ一つの生きる形あるものの中に表現されている全てを知る英知に対する心からの敬愛が彼らのインスピレーションになりました。人間関係と行動主義が彼らの子供達に、自分達自身の神性の表現を助けるため、教えられました。

【解説】

万物の相互関係という言い方がありますが、進化した他惑星人はあらゆるものを、こうした相互関連の視点で観ている訳です。物理の実験で、顕微鏡下で牛乳の粒子が互いに不規則に動いているのを観察する機会があるかと思えます。通常、「ブラウン運動」と言われる動きですが、これは顕微鏡下で勝手に牛乳の粒子が動いているのではなく、その周囲の目に見えない液体分子が不規則に運動している影響を受けたものであることは学校で習っています。このように、ある現象があっても、その奥にはもう一つの別の現象があって、その影響が現れている訳です。

これは一つの粒子の話でしたが、より大きな生命体、とりわけ私達自身のことになると、どれほどの分野や要因と関わりがあるのか、想像も難しいくらいです。その中で、その生命体の主（あるじ）である私達には、更に大きな可能性と役割がある訳です。少しでも早い年少段階で、人間の生き方について学ぶことは大変重要なことです。誕生まもない無垢の段階から、教育を授けることが、この文明を救う唯一の道かも知れません。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第01章 段落007 [2010-12-21]

007 The following lessons I humbly present with the hope that they may act as stepping stones in your quest for knowledge.

007 以下に続く教課を、私はそれらがあなたの知識への探求の道における踏み石として役立つことを願いながら、謹んで贈呈するものです。

【解説】

著者は、この宇宙哲学を、これが正しく確かなものだからと言って、一方的に押し付けようとしているわけではありません。あなたがこれから進むべき道において必ず役に立つもの、時々ポイントとしてしっかり身に付けるべき内容を収めてありますと述べているのです。

とかく哲学は、議論にあるいは空論に走りがちですが、本書は違います。是非、通常の哲学書としては、ご覧にならないで下さい。短い文章の中に著者が他惑星人達から伝えられた、体系的な理解のエッセンスが簡潔に述べられている筈です。

その内容から、どのような理解を導き出すかは、私達、本人次第ということになります。一段落毎、読み返している本講座のようにご自身が得た印象を書き留めることも良い方法かと思っております。

2. Introduction

The Truth about Truth

008 Political factions are clamoring against each other for the right of opinion; philosophers and scientists are arguing about the truth of their various theories; all over the world conflicting thought centers are springing up, each professing itself the only dispenser of the absolute truth and man finds himself wondering just what is truth.

2 まえがき

真実についての真実

008 政治の党派達は互いに意見の正しさを巡って大声を出して主張し合っています。哲学者達や科学者達は自分達の様々な理論の真実について議論しています。世界中で互いに争っている思想の諸々の中心が急速に出現し、互いに自分だけが唯一絶対的な真実の提供者であると明言しており、人はただ、何が真実であるか知ろうと思ひ巡らせているのです。

【解説】

この宇宙哲学が書かれた当時、地球は共産主義の台頭、また、各地での民族独立運動があり、その状況を示唆しているものと思います。しかし、現代でも国内外ともに、政治の世界、あるいは思想哲学の分野でも、本項に書かれていることが日常的に行なわれています。他惑星の文明に関しても、様々な著者や団体が、自らの正当さを主張し合っていることも確かです。

こうした中であって、何が真実かを見極めるのは容易ではありません。かつて、アダムスキー氏の最初の著作である「宇宙のパイオニア」の本物を見たことがあります。その奥付けには、確か「Good Luck To You」というアダムスキー氏の寄せ書きが書かれていたように記憶しています。「本書を読んで、何かが得られますように」「あなたの未来が素敵なものになりますように」というアダムスキー氏のメッセージがそこにありました。

この宇宙哲学も著者は、ただ、私達各自の教材として提供し、中から得るものを得て下さいと言っている訳で、その成果を摘み取るのは、私達自身です。真実を求めるなら、この書の中にありますと言っているのです。

009 As long as man has been in existence I suppose he has sought for truth without recognizing it when he had it firmly in his grasp.

009 人間が存在するようになってからというもの、人間は自分自身の手の中にしっかりそれを握っていたにも拘わらず、それに気付かず、真実を求め続けて来たように私は思います。

【解説】

生まれたばかりの赤ん坊には迷いも何の不足感もありません。ただ、満たされ、安心した表情を見せているように思います。

そこには、創造されたばかりの生命体を持つ独特の光悦感があるような思えるのです。創造の過程はこのように全ての生き物に、純粋な生命体としての表現を与えているのです。

しかし、その者もその後の実社会での生活の中で、本来の輝きは薄れ、汚れが付着して行くことは残念な現実です。また、その一方では真実を求める気持も増して来ることも確かですが、その真実を私達はあまりに遠くに求めすぎている訳です。

元来、自分も生まれた時には、しっかり手にしていた創造主への信頼を再度原点に立ち返って、取り戻す必要があります。素直で無垢な「みどり児」のようにならなければ、「天国に入れない」とは、そういうことを言っているのではないのでしょうか。

010 Many generations ago when the Roman Empire was at the height of her glory and the weight of her dominance was felt by a host of people there arose in her midst a master mind who said to those oppressed, "You shall know the truth and the truth shall make you free." And the people eager for deliverance, cried out, "The truth! Give us the truth that we may be free!" They were told the meaning of truth but they could not comprehend and so we hear the echo of those words and of the billions like them quivering down the ages with an insistent appeal - "The truth! what is truth?"

010 何世代も前、ローマ帝国が栄光の絶頂にあって、その支配の重圧が多数の人々によって感じられていた時、その只中に抑圧された人々に「あなた方は真理を知り、そして真理はあなた方を自由にするでしょう」と言った一人のマスターの心の持ち主が現れました。そして抑圧からの救出を求める人々は、こう叫びました。「真理！私達が自由になれる真理をお与え下さい」と。彼らは真理の意味を教えられましたが、彼らは理解できず、私達は以来、何世代も揺れ動くひとつの一貫した訴え、「真理！真理とは何か？」という言葉のこだまや何十億という類似した声を聞いています。

【解説】

テレパシー（376）でも述べましたが、アダムスキー氏はイエスの周囲の当時の状況について、実に詳しく知っていたようです。本項もその一つで、私の記憶では聖書にこの部分に相当する記載箇所は残っていないように思います。

さて、若干、英語のニュアンスについて申し上げます。本文中の"You shall know the truth"その他の"shall"の意味についてです。もちろん未来形の「○○するようになるでしょう」が意味ですが、更に詳しく言えば、むしろ「○○しなければならない」というような命令的な意図が含まれていることに注意したい所です。ISOの本文の記述やマッカーサーの"I shall return"の場合のように、「必ずや○○すること（になる）」という具合です。

真理を求めてさまよう私達はイエスの時代から文明としては随分と進化した今日にあっても、その基本的な姿は変わりなく、真実を外に、現象の世界に求め続けているという訳です。

011 And for every such questioning voice there is another calling, "Follow me, I alone can give you the real truth!"
And blindly the people follow, little knowing or understanding the purpose of life.

011 そしてこのような疑問の声の一つ一つに対しては、「私に従いなさい。私だけがあなたに本当の真実を授けることが出来るとする、別の呼びかけがあります。そして人々は生命の目的を少しも知ることもし理解することもなく、盲目的に従うのです。

【解説】

真理を求める私達は、もちろん真理を求めようとはしない人々に比べれば、良い方向に進んでいると言えますが、それでも多くの場合、本筋から離れてしまう危険性も多い訳です。いわゆる宗教の道が決して間違っているとは言いたくありませんが、大抵の場合、その団体や組織を維持するために労力の多くが費やされているのも事実でしょう。

確かに多くのいわゆる教祖様は皆、何らかの悟りを得た人達であることは誤りないのですが、やがては当初の志は薄れて、組織拡大の団体に陥ってしまうように思います。

大事なのは、他人に盲目的に従うのではなく、あくまで自分自身で理解し、少しずつ歩むことです。このUFO問題についても過去の例を見れば、様々な団体や活動がありましたが、結局は生命の科学をはじめとする各自の学習を通じて、各自が確認し、実践できた内容しか残らないということだと思えます。

本講座も原理や原則については記述されておりますが、その実生活への応用は各自に委ねられている訳で、私達一人一人が自分の生きる目的や意義を見つめ直す作業が必要となっております。

012 So to you of this present day - you who have acquired much knowledge of many things, I ask, "What is truth?"

012 そこで、多くの事柄の知識を多く得て来た今日のあなたに、私は問い掛けます。「真理とは何かと」

【解説】

確かにイエスが地球に居た当時と比較して、私達には多くの知識が蓄積され、発展した社会システムの中で古代の人々に比べて格段に楽な生活をしています。しかし、宇宙を貫く真実の姿、原理の理解となると、その問いに十分に答えることは出来ません。

私達は確かに「知識」の積み重ねについては努力して来ました。技術も進化させています。しかし、生命そのものへの深遠な理解、人生の生きる目的、各自の創造の目的となると、その理解の程度は古代の人々より劣っているかも知れません。

現代社会には「お金」というシステムがはびこっており、全ての人々の活動を縛り付けています。この中であって、宇宙を貫く「無垢なる」原理を体現することは容易ではありませんが、少なくとも、その真理に心を向け続けることが大切だと考えています。

013 Those who are idealistically inclined will answer, "It is reality!" And those who are founded upon a cold scientific basis will answer, "Fact." Others will say that truth is that which is opposed to untruth or is that which is good. To those who gave the first two answers I shall say you are correct so far as you have gone but I shall proceed to catch you in a net of your own weaving. The latter answer that truth is that which is good is utterly misconceived and evasive.

013 理想的な傾向がある者は、「それは現実だ」と答えるでしょう。また冷徹な科学的基礎に立つ者は「それは事実だ」と答えるでしょう。他の者達は真理とは偽りに対立するものだ、あるいは良きものだというでしょう。その最初の2つの回答を出した者については、私はあなた方がそう言う限りにおいて、あなた方は正しいと言うべきでしょう。しかし、私は更に進んであなたをあなた自身の編目で捕らえようと思います。一方、真理とは、良きものとした後者の回答は全くの誤解であり、言い逃れです。

【解説】

私達が求めている「真理」は何か、どのようなものかについて、改めて問われると、実は返答に窮しません。それほどに私達は自分達がそもそも何を求めているかについてすら、理解していない訳です。

ここでは、よくありがちな「真理」とは「良きもの」という概念は、全くの誤解だと著者は解説しています。真理は文字通り、善悪を超えたものであるという訳です。私達の目には、残虐非道に見える事柄も、時において自然界では起こっており、それらが生態系の調和を整えていることも確かです。

私達が善悪というような裁きの視点を超えて、大自然、大宇宙を流れる原理を最重要なものを見詰めること、それらと同化し、自らその表現者にならんとすることが大切なところです。

014 Let us, therefore, get down to real analysis. Just what is the truth about truth? You have said that it is Reality and if I were to ask you to define reality you would be compelled to admit that it is that which has actual existence, and yet you speak of the real and the unreal. You have a set standard for Reality. Does not everything that is known have apparent existence? How else should it have become known?

014 ですから、真の分析に取り組みましょう。真理についての真実は何かということに対して、あなたは真理とは現実だと先に述べましたが、もし私が現実を定義するようにあなたに問えば、あなたはそれは実際に存在するものだと認めざるを得ないでしょう。そしてあなたは現実と非現実について話していることになります。あなたは現実性に対して固定化した基準を設けていることになります。しかし、これまで知られているもの全ては、明白に存在していないのでしょうか。そうでなければ、どうして知られるようになったのでしょうか。

【解説】

「真理とは何か」という古代からの命題に対し、真理は現実性だと答えた者への質問です。この場合、元来の問いはイエスの「真理はあなたを自由にするだろう」と言った意味での「真理」であり、私達地球人が体得しなければならない境地を指すものと思われます。

その真理に対して、単にそれが現実に存在するものだと一口に言うてのけるのでは、未だ不十分だと著者は述べているように思います。そもそも現実と言った場合、その対称に非現実性という概念があることを著者は指摘しているからです。現実性があるものとそうでないものを識別していると言っている訳です。

本文から、私達が見聞きしたもの、それは想念の世界の段階であっても、現実の世界の中のものであっても、両者に存在の差異は全く無い、私達が思いつくものはやがては現実化するのだと言っているように、私には思えます。

015 What of those that say truth is fact - explaining further that it is that which can be proven. Let me ask you this - proven to whom and by what and for how long? Again you must have a set standard of discrimination. Must it be proven by man's laws or theories that have already been given recognition? Then you are putting a limitation on truth. Must it be proven to all people or only to one who is able to see beyond the perception of his fellow-men? Proof can only go so far as a man will accept and truth to each man is only that which he has experienced either by mental realization or physical expression, and yet truth is universal. It is the sum total of action. Every smallest quivering frequency in the whole cosmos is truth - true because it perpetuates action. I shall bring all of my statements down to a perfectly logical, matter-of-fact foundation.

015 真理とは事実であるとする者達の言うことは、更に推し進めれば、それが証明され得るものだけということ。このように質問させて下さい。誰にそして何によって、またどれくらいの間、証明されるのか。ここでもまた、あなたがたは差別のための固定化した基準を持っているに違いないのです。それはこれまで既に認められた人間の法則や理論によって証明されなければならないのでしょうか。そうであるなら、あなたは真理にある限界を置いていることになります。それは全ての人々にあるいは仲間の者達より奥先を覗くことが出来る者のどちらに証明されなければならないのでしょうか。証明とは人が受け入れるまでのものであり、個々の人にとっての真理はその人がかつて心の自覚あるいは肉体の表現によって体験したことでしかありません。しかし、真理は宇宙普遍のものです。それは行為の総計です。全宇宙の中の個々の極微の震える振動は真実です。それが永続する活動であるが故に真実なのです。私は私の論述を全て完全なる論理的で事実即した基礎に基づいて書き起こすつもりです。

【解説】

人が分かったと言う場合、その人が過去に自ら経験したこと、悟った事柄であることが必要ですが、その場合、人によって体験が異なる以上、真理を単に証明あるいは納得させるものとするには、限界があることとなります。事実であるか、そうでないかを認める上で一定の基準を持っていると本項では指摘しています。

しかし、真理はこれら個人の範疇をはるかに超えた宇宙全体のものと本項では述べられています。各原子の振動そのものが永久不変に継続され続けて行くことの中に真理があると見透しています。小は原子の電子雲の振動、大は銀河宇宙の渦巻き等、人智を超えて永続する宇宙の諸活動こそが真理であると明言されています。

これらの視点に立って、著者は改めて自らの哲学記述の全てをこの「宇宙哲学」の中で、基礎から再構築を行なって行くことにしたと述べているのです。

016 Most of the world's intolerance is due to the misconception of truth. Men fight to death for their individual concept of it when a little wisdom would show them that they are only a step apart in the same hall of learning, but due to the fact that every individual intelligence has a slightly different degree of understanding, truth to each is slightly different. Intolerance is a mark of ignorance, for a developed intelligence is able to view sequences of action that shows each separate action to be relatively true. And because all sides of a question are understood he is bound by none. This type of intelligence does not condemn those who see only one phase of the whole truth. Instead he will point out the pitfalls or limitations that follow the course of thought that the individual is indulging in.

016 世界の不寛容の大部分は真理への思い違いに起因しています。人々は自分達が同じ学びの会堂で互いに一歩だけ離れていることをわずかな智恵が示す時、自分達各自の概念の為には死に至るまで戦うのです。しかし個々人の知性は理解においてわずかず異なるために、各自にとって真理はわずかず異なります。不寛容は無知の印（しるし）です。何故なら進化した知性には個別の行為が相対的に真実であることを示す行為のつながりを観ることが出来るからです。そして一つの疑問に関する全ての側面が理解される為、その者は何ものにも囚われることはありません。この種の知性には全体の真理の内、わずか一つの側面のみを見る者を非難することはありません。代わりにその個人がふけている思考の道程に続く落とし穴や限界を指摘することでしょう。

【解説】

現代の私達日本人には理解にしくく、また経験も少ないかも知れませんが、世界には宗教間の対立問題が現存しています。また、同じ宗教でも宗派が異なることで争いも起こっています。実際の争いの原因は、差別であったり、経済的な利益の独占への反発にもあることでしょう。本来、真理を求める宗教の分野において歴史は多くの殺し合いがあったことを記録しています。それほどにこの地球の私達のレベルは低い訳です。

一方、これに対し、太古からの宗教とも言える土着の自然信仰の多くは、大自然を畏敬し、他の者をも受け入れて来たように思われます。日本の神道やインディアン達の自然観等、大地の中や宇宙に生命の息吹を感じ取る観点の中には、他人と真理を争う要素は入り込むことはないように思います。

意見や見解の相違に対し、その全体における位置づけや生成の経緯を観ることが出来れば、自然とその主張も理解できるということでしょう。結果だけで判断せず、そのよって来た経緯を知ること、知性を育むことが出来るとも言っているように思います。

017 Truth is action - the whole action of which every part is true. Small truths lead into greater truths and one small truth cast out as false can block the progress of a civilization, as has been shown by the history of the past.

017 真理とは行動です。あらゆる個々の部分が真実である行動の全体です。小さな真理はより大きな真理へと導き、偽りと投げ捨てられる一つの小さな真理も、過去の歴史によって示されて来たように、文明の進歩を妨げる可能性すら持っています。

【解説】

私達が求めている真理とは、決して何か他人が考え付いた概念のようなものではなく、現実に世の中の行動や活動であると断言しています。つまりは人体の中の血液の流れや呼吸等、生命活動そのものは宇宙空間にあって、ある意味、永続的に継続する活動です。その活動は宇宙英知の支えがあって成立する以上、それは真理を具現化していると言える訳です。

そうする時、私達は何かの行為を誤ったもの、醜いものと否定すれば、それは法則自体を非難することにもなる訳で、それは進歩の妨げになることを警告しています。

ここでは、あらゆるものを先ずは受け止めて、その中にどのような真理（原理）が働いているかを理解し、更に視野を拡げようとする姿勢が大切です。一見して見苦しいもの、汚いように見える場合のものであっても、そこに生きる人々の生活を理解し、その状況を受け止めることで、不要な偏見を取り除くことが出来る訳です。

かつて中世、西欧では宗教の教義が最優先にされ、自然から学ぶことは異端とされていた時代がありました。天動説が絶対的な真理だとされていたのです。その期間、この文明は長らく停滞の時期があったとされています。言い換えれば、その時代、人々は真理を求めようとするのを禁止されていたと言わなければならない。

真理を求めるに当たって、全ての行動（活動）を観察して、それを全体像として理解する姿勢が重要だと本項は言っています。また、「真理とは行動」ということの中には、単に頭の中で考えているだけでは、ダメで、自ら行動する中で、様々な体験を通じて、真理を掴むことが出来るとも言っているように思います。

018 Because men do not understand the meaning of truth and are therefore intolerant, there has been a span of over a thousand years of scientific darkness that might have been used to bring the slowly evolving civilization to a higher standard of human expression.

018 人々は真理の意味を理解しない為に、そしてそれ故、不寛容である為に、何千年もの長きにわたり科学的に暗黒であった時代がありましたが、そうでなければ、その期間、この緩慢な進歩の文明に、より高度な水準の人間の表現をもたらしたかも知れないのです。

【解説】

他惑星人達と比較して、私達地球人類が科学知識の上で、はるかに劣っている原因は、本項で言う真理への理解不足ということにあります。あらゆる事象や要素の相互作用、関連性を原子レベルまで掘り下げて、その根本原理を理解出来ているものとの相違は大きいものがあることでしょう。

真理をどのように捉えるかは、その人の視野や感性、その他全てに及びます。時代を超えていつの世にも、その感性を持った人間も現れたことでしょう。その他人よりも秀でた者はある時は宗教の言葉と業によって、またある時は科学者として時代を引っ張って来たものと思われま

私達は、この真理に対座する時、どのような気持で向き合うべきか、その姿勢が問われています。

019 "You shall know the truth and the truth shall make you free." And the truth is that all things are true - true in a relative sense, I grant you, - relative to all other parts, but until men recognize and give due consideration to the Cause of all actions they will never be free. Only in uniting our efforts, acknowledging a common purpose can we bring civilization to a unified state of understanding and progress.

019 「あなた方は真理を知ることでしょう。そしてその真理はあなた方を自由にする筈です」。その真理とは全てのものが真実であるということ、相対的な意味において真実であるということであり、私としては全ての他の部分との相関性においてとあなた方に認めましょう。しかし、人々が全ての行動の因を認め、当然支払われるべき考慮を払わない限り、彼らは決して自由にはなれません。私達の努力を結集し、一つの共通の目的を認めることにおいてのみ、私達は文明に統合された理解と進歩の状態をもたらすことが出来るのです。

【解説】

かつてイエスが民衆に対し述べたとされる「真理を知れば自由なれる」とする言葉の意味について解説しています。その重要な所は私達は自分達が把握している「真実」なるものは決して絶対的なものでなく、あくまで相対的なもの、他のものとの相関性の中で位置づけられるものであるということです。

その捉え方は、いわゆる「絶対的」なもの、これしか正しいものがないとする既存の宗教的なものとは、大きく異なります。代わって、一つずつ確かめながら、更に視野を深め、また拡げて行く求道者、探求者の道程に近い概念です。

長い人生の中で、その時その時の状況の中、私達は各々真理を求め何らかの真理や人生観を得てきたものと思います。しかし、その「真理」は不変のものでなく、各自のその後の歩みの中で、より大きな視野、より深い見識の中に統合されて行くべきものです。

その時、大事なものは、私達が各々の行為や活動の中の真の因に思いを致し、各々の活動の中に共通する目的を見つけようとする姿勢です。その因として流れる創造主の意図を学ぼうとする気持が進化の源だと言えることが出来るでしょう。

020 Truth is like a great picture puzzle - a mosaic, as it were, and each man's individual expression is a part of the total composition. The mature individual realizes life as a succession of duties to be performed. Because there are diversified concepts of life does not mean that only one can be correct. No, all are true. Whatever is conceived in the mind of man is true to him for the moment just as every act of nature is true whether it be of creation or disintegration. Man's ideas may be used unwisely because he has not enough knowledge to use them constructively in relation to other truths, but that does not mean that the results establish a fact.

020 真理とは巨大なジグソーパズルのようなものです。丁度、各個人の表現はその全体の構図の一部になっているモザイク画のようなものです。成熟した個人は生命とは達成されるべき義務の連なりと認識しています。生命についての多様化した概念がある為、一つだけが正しいとすることはありません。いいえ、全ては真実なのです。人の心の中にどのような事柄が思い浮かぼうとも、それが創造的であるか、崩壊の性質であるかに関わらず、その瞬間、その人にとってそれは真実なのです。人間のアイデアはその者が他の諸々の真理に関連してそれらを建設的に用いるだけの十分な知識を持たない故に、誤って用いるかも知れません。しかしそれは、その結果が事実を打ち立てることを意味するものではありません。

【解説】

本項ではタイル貼りの巨大な壁画を例に、真理について説明しています。私達一人一人はその絵画を構成するタイルの一片という訳です。様々な個性や状況の多様性の中であって、私達は各々の特性を発揮した表現者になることが必要だということです。

しかし、どのような表現者になるにせよ、絵を完成させる上で、タイルの一片も欠けることは出来ません。また、一つでも質が悪いものが入り込めば、その壁画の欠陥になってしまうことでしょう。

私達は、まだ自分達が描きつつある壁画がどのようなものになるのかを見ようとはしていません。各々のタイルの仕上がりばかりに関心を持っているのです。

しかし、一度、全体を振り返って、社会全体がどのような方向に向かっているか、結局のところ、自分達が描こうとしている絵はどのようなものになるかについて、知ろうとする必要があるようです。

一つ一つの基礎的存在から視野を拡げ、太陽系から宇宙全体にまで視野を拡げる中で、自分の果たすべき役割を知ろうとすることが必要です。また、本文後半に、各自にとって自分がどのようなことを考えようとも、それはそれで良しとするという暖かい見方が提示されています。何か、観音様のような全てを受け入れて戴けるような包容力のある言葉です。とりあえずは、各自の思い通りに進めて宜しい。しかし、全体との関係性、即ち調和を考えて、行動するようにと諭している気がします。

021 Our purpose in life, then, is not personally judge between the true and the untrue but to so coordinate our own being with nature that we may unite the knowledge of Cause and Effect.

021 そこで私達の人生における目的は、真実と真実でないもののどちらかでありかを個人的に審査することではなく、私達が因の知識と結果を結合させられるよう、私達自身を自然と調和させることにあります。

【解説】

私達に批評家は不要です。本項ではまずは、あらゆる物事を受入れ各々の真実を学び、その上で自身をそれらを含む自然と調和させよと言っています。

とかく私達は善悪、良否の判断を好みます。世の中には多くの批評家が自らの意見を披露して世間を誘導しようとしています。しかし、本項では違います。他人の行動を批判したり、裁くのではなく、その行動がどのような背景から生まれたかの原因を理解することを求めています。

また、全ての行動は想念から始まって具体的な行為に至るまでには、身体も含めて様々な仕組みが用いられ、そのいずれもが所定の行動を達成する為に、100%の力を発揮していることでしょう。その中で私達は物質を突き動かす、因について知ることが大切だとしています。現実の結果の奥にある因に対する知識が重要なのです。

前項では真理をモザイクタイルの壁画に例えていましたが、私達は自分自身のタイルが周囲とどのような位置関係にあるべきなのか、壁画全体の意図するイメージはどのようなものかについて、より高い視野で見詰める必要があります。

3. THE MAGNIFICENT PERCEPTION

PRELUDE

022 The roll of the tides and the waves and the rising and setting of suns, the whirling of atoms and worlds are all tuned to the Cosmic Plan yet are subject to time and to space.

第3章 壮麗なる知覚

序章

022 潮汐や波のうねり、太陽達の出や入り、原子や世界の旋回は全て、宇宙の計画に調律され、しかも時間と空間とに従属しています。

【解説】

第3章は宇宙に対する私達の物の見方について説いているように思います。これら本文の表現は大変美しく、同乗記に記述されている母船内部でアダムスキー氏が見聞した真の宇宙空間の姿を思い起こさせます。

私達が地上から空を眺める時、その動作そのものは他の惑星人も私達も同じなのですが、各々が頭の中で知覚している内容は、雲泥の相違があることでしょう。私達は自らの知覚力をみがくことが求められています。

宇宙全体がまさに「天国」の状態で、その存在する要素、一つ一つが小は原子、大は恒星雲まで、一つの宇宙的な計画の下に動いていることに私達は気付く必要があります。

また、私達の知覚力がこのようにそのレベルを向上させることが出来れば、次第に私達の周囲の状況も本来の輝きを取り戻すものと思います。本項を読んで、映画「コンタクト」の後半、他惑星にタイムスリップした主人公が着いた先の美しい海岸風景を思い出しました。

023 Time is the instrument used to measure the movement of Beings - the element action creates in its path from the formless to the formed. In Eternity always you are, but in time you're unstable, inconstant.

023 時間は存在物の運動を計るために用いられる道具であり、その基本的作用は形無きものから形あるものへの道筋の中で、創造的な働きをします。永遠の中ではあなたは常に居ますが、時間の中ではあなたは不安定で変わりやすいのです。

【解説】

前項（022）では私達が時間と空間の中に居ると説かれました。本項ではその内、「時間」とは何かについて説明しています。

時間は運動を計る手法（道具）であると本項は明言しています。私達の時間感覚でも大変充実した一日は長く感じる一方で、不活発な日は時間の経過が早いと感じるものです。老人の一日と伸び盛りの子供の一日とは大きな違いがあるように思います。

また、その時間の流れの中で、形無きものから形あるものに創造されて行くのが基本的な流れであるとしています。その典型例が受精から誕生までの生命体の創造の過程かと思えます。文字通り、時間経過につれて創造的な活動が広く起こっている訳です。

一方、その逆の事象もあります。老化や死がそれです。私達は誕生からやがては死を迎えますし、ある年齢以降は身体も衰えて来るものです。また、時間経過とともに、同じ人でも、その性格や身体の概観が変化します。そのように時間とともに私達、形あるものは変化して行くのですが、一步下がって人生行路全体を見渡す時、本文にもあるように、私達の人生の歩みは、その死の先も続いていることに気付かなければなりません。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落024 [2011-01-14]

024 Sit here at the center of all and look out on your flux of expression. As the moon to the vision of man passes through all the various phases yet remains still an orb complete without change or point of division, so you through your phases shall pass; mortal eyes shall see change and division yet you are a circle complete - you're endless, eternal, abiding.

024 全ての中心であるここに座って、あなたの絶え間ない表現の変化を見渡しなさい。人間の視覚にとって月は様々な位相を通じて変化しますが、それでも変化や如何なる区分けも無く、それは完全な球体のままです。あなたも様々な位相を経ることでしょう。死すべき肉体の目は変化や区分を見るでしょうが、それでもあなたは完全な円（まる）のままです。あなたは絶えることなく、永遠で不変です。

【解説】

時の経過とともに私達も幼年期、壮年期、更には老年期と変化して行く様子を、著者は月の満ち欠けに例えています。人生の歩みも少し離れて、本項で言う「全ての中心」に座って見渡すと、このような移り変わりに見えると言っているのです。

大事なことは、月が三日月の段階から、満月を迎え、やがて一旦は完全に影になった後、再び新しい月として生まれ変わることです。本項では生まれ変わりには言及していませんが、mortal（「やがては死を迎える肉体の」という語感を持つ）という表現を用いて、それに対して、eternal（「永遠」）等の言葉を用いていることが、それを示唆しています。

とかく私達は表面的な結果しか見ていませんが、少し全体を見渡すことによって、各々の生命体の歩みの全体像を掴むことによって、よりスパンの長い視点を養うことだと言っています。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落025 [2011-01-17]

025 Look forth from these eternal heights, from the heart of your unified being; look down towards the plains of desire where your destiny finds its fulfillment. Look closely and firmly perceive that the break which you one time envisioned is nothing but mortal illusion; that there is but the unified whole.

025 これら永遠の台地から、そして一体化したあなた自身の中心から前を見なさい。あなたの運命がその成就を見出す望みの平原を見下ろしなさい。よく見て、あなたが一時、心に描いた割れ目は人の思い違いであること、そして一体化した全体のみが存在することもしっかり気づきなさい。

永遠に続いて行く人生行路を高い視点からよく観察し、これから起こる事柄や未来の自分の姿についてしっかり把握しなさいと言っています。

とかく私達は、その時その時の状況の中でしか物を見ていませんが、それでは変化にさらされ、右往左往するばかりです。それに対し、より高い見地から、これからの人生を見渡しなさいと言っている訳です。これから進む道程の中には私達の長年の願望が成就することが待っていますし、生命の連続性について認識すること、更には他の全てと一体になった姿を見ることが大切だとしています。

至仏山からは眼下に尾瀬ヶ原の木道が続いている風景を見ることが出来ますが、本項は丁度、そのように生命の歩みとしての自分の人生を見るようにと説いています。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落026 [2011-01-18]

026 Always you are One, you are All, as a centralized point of Being. Undying, unchanging - the Consciousness, Cause, and the Action - evolving, transmuting a form to a unified state of awareness.

026 存在の集中化した一点として、いつもあなたは一つであり、全てです。あなたは不死、不変の意識であり、因であり、また進化し、一つ形あるものを統一化された知覚状態に変える行動なのです。

【解説】

各自が自らを個別の存在だと認識している限り、その個体は時間と空間の中で、うつろい行くものになりますが、本講座で学んでいるように、宇宙を貫く普遍原理の流れと合体し、その個我を開放出来れば、自分自身の存在を宇宙のエネルギーの集中化したものと認識すると同時に、他の諸々のものと一体感が生まれる為、自身が宇宙そのものという感覚に導かれるものと思われます。

また、注目したいのは、私達の存在価値が「行動」であると明言されている点です。

つまり、創造物の本来の意義、目的として各自の行動が求められているということです。行動に対する反対の言葉は「怠惰、停滞」ではないでしょうか。自然界の生けるものはすべて、各々の生命を全うしようと努力しています。その中で私達人間の本来の役割として、自分という形あるものを万物との調和統一された見識の存在に昇華させる行動こそが重要だとしています。

宇宙の因や創造主への志向に努める行動、即ち「精進」を本項では求めているのです。

027 From action to action you pass like a great shuttle weaving new patterns - on the loom of Eternity weaving a pattern of beauty called Life. The fine silver thread which you use is Cosmic Consciousness, binding together each stitch in true lines of perfection; creating in patient evolvement the unified Love Mantle of All. Each thought and each conscious emotion weaves the Pattern of exact direction, in time uniting the parts and the Allness, absorbing the All in the One.

027 行動から行動へとあなたは新しい模様を織る大きな杼（ヒ）のように過ぎ去ります。あなたは永遠という織機の上で生命と呼ばれる美の模様を織っています。あなたが用いる細い銀の織り糸は宇宙の意識であり、それは極致の真実の線の一つ一つの編み目を結び付けています。そして辛抱強い進化の内に、全てのものに対する統一された愛の外套を造り上げます。想念の一つ一つ、意識的な感情の一つ一つが寸分たがわぬ方向に模様を編み進め、やがては各々の部分と全体とを結合させ、全てを一つに吸収させるのです。

【解説】

本項は節「壮麗なる知覚」のまとめに相当します。人間の存在意義が、ここでは明確なイメージとして語られています。そのポイントは私達自身が行動することによって美しい世界を紡ぎ出すことになるという点です。

以前、名古屋のトヨタの博物館を見学したことがあります。いわゆる豊田佐吉から始まる自動織機の発達の歩みが実物展示されています。その中で最新の自動織機の実演展示がありましたが、目にも止まらぬ速さで杼（ヒ）が動き、美しい模様を次々と織り上げていたことを思い出します。

しかし、このようないわば自動の織機であっても、昔の遅い織機であっても、布を織る原理は同じです。私達は他惑星人に比べればこのような自分自身の動きは大変鈍いものと思われれます。それでも、一つ一つ丹念に想念を織り込んで行動して行くことで、その成果も美しいものに仕上がるものと思いません。

行動こそが、私達の存在目的であり、創造主から期待されているところです。

THE WORD

028 In the beginning there was but the Word: no mortal mind can know the Word in full for it contains all knowledge and all Power, and only that which is Itself the Word can know or understand potentially. But through a mighty action the Word was imaged into primal form; in form so fine that only Cause could know its attributes or view its being. It incarnated through the whole of substance and impregnated all matter with Its presence till in the place of a tremendous void there grew the second or the form-creation.

大いなる言葉

028 原初は大いなる言葉のみがありました。如何なる人の心もその大いなる言葉を完全に知ることは出来ません。何故なら、それは全ての知識と全ての力を含んでいるからであり、大いなる言葉自身がそれを知り、理解し得るからです。しかし、ある壮大な行為を通じて、大いなる言葉は最初の形態に描かれました。それはあまりに繊細で、因のみがその性質を知り、あるいはその存在を観ることが出来ました。物質全ての中にその存在が宿り、そしてついには巨大な空虚の場所に第2の創造、即ち形あるものの創造が生まれました。

【解説】

「はじめに言葉があった。言葉は神と共にあった。……万物は言葉によって成った。成ったもので言葉によらずに成ったものは何一つなかった」とヨハネ福音書（第1章第1節）にあります。まさにそれと同様のことを本項では述べられています。これも、一説にアダムスキー氏が使徒ヨハネに近いとされることとも関係があるのかも知れません。

さて、この「言葉」という概念、日本でも人が発する言葉には力が宿ると古来から信じられており、昔から多少の認識はあったように思います。しかし、その本来の意味は更に深く、万物の始原となる創造主の意図に対して表現されているものと考えます。その「言葉」が第一段階の創造として目に見えない、例えば原子レベルの創造があり、次に形あるものへの創造が始まったと本項では解説しています。

万物の中に、そのような力のある要素が宿っていることに私達は感謝し、その恵みを素直に慶ぶべきだと考えます。

029 Virgin was this creation in the image of the Word, and filled with all the power of pure wholeness, for it was but one great united form, the body of Cosmic Cause whom we in reverence have called "The Word."

029 乙女とはその大いなる言葉のイメージに創られた創造物でした。またそれは、全ての無垢な完全さの力に満ちていました。何故ならそれは一つの偉大な形、私達が敬愛して「大いなる言葉」と呼んで来た宇宙の因の肉体であるからです。

【解説】

本項からは、そもそも人間が創造された時、最初に誕生したのは女性であったことが示唆されています。

少女達の美しさや爽やかさは、古来、多くの画家の作品に取り上げられています。基本的に宇宙的な性質を持つ存在は皆、若々しく、美しさを保っているということでしょう。反対に、自我の心によって振り回された人生の先には、疲労や厭世感の表現者になってしまう訳です。

私達、あらゆるものを含め、生まれ出る時は宇宙の因に由来する純粹さを持って生まれて来ます。その内部の秘められたパワー、「大いなる言葉」を各自が再び開花させ、表現者となればよい訳で、既に十二分な能力は各自に備わっていると理解すべきなのです。

030 Throughout all space the Word reverberated; It set in motion all the Primal Essence until the whole span of Infinity swayed to the Heart-beat of the Mighty Oneness. Rhythm on rhythm rose and fell in one great undivided harmony, for deep within the bosom of the Word there surged the wondrous Love Song of Creation.

030 全宇宙にその大いなる言葉が鳴り響きました。無限の広がりの中でその力強い一体感の鼓動に従って揺れ動くまで、それは全ての基本的存在を揺り動かしました。律動に次ぐ律動が起こり、また過ぎ去りました。何故なら、大いなる言葉の胸の奥深く、創造の素晴らしい愛の歌が沸き上がったからです。

【解説】

本項は原初の創造の物語を語っているものと思われます。

最初に「言葉」があったと前々項（028）で述べられています。その言葉は次に具体的な力を発現させて、広大な宇宙全体に続くという大いなる創造の作用が始まりました。宇宙空間には具体的な存在として様々な原子あるいはそれに近い基本物質があったものと思われませんが、その基本物質がその鳴り響く「大いなる言葉」の振動に揺り動かされて行きます。やがてその影響は宇宙空間全体にまで及ぶことになります。

そして遂には宇宙全体がその振動に同調し、その過程で様々な形あるものが形成されて行きます。その際、大いなる言葉は単純な旋律を発信するのではなく、多様なリズムを繰り出し、それに応じて様々な創造物が創られたということでしょう。

宇宙の中のあらゆるものが、こうして一つの源泉から生み出されたこと、私達はそれ故に皆、同じ創造主の子供であることが分かります。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落031 [2011-01-25]

031 Greater and greater the Heart of Space was stirred until at last the Song was breathed into a living thing. Each motion as an elemental tone within the mighty symphony and every tiny particle of substance was tuned into accord with every other unit in all space. And thus the impulse of Cosmic Will became a law that ne'er can broken be within the scope of everlasting action. (This Law involves the principle of true affinity.)

031 大きく、また更に大きく宇宙空間の中心は揺り動かされ、遂にはその大いなる歌は一つの生けるものに吹き込まれました。その力強い交響曲の中の基本的な調べの中の一つ一つの運動と、物質の一つ一つの微粒子は全宇宙のあらゆる他の単位と調和させられたのです。そしてこのようにして、宇宙の意思は永続する活動の範囲の中で決して壊れることのない一つの法則になったのです。（この法則は真の親和性の原理を含んでいます）

【解説】

創世記の人類誕生の一節を思い起こす内容です。旧約聖書は単純化した結果のみが記述されていますが、本項では著者アダムスキー氏は、それをある意味、科学的、系統的に万物創造の経緯を解説しています。

宇宙全体が共通の波動（文中では"交響曲"と表現されています）に従って活動しており、その波動は消滅することなく、鳴り続けているという訳です。

私達は、この波動を受け入れ、従うことで、より大きく持てる力を発揮することでしょう。寺の大きな梵鐘がいつまでも振動し続けるように、大宇宙全体がいまだに原始の創造の息吹を伝えており、その原理に従って生命の再生も次々に起こっているということです。

032 Were it possible for any of the Cosmic vibrations to unite contrary to this Primal Law and cause a discord in the mighty paeon their span of such expression would be contained within one moment's quivering vibration, for discord cannot last within the Whole whose very fact of being rests upon the immutable law of harmony. There is no loss of equilibrium within the scope of Cosmic Rhythm that shall not be again absorbed and reunited into Wholeness. For nothing can break the Melody that has forever throbbled within the Heart of That which is, Itself, Infinity.

032 仮にその宇宙的振動のどれかが、この基本法則に反して結合することが可能であったとしても、また、その力強い音節に不協和音をもたらしたとしても、それらの表現の範囲は、一瞬の震える振動の中に封じ込められることでしょう。何故なら、その存在の事実そのものが不変調和の原理に基づく全体の中では、不協和音は継続することは出来ないからです。宇宙的リズムの中では、再び全体性に吸収され、再統合されないような均衡の喪失はありません。何故なら何物もそれ自身、即ち永遠の中心で鼓動しているメロディーを壊すことなど出来ないからです。

【解説】

宇宙全体に流れる基本的な波動の中で私達は生活しています。時折、自我による攻撃的な、あるいは批判的な想念を私達が発することもありますが、それでもそれは一時的な限定された範囲に留まり、やがては消滅することでしょう。大宇宙には、それら、人間の力を超えた大きな波動が流れており、それに同化する者を常に歓迎しています。

また、一方では、このような本来の基本法則に調和した生活を送れない者は、早晚消え去ることになることも、示唆しているものと考えています。

そう考えると、私達はこれら宇宙的な力添えを絶えず宇宙から受けており、自分達の身体や精神そのものが、それと連動しているという大変、高度な存在であることが分かります。一人一人が自分の本来の価値に気付くことが大切です。

お詫び [2011-01-29]

1 1月初旬からの中国出張を終えて、昨夜、無事帰国しました。

帰国途中、北京での2日間の滞在ホテルでインターネットが不調であった為、本講座を更新できませんでした。

お詫び申し上げます。

また、週明けから再開いたしますので、ご了承下さい。

2011年1月29日

竹島 正

033 Creation as a whole makes up the song that rises and falls in its impassioned cadence, expressing in the glory of calm Silence all that the Word has been, is, and shall be; voicing with soundless sounds and formless beauty the pulsing force that blends and inter-blends into new rhythms. The Breath of the All-Creative Intelligence is sent forth in peaceful, silent tones of consciousness and in the womb of illimitable space each new creation stirs with quickened life and becomes another true note in the endless Song of Action.

033 創造作用は全体としてその感動的な抑揚の上げ下げのある歌を作り上げ、大いなる言葉がかつてそうであった、また現にそうであり、未来もそうであろう静寂な沈黙の栄光の中で、音無き音と形無き美しさで新たなリズムに融合し、再融合する脈動する力を表現しています。全ての創造的英知の息吹は平穏で無音の意識の抑揚の中で発信され、無限の空間の子宮の中でそれぞれの新たな創造が奮い起こされた生命とともに起こります。そして終わり無き行動の歌の中でもう一つの真の調べとなるのです。

【解説】

前項では私達は宇宙に流れる波動（振動）の中で、その支えを受けて生きていることが述べられました。

本項では、その波動は大きな感動のうねりとなって、あらゆるものを奮い立たせる作用があり、無言でありながら、想念レベルでは大きな創造力を作用させていると解説しています。

また、その調べは、次々に新たな創造をもたらし、新しい生命を誕生させる原動力となっています。この誕生は私達の周囲の個々の生きとし生けるものの再生の他、広大な宇宙空間の中の新たな銀河系の誕生、即ち新たな天地創造のことでもあります。

私達が音楽に惹かれる原因には、この波打つ生命の鼓動との関係があるように思われます。

034 Out of Cosmic Cause are worlds and planets whirled into existence; out of such formless beauty has evolved form upon form until at last there came one form so perfect in its geometric pattern that it possessed the possibilities of understanding Cause. And so into this form was poured the Breath which speaks the rhythm of creation into being, and it was given power to perceive all existence; and it was also blessed with power to name that which before had been but nameless.

034 宇宙の因の中から、諸天体や諸惑星が渦を巻いて誕生しています。このような形の無い美しさの中から、次々に形が進化し、遂にあまりにその幾何学的パターンが完全である為、因を理解する可能性を持った一つの形あるものが出現しました。そしてこの形あるものの中に創造のリズムを語る大いなる息吹が注ぎ込まれました。そしてその形あるものは全ての存在を知覚する力を与えられたのです。そしてその形あるものはまた、それ以前には名前が無かったものに名付ける力を授かったのです。

【解説】

私達人間がどのようにして原初に誕生したか、また創造物の中における位置付けについて語られています。

よく芸術家が彫刻であれ、絵画であれ、人体のデッサンを基本とするようですが、その人体の形そのものの持つ価値について、本項では特別な意図を持った創造物だとしています。私達人類は本来、他の存在に名前を付けて認識し、あらゆる存在を知覚出来る潜在能力があるという訳です。

その私達自身、果たして与えられた身体を十分、大切にしているのでしょうか。劣悪な環境の中に住む私達ですが、それに加えて余計な心配や所有欲、自我の感情の上がり下がり、その心は疲弊して、身体の管理もままならない状態が続いているのではないのでしょうか。

私達の存在の原点は、本項で書かれているように天与の能力を素直に受け継ぎ、発展させることにあります。創造主の期待を担う私達は、このことにいち早く気付いて、少しでも各自がつまらぬ重荷を下ろすことが必要です。

035 And this creation, highest of them all, was known as Man, born out of That which has no ending; given dominion, consciousness and love and power over all the lesser things. But he descended into depths of sleep, became unconscious of the vaster kingdoms, forgetful of the Glory that exists and dreamed, instead, into existence, the changing image of mortality.

035 そしてこの全てのものの最高位の創造は人として知られ、終わりなきものの中から誕生したものと
して知られました。それは全てのより下位のもの達への統治、意識と愛そして支配力を授けられました。
しかし、人は眠りの奥深く身を落とし、広大な王国を自覚せず、存在し夢に描いた栄光を忘れてしま
い、代わって移ろい行く死すべきイメージを存在させてしまいました。

【解説】

現に私達は眠りに落ちて、自分達本来の恵まれた環境を忘れ、移ろい行く現象の世界のみを生きている
と言っています。よく悟りや覚醒とかと表現しますが、それはこれらの眠りから覚めて、本来の姿を見
るようになることを意味します。

眠りという表現の中には、単に身体が休息を求める自然の睡眠を意味するものではなく、怠惰に由来す
る「惰眠」という意味も含まれていることでしょう。テレパシー講座の時にもありましたが、外部から
の印象に気付くためには、私達は感受性を高めなければならず、感覚を磨くことは、この「眠り」とは
対極をなす状態と言えます。

野生動物が絶えず外界のどんな変化も見逃さないように警戒の状態を通じて、真相に気付こうとするこ
とから始める必要があるように思います。

036 Oh, Son of God and Son of Man, lift up all things within your sight; let your heart make known that which the sight doth not reveal and from the womb of Cosmic Cause which is the source of all creation awaken into the birth of a Magnificent Perception. Awaken into the realm of true Being. Let the strong fingers of your will draw you again into full consciousness. Rise from your earthly couch of slumber and perceive the beauty of your present Existence.

036 ああ、神の息子、人の息子よ、あなたの視界にある全てのものを高揚させなさい。あなたの心に視覚は真理を現さないこと、そして全ての創造の源である宇宙の因の子宮から壮大な知覚の誕生が覚醒されることを知らしめなさい。真実の存在の王土の中に目覚めることです。あなたの意志という強い指であなた自身を完全な意識の中に再び引っ張り入れることです。あなたの地球でのまどろみの長椅子から立ち上がって、あなたの現在の存在の美しさを知覚することです。

【解説】

私達の持つ潜在力をもってすれば、私達が見る全てのものに対して、大きな力を発揮できることが冒頭で述べられています。私達自身が通常、支配されている視覚は外見を伝えるに過ぎず、本質的なことは全て印象をもって知覚しなければなりません。万物の霊長と言われて来た人間は本来、様々なものに対し、大きな影響を与えることができます。私達が一瞥するものも含め、全てのものに良くも悪くも影響を与えている訳です。また、そうすることで実は自分達の環境をも作り出しているのかも知れません。

目で見ると全てのものを本来のパワーを発揮させ、高揚させよと著者は言っている訳です。

また、その高揚対象は私達自身に対しても向けられなければなりません。単に心地良いという理由で、私達は怠惰の眠りに就き、長い間、自分自身の存在意義を考えずに過ごして来ました。それを強い意志で立ち上がり、自分自身の存在を再度、見渡してその価値を知ることだと本項は訴えています。

037 This planet earth that we call our home was brought into its present state of being through that cosmic law of affinity, the great magnetic principle of attraction, and all that therein grows and multiplies is of the one and only Cosmic Power.

037 私達が母国と呼ぶこの地球という惑星は、親和の宇宙的法則、偉大な磁氣的引力の法則を経て、今日の状態になりました。そして地球の中で成長し繁殖する全ては、唯一無比の宇宙的パワーによるのです。

【解説】

私達の生活の全てが拠って立つ所は地球の大地です。この大地こそ惑星を作り上げているものです。しかし、星の誕生の物語と同じく、地球も宇宙開闢の最初から存在したのではなく、その後、諸々の創造の作用を経て宇宙空間のチリから生まれたと考えるべきでしょう。

人間に寿命があるように、こうした星々も誕生間もないものから、崩壊に近いものまで様々なステージがあるようです。私達の惑星地球は、これら通常の変遷過程の他に人間が加える汚染や低次元の想念波動の影響を受けて最近では大きな変動期を迎えているように思います。この大地を固めて一つの惑星としているのが、宇宙的な磁氣的引力だとしています。

引力が惑星上の全ての物質を地球にとどめているということでしょう。引力や磁力等、私達にはまだ分からない要素が多いのですが、少なくともそれら惑星を存在させているのは、本項で言う「磁氣的引力」であることを頭に入れて、地球全体の調和を乱すような想念の放出を監視し、その調和を助けるような高次元な想念活動を出す存在になる必要があるように思います。

038 Each form that with our mortal eyes we view is but a point of action in the whole - a minute bit of elemental substance moving to ever changing patterns and designs; impelled and impregnated with all-abiding consciousness. There is no tiniest unit in the Whole that does not bend an ear to the Law which Fathers it and causes it to be. And all that we perceive with mortal eyes and know with our consciousness is but the effective image of the Cause Intelligence, which formless is, yet causes forms to be; which knows no limitations and no bonds yet creates transient dense conditions that move and change within the bosom of incomprehensible Eternity.

038 私達が肉眼で見る個々の形あるものは、全体の中の一点の活動でしかありません。絶え間なく変化するパターンとデザインに移行する基本的な物質の小さな小片であり、全てを永続させる意識によって促され、受胎されたものです。全体の中でそれを生み出し、そうなる原因を成す法則に耳を傾けないものは如何なる微細なもの一つとしてありません。私達が肉眼で見、そして私達の意識で知るもの全ては、形なきものであるが、形あるものを作り出す因なる英知の結果としてのイメージに過ぎません。その因なる英知には制限も制約も無く、しかも無限の永遠の胸の中で移行し変化する過渡的な密度状態を作り出しているのです。

【解説】

私達が通常囚われている結果物は皆、移り過ぎる一瞬の姿であり、それに囚われることなく、その活動を促している本源なる因について知ることを求めています。

私達自身の肉体も含め、この本源的な生命力に従っていないものは何一つとしてなく、皆、その中の構成員、以前に例示があったようにモザイク画のタイルの1片として、大宇宙の中の役割を果たしている訳です。

自然界のあらゆるものが流転する様子を観る中で、私達はその移ろいを「無常」と悲しむべきではないのです。それらは次々に新しいステージに向けて活躍の場を広げ、互いに共存しながら全体の大きな活動の中に生きていること、更にはそれは因なる生命力が全て統率していることに気付く必要があります。

季節の変化やそれに呼応した動植物の活動の変化は、これら宇宙に流れる活動的なうねりを現したものとと言えます。

039 And every unit in the whole of Being, each atom and each spark of consciousness reveals without a mark of limitation, if we but seek its heart, the perfect image of Infinity. And each of the little passing points of action which we in earthly terms have labelled time, speak within the moment of their being the fullness of Eternity. Just as the drop of water from the ocean reveals the character of that from which it came; and every sunbeam traveling through space reflects the composition of the sun and revibrates the image of that orb in all of the glory of its full expression.

039 そして大いなる存在全ての中の一つ一つの単位である各々の原子と各々の意識のスパークは、もし私達はその本質を求めさえすればその永遠に関する完全なイメージを一点の制限もなく、私達に明かしてくれます。そして私達が地球的な用語として時間と名づけた行動の小さな通過点はそれらの存在する瞬間の中で永遠の全てを語ります。丁度、大洋の水の一滴がそれが来たったものの特徴を現し、また宇宙空間を旅した太陽光線の一つ一つが太陽の構成物を反映し、その球体のイメージをその完全なる栄光の表現の全てにおいて再現するようにです。

【解説】

私達各自の存在は宇宙の中では小さいものです。しかし、本項にあるようにその時々^の行動や想念のスパークは宇宙全体の本源なるものを完璧に表現したものとなっていて、小さいながらもその表すイメージは完全な表現になっている訳です。

それは私達が身近な自然を観察する時、細部について探求すればするほど、美しい世界が拡がって来る理由を物語るものでもあります。自然界のあらゆるものは皆、この生命の源泉を表現している故に、細部を探求すればする程、精緻な姿が現れることとなります。

雪の結晶や植物の花や葉を顕微鏡で観察する時、私達は創造主の緻密な作品の中に暮らしていることが分かります。

040 We, as children of the Cosmos, are in the process of reflecting the understanding of our Source. All action is the echo of the Word as It passes through the vast arcades of space, and in Its passing creates time and form.

040 宇宙の子供である私達は、私達の源泉に対する理解を反映する過程の中に居ます。行動は全て大いなる言葉が巨大な宇宙空間のアーケードを通過する際のこだまであり、その大いなる言葉が通過の際に時間と形あるものを作り出すのです。

【解説】

人の言動や行動はその人の本源なるものへの理解を反映しているものです。私達は日々、その生命の源の理解の道を歩む子供だと本項は述べています。当然、レベルの差はあれ、私達は毎日、少しずつ成長することが期待されている訳です。

私達自身が起こす行動も含めて、全ての行動はその原動力は大いなる言葉が宇宙空間において創り出す創造のこだま、宇宙空間に拡がる想念波動であると本項は解説しています。全ての行動はそれらの想念波動に呼応している訳です。

多くを理解する者は行動の源となる想念を選択し、好ましい波動のみを取り入れることでしょう。また、行動することによって新たな経験と知識が得られ、創造主の隠れた意思をも理解できるようになることでしょう。

041 We must open our eyes of consciousness and view in all Its magnitude and beauty, the living, breathing image of the Word.

041 私達は自分達の意識の目を開いて、その全ての壮大さと美しさの中に生き生きと息づく大いなる言葉のイメージを見なければなりません。

【解説】

Word（大いなる言葉）についての記述のまとめです。

私達はそもそも何故、word（言葉）が宇宙根源の作用者として聖書にも書かれ、アダムスキー氏も同じ表現をしているかについて考える必要があります。実は本講座も含め、私達の日常は言葉によって成り立っていることが分かります。私達の考えも、その他文明のほとんど全てが言葉によって維持されています。

そしてこの言葉には、更に深い意味があり、その源となるWord（大いなる言葉）は宇宙における全ての生命活動、創造作用を司る根源のパワーでもあるのです。私達が発する言葉にはそれと関連があり、私達が日常用いている言葉が更に深遠な所でより大きな働きを担っているという訳です。

また、言葉は人間から発せられると、少なからず周辺に力を及ぼします。私達は言葉の持つ力の大きさを良く理解して、その本来の創造力を生活に活かすよう、大切に扱う必要があります。自然界の諸活動を肉眼ではなく、意識を用いて感じ取るよう、私達の師は私達に語りかけているのです。

THE NAME

042 The Word is changeless, whole and complete. The Name personifies the Word - divides Its vastness into many parts, gives place and form to each and every part and power of utterance in an auditory state. The whirling mass of substance called the Earth is to the mortal ears a mighty name, for on its surface humankind evolves and learns a tongue with which to speak the Name of That which in Itself is nameless, yet Earth shall change and pass away in Time, to reunite within the Cosmos. The Word has always been, will always be, the Name has a beginning and an ending.

名前

042 大いなる言葉は変化することなく、全てであり、完全です。名前はその大いなる言葉を個人化し、その広大さを多くの部分に分割し、各々の部分に場所と形を与え、耳で聞こえる発声の力を与えています。地球と呼ばれる高速で回転する物質の塊は人間の耳にとっては強大な名前です。何故なら、その表面で人類は進化し、それ自身名前が無かった大いなるものの名前を話す言語を学んでいるからです。しかも地球は変化を続け、時間経過の中では、宇宙の中で再統合するため、亡くなります。大いなる言葉は常にあり続け、将来もあり続けますが、名前には始まりと終わりがあるのです。

【解説】

人間はそれまで名前が無かったものに名前を付ける能力が与えられたとされています。もちろん、物事に各々固有の名称をつければ分かり易くなる訳ですが、一方では私達はその分割された個別の物、即ち結果物に捉われやすくなってしまいます。人間が分類する遙か前から、各々の植物や動物は地上で生きていた訳ですし、それらの創造物も何不自由なく生活していたのです。

一方、名前を付けたがる私達人間は、名付けたそのものに捉われその形あるものに執着しがちです。しかし、先に述べられていたように、形あるものは、この地球をも含めて時間経過の中では移ろい行く道を歩んでいます。そしていつかは亡びる必然性があります。

しかし、宇宙全体を観ると形あるものは変遷の道を辿る一方で、その源となる言葉、いわばある意味、様々な要素が融合し、混沌とした段階のエネルギーは衰えることなく活動を続け、不変であるという訳です。

043 The Word has never given forth a Name and never shall, for in such act would lose its endless and eternal state of Being. But Man, to whom free-will and power was given, who slumbers deep and dreams his mortal dreams, has in his waking moments labelled action and given name to consciousness and form. His eyes at first were dim with mortal slumber; he saw but vaguely through the mist of sleep, and only felt the coarsest of frequencies that shaped the holy substance into form, but those he named so he might build a memory of parts to guide his future waking states, for only by such means can he evolve to recognition of Cosmic Allness.

043 大いなる言葉は決して名前を發したことはなく、今後もないでしょう。何故ならこのような行動を行なえば、その終わりのない永遠の存在状態を失うことになるからです。しかし、自由意志と力を与えられ、深くまどろみ、自らの死すべき夢を見ている人間は、目覚めている間、行動にラベルを付け、意識そして形あるものに名前を付けて来ました。その目は最初は死すべきまどろみで霞んでおり、人は眠りの霧の中でかすかに見るだけで、形あるものに聖なる物質を形づくった振動の最も粗いものを感じるだけでしたが、自分が名付けたものに対して、人は将来の目覚めに導く役割を持つ記憶の部品を作ります。何故なら、この手段によってのみ、人は宇宙の全体性を認識するよう進化出来るからです。

【解説】

常に全体の中、あらゆる要素と可能性を持った未分化の始原的状态こそが重要であり、名称を課して具体的な現象に特化した瞬間、それには時間と空間の制約が生じるということでしょう。その始原的状况は宇宙全体と同一であるが故に永続することとなります。

一方、私達は知覚力が鈍い為に、結果の世界に現れた最終段階のものに気付くだけで、その前の段階、即ち印象や想念レベルのいわばこれから起ころうとする段階やその現象を引き起こし始める因の段階については、全く無頓着だということでしょう。

しかし、それでも人が一つ一つ、自分が出会う物事を大切にし、自分なりの名前を付けることは、それらを記憶し易くすることであり、粗い知覚と言いながらも、将来、宇宙を理解する上では足掛かりになるという訳です。

自然を学ぼうとする気持ち、自分自身を深く知ろうとする態度が重要です。

044 Little by little man's awareness of that which he encounters expands, and clearer grows his vision till at last his conscious awareness beholds the transcendent Cause behind the Name.

044 自ら出会う中で少しずつ人の気付きは拡がり、次第に自らの視野を済ませ、その意識の気付きを成長させて遂には名前の奥の超越的因を見守るまでになります。

【解説】

本文から、人間の成長とは生涯を通じての学習により、その知覚力を深めて、因の領域にまで拡げることであると示されています。その過程は詩歌の作家のように、わずかな現象の小片から広大な宇宙の動きを感じたり、他のものとの目に見えないつながりを意識することにも類似しているものと思われます。

自らが関心を持って、様々な事象に名前をつけ、親しみ、記憶しようとする事自体は有益だということは既に述べられましたが、少しずつ気付きのレベルが深まるにつれて、遂には因の領域にまで到達できるとしています。

しかし、それをどうすれば実現できるかについては、本書は明かしていません。その解明は各自で行わなければならない訳です。山登りに例えれば、頂上に立てば素晴らしい景色が待っていることを教えることは出来ますが、そこに至る道は各自が置かれている状況に合わせて各自が切り開かねばなりません。そうした試行錯誤の中で身に付けた体験こそが、次の生涯に持ち越せる自身の記憶になる筈です。

045 Out of the Primal Essence has come forth, charged with the Power of the Word, the manifested utterance of Cause. The planets, worlds, the moon, the stars and suns, the leafing trees, the song bird and the rain, the beasts, the crawling reptiles and the dew, each in its own tongue expresses the Word. But man has given unto each a Name and it is there that his attention lies. Manifestation has become his God and he has placed the Name above the Word, which nameless is and silent and unseen yet causes all the named things to be.

045 原初の本質から大いなる言葉のパワーを授けられて、因の現れとなる声が生み出されました。惑星、天体、月、星々そして諸太陽、葉を繁らす木々、さえずる鳥や雨、獣達、地を這う爬虫類、草露、それらの各々は各自の表現方法でその大いなる言葉を表現しています。しかし、人は各々の名前を付け、それに自分の関心を置いています。創造物が彼の神になってしまい、人は名前が無く、無音で、見えず、しかも名付けられた全てのものをもたらした大いなる言葉よりも、名前を大切に考えてしまいました。

【解説】

私達はもちろん自然界のあらゆるものと同僚であり、皆同じ根源から生まれた兄弟です。しかし、その中でも最も能力の高い存在として位置づけられていることも確かです。しかし、その生き方、生活の内容は他の多くの生き物と比べて、大変貧しい精神レベルにあるのかも知れません。

その原因の一つが創造主に対する信頼度、因に対する知覚力の鈍さにあるように思います。たとえ吹雪の中にあっても鷺達はそれに耐え、やがて天候が収まるのを余裕を持って待つことでしょうか。晴れた日には伸び伸び翼を広げて食料を求めて流氷の海を滑空します。人間はこのような過酷な自然環境では野外で生活することは出来ませんが、動物達は生き生きと生活しています。

一方、私達はいつの間にか、自分達で作上げたものを自分の主人にしてしまいました。地球上で流通するまでになったマネーシステムに私達の生活は支配されています。本来、便利さの為の発明物ですが、今日では地球全体を支配するまでに増大してしまいました。しかし、地球表面の金銭システムには係らず、地球は高速で宇宙空間を移動し続け、季節は変化し続けています。これらの原動力こそ、最も分かり易い創造主の目に見える働きです。

また、本項で言う名前を創造主の上位に置くとは宗教上の争いのことでもあります。創造主をどのような名前と呼ぶかによって、信奉する神が異なるとしているからです。

RELATIVITY

046 Matter manifests as an effect of the Cause impulse that rises from the Word. As a pebble dropped in the center of a still pool will send an impulse through the whole clear mass and stir its farthest boundaries into motion, so was the Primal Substance caused to vibrate by the Cosmic Impulse. And as the nearest wavelets are finer than those at the ultimate extreme so is the substance close to the heart of Creation finer than that upon the outer edge. Each impulse of the Word that has manifested in the realms of matter has evolved into its formed state of being through a primal motion or centralized impulse, out of which grew a heavier motion, swelling to greater perceptibility. The primal frequency goes into expansion without the smallest loss of energy.

相関性

046 物質は大いなる言葉から起こった因なる衝動の一つの結果として現れます。静止した池の中央に落とされた小石はその透明な物体の塊全体に一つの衝動を伝え、その最も遠い境界に運動を促すように、宇宙的衝動によって原始の物質は振動させられたのです。また中心に近いさざ波は最極地のものより精緻であるように、創造の中心に近い物質は外側の縁のものより精緻です。物質界で創造作用をもたらした大いなる言葉の各々の衝動は集中化した衝動の主要な行動を通じて形ある存在状態に進化し、そこからより重い行動、より大きな知覚作用に拡大しました。その主要な振動数は少しのエネルギーの損失もなく、拡張しています。

【解説】

本項前段を模式的に表現すれば、中央の小石が起こした最初の波が因なる衝動のことであり、それが周囲の物質が同調し、その波のエネルギー（因なる衝動）を表現することで、その波が周辺に波及することにより、最後の岸辺でその波が打ち寄せられ、具体的な作用をもたらす状況と表現できるでしょう。

海岸に立つと、打ち寄せる波の起源が何処かは分かりませんが、私達は休み無く波が岸に向かって寄せてくる様子を観ることが出来ます。実は、最も粗い物質界に身を置く私達は、この波が何を伝えようとしているのかについて考える態度が必要ではないかと考えています。様々な自然や宇宙の創造作用が本来、どのような意図を持っているかを常に知ろうとしながら、現象を観ることが大切です。

047 We know that in the pool of clearest water the first wave that was started, in its passing, gave to the next its force and animation. And that, in turn, imparted added motion unto the following molecules of water. Without the unity of the whole mass no particle could know the primal action. The cosmos is like unto the pool from out whose center flows the rhythmic motion - it is the clear calm sea of undivided consciousness upon whose surface there arises innumerable wavelets of vibration. Each form, in turn, contains the same - beginning with one basic impulse evolving to countless particles of motion, each one attuned unto the primal urge. Again, each tiny central point of action is offspring of the Great Heart of motion. To the understanding of the mortal man these countless points of action are perceived as separate entities within the varied kingdoms. Upon the earth man gives the name of mineral unto the denser substance that he sees; a little higher is the vegetable, and then there comes the animal and fowl, which leads up to the consciousness of man who separates the Allness into parts and draws a line where no such line could be, for through the whole vastness of the Cosmos the Primal Impulse incarnates itself and as the ripple in the pool gave up itself to create something greater, so does each manifested form of each kingdom release itself into evolvment. The innumerable minerals give up their impulse to plant life, the plant, in turn, releases energy unto the higher consciousness of flesh. There is nothing that can live alone, nor any spark of energy destroyed. All impulse lives and acts eternally, passing from form to form and in its passing charges all substance with emotion and creates ripples on the Sea of Being.

047 私達は透き通った水からなる池の中で、始まった最初の波は進む中で隣にその力と行動を与えていることを知っています。また、そのことはそれに続く水の分子に運動を伝達することでもあります。全ての物質の一体性が無ければ、如何なる粒子もその原始の行動を知ることは出来ませんでした。宇宙とはその中心からリズムカルな運動が流れ出る池のようなものです。それは表面に無数の振動するさざ波が起こる、分裂の無い意識からなる清澄な静かな海です。各々の形あるものは、今度は同じものを含んでおり、無数の粒子の運動を展開する一つの基本的な衝動から始まり、各々はその始原なる衝動に調和しています。更に各々の小さな行動の中心は運動の偉大な中心でもあります。死すべき人間の理解にとって、これらの無数の行動の中心は様々な王国の中での分離した実体のように受け取られます。地球に対して人は自分が見るより密度が高い物質を鉱物という名前で名付けますし、より高次なものを野菜、そして次に動物や家禽類等が入ります。これらは人間の意識にまで至りますが、それは全てを部分に分け、本来、そのような区別のあり得ない所に線を引いています。何故なら宇宙全体の広大さの中に始原なる衝動が化身し、池のさざ波のように自身をより大きな何かを創り上げる為に捧げているからで、各々の創造された形あるものは進化の為に自身を解放しているのです。無数の鉱物が植物の命の為に自分達の衝動を捧げ、植物はより高次な肉体の意識にエネルギーを放出しています。独りだけで生きて行けるものは何一つありません。また、破壊される如何なるエネルギーの火花もありません。全ての衝動は形あるものから形あるものに移行しながら生き続け、永遠に行動し、移行する過程で全ての物質に感情をみなぎらせ、実在の海にさざ波を創り出すのです。

【解説】

波が伝播する為には、各々の場の存在物が自身をひたすら波の表現者になりきって、隣接するものにその内容を伝えようとしなければなりません。一つでもその任務を怠るや、波は伝わることはありません。宇宙は各構成要素がこくした自己を因なるエネルギー波動の表現者に徹することで成立している訳です。

一方、こうしたいわば「個我を捨てる」のは何故出来るかについては、「個我を捨てる」ことによつて、むしろ全体との一体性が生まれることに注目すべきだと考えます。全体に自我を没入させることによつて、より深遠な振動が体内を通過しやすくなるものと思われまふ。

本項及び前項にありますように、物質の奥深く因の領域から絶え間なく精緻な「調べ」が流れてくる訳ですが、その振動も最下流ではその現れも粗くなると述べられていました。人体に例えれば、身体の内奥の中心部から発信される振動が外気と接する所、即ち、皮膚は最も組織が粗いのかも知れまふ。私

達が日常、気にしがちな「顔」等は、その最たるものではないでしょうか。本来、私達の誇れる良質な組織は、身体の内側にこそあるように思います。

048 Substance is in the process of evolvment; consciousness, in the process of expression. Up and down the vast scale the force moves rapidly into expression, touching one particle of matter, then another - blending the two or more into a chord of harmony, just as the fingers of a man pluck music from the mute strings of his harp. To produce a perfect melody the strings must be set in motion many, many times, making new tonal combinations - now soft and low, now rising to crescendo; one time in rapturous swinging rhythm, then changing to a lingering minor key - all strings awaiting the touch that stirs them to life within the melody. Each string is vital to the total Song.

048 物質は進化の過程に、意識は表現の過程にあります。広大な規模に上下しながら、力は表現に向けて素早く動き、物質の粒子一つ一つに次々に触れながら、二つあるいはそれ以上の粒子を一つのハーモニーの和音に融合します。丁度、人の指がハープの沈黙した弦から音楽を弾き出すようにです。完全なメロディーを作り出す為には、弦は何度も何度も揺り動かされなければなりません。その結果、新しい音色の組み合わせを作り出します。柔らかで低いトーンから、今度は最高潮に上昇します。ある時は熱狂的な律動的なリズムで、次はなごりを惜しむ短調の調子に変化します。全ての弦はそれぞれをメロディーの中で命を掻き立てる演奏者のタッチを待っているのです。弦の一つ一つがその歌全体にとって無くってはならないものです。

【解説】

以前、顕微鏡下で牛乳の粒子が振動している様子が見えることを紹介しましたが、宇宙の中のあらゆるものが振動していることは現代物理学の共通の認識です。しかし、その粒子の振動の原動力なるものの実態が、本項で言う宇宙空間である種の強力な力が縦横無尽に飛び交っている状況を表しています。

とりわけ、私達にとって大切なのは、各自の特性を本文ではハープの弦の一本に例えられている点です。音楽を作り出す神の手によって適宜適切に弦に力が加われば、調和ある音楽の一部として各自の表現（音）が鳴り、その結果、壮大で美しいメロディーの中の一音が鳴らされ、曲が成立する訳です。どの曲にとっても、その音が無ければ、音楽は成立しません。それが私達各自が自分の本来の特性を発揮することで、全体として美しい調べが出来上がるということです。

このようにあらゆるものを調和させながら、パートパートに必要な存在を奮い立たせ、美しい作品を仕上げて行く、宇宙を駆け巡る力は実に大いなる存在です。

049 So it is with the Song of Creation - each atom of substance is used eternally, now making up a rose bush or a tree; now mingling within man, now in the beast; descending into form and then once more ascending to invisibility; expressing through fire, water, earth and air, and ether finer than man can know; from the coarse pulsation that produces stone to a motion higher than the speed of light; from radiation down into vibration and back again the Primal Essence moves. From the formless into densest matter and back again into the higher state, each atom relative unto all others, cooperating and exchanging places.

049 ですから、物質の原子は創造の歌と一緒に用いられており、今はバラの茂みか木を作る為、また今は人体の中で混合され、あるいは今は獣の中に混じっています。形あるものに降下し、次には再び目に見えない存在に昇華します。炎を通じて、あるいは水、大地や空気そして人が知っている以上の精緻なエーテルを通じて表現されています。また、石を作り出している粗い振動から光の速さより高い運動に至るまであります。放射線から低下して振動に至るまで、そして再び原初の真髄は動きます。形なきものから最も密度の高いものまで、また逆に、より高次の状況にまで、各原子は他の全てとの関連において協力し合い、互いに場所を交換しています。

【解説】

段落（046）から続く本項はrelativity（相関性、つながり）について説明しています。その中で原始は様々な創造物に用いられることによって下は黙っている鉱物から植物、動物、更には人間の身体を作る為を活用され、遂には宇宙空間のガス体の一部になって次の活用の機会を待つことでしょう。何千億年、あるいはそれ以上の長い年月の間、原始は様々な形あるものに活用されながら、自身の体験を蓄えて来ました。

人体には60兆個もの細胞があるとされており、それら一つ一つが膨大な数（10の14乗個程度）の原子から成り立っていることを考えれば、これら壮大な宇宙ドラマが私達自身の身体についても起こっていることが分かります。一つ一つの原子や細胞、あるいは人体ももちろん単独で存在するように見えますが、その営みは他の多くのものと関連するなかで、各々の行程を歩んでいる訳で、一度として単独で目的を達することはありません。相互に切り離せない深い関係の中で生きて行くことを私達は学ばねばなりません。

おことわり [2011-02-24]

明日から、来週月曜日まで、北海道に撮影旅行に出てしまいます。

その間、本項の更新をお休みしますので、ご了解下さい。

050 Within the Cosmos there is no destruction but only newness by a ceaseless action; all substance changing and transmuting but never for an instant's time withholding. In an endless array of patterns and designs from formless into formed in unfolding the wondrous picture of eternity.

050 宇宙の中では破壊というものはなく、絶え間ない行動による新しさだけが存在します。全ての物質は変化し、変質しますが、一瞬として保留状態にあることはありません。永遠の目くるめく絵画を紐解く中で、終わりのないパターンと形なきものへの入念な計画があるのみです。

【解説】

私達地球人にとって、人間の死は悲しむべき事柄の最たるものとなっています。しかし、本項では宇宙には絶えず新しさだけが存在し、生き生きとした生命力の衝動波動が支配していることを伝えていきます。私達も自然を観察すると冬の後には必ず春が巡って来ますし、自然界の中では死者は意外な程、早くその舞台から去り、代わって新しい生命体が大地に現れ、草木は地を繁茂する姿を見えています。

宇宙の中の大道はこうした常に生まれ変わる自然のサイクルの中の活気ある流れであり、私達は常にそのことを身体に受入れ、その波動の表現者にならなければなりません。古来から「万物は流転する」とありますが、その真の意味はこうした生命力にみなぎる姿を指しているのです。

051 There is no greater law than that of conscious action, for upon it rests continuous Creation. Energy acting upon itself gives birth to time and space, the relative elements of the Cosmos that cause conception of the state called form. Each thing depends in part upon another and may be traced back to a common source.

051 意識の活動ほど偉大な法則はありません。何故なら止むことの無い創造はそれに支えられているからです。意識の活動において作用するエネルギーは、宇宙の相関的要素である時間と空間を生み出しますが、（その時間と空間は）形あるものと呼ばれる状態の概念をもたらします。各々の物事は、部分的に互いに依存しており、また一つの共通の源泉に遡ることができることでしょう。

【解説】

私達は著者の言う「意識の活動」というものに対して、まだ十分には理解していないかも知れません。しかし、本項では意識の活動というものが時間と空間を生み出す源だと明言されています。即ち、時間と空間を越えた存在が意識ということかと思われれます。その宇宙意識という本源的な要素が全ての生き物の源泉であるが故に、全ての生き物は同じ源を掘り所とする兄弟姉妹ということになる訳です。

この意識の活動の法則こそが、何よりも貴重なものである訳ですが、その恩恵を受ける私達は、その存在を知らず、また結果の世界のみに価値を置いて来ました。現象の奥にある時空を超えた意識の活動について知れば知るほど、万物の相互依存性や相関性について目が開けて来るものと思われれます。

4. PERCEPTION AND CONCEPTION

052 "What man can conceive he can also achieve," has been said, but between conception and achievement there lies a middle step which is perception. We are familiar with the use of the word perception as used in relation to a faculty of receiving knowledge of external things by the medium of the senses. This same faculty may also be used to alert the senses to a Cause Intelligence which is beyond its effective scope of perception. Conception is constantly taking place within man; the conscious intelligence of the cosmos is eternally incarnating in matter, but unless there is awareness on the part of the mortal sense mind these thoughts are liable to pass on without ever being recognized in the world of form. We know that thought is the basis of human action and there are millions of thoughts that pass over the highway of mind every day, but man perceives approximately one thought out of every hundred which is conceived within his mind.

第4章 知覚と感知

052 「人が感知することはまた、実現することが出来る」と言われて来ました。しかし、感知することと実現の間には、知覚という中間の段階があるのです。私達は知覚という言葉、感覚という媒体を通じて外の物事の知識を得る能力に関連させてよく用いて来ています。これと同じ機能は知覚の効果的な範囲を超えた宇宙的知性に感覚を鋭敏にさせるためにも用いることが出来ます。感知することは人間の中で常に起こっており、宇宙における意識の知性は永遠に物質の中に体現していますが、肉体の感覚心の側に気付かなければ、これらの想念は形あるものの世界の中で認識されることのないまま、通り過ぎてしまい易いのです。想念は人間の行動の基本であり、また毎日、心の大道を何百万もの想念が通過していますが、人は自分の心に感知されるおおよそ100に1つの想念を知覚するだけであることを、私達は知っています。

【解説】

本章では心に浮かぶ抽象的な性質のアイデア (Conception) と具体的な映像や音声によるアイデア (Perception) の関係について説明しています。

私達の身体を含めて宇宙空間には膨大な数の印象波動が飛び交っています。そのことは前項(048)の中でも宇宙の基本的生命力とも言える力が縦横無尽に飛び交い物質を奮い立たせていると記述されている通りです。しかし、これらの印象を私達が正しく捉える為には、先ずはその持つ内容を理解しなければなりません。その理解に感覚を通じた理解が必要だという訳です。

漠然としたアイデアをより具体的なものとして把握する為に、私達には既存の感覚による理解が必要です。その結果、漠然としたアイデアは具体的なイメージとして把握されることとなります。

印象に対して感覚を研ぎ澄ますことは、古今の芸術家の才能でもありますが、私達各自の能力を高める上からも重要だということです。

053 There are myriads of thoughts bombarding man's mind every second; some are personal, some are impersonal, many are beyond the conception of the average sense mind. It is true that each thought that enters man's being impresses itself upon the individual cells of his body but the mortal sense mind as a whole does not become aware of it. Conception while being of Cause does not raise man to the Cause state; it is perception which produces growth in the mortal man. In the average man the thoughts are passing at the approximate rate of 1100 per second. In a highly developed person the thoughts run about one-half million per second. The mortal grows through experience and only that which is perceived consciously can be termed as experience. Awareness is the key to wisdom and the only channel to human thought expansion. Awareness must be combined with action so that intelligence may be expressed. Cosmic Cause incarnates in matter whether the mortal mind of man is conscious of it or not, but through perception of that action the mortal expands in the field of growth. The mortal sense mind, having divided itself from the Whole, must evolve again into the Oneness by perceiving the Cause in effects. In the cosmos everything exists and we, being of the cosmos, have everything within us. If we perceive that which is within us we are able to bring it into manifestation. Through perception we actually "mother" or "father" a thing into growth. The whole science of life is based on these two - through conception and perception are all things brought into being in the world of effects. Conception is responsible for putting Cause into motion and bringing forth action. Conception may take place without any awareness on the part of the intellect but the action which takes place due to conception bring forth a quickening that produces what we know as sensation. Perception is the act of becoming aware of sensation and knowing its source.

053 毎秒、人間の心に衝突して来る何万もの想念があります。あるものは個人的なもの、またあるものは非個人的なものであり、多くは平均的な感覚心の感知を超えています。人間に入り込む各想念は、それ自身を人間の肉体の個々の細胞に印象を刻印することは真実ですが、死すべき感覚心は概して、それに気付くことはありません。因に属する感知は人を因の状態にまで押し上げることはしません。死すべき人間において成長をもたらすのは知覚なのです。平均的な人間では、想念はおよそ毎秒1100個が通過しています。高度に進化した人物においては想念は毎秒50万個も流れます。死すべき人間は体験を通じて成長するもので、意識的に知覚したもののみが体験と呼ぶことが出来るのです。気付きは人間における想念の拡大につながるカギであり、唯一の道です。また、気付きは知性が表現されるよう行動と結び付けられなければなりません。宇宙の因は死すべき人間の心が意識しているに依らず、物質に宿っていますが、その活動を知覚することによって死すべき人間は成長の分野で発展するのです。全体から自分自身を分離した死すべき感覚心は結果における因を知覚することによって、再び一体性の中に進化を遂げなければなりません。宇宙の中に全てが存在し、私達もその宇宙に属する以上、私達の中に全てを有しています。もし、私達が自分自身の中にあるものを知覚すれば、私達はそれを創造の現れとしてもたらすことが出来ます。知覚を通じて私達は実際には物事を成長させる「父母」の役割を果たすのです。生命の科学全体はこれらの二つ、感知と知覚に基礎を置いており、それらを通じて、全ての物事が結果の世界にもたらされるのです。感知は因を動かし、行動を推し進める役割を果たしています。感知は知性の側には何らの気付きもないまま生じるかも知れませんが、感知に起因する行動は私達が湧き起こる感情として知っている状態を作り出す衝動をもたらします。知覚はその感情に気付き、源泉を知る行為なのです。

【解説】

本項は通常、私達が「思いは実現する」と単純に考えていることの本質的な解説が為されています。

私達にやって来る宇宙を源泉とする想念が感知される、いわば第一段階の感知 (Conception) があり、その感知機能が鋭敏になると、各細胞が感知した想念情報が具体的な感情衝動 (Sensation) として発現し、それが感覚心に属する知覚機能に働きかけることによって私達はその想念情報に気付くという構図が解説されています。

また、重要なのは、私達が知覚する段階が、即、関連する物事を実現する機能を持っているとすることです。言い換えれば、私達自身が物事の創造の仕組みの中の一つの機能を果たしていると言うことが出来る点です。私達が日常、どのようなことを思い、どのような想念を取り入れるかには十分な注意

が必要です。日常、無視され本来の役割を果たすことなく、通り過ぎて行く膨大な数の宇宙の因からの無言のメッセージに気付こうとしないことは、本当にもったいないことです。

054 In our christian bible we find references to "Life Eternal" and the way we must conduct our lives in order to know, "the only true God," but the application as to just how this is done is not explained. To know God the Father is to perceive Cosmic Cause. Conception has no limitations for it is cosmic, and that which is conceived can also be perceived by the mortal mind so perception knows no beginning or ending; its vastness is all-inclusive.

054 キリスト教の聖書に私達は「永遠の生命」や「唯一真実の神」を知る為に私達が人生を導かなければならない道に関する言及を見出しますが、ただ、これがどのようにしたら為されるのかについては説明されてはいません。父なる神を知ることが宇宙的因を知覚することです。感知は宇宙的属性であるが故に限界はありませんし、また感知されたものはまた、死すべき心によって知覚され得るため、知覚にははじまりも終わりもない訳で、その広大さは全てを包含するものです。

【解説】

「汝の神を知れ」とは宇宙から毎秒何万と来る印象波動を各自で知覚せよということであった訳です。

この「知る」という言葉の奥には、印象活動が各細胞に到達して起こすConception（感知）が引き起こす細胞から発せられるSensation（衝動）に感覚心が気付くこと、即ち感覚心が遠く宇宙からやって来る想念を知覚することを意味していたのです。

しかし、その知覚すべき対象は実は無限にあり、空間に満ち溢れているというべきかも知れません。目の前におびただしいほどの創造主のメッセージが流れている訳ですから、それに気付くようになれば、幸せそのものになることは間違えありません。

壮大なる宇宙の中で、自ら宇宙と分離し、引きこもっている私達人間は、奇妙な生き方を選択していることが分かります。折角の人生です、一日も早くこの素晴らしい現実気付きたいものです。

055 Perception includes not only recognition but also comprehension. We cannot fail to recognize the fact that we are sons of the Cosmic Father Principle and heirs to all there is, but how many are there in this world who have actually perceived what that sonship means? Lack of perception leads always to a lack of confidence which prevents man going forward into greater accomplishment. The man who fails to understand his relationship with the whole is but a wanderer having no purpose in life.

055 知覚には認識のみでなく、理解も含まれています。私達は自分達が因なる父の息子達であり、存在する全ての相続人であることを忘れてはいけませんが、この世の中にはどれだけの人がこの息子の地位が何を意味するかを知覚しているのでしょうか。知覚の不足は確信の不足に繋がるものであり、それは人がより大いなる達成に前進することを妨げるものです。全体との自身の関連性を理解出来ない人間は人生に何の目的を持たない放浪者でしかありません。

【解説】

重要なのは宇宙全体における私達各人の役割についての理解です。前項にもありましたように感知 (Conception) 状態では現実の結果の世界にはあまり効力が無い一方、それらを各自の感覚心が把握すること (Perception) によって初めて理解が拡がるという訳です。

また、その理解の中で私達一人一人が父なる神の子であることが理解されれば、私達の進歩は急速に進展すると明言されています。様々な物事が良い方向に変化し、生き生きとした生活を送れるようになることは、「類は類を呼ぶ」ことから頷けます。その姿は自然界における動植物達とも似ていることでしょう。また、私達全てが創造主の息子、万物の跡継ぎとして、本来、大切に扱われていることにも気付く筈です。

056 Lack of perception is the greatest of the sins of omission; why should a man remain in ignorance when all things lie before him and the very fullness of life prevails within his being awaiting the command to come forth.

056 知覚の欠如は怠慢の罪の内、最大のもので、何故、人間は全てのものが自分の面前に有り、自身の中には命令が来るのを今か今かと待っている生命で満ち溢れているのに、無知のまま留まっているというのでしょうか。

【解説】

よくよく考えれば、私達の周囲にある手付かずの自然の他にも、道端に咲く名も無い草花その他、自然界にあるものは、どれ一つとっても美しさに驚かないものはありません。先日も北海道知床（羅臼）の流水群や鳥達を見てきましたが、そこに行けば誰もが写真家になることが出来るほど、自然本来の美しさには驚かされました。

また、一方では人体には様々な機能があり、この惑星の人口に匹敵する60兆もの細胞が各々役割を担って活動しており、人体という一つの目的を果たしています。

私達は、自身の外側には豊かで美しい世界が広がり、内には私達の命令一下、忠実に働く細胞群が与えられています。このような恵まれた環境にあつて、その状況に気付かず、勝手な不平や不満を漏らしている私達はこれらを与えてくれた贈り主に対して、大変失礼なことを続けていると言えるでしょう。

先日もある会合で申し上げたのですが、私達にとって各創造物がどのような意図、目的で創られたのかを知ろうとすることが最も需要だということに気付く必要があると思っています。このことはひいては私達各人が生まれた目的、今人生の期待された目的について学び知ろうとすることにもつながっています。贈り物を受け取った者はその贈り主の気持を感じ取ることが最低限のマナーであることは言うまでもありません。

057 When an unselfish idea is conceived it is to be perceived and brought forth into manifestation just as a soul conceived in the womb of a mother is to be given birth in physical form. Whatever one becomes aware of that is not contrary to natural law must exist, for how can it be possible to perceive that which is not existent?

057 一つの非利己的なアイデアが感知される時、それは丁度、一つの魂が母親の子宮で受胎し肉体の形をもって誕生するのと全く同じに、それは知覚され具体的な創造物としてこの世にもたらされます。自然法則に反しない限り、どのような事柄も人がそれに気付くものは存在する筈です。何故なら存在しないものをどうして知覚することが出来るのでしょうか。

【解説】

いわゆる「思いは実現する」の作用原理が述べられています。人体が受精の瞬間から誕生に至るまで母体の中で着実にその肉体が形成されて行くように、正しい想念を知覚した場合には、それが青写真になって次々に実現に向けた作用が宇宙空間の中で発生するとしています。即ち、私達が本来望ましいとする非個人的なアイデアをこの肉体の感覚心として正しく知覚し、自覚さえすれば、早晚それらのアイデアは実現する方向で、様々な環境が自然と作用することを示唆しています。

多くの聖人達が奇跡を起こして人々を救ったり、病を治したりしたのは、この作用を積極的に応用した為と思われます。また、願い事は執着せず、直ちに解き放とも言われますが、抱いた想念にいつまでも固執することなく、解放することによって、後はその作用の結果を待つという「他力本願」的な姿とも言えるように思います。

要は私達各自は創造主の息子として、物事を創り出す能力を秘めているということでしょう。大切なのは私達が感知し、知覚した事柄はその瞬間から、全て実現に向けて動き出すということです。

058 There is really very little difference between conception and perception; the former is the cause soul awareness and the latter is mortal sense awareness, and the two should be always united.

058 実際には感知と知覚の間には、本当にほんのわずかの違いしかありません。前者は因の魂による気付きであり、後者は死すべき肉体の感覚の気付きで、両者は常に一体であらねばならないのです。

【解説】

第4章の要旨として、Conception（感知）とPerception（知覚）について、Conceptionを因に属する魂の気付き、Perceptionを肉体の感覚心による気付きと明確に解説しています。つまりは私達の因なる部分と肉体の感覚器官の部分の二つの統合が大事であると述べられています。

両者は機能的には大差は無いとしておりますが、その感知能力には現実大きな差があるものと思われま。よく、因を知ることが大事だとされていますが、それはこの因に由来する感知結果に通常感覚心を鋭敏にさせよということかと思えます。「生命の科学」において、「原因を知ること」の大切さが繰り返し述べられています。どのようにしたら良いかについては、各自の努力と工夫によるところが多く一概には言えませんが、少なくとも、私達感覚心が因に関心を持つことが最も重要だと考えます。

毎日の生活の中でも外見からは分からない隠れた要因や仕組み、それらが支える機能について気付くことが重要です。何気ない事象の中に、大いなる因の活動があることに気付きたいものです。こうした歩みの中で、感覚心による知覚範囲が因の領域にまで拡がり、両者が一体になることが出来るものと思われま。

059 One of our noted scientists once said, "I find oftentimes that in the moments when I have ceased pondering over a problem the greatest revelations come to me." Such revelation is true perception, for it is the time when the mortal sense mind and the cause intelligence unite. Such awareness is called intuition, and the man who acts intuitively is always right. The mortal mind is usually unable to perceive the thoughts which are conceived from the cosmic source for it is in a constant state of friction and wonderment, lost in the perception of the innumerable forms of the effective world and so unaware of the new ideas that are waiting for birth. It is necessary to perceive the possibilities within anything before those potentials are able to become a reality in one's life. True perception goes beyond the apparent into the cause of the appearance, it goes into the invisible and brings newly conceived ideas into manifestation. Many people consciously perceive wonderful things but have not enough faith to bring them forth.

059 著名な科学者の一人はかつてこう言いました。「私はしばしば、問題について考え込むことを止めた瞬間に最大の新発見がやって来ることに気付いています」と。このような啓示は真の知覚です。何故ならそれは死すべき感覚心と因なる知性とが結びつく時であるからです。このような気付きは直感と呼ばれ、直感的に行動する者は常に間違いはありません。死すべき心は大抵は宇宙的源泉から感知される想念を知覚することは出来ません。何故ならそれは常に摩擦と好奇心の状態にあり、結果の世界における無数の形あるものを知覚する内に迷ってしまい、誕生を待っている新しいアイデアには気が付かないからです。このようなこと（訳注：感覚心と因なる知性が結びつくこと）が各自の生活において現実のものとなるのが可能となるためには、それ以前にその可能性を知覚する必要があります。真の知覚とは外観を超える因にまで及ぶものであり、新たに感知したアイデアを創造物としてもたらすのです。しかし、多くの人々は意識上は素晴らしい物事を感知はしますが、それらを現実にもたらすほどの十分な信頼を持っていないのです。

【解説】

「直感に従えば間違いはない」、というのが多くの方のこれまでの経験則ではないかと思います。もちろん全ての事例に当てはまるものではなく、特に物事が順調に推移している時、不思議と「勘が働いて」、未然に危険を避けたり、タイムリーな行動がとれたという思いが皆様もお持ちかと思います。

そのような良好な状態とは、実は本項にあるように心が因の領域の情報までも知覚出来ていることを意味していると考えべきなのです。私達の先輩宇宙人達は皆、このようないわばテレパシクな能力に秀でている為、物事を起こす際の効率が良く、適切な時に適切な行動をとることが可能なのだと思われます。

実はこのように因の領域からは常に支援の手が差し伸ばされており、私達は正直、素直にその声に耳を傾け、気付くことではるかに苦勞の無い生き方が出来るものと思われます。しかし、これは単に楽な道に行くという意味ではありません。創造主の導きを信じ、自らを通じてその発現を望む、高潔なる意志の下で初めて実現するからです。文中のFaithについて、本項では「信頼」と訳出していますが、他の日本語としては、「信仰」や「信念」と訳されることが多いことを付け加えておきます。

お知らせ [2011-03-14]

この度の地震被害に逢われた皆様には心より御見舞い申し上げます。

幸い、私共の方は被害を免れており、本講も引き続き継続して行きますので、ご安心下さい。

なお、本日から始まる東京電力の計画停電その他の影響から、2～3日、お休みさせて戴きますのでご了解下さい。

2011年3月14日

竹島 正

再開のお知らせ [2011-03-16]

本講座をご覧戴いている皆様へ

地震発生以来、何かと慌しく、本講に取り組むゆとりがありませんでした。また、一方では福島原発の状況については、予断を許さない状況が続いております。

当分の間、これらの状況は続くものと懸念する一方で、こういう時こそ、結果の世界に影響を受ける感覚心を鎮め、冷静なる心境になることが求められているものと思います。

本講座を学ぶ私達もその持てる力を最大限発揮する上から、再びこの講座を再開することが必要だということに気付いた次第です。

諸般の事情により、従来にも増して不定期となるかも知れませんが、本日より更新を再開しますので、宜しくお願い致します。

2011年3月16日

竹島 正

060 Learn to believe in your power of perception; give recognition to those things of which you became aware and you will find yourself enjoying a feeling of happiness and well being. Your vision will gradually expand to where you can feel the pulsation of life in all forms. And you will understand the Universal Language of Life, and the limitations that have bound you to the personal ego will vanish into the illimitable vastness of Cosmic intelligence.

060 あなた自身の知覚力を信じることを学びなさい。あなたが気付くようになった物事に認識を与えることです。そうすればあなた自身、幸せと良好な状態を楽しんでいることに気付くことでしょう。あなたの視界は徐々に拡がり、あなたがあらゆる形あるものの中の生命の脈動を感じ取れるようになることでしょう。そしてあなたは生命の宇宙普遍の言語を理解し、あなたを個人の自我に縛り付けて来た諸々の限界は宇宙的知性の限りない広大さの中に消え去ることでしょう。

【解説】

大事なことは、私達各自が因の領域の知覚力であるConception（感知）と結果の領域の知覚力であるPerception（感覚心の知覚）の両者を持っているということでしょう。更にはこの感覚心による知覚力も現状では因の領域への拡がりほとんどありませんが、訓練によって拡げられるという訳です。

いわゆる物質が創造される原動力を司る領域との交流ですから、その恩恵は計り知れません。私達各自の知覚力を発展させる意義はそこにもあるのです。

更に整理しておきたい事は、Conception（因の領域の感知）からもたらされる情報は基本的に有用なものであり、私達は積極的に取り入れる必要があるということです。もちろん人間が各自発する低レベルの想念もある訳ですが、私達の志向する波長に合ったものが入ってくる訳で、望ましいものを明確にしておけば、恐れる必要はありません。

私達が開発しようとしている知覚領域が、それほどまでに素晴らしい世界なのだということを明らかにした上で、知覚力を高めることが重量です。

5. WHAT IS CONSCIOUSNESS?

061 The term consciousness seems to be the foundation of all creation. It is not a physical thing, yet it measures all expressions of physical forms. Without it no form could be or exist for consciousness is life itself. It is the power which gathers the elements into the formed state and it is the intelligent force which causes awareness and animation within the form. Conscious awareness of the All-Inclusive consciousness is that tremendous power which is referred to in the Scriptures as the Holy Ghost. It is a dweller, as power, within that which is created, perpetuating the growth of the form by the constant action which is the law of It's being.

第5章 意識とは何か

061 意識という用語は全ての創造作用の基礎であるように思います。それは物理的なものではありませんが、物理的な形あるものの全ての表現の尺度となっています。意識なしではどんな形あるものも存在することが出来ません。意識が生命自体であるからです。それは諸元素を集めて形ある状態にさせる力であり、形あるものの中に気付きと活気をもたらす知性的な力なのです。全てを包含する意識に対する意識的な気付きは聖書の中で聖霊と称されるあのすさまじい力です。意識は創造されたものの内側にある力としての住人であり、その存在の法則でもある絶え間ない行動によってその形あるものの成長を永続させているものです。

【解説】

私達は未だ十分に意識の実体について学んではおりません。各自の誕生から今日まで意識について正しく系統的に教わったこともなく、先人達もその人なりの断片的にしか把握出来ていないように思われます。しかし、万物を根本的に支えている力であり、いわゆる聖霊とも称せられる莫大な力を有しているという訳です。

しかし、その力は知性を持った力である点が重要です。現在、福島原子力発電所で生じている有害な放射線を出すのも原子の反応ですが、それらは人間が無理やり作り出した反応系での現象であり、自然の反応ではないように思います。自然界で生じる生命活動の反応は、もっとエネルギーレベルが小さく、効率的に進行しますし、何よりも永続できる調和したものとなっています。

この意識の持つ力を自覚できれば、内側から力も湧いて来るように思います。私達自身がより良いものの創造の経路として役立つことを願うものです。

062 The story of creation as recorded in Genesis says that God created man from the dust of the earth; out of the elements He molded a form in His image and likeness as a sculptor creates a beautiful statue out of clay. This He did with intelligence and power, and having looked upon His completed form creation He was well pleased, so He incarnated into the form as the Breath of Life and man became a conscious being, a living soul, having the power of intelligent action, which we know as life.

062 創世記に記録された天地創造の物語は、神が人間を大地のチリから創ったとしています。その諸元素から創造主は彫刻家が粘土から美しい彫像を作り上げるように、神ご自身のイメージと似姿で一つの形あるものを型に入れて創ったのです。これを神は知性と力によって行い、自ら完成した創造物を眺め、神は大いに喜び、生命の息としてその形あるものの中に化身し、その結果、人は意識ある存在、生ける魂、私達が生命として知っている知性的な活動の力を得たのです。

【解説】

この記述は聖書の創世記にある内容ですが、私達は著者アダムスキー氏はこれを単に象徴的な描写として述べていると考えてはいけなように思います。つまり、私達が「創造主」と言う時、私達は具体的に人間に似た姿の創造主像を思い浮かべる必要があるように思います。その理由は、第一に本文にもあるように、「人間を神ご自身の似姿に創った」とある訳で、私達人間は少なくとも外見上は神に似ているということからです。更には進化した宇宙人達の宇宙船内でアダムスキー氏は創造主を描いたとされる肖像画を見えています。科学と哲学をマスターした人達が到達した点が、この創造主を具体的な人間の似姿として表現していたことによります。

とかく神を崇める行為は地球では様々なレベルがあり、過去から現代に至るまで、その神を争っての戦いが各地で起こっていたり、多くの宗教団体が人々を惑わしていることも確かです。そうした中であって、宇宙全体の秩序と生命活動を支えている原理や仕組みを学んだ上で、表現し実感できる神の姿こそ、私達のゴールと言えるものです。

063 This intelligent force, then, is actually the Cosmic Whole, for Its limit of knowledge is no where. It is the creator of everything that was, is, and will be. It is not only the soul of man but the very soul of all things, the Father-Mother principle of the Cosmos.

063 この知性ある力は、実際には宇宙全体なのです。何故ならその知識の限界は何処にも無いからです。それはこれまでにあった、現在ある、そして将来あるだろうあらゆるものの創造主です。それは人間の魂のみならず、万物の魂そのもの、宇宙の父性母性原理なのです。

【解説】

意識とはどのようなものかを説明している本文から、私達は広大な宇宙とくまなく繋がっている、意識と呼ばれる知性ある力の存在をイメージすることが出来ます。万物あらゆるものを支えている知性体と私達各自の意識とが繋がっているという訳です。

また、あらゆるものが生み出され、創り出されて行く上で、意識が必ず作用していることでもあります。それはかつて、「天地は滅びても私の言葉は滅びない」としたイエスが伝えたかった内容とも言えるでしょう。

現在、この惑星では日本の震災も含め、不安定な情勢が続いていますが、今後どのような経過を辿るとしても、本講で言う意識の働きは宇宙全体の広大さの中で、変わることなく生命の躍動を生み出しているのです。

064 As far as we know consciousness had no beginning and will have no ending for it seems to be all in all, the Alpha and Omega, and is made up of the Trinity; first the power; second, the intelligence; and third, the created form. John tells us -"In the beginning was the Word and the Word was with God and the Word is God." What is a word? Is it not a thought expressed? And does not thought depend upon consciousness for it's being? Then we must admit that "in the beginning was consciousness and the consciousness was with God and consciousness is God." Out of consciousness, again, proceeded thought so "in the beginning was thought and thought was with God and thought is God." And thought becoming expressed returns us in proper sequence to the Word which is with God and is God. (Cosmic Cause) The incarnation of these three through action brings forth manifestation which is concrete realization in form of that which exists always in consciousness.

064 私達が知る限り、意識には始まりもなく、また終わりもないものでしょう。何故なら意識は全ての中の全て、アルファ（訳注：ギリシャ文字24個の最初の文字）であり、オメガ（訳注：ギリシャ文字24個の最後の文字）であるように思うからで、それは三位一体（訳注：「父・子・聖霊」の三位格があることを指す）から成っているからです。即ち第一に力、第二に知性そして第三に創造された形あるものです。使徒ヨハネはこう言いました。「はじめに言葉ありき、言葉は神とともにありき、そして言葉は神である」と。言葉とは何でしょうか。それは表現された想念ではないでしょうか。そして想念はその存在を意識に依存しているのではないのでしょうか。そうすると私達は「はじめに意識があり、意識は神であった。そして意識は神である」ことを認めねばなりません。意識の中から更に想念が進み出るため、「はじめに想念があった。想念は神であった。そして想念は神である」ということになります。そして表現された想念は神とともにあり神（宇宙的因）である言葉として適切な順序で私達に戻って来るのです。これら3つの想念の活動の化身は意識の中では常に存在している形あるものへの永続的な現出である創造作用をもたらすのです。

【解説】

意識にはいわゆる三位一体としての3つの作用があることが述べられています。力と知性そして具体的な創造物です。これについては使徒ヨハネが言う「はじめに言葉ありき」の一節にあるように、言葉自体が意識に裏打ちされた想念である以上、「はじめに意識があった」あるいは「はじめに想念があった」と言うことも出来る訳です。

また、本項では物事が創造される一連の流れ（注：文中ではsequence順序と表現されています）について、想念が発せられると、それが「言葉」に表現され、やがて宇宙的因に作用して、その想念に沿った物事を生み出して来ることを説明しています。丁度、日本に伝わる言霊（ことだま）と似た内容です。私達は日頃、何を想念として抱くか、どのような発言をしているかが大変重要で、私達が知らず知らず、この創造作用を誘発していることに気付かなければなりません。

065 Everything from the mineral to the Cause kingdom is changed, moment by moment, by the everlasting activity of consciousness. It is the avenue of progress; the stream of life laden with ideas which drop into the consciousness of mortal man with great rapidity and which may be used or discarded, depending upon the understanding of the individual. Consciousness speaks the language of the Soul, for it is the Soul. This Cosmic language is soundless, yet it roars with a voice of thunder, reverberating with a tremendous force upon the mortal form, producing a state of awareness as to the ideas that lie within him - ideas which only he himself knows unless he expresses them in words, and which even then may not be understood by another.

065 鉱物から因の王国に至るあらゆるものは永続する意識の活動により、刻々と変化します。それは進歩の大道であり、大速力で死すべき人間の意識に降り下るアイデアを積み込んだ生命の流れであり、各自の理解力により、活用されるか或いは捨て去られるかになります。意識は魂の言葉を話します。何故ならそれは魂であるからです。この宇宙的言葉は無音ですが、雷ほどの声で叫び、死すべき形あるものにすさまじい勢いで響かせ、人の内側にあるアイデアについての知覚状態を作り出します。そのアイデアは言葉に表現しない限り、その者のみを知り、言葉に表現したとしてもその時、他の者には理解されないものです。

【解説】

私達はここで無言の意識の語らひは、実は私達の想像を超える力強いものであることを記憶しなければなりません。

聴覚に障害のある人は数多くおられますが、丁度、健常者も、こと意識に対しては、同様の状況だという訳です。

意識の叫びが耳元で大きく響いて、ようやくかすかにその内容をアイデアとして認識するという具合です。しかし、その意識の力は宇宙全体を動かす程、絶大である為、あらゆるものがその働きかけに従って活動しているのです。聖書では聖霊と呼ばれる究極の力なのですが、私達はその力を借りて、自分の進歩に積極的に生かして行く必要があります。そうする中で各自が本来の進歩を遂げることになる訳で、「無常」という言葉の本来の意味は、意識に従えば各自否応無く進歩の大道をひた走ることになり、留まることはないという積極的、建設的な意味合いであることが分かります。先日（2011年3月12日）、諸用があり、千葉南房総に行きましたが、地震の影響で人気の無い海岸は晴れ渡った空の下、津波など無かったかのような青く澄んだ平穏な海が広がっており、いつものように鳥も行きかけていました。美しい海の景色を見て、全体としては先の地震はほんの一時の出来事であり、大勢は平安そのものであることに気付いた次第です。

066 Consciousness is the very substance of all forms, yet itself is formless. It is the ruler and keeper of all elements which compose it in the field of form-action, for through this intelligent force the elements which make the form become conscious. It builds form and disintegrates forms yet it knows neither life nor death. It is motionless, yet it is the all-active power by which the cosmos is maintained; placeless, yet it is everywhere for outside of it there is nothing; inert yet composed of unlimited power.

066 意識とは万物の本質そのものです。しかし、意識自身には形がありません。それは形あるものの活動の分野で組織するあらゆる元素の支配者であり、保護者なのです。何故なら、この知性ある力を通じて、形あるものを作り上げている元素が意識を持つようになるからです。意識は形あるものを作り上げ、また形あるものを分解しますが、それでも生も死も知ることはありません。意識はじっとしていますが、宇宙が維持される全ての活動的なパワーでもあるのです。定まった場所はなく、何処にでもあるのです。何故なら、意識の外側には何もなく、意識は自ら動くことはありませんが、無限のパワーから成り立っているからです。

【解説】

万物の本質的部分である「意識」の特徴について本項では解説しています。私達は未だ十分には知覚していませんが、私達の身体からはるか彼方の宇宙空間に至るまで、ある一つの存在が繋がって存在しているという訳です。その意識なるものは自ら声を出して騒ぎ立てることはなく、もちろん肉眼では見えません。しかし、その沈黙する実体はあらゆるものに作用して、創造的活動を促し、また場合によっては形あるものを分解、破壊させる力を持っています。

その意識は宇宙創造の始原の昔から、現在、未来永劫、宇宙空間に充満し、万物を揺り動かして生命活動と諸物の進化を促しています。この意識の作用ほど偉大なものはなく、この存在に気付いた者は、各々の時代に各々の表現でその存在を称え、帰依したものと思われまます。

今日、とりわけ東日本に起こっている天変地異についても、幸いにして生き残った私達はそれをこの意識に目覚める機会として捉え、各自がこの惑星内部から発信されている声なき声を感じ取り、これら変化をより穏やかなものとするよう、各自に与えられた意識の力を発揮して欲しいと考えます。

067 The growth of earth and the growth of man is the actual evidence or testimonial of consciousness. Thought, itself, is composed of consciousness. All things of the heavens and the earth have been and will continue to be conceived in the womb of this mother-father principle. Man was born - into a physical form and will grow old and perish while consciousness remains everlastingly young in existence.

067 地球の発展と人間の発達は意識の実際の証拠であり、証明書です。想念自体は意識から成り立っています。天と地の全てのものは、これまでも、またこれからもこの母性父性原理の子宮の中で受胎し続けることでしょう。人は肉体の形に生まれ、年老い、死を遂げますが、一方、意識は永続的に若いまま留まります。

【解説】

博物館等で見える恐竜の化石は遠い太古の昔、地球にはそのような大型の肉食獣が繁栄していたことを示しています。それらの時代から古代の狩猟生活、農耕生活等、長い年月を掛けて人類は進化し、今日の文明を築くまでに至りました。この間の歩みは人類の進化発展と言ってよく、荒涼とした大地から緑豊かな自然環境に移行することも地球の発展とすることが出来るでしょう。

本項はこれらの発展こそが、想念が創造の原理に働きかけた結果であるとしています。つまりは、意識に起因する想念が第4章等で述べたように感知された（即ち受胎conceivedされた）時、自然自体の創造のプロセスが起動し、そのアイデアを現実のものとさせるという具合です。いわば因の領域に属するその原理と想念は永遠に若々しいままなのですが、一方、具体的な物質の世界に創造されたもの、即ち結果物は、私達の人体も含め、老化の歩みを避けることは出来ないというものです。繁栄を誇った恐竜達もやがては環境の変化の中で死に絶えてしまった訳です。

しかし、想念のレベルや宇宙を貫く創造の仕組み自体は未来永劫変わることはありません。即ちどのような想念がどのような結果をもたらすかについては、ゆるぎないもんがある訳です。私達も自らの肉体を未永く活動的に保つ為には、日頃からこの若々しい生命の源、宇宙創造の原理に近い位置で過ごすことが必要です。

068 One's breath is measured by consciousness, and Heaven is but a man suspended between the Soul consciousness of Eternity and Man's consciousness of earth. It is the mark or center of balance where the true understanding of the cosmos exists. Each conscious being is but a focal point of action within this great limitless ocean of intelligent force. There is no separation between any one of these focal points of conscious action and the Wholeness of consciousness.

068 人の息は意識によって見守られており、天国とは人が永遠なる魂の意識と地上の人間の意識との間に吊るされていることに過ぎません。それは真の宇宙の理解が存在するバランスの印、或いは中心です。各々の意識的存在は、この偉大なる限りない知性の力の海の中における行動の焦点です。これらの意識的行動の焦点のいずれの間と意識全体との間には分離はありません。

【解説】

私達の毎回の呼吸が意識によって見守られているということは、どういうことでしょうか。それは即ち、瞬間瞬間の各自の放つ想念はもちろん、肉体内部の諸状況に至るまで、丁度、傍らで眠っている幼児を母親が見守るように、私達は意識によって常に見守られていることを意味します。この人々を見る目については、チベット寺院に描かれている目も同様な意味合いを持つものと思われま

更にもう一つ、本項における天国についての説明として、永遠なる意識なるものと地球の人間の意識の間に吊るされている(suspended) という表現について述べて置く必要があります。本項の吊るされている(suspended) の意味合いについて、私自身正確には把握できておりませんが、イメージとしては、この二つの意識にまたがった状態、両者の領域の接点のようなバランスが取れた状態を指すように思っております。また、意識的行動の焦点 (focal points of conscious action) という表現も、私達人間が意識が行動する際の焦点、即ち作用が集中する点であることを示すものと思われま

069 Those who have become consciously aware of conscious consciousness through the ages have known this and have used the knowledge in their daily life. They have recognized themselves as the unlimited consciousness and thereby have become the controllers of it. The average man who claims himself a conscious being has through the development of a personal ego blinded himself to the reality of his being and understanding of cause consciousness so that he is expressing not more than one tenth of one percent of his potential ability. Think of the possibilities ahead of man when he shall have enlarged his field of awareness.

069 時代を通じて意識的意識について気付くようになった者達は、このことを知り、日常生活の中にその知識を利用しました。彼らは自分自身を無限の意識として認識し、その為その支配者になって来ました。自分自身を意識的存在だと主張する平均的な人間は、個人的自我の発達を通じて、自分の存在の現実性について自分自身を盲目にしてしまい、その結果、彼自身の潜在能力の1%の10分の1も表現してはいないのです。自分の気付きの領域を拡げた時の人の前に拡がる諸々の可能性について考えて下さい。

【解説】

自らが意識と称される全能のパワーの一部であるとする自覚は、その者の発展に限りない力を与えることとなります。

この場合、本項ではconscious consciousness（意識的意識）と表現される点について、考えて見たいと思います。「意識的意識」という表現は、何かの禅問答のような雰囲気を持った表現です。勝手な解釈をすれば、私は「意識的」ということの方が重要ではないかと考えています。その「意識的」とは、私達が通常使用している言葉の延長線上で考えて良く、「〇〇を意識して」という意味と同様です。自分自身のある意味、精神状態に対して知覚できている状態を指すものです。そして「意識」は、本章でこれまで述べられて来た、力強く宇宙にみなぎる活動エネルギーだと考えられます。

ひとたび、ご自身で自分の内側にもこのような能力が潜在的に付与されていることに気付けば、後はその応用だけということになります。自己の自我、即ち「自分という存在」を発展させようなどとは思わずに、ひたすら内奥の指令を行動に移すだけで、従来に無い飛躍発展する存在になるという訳です。

070 We have been taught that all things are possible with God. God is consciousness, and man cannot separate himself from consciousness for he is that. Are not all things also possible therefore, with man? Jesus the Christ understood this unlimited capacity for expansion when he said-"Greater things shall you do than I have done." He put no limitations upon himself or upon another. It is through the understanding of the consciousness, which is oneself, expressing through all forms that gives one the power to control all elements. Cannot a being command himself into action? Cannot consciousness direct its own movements? This mighty Cosmic force, with power to do and the intelligence to direct, is the most generous giver of all things to those who utilize every fleeting conscious moment, but it turns a relentless executioner in the hands of those who pay no attention to its gift of Ideas.

070 私達は全てのことが神にあっては可能だと教えられて来ました。神は意識であり、また人は意識から分離できません。何故なら人は意識であるからです。では、全ての事柄もまた、人間にあっては可能ではないのでしょうか。イエス・キリストは「私が為した以上の大いなることを貴方は為すだろう」と言った時、この拡大する無制限の能力を理解していたのです。彼は自分自身にも他の者にも如何なる限界を設けていませんでした。それは全ての元素を支配する力を与え、万物を通して表現している自分自身である、意識の理解を通じてのことです。何人であれ、自分自身に行動せよと命令することは出来ないことでしょうか。意識はその運動を指図出来ないのでしょうか。この力強い宇宙的力はそれを為す力と指導する知性を持ち、意識的瞬間の束の間のひとつひとつを活用する者達にとって全てのものを与える寛大な贈与者ですが、一方、そのアイデアの贈り物に何らの関心を払わない者達の手において情け容赦の無い執行人に変貌するのです。

【解説】

本項は私達が「意識に向き合う」際の心構えを述べています。

意識があらゆるものを動かし、私達自身を含めて宇宙空間に存在する全てのものを、言わば統一的に活動を制御する等、莫大な力を持っていることは、これまでも述べられて来た通りです。そのことに気付けばまた、前項（069）で述べられたように、その意識と交わる立場にある私達には本来、無限の可能性があることが分かります。従って、このことを自覚する時、私達はあらゆることを実現出来る存在であることに思い至ることになります。

その為には意識の贈り物、即ち、瞬間瞬間に来るアイデアや想念に絶えず関心を持ち、幸運にもそれらを感じ出来れば、それを大切に取り扱って、自分の発展に活用すべきことは言うまでもありません。この姿勢は従来からの単に意識を礼賛するだけの姿勢とは異なり、各自の心を鎮ませて、宇宙根源の送り主からの静かなメッセージを受信しようと耳を傾ける態度です。

また最後に、それらの指導に耳を貸さないで過ごした者に対しては、厳格で容赦ない執行人としての意識の姿にも言及されていますが、これらは仏教寺院の仁王像や憤怒の像も同様なことを意図しているものと思われます。

いずれにせよ、私達は意識というものの存在をまずは自分自身に認めさせ、自然界の様々な活動をその作用の結果として観察し、学ぶことが重要です。

6. BODY, MIND AND CONSCIOUSNESS

071 Until quite recently mind and matter have been considered as widely separated as the poles. The materialist has exalted matter into predominance and the metaphysician has given the supremacy to the mind, while consciousness has received scarcely a consideration. There have, of course, always been alerted minds in the world who understand the inseparable relationship of mind, matter and consciousness and have made use of this knowledge in the field of practical evolvement, but the world in general has chosen to remain in the mystery of divisions.

第6章 肉体、心そして意識

071 全くの最近まで、心と物質は両極のように甚だしく分離して考えられて来ました。唯物論者は物質を優位位置に引き上げ、また形而上学者は心にその最高位を授けて来ました。しかし一方では、意識はほとんど考慮すら受けて来ませんでした。もちろん、世の中には心と物質、それに意識について引き裂くことの出来ない関係を理解する鋭敏な心の持ち主がいつも居て、実際的な発展の分野にこの知識を活用して来ましたが、世の中一般はその区分分けという神秘の中に留まることを選択して来ました。

【解説】

まずは世の中に存在するものとして「物質」は誰にでも分かります。次に自らの「心」ですが、これも各自の内側の想念の動きや目や鼻、耳を通じて来る情報の認識やそれへの反応、またそれらの経験の記憶から、その実態を各自は理解出来る筈です。問題は、世の中にはこの2者の他に、もう一つの重要要素、「意識」と呼ばれるものがあることにほとんどの人が気付いていないことにあります。

心の支配欲から物質を浪費し、有害な汚染物を環境に撒き散らす等の行動を行って来た人間は、地球上の諸々の物質を所有しようと争いを続けています。また、一方では、神秘論者はインドの行者のように、心の持つ潜在能力のみに着目して物質に価値を見出さない生活をしています。

しかし、野生動物や野生の植物を含めた自然界を見ると、それらは見事に調和し、落ち着いた中にも活発な行動が行われています。例えば、春から夏に掛けて、山歩きをすると、ほんの2週間間に驚く程の変化を見ることが出来ます。これらの自然の活動には上記の「心」と「物質」の他に、存在する「意識」が大きな役割を果たしているのです。つまり、適宜、適切な時期に各々の物質と心に、その活動を促すような指令（想念）を発して行動を促すという具合です。今回の震災の津波被害においても、飼い犬が津波が来る前にいつもの散歩コースとは逆の高台に飼い主を導き、避難させたというニュースが流れていました。このように事象が発生する以前にその現象を知らせるというのも、意識の作用ということになり、その飼い犬はそれをキャッチしていたこととなります。

私達はあらゆる現象の背後に、必ず意識の作用が関連していて、意識が物質を指導し、結果を生み出していることを見るようにしなければなりません。

072 Science has done much in proving many things which the majority of the people of the world previously refused to accept. It has proven, for instance, that all forms are made up of cells which are composed of the same elements as the earth, air and water. It has revealed the fact that the human body is no different in composition than any other form in the mineral, vegetable, or animal kingdom. These cells or atoms of matter possess a certain amount of intelligence and are actually little entities not unlike the human being, but the world has not easily accepted the belief that a particle too small to be seen without the aid of a microscope can be the possessor of a mind, or intelligence. Science has now brought forth the proof of this. It speaks of living and disintegrating atoms of matter, and in working with these tiny cells it has learned to release a form of energy from the atom which is seen as a ray of light. One professor of science has spoken of this as the soul of the atom, which certainly implies intelligence.

072 科学はかつては世の中の大多数の人々が受け入れを拒絶した多くの物事を立証して来ました。科学は例えば全ての形あるものが、地面と空気、水と同じ元素からなる細胞から成り立っていることを証明しました。それは人体が鉱物や植物あるいは動物の王国における他の形あるものと組成において何らの違いが無いという事実を明らかにしたのです。これらの細胞や物質の原子は幾分かの知性を持ち、実際には人間とさほど違いが無い小さい実体なのですが、世間は顕微鏡の助け無しには小さすぎて目に見えない粒子が心や知性の所有者であり得るとの確信を受け入れることが出来ないうでいます。しかし、科学はこの証拠を提出しています。科学は物質の原子の生存と分解の状態について語っており、これら微細な細胞について研究する中で、これら細胞が光線として見られるような原子からのエネルギーを放出することを学んで来ました。科学のある教授はこのことを、原子の魂と表現しましたが、それは確かに知性を暗示させるものです。

【解説】

以前、ウエイン・ダイヤー氏の講演CDの中で、私達の血液中の鉄分の由来について語っていたことを思い出しました。血液中のヘモグロビンの中の鉄は、地球の鉱物が由来であり、私達が亡くなった後も地球に留まる訳で、私達の肉体の各成分は皆、地球上の元素から作られているのです。

しかし、私達は人間が何か特別なもののように感じ、特別扱いをして来たように思います。それはある意味、全創造物の最高位にあるものとしては当然なのですが、本質的には私達は他の者達と同様、同じ母なる大地から等しく生まれ出ているのです。

その上で私達の細胞を構成する諸々の原子が各々長い年月の体験を蓄え、英知を持つものであるとすれば、私達は只、それらの原子から教えられるべきでしょう。宇宙開闢以来の知識を持つ原子を自分の最も近い教師として受け入れることが出来れば、素晴らしいことです。

073 It needed not the aid of science, however, to prove the intelligence of matter, for the very fact that bodies act and grow proves that the cells must possess the consciousness to receive instructions from a higher intelligence. We know that nature takes its own course in healing the body when called upon; that a thought given by a man is immediately acted upon by the cells of his body, so matter must have a mind which is capable of receiving the command of either man or nature or it would not act accordingly. Mind, itself, is nothing more than the highway over which consciousness projects ideas to set matter in motion. If matter were not the possessor of mind there would be no avenue through which it could receive the thought impressions; if it did not possess intelligence it could not act upon impressions, and if it did not possess consciousness it would be totally unaware of the command and would remain in a state of complete inertia.

073 しかしながら、物質の持つ知性を証明するのに科学の助けは必要としません。何故なら、肉体が行動し成長するという事実はそれら細胞がより高位の知性から指導を受け取る意識を持っていることを証明しているからです。私達は自然は求められた時、肉体を治癒する上でそれ自身独自の経路をとることを知っています。また、人間によって与えられた一つの想念は直ちにその者の肉体の諸細胞によって行動に移されることから、物質は人間あるいは自然の命令を受けられる心を持っているに違いありません。そうでなければ、それに応じた行動はとれないからです。心自体は意識が物質を起動させるためのアイデアを放射するハイウェイに過ぎません。もし、物質が心の所有者でなかったとしたら、その想念印象を受け取る大路は無いこととなり、もし、物質が知性を持たないとすれば、印象に基づく行動をとることが出来ないこととなり、もし、物質が意識を持たないとすれば、物質はその命令に全く気付かず、全くの惰性の状態に留まることとなります。

【解説】

本章のテーマである「物質（肉体）・心・意識」について、ここでは私達に日常の観察を通じて、それらの相互関係を見出すことの大切さについて述べています。私達の肉体自体は鉱物から動植物に至る自然界における他のものと、その構成要素は変わるものでないことは前項（072）で説明されて来ました。その上で、各々の物質、原子について、私達は自身の肉体を含めて「物」として捉えがちですが、実は原子分子に至るまで、各々の物質には「心」があると本項で明かされていることは大変重要です。

私達自身の身体を例にとっても、私達が「こうしたい」と思う想念を受けて、具体的に行動に移す、即ち各肉体の部位が動く為には、瞬時に様々な段階で各部位、各細胞間で、連絡調整が行なわれて初めて身体が動く訳です。この間には次々に想念を伝達する、あるいは共有するために各構成要素の一つ一つに想念が通過する通路とそれを感知する心が無くてはならないという訳です。

万物に心があるとする教えは、地球各地の先住民族の宗教観や日本神道にも通じるものがあり、物質に「愛着」を感じることが出来るのも、そうした理解に基づいているように思います。

074 We know from actual experience that when a thought is sent over the highway of mind that all of the cells of the body respond in a perfectly unified state in producing that impression in outward form. It is not difficult to know if a man is joyous or angry. The thought of anger will mold the matter composing the body into an exact image of itself - contorted features, flashing eyes, clenched fists, set mouth etc. It may even produce a state of intense trembling throughout the form. If the thought is changed to one of joy the body again responds and matter is molded according to an entirely different pattern - the eyes glow with a soft light, the features are relaxed, and the whole form becomes one of simple grace, a symphony of harmonious action.

074 私達は実際の体験から、一つの想念が心のハイウェイに送り込まれると、肉体の全ての細胞は外向きの形にその印象を作り上げようと完璧に統一された状態で呼応することを知っています。人が楽しく思っているか、怒っているかを知ることは難しくはありません。怒りの想念は肉体を構成している物質をまさにその想念自身のイメージに鑄込み、歪んだ表情、ぎらついた目、固く握りしめた手首、こわばった口等を作り出します。それはまた、身体全体を激しく震えさせる状態さえも作りだすかも知れません。しかし、もし想念が楽しいものに変われば、身体は再び呼応し、物質は全く異なるパターンに沿って鑄込まれ、目は柔らかい光に輝き、表情はリラックスし、形全体は純真な上品さ、調和ある行動のシンフォニーになるのです。

【解説】

想念が最も力を発揮するのは、その肉体細胞への働きかけという訳です。言わば私達は長年月をかけて自分自身の肉体を作り上げているのです。肉体は長年月、心を通過する想念からの影響を受けており、人間、年齢を重ねるにつれて、その人の長短の特徴はより顕著になるということでしょう。また、各自の想念の影響は肉体細胞のみに留まらないと考えるべきです。日々の精進の成果は、生活の様々な側面にも現れることとなります。これは一人の人間の周囲に留まらず、地方や国全体にも及ぶと考えるべきでしょう。

実は現在、東日本大震災から多くの人々の心に地震や津波、更には原子力発電所の被災事故への進まない対応について、恐れや苛立ち、悲嘆等、多くのマイナスの感情が生まれています。しかし、本項から分かるように、マイナスの想念は各自の肉体への影響も含めてマイナスの影響しか残しません。何とかこうしたマイナスの想念を各自の心から駆逐して、より新鮮で美しい本来の想念のあるべき姿を取り戻して、復興にあたりたいものだと考えます。自然の動植物のように、例え踏みつけられようとも、めげることなく、再び立ち上がる力強さをもって欲しいと願っています。

075 Mortal thought, however, is not the intelligence, it is but an idea projected by consciousness. It acts as a messenger between the sender and the receiver just as an idea consciously projected into a microphone travels on the mind of a radio (the ether waves) to the receiver. The great unlimited force of intelligence, which is consciousness, broadcasts a message in the form of thought; this message travels upon the highway of frequency called mind and contacts every part of the body. Since every cell is the possessor of mind the idea impresses each of them at the same time and they as a whole give expression through and upon the body. This is the same principle used in the operation of radio. Once the message is given over the microphone all space is effected since it can be picked up anywhere by a good receiving set. Thought effects the whole of matter in the same manner. The radio frequency is carried on the waves of ether and is neither seen nor heard outside the studio unless it passes through a receiving set. In this same way consciousness projects itself as an idea through space by an instantaneous action effecting all space at one time and the idea which is supported upon the waves of mind become manifest only after passing through the instrument of matter. In other words, mind is the channel over which man is supplied with conscious awareness just as the ether waves are the channel over which we receive the musical and oratorical expression of the consciousness broadcasting them.

075 しかしながら、死すべき（訳注：肉体の）人間の想念は知性ではありません。それは意識によって放出された一つのアイデアなのです。それは丁度、マイクの中に意識的に放出されたアイデアがラジオという心の上を（エーテル波として）進行し、受信者に到達するようなものです。意識である偉大なる無限の知性の力が想念という形の中にメッセージを放送します。このメッセージは心と呼ばれる周波数のハイウェイを旅して身体中のあらゆる部分と接触します。あらゆる細胞は心の持ち主である以上、そのアイデアは同時にそれらの各々に印象づけ、それらは全体として身体全部を通じて表現を与えるのです。これはラジオの操作で用いられているのと同じ原理です。ひとたびメッセージがマイクを通じて与えられると、全宇宙が影響を受けます。何故なら、良い受信機によっては何処でも拾い上げられるからです。想念は全く同様に物質全体に影響を与えます。ラジオの周波数はエーテル波によって運ばれますが、受信機を通らない限り、スタジオの外では見たり聞いたり出来ません。それと同様に意識は全宇宙空間を同時に影響を及ぼす瞬間的な行動によって自身をアイデアとして宇宙空間に放出し、心の波動によって支持されたアイデアは物質という装置を通ることによってのみ現出化するのです。言い換えれば心は人間が意識的気付きによって与えられたチャンネルであり、丁度エーテル波が私達がそれらを放送している意識の音楽や演説の表現を受信するようなものです。

【解説】

私達の心は想念が通過するラジオのようなものだと解説しています。もちろんテレビも同じ作用です。多くのメッセージが放送を通じて流れて来ますが、その電波は受信機があれば、誰でも何処でも受信できるように、想念は全宇宙で同時刻に感知されるものだとしています。即ち、ある人が閃いたアイデアは、同時に様々な所で同時にキャッチされるという訳です。

また、想念は心に感知されることによって、具体的な物質への作用が始まるということもポイントの一つです。私達人間が神の道具となって創造の一端を担うことを創造主は望んでいます。その為に創造主は必要な時、必要なテーマの思いを發するのではないかと思います。その思いである想念を如何に受け止め現実世界に実現するかが私達、最高位の創造物に望まれていることです。

そのためには、様々なレベルからなる想念の内、より宇宙的、より建設的な想念にダイヤルを合わせる必要があります。各自の指向性のアンテナをそのような向きに保持することから始めることです。

076 The sense mind personifies the impressions received and distorts them with self opinions. If the radio ethers are disturbed we on the receiving set get the disturbance called static, which means that we cannot get the program clearly. This is also true with man, for when the mind of man is disturbed that which is coming from the broadcasting station of consciousness is not revealed perfectly and matter goes into action with a distorted conception of its mission. The result is a state of confusion within the body. Cosmic consciousness is never confused, it is always in a unified state, so the harmonious manifestation of an idea depends upon the stillness and impersonal attitude of the mind. A clear peaceful mind will always bring desirable conditions. A disturbed mind will cause distorted conditions.

076 感覚心は受信した印象を属人化し、自己の意見で歪めてしまいます。もしラジオエーテル波が妨害されると受信機の所にいる私達は雑音と呼ばれる攪乱を受け、その結果、私達は番組をはっきり聴取することが出来ません。これは人間についてもまた同様です。何故なら人の心が攪乱されると、意識という放送局から来るものが完全には明らかにならず、その使命の歪んだ概念による行為に物事が進むからです。その結果、肉体の中が混乱の状況になります。しかし、宇宙的意識は決して混乱はしません。それは常に統一化された状態であり、その為、アイデアの調和ある現出は心の静寂と非個人的な姿勢に依存しています。明晰で平穏な心はいつも望ましい状態をもたらすでしょう。一方、混乱した心は歪んだ状態をもたらすでしょう。

【解説】

せっかく宇宙意識からの想念メッセージを受信できたとしても、そのチューナーであるべき心が、その受信内容に勝手な解釈を加え歪んだ情報に変質させるという問題があります。自我（エゴ）が好ましい方向に強引に解釈を加え、あたかも自我を肯定するようにメッセージを改変するという訳です。しかし、心によって付け加えられた要素は真実でない以上、その実現性は乏しく、それをまともに受けた肉体細胞は混乱してしまうことになります。

そのような画策を起こさないよう、私達は自身の心を見張る必要があり、どのような場合、どのような状況においても心を落ち着かせ、穏やかな状態に保つことが必要です。電波に乗って貴重な番組は常に各々の受信機に向けて放送されていますが、それを受信する各自の心がそれら電波を受信して忠実に再現しなければ、価値あるメッセージを受け取れないことになります。

077 This proves to us then, that mind is not all there is since it can be used one way or another. Evolution is not the expression of mind but the expansion of mind. Just as an ungraded road is broadened and leveled in order to accommodate more traffic upon it, so must the highway of mind be expanded and smoothed in order to allow consciousness to project more numerous vehicles of thought to their proper destination. Mind is only the channel of expression, the avenue by which consciousness manifests itself in matter. Body, mind and consciousness, then, are one and inseparable. The body of matter would cease to exist if it were not supported by consciousness. Consciousness could not express itself in matter were it not for the conveyer over which it travels, and mind would be a useless nothingness were it not acting as a channel between the two.

077 このことは私達に、心というものはそれが様々な方向に使われ得るということから、心の現状が全てではないことを示しています。進化という言葉は心を表現したものではなく、拡張することが心を表すものです。丁度、未だなだらかに整備されていない道路がより多くの交通を収容できるよう拡げられ、平らにされるのと同様に、心のハイウェイは意識がより多くの想念の乗り物をそれらの適切な目的地に向けて抄出させられるよう、拡張し、滑らかにされなければなりません。心は表現のチャンネルに過ぎず、意識が物質にそれ自身を現出させる大道なのです。肉体と心と意識は、それ故一つであり、分離できません。物質からなる肉体は、もし意識による支援がなければ存在は途絶えてしまうでしょう。意識はそれ自身が通る輸送装置がなければ物質の中にそれ自身を表現することは出来ないでしょうし、心が両者の間のチャンネルとして行動しなければ何ら無用のものになることでしょう。

【解説】

心は想念の通り道であり、その想念を身体内の各部に伝えることがその任務です。そういう意味では与えられた想念・アイデアを正しく伝えることが重要であり、自分の意見を差し挟むことは厳に慎まなければなりません。受信する想念は多岐にわたることから、丁度、テレビが様々な番組を再現しますが、テレビ受像機自体は何ら変わらないのと同様に、見かけ上、テレビ（心）は様々な表現をしているように見えるに過ぎません。それが本文にいう「心というものはそれが様々な方向に使われ得る」ということです。

さて、間断なく流れ込む想念をスムーズに通過させるためには、心はやって来る各々の想念を自我の好き嫌いで裁くことなく、ありのままを受け入れる努力をしなければなりません。よく「心が広い」あるいは「心が狭い」という表現をしますが、心の発達とは心を拡げること、寛容さを発達させることにあるのです。せっかくの宇宙意識からの貴重なアドバイスを大切に、またより多く受信して、その恩恵を受ける為に、私達は心の拡がりを目指すべきです。

如何に意識が素晴らしい解決策やビジョンを示してくれても、心がそれを認識しない限り、現実界にそれを展開することは出来ません。そのことから意識と指令を待つ物質とをつなぐ役割を心が持っていることが重要なポイントです。

078 Remember, mind has the possibilities of expansion. Matter, again, is in the process of evolution; so neither mind nor matter is all in all.

078 覚えておいて欲しいことは、心は拡張の可能性を持っていることです。物質もまた進化の過程にあることです。ですから、心も物質も全て現状のままではないのです。

【解説】

各人の心がそれぞれ拡張し、意識からの印象がより多く流れることによって、物質もより早く進化を遂げることとなります。自分が進化のどのレベルにあるかは、心に浮かぶ宇宙的な印象の数を見れば良いものと思われます。例えば、印象によって近未来に起こる事象を予知したり、知らず知らずの内に準備をしていたり等、自分だけが知り、納得出来る体験も増えて来るものと思われます。

一方、物質界においても進化の足跡を確かめることが出来ます。化石は太古の生き物達の姿を今日に伝えるものです。かつての恐竜の棲む時代から今日まで多くの生物種が入れ替わって来ましたが、それらの時代に比べれば、今日の地球ははるかに穏やかな生き物達に移り変わっており、これも進化の歩みと言えます。また、個人としてもその人の人相は内面を写すものである以上、年齢を重ねるにつれて現れる各自の顔付きも、それぞれの「進化」を反映したものです。

まして進化した他惑星にあっては、その心に呼応した物質の精緻さが進み、全てが高品位な存在として輝いていることは容易に想像出来ます。

7. CONSCIOUS AND SUB-CONSCIOUS MIND

079 There has been, and is, widespread misunderstanding regarding the status and function of the subconscious mind. This lack of knowledge has caused many people to get lost in mysteries which are of no value to humankind. There are books and teachings regarding the subject, which we find by research to be wrong. We know that the so-called conscious mind, which is the intellect that we use daily to govern our normal activities, is very fickle and weak. This mind receives impressions from the senses and formulates its own opinions and is subject to uncertainties, fear, or any emotional change that comes its way. This mind gives credit to a sub-conscious mind which it feels possesses memory of past events and a greater knowledge of things unknown to itself.

第7章 意識的及び潜在意識的心

079 潜在意識的心の状態と機能については、広範囲に拡がった誤解があります。この知識の欠如の為、多くの人々は人類にとって何らの価値のない神秘の中に迷っています。このテーマに関して書物や教えがありますが、私達は調査の結果、それらが誤りであることを見出しています。私達は、日常、私達が普通の行動を支配するために用いている知性である、いわゆる意識的心は、大変移り気であり、弱いことを知っています。この心は諸感覚から印象を受け取り、自分の意見を作り上げ、やって来る不安定さや恐れ、あるいはその他感情への変化に従属しています。この心は過去の出来事に関する記憶や自分自身には分からないより偉大な知識を有していると感じている潜在意識の心に信任を与えているのです。

【解説】

いわゆる潜在意識についての説明です。その説明の前に本文では、日常、私達が用いている「顕在意識」としての心が、実は諸感覚の反応によって支配され、大変不安定な状況のまま用いられていることを指摘しています。その一方で、潜在意識の、即ち通常意識に現れていない何ものかが過去の記憶も含め、もろもろの知識を持っている筈だとしている訳です。

しかし、全て「心」によって対応できるとする所に、大きな誤りがあるように思います。心が自分のものであることは誤りのないことですが、その心が全てを知っている（あるいは知っている筈だ）とし、そこに価値を置くこと自体に誤りがあるように思えるのです。

私達は、これまでの学習から、心自体は本来、実態が無くてよく、単なる通り道でよいことを学んで来ました。また、テレビやラジオにも例えられてきました。もちろん、テレビのスイッチを入れて放送されている番組を見る時、あたかもテレビが映像を提供しているように見えますが、実際はそのメッセージは放送局のスタジオで製作され、電波に乗って各家庭に向けて放送されている訳です。テレビ自体が放送の内容を知ることはないのです。そういう意味でも、私達が日頃取り扱う心も、そうした各自の肉体の道具に過ぎないということだと考えるべきでしょう。

080 This so-called subconscious mind is in reality one in consciousness with the ever present Cosmic Intelligence. It is the Soul mind in the body of man; that which built and maintains the body. It fears nothing and respects nothing in the sense of personal respect. The sense mind is negative and the All-knowing mind is positive and they are one. In order to enjoy the full benefits of each, man must discipline the sense mind to follow the dictates of the Soul mind. This mind gives impressions for action that is sometimes beyond the perception of the sense mind, and will continue to do so from time to time until the sense mind executes the impression perfectly, so that it may partake of the experience of right action. Just as a teacher would tell a child to do something in a certain way and the child did not do it, but made a mistake, if the teacher should allow the child to go on that way, would it ever know the right way of doing that which it was told to do? No. Therefore the teacher, in order that the child may know the right way, insists that it be done over and over until it is done right and by so doing the child has the practical experience of how it is done.

080 このいわゆる潜在意識心は、実際には永遠に現存する宇宙的知性と共にある意識状態の一つです。それは人体の中の魂の心であり、身体を作り維持している存在です。それは何ものをも恐れず、人の個人的事項に関し、何ものも尊ぶことはありません。感覚心は陰性ですが、全知心は陽性であり、それらは一つです。それぞれの恩恵を十分に享受するために、人は感覚心を訓練し、魂の心の指令に従うようにしなければなりません。この魂の心は時として感覚心の知覚を超える行動に向けた印象を与え、感覚心はその印象を完璧に実行するまで、時折そうし続ける結果、感覚心は正しい行動の体験を共にすることが出来るようになります。丁度、教師が子供をあるやり方で何かさせようとし、子供がそうしようとせず過ちをしでかす時のように、もし、教師がその子供をそうすることを許していたとすれば、その子供は言いつけられた正しいやり方を知るのでしょうか。いいえ、出来ません。ですから、教師はその子供が正しい方法を知るようになるため、正しく行うまで何度も何度もそうすべきと主張しますし、そうすることで子供はどのようにして為されたかの実験的な体験を持つのです。

【解説】

私達に時折来るインスピレーションなるものは、実は各自の師となるべき宇宙意識からの指導の言葉であった訳です。この貴重な言葉を私達は多くの場合、うまく受け止められず無視して来ました。それでも我が師はあきらめることなくポイントとなる時期毎にメッセージを送り続けているのです。

従って、私達の心が先ず為すべきは、自分がそれらの指導を受ける立場であることを自覚することです。不安定な心の状態を安定化させ他の創造物達の生き方を参考にしながら、心のありようを整えることです。このことは各自、自分の心の中で行うべき作業であり、何処に居ようと出来る自分自身の内面の訓練です。

その結果として、自分の歩んでいる道が正しいかどうかは、自身の身体状況も含め、それに伴う環境の変化が思わぬ早さで訪れることや、優れた人々との出会いが増えること等によって容易に実証されることで分かります。私達自身の心の状態に類似したものが集まってくること、心の状態を反映して環境が創られて来ることがその原因です。

081 To bring ourselves into a broader state of conscious awareness we must transfer the controls from the sense mind to the All Knowing consciousness; and by so doing we transform the body into its natural state. The conscious thoughts that we entertain in our mind draws like conditions unto us. If we wish to expand in conscious awareness of that which we really are we must place the past conditions which have already served us in their proper place, and progress into the vast understanding of a limitless being.

081 私達自身をより幅広い意識的自覚状態にするためには、私達は統制を感覚心から全てを知る意識に移行させなければなりません。そしてそうすることによって、私達は肉体を自然な状態に変質させるのです。私達が自分の心の中で抱く意識的想念は同様な状況を私達に引き寄せます。もし私達が実際にあるがままの意識的自覚を拡張したいと願うのなら、私達は、私達に役立った過去の状況を適切な場所に置いて、無限の存在への広大な理解へと前進しなければなりません。

【解説】

ここに自己改革の秘訣があると考えます。従来の自分の支配者であった心を感覚が形成して来たものと認識し、以後はより精妙な印象に従った生活を実践することにあります。初めは何時来るか分からない当ての無い印象を頼りに生きることは容易ではないように見えますが、少しずつ増える成功体験によって、より堅固な生き方に成長するものと思われます。

その中での注意点として、本項では、これまでの感覚心による経験、成功例や失敗例など、過去への執着は全て無用だと述べられています。常に、流れてくる印象の波を警戒しながら、今を楽しむ姿勢が重要だと本文は明快に解説しています。

この教えの内容は多くの宗教教義に共通したものがあり、真理は一つであることが分かります。

082 Knowing what we are, we then have to hold fast to that which we want and eliminate from the conscious sense mind that which we do not want. We are bound to get results if that which we want is the right thing for us to have at that time. Otherwise we will get what we need at the proper time.

082 私達が何者であるかを知った後は、私達は自分達が欲するものをしっかり保持し、望まないものを意識的な感覚心から駆逐しなければなりません。私達はもし、私達が欲するものが、その時私達が得るのに正当なものであるなら、結果を得る筈なのです。さもなければ、適切な時期に必要なものを得ることでしょう。

【解説】

瞬間的な想念の力というよりは、私達が日常、心に抱いている想念は驚くべき実現力を持っているということでしょう。従って、私達は先ずは自分が望むものだけを心の中にしっかり保持して、時として入り込み易いその他の要素から影響を受けないようにしなければなりません。

おそらくは学習を進めるにつれて、本人が気付かないまま、各自の想念の持つ実現力は向上している筈ですので、その応用についてはより多くの注意が必要だという訳です。

各自がそれぞれ創造主に似た能力を持つ以上、良くも悪くも地球全体が私達人類の心の総体を反映させていることも分かります。今回、東日本で発生した大規模地震がどのような意味を持つのかは分かりませんが、少なくとも私達は地面の奥深い地層で起こりつつある現象をテレパシクに感じ取り、大地が何を訴えようとしているかに耳を傾けなければなりません。また、一方では、連日の余震その他に対し、真実を知らない私達の心が恐れるばかりでは、決して良い結果は生まれません。何よりも、私達が望むことだけを心の中に保持することが事態好転のきっかけになるからです。

083 But man must have faith and confidence in the workings of the eternal law; if he has any doubt he will block the condition from appearing. A doubt as small as a mustard seed will keep it from him, but should he have faith as small as a mustard seed he shall have the desired manifestation.

083 しかし、人はその永遠なる法則の作用に対し、信頼と確信を持たなければなりません。もし、どんなものでも疑いがあれば、現出の条件を妨げることになります。カラシ種ほどの小さい疑いは、その者から遠ざけますが、カラシ種ほどの小さい信頼があれば、望んだものの現出を得ることでしょう。

【解説】

先日、たまたまテレビでハッブル望遠鏡に関する番組を見る機会がありました。途中からであった為、ストーリー自体は分かりませんが、驚いたのは、ハッブル望遠鏡で観測している天文学者達が、はるか遠い銀河星雲の群れを見て、宇宙には法則があると認識したことです。様々な銀河がランダムに点在しているように見えますが、実はそうではなく、大きな泡の周囲に分布しているような位置関係にあることが分かったということです。

一つの惑星どころか、銀河星雲の分布にいたるまでの広大で統一された法則が、無音の宇宙空間を通じて生きていくことに驚かされた次第です。これら無音の法則は宇宙空間全域に作用している訳ですが、私達はそれらに信頼を置くことで、それらの力を手にし、自らの生活に活用できることを本項では述べているのです。沈黙は全面信頼の証であり、その作用に何ら力を挟まない態度であるように思います。

084 Man has risen from the savage state to the present civilization only by wanting the better things of life knowing that he could have them.

084 人は野蛮な状態から今日の文明まで、実現出来ることを知りつつ、生活のより良い物事を望むことのみによって立ち上がって来たのです。

【解説】

人がこうありたいと願うことについては、基本的に何物も実現するという訳です。その願いは環境に作用し、遂には実現に導くこととなります。それ故、人が日常的に心に描くことは現実に反映されるべき内容に保持しなければなりません。この人々の願いこそが文明の進歩の牽引役になって来たという訳です。想念が進歩の道を開拓するのです。

確かに一昔前の生活と比べても現代の私達は多くの労働から解放され、機械がそれに代わって私達の生活を支えています。実はその分だけ私達はより創造的な行動をとれる環境にあります。これからの世代に有用な成果を残し、自らも進化する為に、各自がどのような事柄を心の中に描くかは、今後のこの惑星の将来を左右する大きな力を持っています。

8. MAN IS A FOUR SENSE BEING

085 One of the greatest bits of wisdom ever given to man by the outstanding philosophers of all ages is composed of two words: "Know thyself." That one assignment has kept the seekers of knowledge hard at work for billions of years, and it will still be a supreme admonition a billion years hence. It is an eternal study, for man himself is eternal. In that one statement the philosophers have taken in the whole of the Cosmos.

第8章 人は四つの感覚からなる存在

085 あらゆる時代の傑出した哲学者から人類に与えられた最も偉大な英知の小片は二つの言葉から成っています。「Know thyself (汝自身を知れ)」。その課題は知識の探求者を何十億年もの間、勤勉に働き続けさせましたが、またなお、これから10億年も最高の説諭となるでしょう。人自身が永遠であるために、それは永遠の学習なのです。その一つの声明の中に哲学者達は宇宙の全てを取り込んだのです。

【解説】

「汝自身を知れ」という言葉はソクラテスの言葉として知られていますが、そもそもの起源は明らかでなく、ギリシャの神殿の入口に刻まれた碑文として残されているとのことです。その奥義は前項 (070) に紹介されたイエスの言葉「私が為した以上の大いなることを貴方は為すだろう」にもあるように、最高位の創造物として人間には生まれながらにして全てのものが与えられているという意味があった訳です。

しかし、そうであったとしても、現状の私達は常に現状に不足し、不満足な思いを持って生活を送っています。全ての原因を自分の外側のせいにして、自分自身の責任には言及しないのが常となっています。自分の内側に全てが用意されていることに気付かないまま、外側に求め続けているという訳です。

人体には60兆個もの細胞があるとされていますが、このような膨大な数のレベルになると、それから先、ゼロがいくつ増えても大勢には影響はありません。即ち、地球全体から見ても、一人一人の人体の内側での出来事を宇宙全体の出来事と見なすことも出来るように思います。細胞レベル、原子レベルの世界と私達の心の諸反応との相互関係等、想念と物質、更には意識と呼ばれる普遍的知性との関係について学ぶことによって、本来の展望も開けます。自分自身を生きた教材として学ぶことの大切さをこの言葉は簡潔に訴えているのです。

お知らせ [2011-04-22]

本日から、約 1 週間、出張になります。

その間、本講座の更新が不定期になるかも知れませんが、ご容赦下さい。

086 The desire within all men to understand themselves is increasing tremendously. Theory upon theory has been advanced in the endeavor to throw some new light on the subject. Of late years we have heard a great deal concerning the senseman, and the control of the senses as a means of living above conditions and environments, yet we are still struggling under a misconception concerning them.

086 自分自身を理解しようとする全ての人の内側にある願望は驚くほど増えています。理論に次ぐ理論がその課題に何らかの新しい光を投げかけようと努力の中に繰り広げられて来ました。昨今では私達は、状況や環境を超越して生きる手法として、感覚人や感覚の制御について多くを聞いていますが、それでも私達は未だ、それらについての誤解の下であえいでいるのです。

【解説】

本項で言う「自分自身を理解しようとする理論」とは、心理学のことを指しているのかと想定されま
す。とりわけ米国では学問分野として研究が盛んであったようです。また、いわゆる自己改革、自己改
造等の啓発書も盛んに出版されていたようです。これらの多くは、いわゆる「ハウ・ツー」ものが多い
ように思われ、個人的には好きではありませんが、米国においてそうした精神世界についての探求に関
心が高いことは注目して置きたいところです。最近では、更に様々な啓発者が現れて、積極的に活動し
ています。

これら人間の内面の理解と開発は、本講座と目的を同じくする訳ですが、本項ではそれらの多くは大事
な部分での誤解の下に構築されている為、本来の答えに容易にたどり着けないことが多いと忠告してい
ます。

その最大のポイントが、本章の人における感覚反応の影響が大きいこと、即ち、文中、「Senseman (感
覚人)」と呼べるほど、既存感覚に依存した生活を送っている実態にあるということにあります。

087 We have looked upon ourselves as a five sense being possessing the attributes of sight, hearing, taste, smell, and feeling or touch. We have drifted along idly contenting ourselves with this analysis of our makeup, but recently we have become quite curious to know just how these senses work and what they are. In our seeking we have run our craft upon a rock. We have been unable to account for certain elements of action which we have encountered in our daily lives and so to relieve the tension of this uncertainty some of our most learned theorists have endowed us with a sixth sense. To this added sense has been attributed all the phenomena that have been unexplainable in the five sense man. In fact there have been those who have sought to add a seventh sense. The mortal mind seems to have a faculty for complicating that which is very simple and thereby creating confusion instead of understanding.

087 私達は自分自身を、視覚、聴覚、味覚、嗅覚そして触覚ないし感觸の5つの感覚の属性を持つ存在として見なして来ました。私達は私達の成り立ちをこの分析で無益に満足したまま漂って来ましたが、最近になって私達はこれらの感覚の作用がどのように行なわれるか、またそれらは何であるかについて大いに知りたいと思うようになりました。私達のこの探求の中で私達は自らの乗り物を岩に乗り上げてしまいました。私達は私達の日常生活の中で出会ったある種の行動の要素を説明することが出来なかった訳であり、この不確かさの緊張を和らげるために、私達の最も学識のある理論学者達は私達に第6番目の感覚を授けたのでした。この付け加えられた感覚に5つの感覚の人間となる説明不可能な全ての現象が割り当てられました。本当は第7番目の感覚を追加した人達もいたのです。死すべき人間の心は、とても単純な物事を複雑にする才能があるようで、これにより理解の代わりに混乱を創りだしています。

【解説】

自然界における他の多くの生き物が共通に持っている優れた感知力は、多くの場合、「本能」と称されるだけで、人間には当てはまらない、また稀に現れた時でも「超能力」ということで、到底一般の私達が身に付けることは出来ないと言われて来ました。その中には本文にある「第6感」という概念もある訳です。

しかし、アダムスキー氏の伝えている最も重要なことは、このような透視や予知能力というものが特別な能力ではなく、私達の通常的能力として位置づけられる、言い換えれば誰もがその開発に向かって歩んで行くことが求められているとしている点です。そして、その際に既存の私達は視覚から嗅覚までの四つの感覚に支配され、それらの意思に振り回され、それらの感覚が感知出来ない対象物については無頓着であるということでしょう。

前項（086）でも述べられた通り、心理学等の分野を含めていわゆる自己開発には様々な活動や導き手が出回っていますが、肝心の出発点が誤っていれば、それらの発展性はない訳で、私達はこの基本事項から日常を振り返って見る必要があるということです。

088 If you have accepted the theory of the sixth sense you will no doubt be surprised by the statement which I am about to make, but as one of the great Chinese sages has expressed it - "The truth that we least wish to hear is that which it would be to our advantage to know."

088 もし貴方が第6感の理論を受け入れていたなら、きっとこれから私が行なおうとする発表に驚かれることでしょうが、偉大な中国の賢人の一人が表現したように、「私達が最も聞きたくないと思う真実は、私達が知ることによって私達の為になるというものが多いのです。」

【解説】

いわゆる既存の感覚では説明出来ない知覚作用を、私達の科学者達は安直に「第6感」と表現して来たものと思われます。しかし、そもそもが私達の感覚は逆に5ではなく、4である、即ち視覚、聴覚、味覚それに嗅覚から構成されているというのが、本講座の基本です。従っていわゆる物質化の前の段階についての知覚や遠隔地での状況の把握等、既存の感覚器官の対象範囲を超えた領域の取扱いについては、何か別の感覚器官の存在を設定すること自体に大きな誤りがあると指摘しています。

既に学んでいることの中には、細胞一つ一つに印象を感受する存在があることや、原子の一つ一つにも英知の存在があること等、いわゆる目や耳等の感覚器官には依存しない知覚力が各段階の構成要素には普遍的に備わっており、各々が印象を交流出来ることがあります。

それらの実態を理解する為には、先ずは教師の伝えたいとする所を素直に学ぶことが必要で、その理解の中で初めて各自の実生活に適用し、恩恵を受けることが可能となるのです。

089 The purpose of this lesson is to show you by means of practical analysis that man is not the possessor of the five senses but is actually a four sense being. This, we realize may be more difficult for you to accept than the belief in the sixth sense, for we as mortals can more easily accept that which we feel adds to, rather than subtracts from that which we think we have. However, this subtraction, as you will find, is not in the nature of releasing something as a loss, but as the process of gaining something much greater.

089 この教科の目的は、貴方に実際の分析の手法を通じて、人間は5つの感覚の持ち主ではなく、実際には4つの感覚の存在であることを示すことにあります。このことは貴方にとって第6感を信じるよりはるかに難しいだろうと私達は承知しています。何故なら、死すべき存在としての私達は私達が所持していると思っているものから減ずるより、加わることを容易に受け入れられるからです。しかし、この引き算はやがて貴方も分かるように、失うという意味で何かを手放すという性質のものではありません。そうではなく、より大いなる何かを得る過程のものなのです。

【解説】

自分の心を視覚、聴覚、味覚、嗅覚の反応として観察することで、より本質的な問題に近づけるという訳です。私達が触覚については、とりあえずは別扱いにし、アダムスキー氏の他の著作にあるように、より本質的な知覚チャンネルとして別途、より丁寧な取扱いをする必要があることとなります。

しかし、当面の問題は、心と前述の4感覚の関係を自ら観察し、その実態を把握することから始める必要があります。そういう意味では勝手に「第6感」と安直につけた架空の概念等、私達には有害であり、無用です。私達は実際の宇宙に湧き起こる意識や印象の作用について、もっと具体的、実際的な取扱いを心掛ける必要があります。

本項で言う「捨てる」ことは、当面、問題となる案件（ここでは心の本質）について、関係の無い要素は捨てて、問題をさっぱりさせた後に、初めて見えてくるのが大きいとも解釈出来ます。そうした中で、心の作用が理解出来れば、更に次のステップが待っているということになります。

090 Let us, therefore, analyze the sense man. You have believed that man is endowed with five avenues of expression - sight, hearing, taste, smell and feeling. Each of these attributes is supposed to have the ability to act independently of the others. We can close our eyes and hear, taste and smell. It is possible to decipher between sweet and sour without hearing, smelling or seeing the object in question. We can certainly tell the difference between a bit of garlic and a rose without using the sense of sight, sound or taste. So it is possible to prove that four of our senses do work independently of each other. But now let us remove that which is known as the fifth sense; let us deprive man of feeling. What is the immediate result? The result is a state of unconsciousness; the four other senses are ceased to function, even though the organs of sense themselves, are still existing in the body. The eyes, nose, palate and ears are uninjured yet they do not see, smell, taste or hear. Apparently these senses cannot, then, work independently of feeling. Does this not prove that feeling is not a sense, but the conscious power which gives sensation to the senses?

090 それ故、感覚人間を分析して見ましょう。貴方は人が5つの表現の大通りを授けられていると信じて来ました。視覚、聴覚、味覚、嗅覚そして触覚です。これらの属性の一つ一つは他と独立して作用する能力を有しているように思われます。私達は目を閉じて聴くことや味わうこと、香りを嗅ぐことが出来ます。問題の対象物の音が聞こえなくても、臭いが嗅げなくても或いは見えなくても甘いとすっぱいの味の違いを判読することは出来ます。私達は確かにニンニクの小片とバラの違いを視覚や音や味の感覚を用いずに言い当てる事が出来ます。ですから、私達の4つの感覚は互いに独立して働いていることを証明することが出来るのです。しかし、第5番目の感覚として知られているもの（訳注：「触覚」のこと）を取り去って見ましょう。人から触覚を取り除いて見ましょう。直ちにどのような結果になるのでしょうか。結果は無意識の状態です。4つの他の感覚は感覚器官自体は依然として肉体に存続していても機能を停止します。目や鼻、舌や耳は傷ついていませんが、それらは見ることも嗅ぐことも味を感じ、聴くことはありません。見たところこれらの感覚は触覚から独立して作用することは出来ないようです。このことは触覚は感覚ではなく、感覚に刺激を与える意識的な力であることを示すものではないのでしょうか。

【解説】

触覚が無くなるという状況は容易には想像出来ないのですが、本文ではそれが無意識状態になると明確に説明しています。即ち、本人の意識が有る無しに繋がる体全体の機能に直結しているという訳です。よく私達は人の生き死にの境目の重要な指標として「意識がある」「意識が無くなった」という表現をし、「意識がある」ことで生命が継続出来ている状態であると判断しています。「意識がある」として居ることの中には、本講座で言う宇宙意識の概念もその一部に入っていることとなります。

また、触覚の作用が各感覚器官が受信した信号を身体内の何処かにある感覚の本体に伝える機能をも担っているとすれば、触覚が停止すれば、全ての感覚が停止することも理解出来ます。

感覚による裁きが私達の重要な課題であることは私達がよく承知している所ですが、どうやら一連の感覚機能は目や耳等のいわゆる感覚器官とそれからの信号刺激を最終的に受ける感覚本体、更に伝送する触覚的要素の3つの要素から成り立っていることが分かります。

091 Each sense is able to operate independently of the other senses only so long as it is supported by the life force of feeling, but the feeling or consciousness is entirely independent of the four senses. The sense of sight, taste, smell and hearing might all be destroyed and yet so long as the feeling remained man would be a conscious, active being, knowing joy and sorrow, peace and pain, and altogether very much alive. The feeling is indestructible. It is the eternal, the everlasting intelligence. The destruction of the body cannot destroy the feeling, which is consciousness. It is like the electricity which flows through the wires to the bulb to produce light. If the bulb is destroyed the electricity cannot produce light through it, but the electricity is not destroyed. On the other hand, if the electricity is withdrawn it matters not how good the bulb may be there will be no light emanating from it.

091 各感覚は触覚の生命力によって支えられている限りのみ、他の諸感覚から独立することが出来ますが、触角あるいは意識はその四感覚とは完全に独立しています。視覚、味覚、嗅覚そして聴覚が全て壊されても、触角が残る限り、人は意識があり、行動でき、喜びも悲しみも平穏さも痛みも感じることが出来、まったく活発に行動できます。触覚は破壊されることはありません。それは永遠であり、永続する知性なのです。肉体の破壊によって意識である触覚が破壊されることはありません。それは光を作り出すために電球に電線を通じて流れる電気のようなものです。もし電球が壊されれば電気は電球を通じて光を作り出すことは出来ませんが、電気は破壊されることはありません。もし電気が取り消されれば、電球が如何に良いものであるかは問題にならず、電球から光が出ることはありません。

【解説】

そもその感覚の機能を下支えしているのが触覚という訳です。この「触覚」、原文では「feeling」という表現が用いられており、直接的なイメージとしては、"何か対象物と触れて受ける感触"を意味するようには思います。昆虫等にある触角が様々なものに触れて、安全なものかどうかを見極めて前に進むような時に用いられる感覚です。私達の人体は、身体全体に触覚を張り巡らしており、各部から発せられる痛みや痒み等の警報を感受し、身体全体の維持に役立っています。

これら身体各部に、いわば意識を行き渡らせて身体全体の一体感を作り上げるのが、触覚の役割なのかなと思われまます。それは私達自身の身体各部に自分の意識を巡らせることにも一致していることから、触覚は意識と一致しているように思われまます。このような身体全体を支えている触覚的要素に対して、四感覚がどのように自分の意見を押し出して全体を支配しようとしているかについて、私達は日々の生活の中から観察し、それらの行動をコントロールしなければなりません。

092 Within the last few years the attention of the world of science has been attracted to the many cases of suspended animation where the body remains for months in a state of perfect preservation. The sense organs are normal, yet they cease to function in a conscious way. Why? Because most of the feeling has left the body; approximately ninety-nine percent of the consciousness has left, and while one percent of feeling within the body keeps it from disintegrating, this is not enough to cause any apparent awareness within it. Many of these cases have reentered into active life. The feeling had again taken possession of the body and reanimated the inert organs of sense producing in them a state of conscious awareness. If understood rightly these four senses of man correspond perfectly to the four elements of creation, and the so-called fifth sense is the stimulus which imparts to them the animation necessary to produce conscious functioning.

092 過去数年間、世界中の科学の注目は、肉体は何ヶ月も完全な保持状態である中での生気が中断している多くの事例に引き付けられて来ました。感覚の諸器官は正常なのですが、それらが意識的には機能しなくなっているのです。何故でしょうか。それは触覚の大部分が肉体を離れてしまっているからです。概ね意識の99%が離れてしまっており、肉体の残り1%の触覚が肉体の分解を抑えており、これでは肉体内部に知覚をもたらすには十分でないのです。これらの多くは再び生気を取り戻しました。触覚が再び肉体内の位置を取り戻し、不活発な感覚器官を再び活性化し、意識ある覚醒状態にしたのです。もし正しく理解できれば、人間の四つの感覚は創造の四つの要素に対応し、いわゆる第五感覚は、意識的機能を作り出す為に必要な活性化を与える刺激ということが分かります。

【解説】

いわゆる本人の意識が無いと称される状態です。その程度は本当の臨終の状態から、いわゆる植物状態や脳死と呼ばれるものまでであると思われませんが、いずれにしても触覚的要素が機能しなくなっていることとなります。また、本文中に「意識の99%が離れてしまっており」とさり気なく著者が表現していることにも注目したい所です。丁度、意識なるものが身体内から別の所に移動するような状況表現している訳です。その結果、万一、更に意識がその肉体を離れば、後は屍（しかばね）だけが残ることとなります。実はその屍という意味合いが、よく出てくる「Mortal（死すべき）」ということで、各感覚はその窓口である感覚器官も含めて、その死すべき肉体に帰属しているという意味で「死すべき人間の心」という表現されて来たものと思われま

す。触覚についての研究事例を見ると、人間の皮膚をはじめとして触覚の受容器は身体内に広く分布しており、外部からの刺激に対して常に警戒状態にあることが分かります。私達は自らの心なるものが具体的には何処にあるのか明確には教えられていませんが、おそらくは頭脳に分布しているものと思われま

す。それに対して生命の源にも通じる触覚は全身くまなく分布し、想念活動も含め、私達の生命活動を支えているということとなります。

093 In other words this sense is merely the unification of the four senses with that unlimited conscious feeling which controls, supports and animates every conceivable thing in the universe. It is the expansion of the four senses in the channel of feeling which makes of the mortal sense man, a conscious user of conscious power. Through this education of the senses the sight becomes a microscopic sight extending beyond the gross material forms; the hearing is expanded to catch the soundless sound frequencies. etc. Each of the four senses Will themselves into greater fields of awareness through the recognition of Cosmic Feeling which is the mother-father thought supporting them.

093 言い換えれば、この感覚（訳注：触覚）は、宇宙空間の中のあらゆる知覚し得るものを支配し、支持し、活性化する無限の意識的な感じによってその4つの感覚を統合しているに過ぎません。それは触覚の経路への4つの感覚の拡張であり、死すべき感覚人間を意識的な力の意識的利用者にするのです。諸感覚の教育を通じて、視覚は大まかな物質の外観を超えて顕微鏡的な視野となり、聴覚は音のしない音波を捉えるまで拡張します。4つの感覚の各々はそれらを支える母性及び父性の想念である宇宙的な触覚の理解を通して自らをより大いなる気付きの場にもたらしめます。

【解説】

視覚から嗅覚までの4つの感覚は、各自固有のものですが、触覚は宇宙全体とも繋がっている生命力である点が重要なのです。全身にくまなく分布する触覚は既存の4感覚に感覚機能を与え、それらが感受した信号を脳に伝える大事な機能を担っている他に、触覚の助けを受ければ、遠隔地の出来事をも4感覚は知覚することが出来ると言っています。

その背景には、私達の持つ触角がむしろ、主体となる感覚要素であり、4感覚は補助的なものと言うべき関係があります。光の無い海底でも多くの生き物が棲息していますし、視覚は生存に不可欠という訳ではありません。聴力もしかりです。多くの生物は触覚を中心として生きているようです。同様に様々な予知反応を多くの生き物が見せますが、それもこの触覚の活用ということが出来ることでしょう。未だ現実化していない、イメージの段階でも物事を触覚を通じて感知することも意識に繋がる触覚だからこそその機能ということになります。

094 The mortal may be likened to a violin, which is the closest to the human expression known as man. Upon the violin there are only four strings; through the medium of those four strings can the coarsest or the most celestial melodies be played but the Instrument is only a bit of wood and string until it is acted upon by a conscious intelligent force. The sounds produced depend upon the skill of the musician. The four senses in the instrument called man are unable to bring forth any expression of life without the aid of the All-Inclusive consciousness which is feeling.

094 死すべき人間はバイオリンになぞらえることが出来るかも知れません。バイオリンは人として知られる人間的表現に最も近いものです。バイオリンには4つの弦しかありません。それらの4つの弦の媒体を通じて最も粗いものも最高に天上的なメロディーも演奏されることが出来ます。しかし、その楽器は意識的な知性を持つ力によって演奏されるまでは、単なる木と弦でしかありません。作り出される音はその音楽家の技量に依存しています。人と呼ばれるその楽器における4つの感覚は、触覚である全てを含有する意識の助け無しでは、如何なる生命表現をももたらすことが出来ないのです。

【解説】

楽器単独では音楽を奏でることは出来ず、必ず演奏者が必要であることは言うまでもありません。しかし、この楽器を人体に置き換えれば、人が本来の活動を為しえるためには、常にその演奏者である創造主に身を委ねる必要があります。もちろん、楽器としての身体の整備や弦である4感覚の調和と調製が演奏に先立って行われなくてはなりません。

テレビ番組でも著名な演奏家による音楽番組が時折放送されますが、それらを見ると演奏家は自分の分身として楽器（バイオリン）を自らの身体に押し付け、一心不乱に楽曲を追求していることが分かります。それと同様に私達が創造主に身を委ねるということは、それと同様な熱心さや没入感によって創造主と一体になり、私達の4感覚の表現分野を通じて何かを表現していることとなります。その状況は単に私達が創造主と一体になるというよりは、創造主が私達の方に没入し、ご自身の表現したいイメージを私達（楽器）を通じて表そうとしているという、大変活気ある行為であることに気付きます。

095 Feeling is a state of alertness - when expressed impersonally it is conscious awareness of conscious consciousness.

095 触覚は警戒の状態であり、非個人的に表現された場合、それは意識的意識に対する意識的な気付きとなります。

【解説】

これまで触覚 (Feeling、フィーリング) は4感覚の機能を支え、人体の生命活動を指揮する重要なものだと説明して来ました。本項ではその触覚の機能は、宇宙的生命力とも言うべき意識 (Consciousness) に対しても感受出来る機能を持っていると明言しています。

全身くまなく分布している神経網の各触覚受容器は、圧力や温度という要素を感知し、頭脳にその信号を送る監視員の役割のみならず、宇宙からの印象等、諸々の想念波動についてもキャッチ出来ることも、本文の言及の範囲かと考えます。

このような触覚を自我への関心でなく、非個人的な姿勢で解放することによって、触覚は宇宙の意識の存在にも気付き、交流することが出来るという訳です。触覚はこのように生命活動に深く係る機能を有している訳で、私達は触覚を中心に据えて、その触覚から得た印象に従った生活を日々送ることが重要です。雨季を迎えてカタツムリの生き方にも学ぶところは多いようです。

096 When that feeling is no longer playing upon the senses they lie inert like the muted strings of the violin after the consciousness of the musician is withdrawn to another channel of service.

096 諸感覚に対して触覚が作用しなくなると、諸感覚は演奏家の意識が別の奉仕の経路に引き上げられた後にそのバイオリンの沈黙した各弦のように不活発になったままになります。

【解説】

アダムスキー氏の言う"Consciousness"は日本語では「意識」という概念が相当するとされて来ました。この意識という言葉について、日本語では、生き死にの境の重要な要素として「意識があるか否か」として、あるいは「自意識過剰」や「意識的に」という具合に用いられて来ました。よく言われるのは、例えばジムのトレーニング等では、コーチは鍛えたい身体の特定位を「意識して」トレーニングを行うことを奨めています。

また、この「意識する」という点については、自分の気持あるいは関心の集中物のようなイメージもあるのではないかと考えます。そういう意味では、意識は自分の自由に動かせしめ、距離に関係なく自分が思った瞬間に移動させることが出来ます。この意識については、自分の身体については触角の要素を媒介としているものと思われそうですが、身体外の空間についても、その移動範囲を広げることが出来るものと考えています。

とかく私達は言葉に引きずられますが、大事な点は著者がどのようなイメージとして、その言葉を用いたかを理解することです。演奏家が楽器を手にとって具体的にその持つ知性を動員して演奏すれば、楽器はそれまでとは異なり、生き生きとした音色を発しますが、それは演奏者がいわばその意識を楽器に吹き込んだとも言えるでしょう。このように意識という概念は、気持の本体とも言えるような、また触覚に似た存在として認識出来るのではと思っています。

097 In a television program called "Frontiers of Mind," the Bell Telephone Company presented an excellent scientific demonstration of what touch is and how it reacts to electrical impulses. It showed that touch is not a sense organ but acts as a telegraphic system via the nerves to the brain. It registers that which it contacts and relays that reaction as electrical impulses through the nervous system of the body. Touch is inseparable with feeling, for feeling gives sensation to the nerves.

097 「心の最前線」と呼ばれるテレビ番組の中で、ベル電話会社は感触が何であるか、またそれが電気パルスに対し、どのように反応するかを示す優れた科学実験を提供しました。その番組は感触は感覚器官ではなく、神経を経由して頭脳に通じる電信システムとして機能していることを示しました。それは触れるものを記録し、肉体の神経を通じて電気信号としてその反応を伝達しています。感触は触覚と分けることは出来ません。触覚は神経に感情を与えるからです。

【解説】

触覚は身体中に分布する神経ネットワークを通じて、信号を頭脳に伝える機能を含んでいることは先に述べたところです。触覚こそが各細胞を人体という一つの機能体にとりまとめ、全体としての機能を果たす上で現在の私達が知っている以上の役割を果たしているのかも知れません。

また、触覚が他の4感覚も含め全体の感覚を支えているということは、触覚が痛い、痒いの反応のみならず、目や耳の反応、即ち映像や音声の信号を伝える機能を有していることになる訳です。そういう意味では想念印象についてもその伝達に大きな役割を果たしているのかも知れません。私達はこれまで自分の目や耳を中心に生活して来ましたが、これからは印象中心の生活を送ることが求められており、その際にはご自身の触覚を頼りに生きていくこととなります。日本語の「神経」という表現、「神に通じる経路」をイメージしたとすれば、実に的確な表現であることが分かります。

098 Science has now proven that the so-called fifth sense should not be classed with the other four.

098 科学は今や、いわゆる第5番目の感覚は他の4感覚と同類に見なすべきではないことを証明しているのです。

【解説】

私達にとっての当面の課題は、この4感覚を監視し、それらを因や他の諸々の要素と調和させることにあります。著者は何故、このように「4感覚」に注目を集めようとしているのでしょうか。それは所詮、人間と外界との交流は自我というべき「家」にある4つの窓を通じてなされると考えられるからです。その4つの窓が曇りなく、また自身の好き嫌いの判断を加えることなく、ありのままの情報を主（自我）に伝えることが当面の目標です。

人が長年生きた中では、必ずしも感覚の統制だけでは十分と言えないでしょうが、人間が生まれ変わって赤子として新しい人生を歩む時、心が未発達であれば、記憶を運ぶことが出来ず、まっさらな状態からスタートする訳で、その場合は想念を直接感受するよりもこれら4感覚を通じてほとんどの情報を得ることになり、その取扱いが重要となる訳です。私達が他惑星人のようなレベルに達するまでは、もっぱら既存感覚の統制を行う必要があるということでしょう。

9. THE HIGHWAY OF PROGRESS

099 The sages of the Orient left to posterity many words of wisdom that might well act as guide posts along the way of life. Among the Chinese proverbs is one statement to the effect that "a journey of many miles begins with one step."

第9章 進歩の王道

099 東洋の賢人達は子孫に人生を歩む中で、案内標識としてよく機能する多くの知恵の言葉を残しました。中国のことわざの中に「何マイルもの旅も一歩から始まる」（訳注：「千里の道も一歩から」）という意味の言葉があります。

【解説】

山道で道が分かれ、どちらが目的地に通じるか迷いそうな場所に、先人達が建てているのが道しるべです。本項で著者が例示しているのも、そうした案内標識をイメージしています。つまり、人が道に迷った時、正しい方向を指し示すのが、これら先人の知恵という訳です。

宇宙哲学の学習においても、他の物事と同じく私達にとっては途方も無い遠いゴールを目指した道程です。最初は勢い良く進んで行っても、途中で起こる様々な出来事で時にはわき道に入り込んでしまうことも多いものです。しかし、このような時、あせらず本来の方向に向き合い続けていればいつか光も見えて来るものです。私達は長い旅を続けている訳で、当面、毎日毎日、目の前の一歩が正しければとりあえず、本日の仕事は良しとすべきなのです。

100 In these days of restless activity and innumerable new discoveries, in the babble of uncounted creeds claiming space contacts and guidance, and in the uncertain whirl of diversified circumstances it is well to contemplate this bit of wisdom and stabilize oneself in the thought that action begins with one single step. That regardless of how far or how near the goal may be there can be only one step taken at a time. It is the first stride forward or backward that will carry a man in that direction. This is true of every act of our daily lives and is just as true in our start to live a unified life. It takes but one step at a time to lift us out of the rut of the old habits and start us on the highway of the new, but that step must be complete; we cannot put one foot forward and keep the other in the rut, for in such cases we will have made no progress. That is what many people are doing in their effort towards moving into the newness of cosmic life - trying to go forward into the vastness of Cause while clinging to the limited sense conceptions of traditional belief and opinions.

100 今日の落ち着きのない活動と無数の新しい発見の時代、宇宙人とのコンタクトや導きを得たと主張する無数の信条のたわごとや様々な状況下におけるはっきりしない渦の中にあっては、この知識の薄片をじっくり考え、行動は一步から始まるというその考えの中で自分を安定化することは良いことです。ゴールが如何に遠いか、あるいは近いかに係らず、一時に一步しか進むことはできません。前進であれ後退であれ、その方向に人を運ぶのは最初のひとまたぎです。これは私達の日常生活のあらゆる行為についても言えることで、統合された生命を生きる上で私達がスタートする上でも同じことです。古い習慣のわだちから私達を引き上げ、新たな王道で私達をスタートさせる為に一時にただ一步が必要なだけです。その一步は完全でなければなりません。私達は一方の足を前に、他方をわだちの中に置いたままにしておくことは出来ません。そのような場合、私達は進歩することはありません。それは多くの人達が宇宙的生活の新鮮さの中に移行しようと努力している中で行っていることでもあるのです。因の広大さの中に行こうとする一方で、伝統的な信念や意見という限定された感覚の概念にしがみついているのです。

【解説】

イエスの言葉の中にも「二心があってはだめだ」という表現があったとされていたことを思い出しました。迷いを打ち払い、心が一つになった状況を本項ではunified life（統合された生命）としているのです。これに対し、一方では進化の道を目指している中で、旧来の習慣を捨てがたい状況では真の進歩はないとしている点に注意が必要です。

また一方で、進歩を獲得する為には一度で一段の進歩でよいとも言っています。階段と同様、当初の本人が理解でき、実行できる範囲内で一步だけ前進させることです。その完全な移行が出来れば、次にそこでも新たな課題を発見し、取り組めば良い訳です。如何に道が遠くとも、進歩を続ける限り時間は十分にあるという訳です。この場合、一挙に高い位置まで無理して飛ぼうとすべきではありません。各自の理解する範囲、納得できる範囲内で移行すればよく、他の者の意見に頼ることは禁物です。

不安が広がる世界にあって、内外ともに多くの宗教家が生まれていることも確かですが、これらの多くは人々の不安視する想念の影響を受けたものも少なからず存在します。真の宇宙の因から発する印象を正しく感知することは容易ではありません。先ずはご自身で印象を感受して、それが正しい内容であることを確かめながら、一步一步進むことが賢明です。

101 It takes courage and faith to walk the road of progress; the doubter will remain forever in the same old rut. He may turn his vision towards greater knowledge but it will remain forever a dream of mystery unless he releases himself from the spot upon which he stands and takes one step forward.

101 進歩の道を歩むには勇気と信仰を必要とします。疑う者は永久にその同じ古いわだちの中に留まりま
す。その者はより大なる知識の方向に自分の視野を向けるかも知れませんが、自分が立つその場所か
ら自身を解放し、一歩を前に踏み出さない限りは、永遠に夢の中に留まることでしょう。

【解説】

習慣を抜け切るには勇気と信仰が必要だということです。わずかな一歩ですが、それを踏み出す、即ち行動に移すためには抵抗もある訳です。例えば、「〇〇をやらなければならない」ことは分かっている
も、それを実行するのに何年も先延ばしにして来たこと、その内にはそのやるべき内容も忘れてしま
うことも有りえます。私達は習慣の中に居心地の良さを感じるからであり、私達の自我の本性が怠け者
であることがその主要な原因です。

もう一つの要因は、行動した結果がどうなるか見えないということがあります。従来、経験の無いこ
と、新しいことはどのような結果になるか、とかく私達は不安視します。その為、実績があり、結果が
想定できる前例に走りがちということでしょう。

これらに対し、新しい分野に飛び込むためには、未知なるものに対する勇気と信仰が必要だという訳で
す。この場合、「信仰」とは原文では「faith」であり、信頼或いは信念とも訳される概念です。創造主へ
の信頼ということかと思えます。自身の進歩を目指す作業の中で学んだこと、少なくとも心が理解した
わずかなステップも、それが完全に行動として実践する中では新たな体験が生まれます。その体験が次
ぎのステップに移行する原動力になることでしょう。その為には、進む一歩こそ体験に裏付けられたも
のとして大切に取り扱われなくてはなりません。

102 What would this country be today if the pioneers who set sail from lands across the sea had lost faith and courage and spent their days merely dreaming of the new land while their ships remained anchored in the ports of the old world?

102 もし大西洋を横断した大陸から帆を上げた先人達が、信仰と勇気を失い旧世界の港に錨を降ろしたまま、単に新大陸のことを夢見て彼らの時を過ごしていたとすれば、この国（訳注：米国）は今日どうなっていたことでしょうか。

【解説】

いつの時代にも次の時代を切り開くパイオニアの貢献がその後の発展をもたらすものです。文中にあるコロンブスの当時、大洋を小さな帆船で横断するのは大変危険でした。そもそも地球に果てがあるか疑わしい感覚の時代、パイオニアたる者、大いなる勇気を持った冒険家であった訳です。

これに対してこの宇宙哲学の学習においても同様な状況にあると著者は言っていることに私達は着目しなければなりません。私達の先に待っている当面のゴールに至る上で、実は未知の新大陸を求めて出帆するのと同様の勇気と信仰が必要だということなのです。日々の生活一つにしても心で考えているのではなく、思い切って実施に移すことが大切であり、それには両足ともに新しいステップに乗ることが必要だということです。

私がかつて、故エマ・マーチネリ女史からもらったアダムスキー氏の著作、Pioneers of Space（宇宙のパイオニア達）の本の奥付には氏のサインがあり、合わせて「Good Luck To You」（あなたに幸運を）と記されています。今までそれがどういう意図で記されていたのか分からないままでしたが、本項により、一歩を踏み出そうとする私達への声援として理解することが出来たように思います。

103 The thousands of scientific discoveries that have benefited humankind would be still in the realms of Cause if some few men had not had the faith to bridge the gap between the known and the unknown and had the courage to take the first step upon the bridge. The many things that we enjoy today may be laid to the credit of the few who were courageous enough to move forward into new realms of perception.

103 人類に恩恵をもたらした何千もの科学の発見は、もしわずかの人達が既知と未知との隙間に橋を掛けようとする信仰を持たず、その橋の上に第一歩を乗せる勇気を持たなかったとしたら、それらは依然として因の領域にあるままになっていたことでしょう。私達が今日享受している多くの物事は、新しい知覚の領域に進み出ようとする勇気を持った極少数の人達の貢献に帰すると言えるでしょう。

【解説】

今日、私達の何気ない日常生活は、例えば100年前と比較しても大きく異なるものとなっている筈です。昔、夢見られた数多くのものが今では当たり前な生活用品として身の回りに溢れているからです。

しかし、それらの日常も元々は科学者の発見が源であり、商品化に向けて様々な工夫をした技術者の成果である訳です。考えて見れば、このような先駆者達が新しい事実を掴んで応用することに熱意を持ち、試行錯誤の結果、今日の姿があるということでしょう。

その際に、先人達が未知の事象に踏み出す際の心境、心持ちについて本項は述べています。限られた現象の観察から、その背後にある新しい真理を直感し、それを具体化するのが、発見だと考えます。その発見の過程において、その研究に携わる者がどれだけ真理に迫るか、また真理に迫る為には、与えられた真理の断片から、どのような全体像を認識するか等、これら重要な事柄は全てそれに携わる者に依存していることも確かです。

104 It is true that the step into the wholeness of life carries us into the unexplored but what would our existence be if we remained always in the world of the obvious? Delving into any subject takes us from stagnation to knowledge and progress. There is no need for any one remaining in the state of disintegration or static mental condition when everyone is privileged to step into the newness of things and study in the school of everlasting advancement. There is no place to which a man is bound; he may go forward freely whether it be in a world of acts or in the universe of facts. There is no standing still; one must go either up or down, and the upward step is always the proper one to take. All of the storehouses of earthly knowledge in which various manuscripts are treasured contain not even a beginning of the wisdom that is held within the storehouse of the cosmos.

104 生命の全体性への歩みは私達を未踏に運び入れますが、もし私達が明らかな世界にいつも留まっていたら、私達の存在意義は何なのでしょう。どんな課題でもそれを掘り下げることが、私達を停滞から知識と進歩に連れ行きます。誰もが物事の新鮮さへの一歩が与えられ、永続する前進の学校での学習が与えられているというのに、誰一人、崩壊或いは静止した精神状態に留まっている必要はありません。人が縛りつけられている必要のある場所は存在せず、人は行動の世界や事実の宇宙の中であれ、自由に前進することが出来るのです。静止しているものは何一つありません。人は上昇するか下降するかのいずれかであり、上向きの一歩は常に取るべき適切なものです。様々な原稿が収蔵されている地球上の知識の宝庫（訳注：図書館を指す）の全てでさえ、宇宙の宝庫の中に保存されている英知のはじまりさえも含んでいないのです。

【解説】

私達がどう思おうと、私達が暮らす宇宙は、統合された生命が活発に活動する躍動感溢れる世界です。その中では何一つ静止するものはありません。役割を終えて静止するものは、直ちに分解し、新たな要素に取って代わります。その中では「死」のまま継続するものはありません。

このように考える時、停滞というものは宇宙には存在しないことが分かります。当然、私達自身についても言えることで、向上心や探究心が薄ければ、退化や老化が起こることになります。いつも思うことは自然の中で観察して見ると、自然の中では皆、活発で生き生き暮らしているということです。各々の一生は短く、生存競争も激しい筈ですが、野原に出て、先ず弱弱しいものを見たことはありません。その理由の一つは弱いものは自然界では生きて行けないことや、寿命を終えたものは速やかに舞台から退場し、新しい存在に取って代わるということもあるでしょう。しかし、それに加えて、自然界の各構成員が季節の変化等の環境の変化に柔軟に対応し、調和の中、命がけで各自の生命の表現を行っていることに気付く必要があります。その活動を支えているのが、本項で言う統合された生命と言うべきものです。

105 One step can set a man on the highway of eternal learning - the everlasting revelation of facts that exist only in the laboratory of Cause which knows no limitations or boundaries. But after you have taken the first step, learn the lesson of patience so you may not try to travel faster than your understanding will permit, One step will set you on the highway, but there are billions of steps ahead of you, for after you have reached a goal you still must travel through Eternity. Man can never attain the totality of all that is to be known, for if he could do that there would be an end to all things. Knowing that this is true, why be impatient to forge ahead? Each step we take is new; each step is the first one from the point that we have previously reached. It is well to have ideals; we are given glimpses now and then of the fullness of the life ahead of us so that we may be inspired to continue action, but if we keep our eyes totally upon the future we are sure to miss the beauty of the present and we may stumble into a briar patch and endure much suffering while trying to extricate ourselves.

105 一步の踏み出しが人を永遠の学びという王道、制限も境も知らない因という実験室の中にのみ存在する事実の永續する現出の場に据えることが出来ます。しかし、貴方が第一歩を踏み出した後は、貴方は自分の理解が許すより速く旅しようとはしないよう、忍耐の教科を学ぶことです。踏み出す一步は貴方を王道に乗せはしますが、貴方の前には何十億もの歩みがあるのです。何故なら、貴方が一つのゴールに到達した後も、貴方には永遠を通じてなお旅する必要があるからです。人間は知るべき全ての全体性を決して達成することは出来ません。何故なら、もしそれが出来たとすれば、あらゆるものに終わりがあることになるからです。このことが真実だと知ったからには、どうしてせっかちに先頭を切ろうと突進するのでしょうか。私達が毎回、踏み出す一步は新しいものです。私達が時折、私達の将来にある満ち足りた生活を先立って見せてもらえることもあります。もし私達が未来のみに全て着目していたとすれば、私達は間違いなく現在の美しさを見失い、イバラの小畑の中につまづいて、自分を救い出そうと、より手ひどい痛みにも耐えることになるかも知れません。

【解説】

思えば昔、初めて「実見記」や「同乗記」を読んだ時、そのあまりの美しさに感動し、一人夜庭に出て夜空を飽きずに見上げていたものです。アダムスキー氏との出会いはそれほど新鮮なものでしたが、それは今思うと素晴らしい未来への憧憬であって、そこに辿り着く為の道にしっかり乗った訳ではありませんでした。しかし、その体験感は今でも覚えており、私の人生もその辺から始まったように思います。

あれから四十数年が経過し、私自身を巡る環境も大きく変化しました。この間を振り返ると、やはり継続して来て良かったと思う次第です。本シリーズをはじめ、アダムスキー氏の伝えた事柄は平易なものですが、頭で分かっていることと行動した上で体験から学んだ理解とは大きなレベルの差があるように思います。

理解して身に付けたものは転生の後にも継続して運ばれるものだと思っていますが、使われることのない単なる知識はやがて忘れ去られるものです。そういう意味から、本項では一つ一つ理解し、実生活に応用しながら、各自の真の能力を高めて行くように述べているのです。

106 Remember that youth is the result of constantly renewed thoughts and life is activity - it is progress. The first step taken in any field of accomplishment is an initiation into a new endeavor and requires a certainty that is born of perception - an assurance of a vastness that lies beyond our present line of vision. Neither you or I know what each new step will bring but the journey must be made and only faith will reveal truth to us.

106 覚えておいて欲しいのは若さとは絶え間なく更新される想念の結果であり、生命とは活動であり、進歩であるということです。如何なる達成の分野でも踏み出された最初の一步は新たな努力へのはじまりであり、私達の現在の視界の境界線の奥に横たわる広大さの知覚への確信を必要としています。貴方も私も新しいそれぞれの一步が何をもたらすのか知るものではありませんが、その旅は為されなければならず、唯一、私達の信仰が私達に真理を明らかにすることでしょう。

【解説】

若さを保ちたいというのは、人間の望みの最たるものでしょう。身体の老化を遅らせるにはどうすればと、中高年の多くが体力維持に努めています。古来から不老不死を求めて様々な探求が行われて来ましたが、果たしてどれほどの効果があったのか、疑問です。

それに対して、本項では若さを保つ要因はその人が日常的に抱く想念が停滞することなく、絶え間なく変化、更新することだと述べています。つまり、習慣的想念とは正反対の状況なのですが、これは各自が新たな分野や物事への挑戦を行う際に最も良く発現するということでしょう。新しい分野に踏み出す時、その視界の先には広大な未知の世界が広がっていることを感じ取ることが大切だと言っているのです。

日常、私達は安定した生活を望みますし、「こうすれば、こうなる」という決まり切った結果の世界に安住しがちです。しかし、それは心の惰性、習慣的指向から来るもので、本来は日々新たなる冒険こそ望ましいと言えるのです。「同乗記」には進歩した宇宙人達が広大な宇宙空間の旅行を楽しみ、千年以上も生きていた長老が語るお話も紹介されていました。宇宙人達の若々しさは、このような想念活動の活発さにも裏打ちされているものと思われます。同じものを食べ、同じ環境に暮らしたとしても、その人が心に抱く想念活動の違いによって、発現する若さは大きく異なるものとなる訳です。

107 Through our life on earth we have learned a great deal; how much more we shall learn as we venture into the realms of Cause. We shall know much more beauty than we have known in the world of effects. Our admittance to such knowledge is not difficult - just one step can prove itself the key that will unlock the chambers heretofore unknown to us. "There is nothing," we have been told, "that shall not be revealed." To the vision of the brave in heart no truth can be concealed. One single sacrifice - the releasement of old thought habits, may bring rewards far greater than you have ever dreamed

107 地球上における私達の生活を通じて、私達は多くを学んで来ました。私達が因の領域に足を踏み入れれば、更にどれほど多くを学ぶこととなるでしょう。私達の結果の世界で私達が知って来たよりも更に大きい写しさを知ることになるのです。このような知識に対する私達の入場の権利は難しいものではありません。ただ一步の踏み込みが、私達にこれまで知られていなかった特別室を開けるカギであったことを明かします。「明かされないものはない」と私達は教えられて来ました。心の勇敢な者の視野には如何なる真理も隠されていることは出来ません。ただ一つの犠牲、古い思考習慣の解放は、貴方が夢見たこと以上に大きな報酬をもたらすことでしょう。

【解説】

因の領域は現象世界より、はるかに美しいと解説しています。そしてその領域に入る為には、一步を踏み込むだけの勇気でよいとしていることに注目したいものです。既存の4感覚では所詮、把握出来る範囲は限られますし、一度現象界に出たものは、時の流れの中で劣化は避けられないという訳です。

これに対して、因の領域は常に新たな結果を生み出している訳ですから、そこには常に新鮮な生命の息吹が湧き出しているということでしょう。創造の源泉に触れない限り、永遠の生命について理解は出来ないということでしょう。森羅万象、静止するものは何一つとしてなく、一見静置しているように見える地表や地下深くの鉱物も、時折の地震で分かるように活動しており、何よりも地球自体が宇宙空間を高速度で滑空していることを考えれば、静置していると見ているのは限られた視野しか持たない立場の感覚人の幻想であることが分かります。

10 FAITH

108 Faith is perhaps one of the most widely discussed topics in the world, yet it is the least understood. Teachers, ministers, psychologists, etc., all advise the development of faith and proclaim it as the basic quality of life but find difficulty in explaining this particular faculty.

第10章 信仰

108 信仰はおそらく世の中で最も広く議論された話題であり、また最も理解されていない話題でもあります。教師や聖職者、心理学者その他の人々は皆、信仰の発達を推奨し、それが生命の基本的な質であると宣言していますが、この特別な機能について説明することは難しいとしています。

【解説】

前項107では、新しい分野、とりわけ因の領域への探求が推奨されました。その一步を踏み出す際に必要なのが本章で言う「信仰」です。

実はこの「Faith」という言葉の訳出には、従来からの「信念」とすべきかと迷うところもありました。しかし、以前にも何処かで述べた通り、日本語の「信念」には、「何か我武者羅に物事を確信する」という語感があることから、それを嫌って、本講座においては敢えて「信仰」という言葉を充てています。目に見えない創造主の存在を信じることに始まる静かなる信頼」をイメージ出来るからです。

信仰的な信頼感とは、一方で恐れを知らない安心しきった態度を示しており、それは加護を一身に受ける者が神を信じ切っていることに由来します。これは因の領域に作用して物事を実現する上で重要な要素ということになります。

109 We know that all things in the manifested world are possessed of the positive and negative aspect. Faith is one of the positive aspects of man's character so what is the opposite of faith? Fear, of course! Therefore, to understand one we must understand the other; they are the two ends of one pole. Fear is the lower expression so let us begin with an analysis of it and work upward to faith.

109 私達は、創造されたこの世界の全ての物事は陽と陰の側面を有していることを知っています。信仰は人の性質の陽の側面の一つですが、それでは信仰の正反対は何でしょうか。もちろん、恐怖です。ですから、私達は一つを理解するには、もう一つも理解しなければなりません。それらは一本の棒の両端なのです。恐怖は低次元な表現ですから、私達はその分析から始めて、信仰まで昇って行くことにしましょう。

【解説】

古来から東洋には、「陰陽」という概念があるように、物事の性質はプラスとマイナスの要素として取り扱われると本項では述べられています。どのような光でもプリズムのように分解すれば、その振動数別にスペクトルとして表現されるように、各自の到達レベルも様々な段階として評価されるのかも知れません。

この場合、重要なことは本項で言う陰陽とは、一つの棒の両端をその最たるものとしており、バラバラな要素としては捉えていない点です。不足している状態から、満ちている状態まで連続した状況を示している訳です。

何事においても本来、上達して行く為には、何故上達出来ないか、その原因を理解することが大切で、その為には、自らの欠点を良く知ろうとすることが必要です。決して向上したいという気持だけでは効果が薄いということでしょう。私達自身、何処に問題があるのかを理解することも大切なのです。

110 If we analyze fear we will find it to be produced by a state of wondering in regard to our support and safety. In most every case fear is focalized about one's personal being or self-interest. Most men look upon the activities of life in the light of the effect that they will have upon themselves and those dear to them. They are living in the consciousness of the effective world, depending upon outer things for their support, and the recognition of the instability of outer effects produces a condition of uncertainty within their own minds. We may say then, that fear is the self-centered state and faith is living the impersonal state of being. Fear is based on effects; faith is based on Principle or Cause.

110 もし私達が恐怖を分析すれば、私達はそれが私達への支持と安全に関する不安状態によって作り出されることを発見するでしょう。ほとんどの場合、恐怖は自分の個人的な存在か自身の関心に焦点が当てられています。ほとんどの人達は、それらが自分自身や自分達にとって大切なものに与える影響という光で人生の活動を見えています。彼らは結果の世界の意識で生きており、自分達の支えを外側の物事に頼り、外側の結果物の不安定さの認識が心の中に不安定な状況を作り出しています。ですから私達は恐怖とは自己中心の状況であり、信仰とは非個人的な状態と言うことが出来ます。恐怖は結果に基づくものであり、信仰は法則、即ち因によっているのです。

【解説】

よくアダムスキー哲学の中では「Effect」という表現が用いられ、それに対応する日本語の訳語として「結果」という言葉が用いられて来ました。しかし、日本語のイメージとしては、本来、「結果」に対応する言葉は「Result」という語を充てるのが一般であり、原語のEffectに含まれる語彙について少し述べておきたいと思います。

本来、Effectに当る直接的な日本語表現としては、「効果・影響」という言葉になります。もちろん、「Cause and Effect」という熟語の訳として長らく、「原因と結果」として訳されていることから、本項においてもそれに倣って「結果」と訳出している訳です。

即ち、本来のEffectとしては、何かの原因からもたらされた直接的ないし間接的な効果・影響を指している点に注目して戴きたいのです。つまりは、物質の奥にある目に見えず、耳に聞こえない因なる要素が発する衝動想念が具体的な物質世界に作用させ、出現したもの、その衝動の影響を受けて形あるものとして創造されたものがEffect（結果）だという訳です。

しかし、私達人間にも当てはまる訳ですが、創造され、誕生した時には元来の創造主の意向に沿った存在であったものが、時を経過するにつれ、自我を強めたり、周囲と摩擦したりして老化が進行してしまうことも多いのです。このように創造の意気込み自体は永遠に活気あるものですが、結果物は移ろい易いものだということでしょう。このような因なるものの投影や作用の末に生まれ出たものをEffect（結果）と言っている訳です。

本題の恐怖については、自分自身や近親者の保身をこのような本来、不安定なものに拠り所を置いていることから来る訳で、損得を捨てて、より安定なる因、即ち創造主の意向が作用する中に置くことが唯一の解決策になると言っているのです。

111 How often quoted is the expression of the Christ, "If ye have faith as a grain of mustard seed ye shall say to this mountain, remove hence to yonder place, and it shall remove; and nothing shall be impossible to you." (Matthew 17:20) This statement has been used to show how little faith is necessary to bring forth manifestation. Notice, however, that the words are not "faith as great as a grain of mustard seed" but "faith as a grain of mustard seed." Not the quantity of faith but the quality of faith is called to note in this statement. Let us study the consciousness of the mustard seed. Is it ever overcome with fear in regard to its personal existence? What causes it to grow? Is it not the conscious impulse force within it which promotes it into action? The seed knows nothing but this urge within itself which causes it to expand, burst its shell and proceed upward into the light. It does not seek to resist this force of natural growth nor does it wonder if it is right to act in this manner. It acts unquestioningly according to the law or principle of its purpose. It does not look to effects - neither to man, to earth, water, or sun. It expands into a mature bush because the forces within it command it into such growth.

111 これまで何回、キリストのこの表現が引用されたことでしょうか。「もし、汝に一粒のカラシ種ほどの信仰があれば、この山に対し、ここからあそこの場所に移れと言え、その山は移るであろう。貴方に不可能だというものはない。」(マタイ17:20)。この表現は創造作用をもたらすのに、如何に小さな信仰が必要なだけであることを示すため、用いられて来ました。しかし、それらの言葉は「カラシ種一粒の大きさの信仰」ではなく、「一粒のカラシ種ほどの信仰」としているのです。信仰の量ではなく信仰の質がこの声明の中で求められていることに注意して欲しいのです。カラシの種の意識を研究して見ましょう。それはその個人的な存在に関して恐怖に打ち負かされているということはないのです。何がそれを成長させるのでしょうか。それを行動に突き動かすのはその種の中の意識的衝動ではないでしょうか。種は自分の中にあるこの衝動しか知っておらず、それが膨張し、殻を弾けさせ、光に向かって上方に進み出します。それは成長のこの力に抵抗しようとはせず、またこのように行動することが正しいかどうか迷うことはありません。それは法則あるいはその目的の為の原理に沿って、疑問を持つことなく行動します。それは人間、地面、水や太陽に対する影響を見てはいません。内部の諸々の力がそのような成長を命じる故に、成長した茂みになるのです。

【解説】

言うなれば山をも動かす力が想念にはあるという訳です。このように想念、思い、信仰の念は大きな潜在力があるのですが、本項で著者はその潜在力の大きさを述べているのではありません。もともとイエスが伝えたかった信仰の質について解説しているのです。

今日的に言えばカラシの種一粒の中には、将来のカラシの茂みを構築するに必要な情報と知識があり、種を発芽させ、成長させるに必要な一切の知恵が詰まっていることになります。このDNAをはじめとする情報分子と発芽のOKサインを出す意識体が種を支えていることは私達にも容易に分かります。

しかし、カラシ種と私達自身を比較して分かることは、本文中にも述べられているように、種はその生きる全てを全て自分自身の内側にある英知に依存し、内なる意識の声を聞いているのに対し、私達人間はほとんど全てを自分自身の外側、即ち環境のせいに行っていることが揚げられます。社会の情勢、経済条件等、様々な状況が私達の日常生活を支配しており、私達自身、環境の下僕と化しています。

実はこれら環境こそ、前項で言うEffect (結果) の最たるものです。原因となる想念が作り出したものに原因を作った私達自身が支配されている訳です。

これに対し、私達一人一人が内なる存在に対する信頼 (Faith) を高め、それを頼りとする事で、本項にあるようにカラシ種と同様な生き方が出来ることになります。山が動くかどうかは別として、驚くほどの結果 (Effect) がもたらされることは間違いありません。

112 At this point you will, of course, say, "But the seed could not grow without the support of the earth, air, water and sun." This is true, but as the seed obeys the command of the Cosmic or Cause intelligence all necessary elements unite to bring it forth. The seed is not commanded to push through the ground in the cold winter months nor does it seek to grow without that urge from within. It waits patiently till it feels that the time for growth has come. What would happen if the seed questioned the urge to grow as man questions new ideas of a broader conception of life that try to impress themselves upon his mind? As the seed by not resisting the urge grows into a beautiful bush, so man, likewise, may be assured that if an idea or desire arises that is impersonal, it is there for a purpose and if acted upon will produce beneficial results. A desire can be kept from manifesting only through the effort of the personal will in resisting action. For the thought or desire is the actual Cause which fathers the outward conditions.

112 この時点で貴方はもちろん、こう言うでしょう。「しかし、種は土や空気、水や太陽の支援無くしては成長出来ない。」このことは真実ですが、種は宇宙の、或いは因の英知の指令に従うため、全ての必要な要素が種の発芽を実現するため、結束するのです。種は寒い冬の月日に地面を貫いて突き進むよう命ぜられることはありませんし、そのような内部からの衝動無くしては成長しようとはしません。それは成長の為の時期が来たと感じるまで忍耐強く待っています。もし種が人間が自分の心に印象付けようとしているより広い生命の新しい概念を疑問視するように、成長への衝動に対して疑問に思ったら、どうなることでしょうか。種がその衝動に抵抗することなく、美しい茂みに成長するように、人間も、もし非個人的なアイデアや願望が起こった場合には、それ（訳注：アイデアや願望）は一つの目的の為にそこにあるのであり、もしそれに応じて行動すれば恩恵のある結果を作り出すことでしょうか。願望は抵抗的行動をとる個人的意志の影響によってのみ現象化から遠ざけられるのです。何故なら、想念や願望は外側に向けての状況を生み出す実際の因であるからです。

【解説】

例えて言えば、私達自身をカラシ種に置き換えると分かり易いのかも知れません。とかく私達は自分の外側、即ち外界の影響を多く受けます。様々な環境状態の他にも、鏡に写った自分の姿、等々です。しかし、私達自身の肉体を維持しているのは外側の環境ではありません。私達自身の内側にある様々なシステムである訳です。

実はこの自分自身の真の姿について、その実態を未だ私達は十分に把握してはいません。カラシ種になりきって、その内側を見ようとする時、私達はまだ何一つ把握できていない訳です。自分の内側の実態がどのようなものを理解して行くかは大きな課題なのです。

さて、この内側から私達の諸々の想念が生まれるのですが、本文の終わり近く、想念の潜在力について著者が明言している事柄は特に重要です。つまり、元来、想念は創造主のそれと同種のものである以上、大きな実現力を持っているということです。より望ましい想念のみを発し、利己的なもの、その他の有害、不要なものは断じて発することが無いようにしなければなりません。

113 The development of faith in man is the growth out of the personality into the impersonal expansion of awareness; from effect to the cause back of all effects.

113 人における信仰の発達は、個としての自分から非個人的な知覚の表現への成長、結果から全ての結果物の背後の因への成長のことなのです。

【解説】

従来、アダムスキー哲学で度々取り上げられていた「Faith」（注：ここでは「信仰」と訳しています）の真の意味が、この一節に良く表れています。即ち、従来は「信念」と訳されて来ましたが、この「信念」は個人的願望に対するがむしゃらな意志の強化というようなものではなく、物質の奥にある意識的な衝動に対する同調力のようなもの、知覚力だと明言していることに注意したいものです。

私達は「自意識」と表現されるように、全て自分を中心に物事を考え、良否を判断しています。しかし、本項の短い文章の中に、「非個人的な知覚の表現」とあるように、良否や損得を超えた透明感ある姿勢の中で、因に仕えることが求められています。また、そうすることで、各自の知覚力は深まり、歩むほどに因の存在とその偉大さを確信することになるようです。

114 There is no such thing as absolute unbelief; there is only a growth from the lesser faith to the greater faith. As the teacher Zoroaster explained, "Evil is but unripened good." Likewise, fear is but undeveloped faith. Man has come from Cause Intelligence to the world of effects; his mortal sense mind lost the memory of Cosmic Cause and he is now in the process of reestablishing himself; he is on his way back to oneness with the Principle where selfishness with all of its innumerable effects is dissolved. It is through the recognition and realization of Cause that faith is stabilized.

114 絶対的な不信心というようなものは存在しません。より少ない信仰から、より大きな信仰への成長があるだけです。教師ゾロアスターが「悪とは未成熟の善である」と言ったようにです。同様に恐怖は未発達な信仰なのです。人は因なる英知から結果の世界に生まれ来たり、その死すべき感覚心は宇宙的因の記憶を失い、今や自分自身を再構築する過程にあります。人は利己心とその無数の結果物と溶け合う一大原理と一つに戻れる道の途中に居ます。信仰の安定化は因の認識と実感を通じてなされるのです。

【解説】

人間の成長とは何かについて本項は説いています。「因から生まれた私達」とは各自の由来は人の受精卵を発端とする訳ですが、その極小の存在が今日の人間一人に成長して来ることとなります。その間、その実体としての存在は本来、変わるものではない筈です。つまりは私達は究極に考えれば、物質的にはゼロから生まれているということも出来ます。しかし、ご存知のように、この実体の起源は物質ではなく、因に由来します。私達は実際には因からこの世界に生まれ来たとも言うことが出来るでしょう。

さて、実はその間に私達の心は因に関する記憶を失っており、各自の人生においては、この因への回帰が主要な目的の一つということになります。結果しか信じない心、成果しか信用しない気持を一旦捨てて、現象の奥にある因なる英知の存在に気付くことが大変重要であり、そうする中で因に対する信頼感も増して来るように思います。

115 Why do we have perfect confidence that the sun will rise each day? Have you ever known a man rising each morning, hours before dawn, to sit wringing his hands in tense anxiety over the prospect of eternal darkness? No, we have no such fear, and the primal reason that we do not doubt in this case is because the action of the suns and planets is greater than our mortal mind can conceive and therefore we leave such actions entirely in the hands of the All-Knowing Principle which understands and perpetrates all action. In this case we realize our personal insufficiency and so do not concern ourselves by exerting mortal effort in regard to it. We simply allow it to take place.

115 何故、私達は毎日太陽が昇って来ると完璧に確信して来ているのでしょうか。貴方はこれまで毎朝起きては夜明け前に永久に闇が続くことを恐れる余り、両手を握り締めて座すような人を知っていますか。いいえ、私達にそのような恐れはありません。また、このような場合に私達が疑いを持たない主な理由は、諸太陽や諸惑星の行動は私達の死すべき心が計り知りえるより偉大であり、それ故、私達はこれらの行動を全ての活動を理解し、それを為す全知の法則の手に完全に委ねているからです。この場合、私達は個人的な力量不足を自覚し、その為、それに対して死すべき者の努力を行使して自分自身を係らせようとはしないのです。私達は素直に起こるに任せているのです。

【解説】

水平線の奥からオレンジ色の太陽が姿を見せる時、私達は自然と雄大で荘厳な宇宙の営みが、私達の日常として起こっていることを自覚します。また、その昇る太陽に手を合わせたくなるのは、私達日本人ばかりではないのかも知れません。同時に、また昇る太陽の速さが速いのに驚かされます。

私達はこのように、ダイナミックな宇宙スペクタクルの中に毎日を暮らしている訳ですが、時たま訪れる海辺の朝の風景に立ち会う時以外は、このような光景が起こっていることすら気付かずに、各々の一日を始めています。

本項では、こうした毎日の日の出の光景に対し、私達は信頼を置いているというよりは、最初から無関心で宇宙の法則に任せているとしています。私達の力の到底及ばない法則だからとして、無関心でいるという訳です。

しかし、これは真の信仰 (Faith) とはかけ離れています。私達はもっと誠実に私達の日常を支えている宇宙的英知、宇宙の法則を探求し、感謝すべきなのです。

116 Do we worry that the rivers will start flowing up hill, or drop a weight and hold our breath that it might rise again, or throw a ball into the air and doubt that it will return to earth? No, for again we know the principle governing such action.

116 私達は川が丘を遡って流れるかも知れないとかを心配し、或いは重りを落として再び昇って来るかも知れない、或いは空中にボールを投げて再び地面に戻って来ないかと息を凝らすことがあるでしょうか。いいえ、ありません。何故なら、この場合もやはり私達はこのような行動を支配している原理を知っているからです。

【解説】

私達の身の回りには私達が考える以上に、従来から当たり前に見ていた物事が数多く存在します。これらの現象に対して、私達はそれらの現象が何時変化するかも知れないと不安視することはほとんど有りません。

しかし、これら全てを法則の手に委ね、一切を当たり前のように見ていることは、必ずしもあるべき姿ではないように思います。多少、本項の主旨からは外れますが、やはり自然環境の中に息づく法則性、即ち平等に作用し、ブレの無い働きへの畏敬とその奥にある原理の探求こそ、私達人間の役割だと思っております。

これらの現象に対して日常的に私達が安心して居られるのは、未熟な私達に対する創造主の贈り物なのかも知れません。さもなければ、他の諸々の心配事と相まって、私達は恐怖だけの生活を送ることとなり、すぐにも滅んでしまうと思うからです。

117 Our lack of fear is not due to our confidence in matter but our inherent faith in the principle supporting and controlling matter. I say inherent because Cosmic Cause which produces faith is within every one. It is closer than hands and feet and whether or not we as mortals openly admit its existence we do realize it or we would not be conscious, living beings.

117 私達に恐怖が無いのは私達が物事に確信があるからではなく、物事を支配し、統制している原理に対する生まれながらに存在する信仰がある為です。私は信仰を作り出す宇宙的因は誰もの中にある為、生まれながらに存在すると言っているのです。それは貴方の手や足よりも近くにあり、死すべき私達が公にその存在を認識していると認めるかどうかによりません。何故なら、そうでなければ私達は意識ある生き物とはならないからです。

【解説】

私達はどんな不信心な者でも、自然界に流れる宇宙法則については、当然のごとく信じているという訳です。実はその法則なるものは私達に内側にも等しく流れており、その身近さは自分の手足よりも近いということがポイントです。つまりは自分というものの内側にいつも寄り添い、常に参照できる位置にあるということになります。

それゆえに私達は「意識ある生き物」になっていると文中にあるように、この法則は私達の意識にも密接に関連したものでもあります。その意識への信頼を通じて、法則原理を学ぶこと、それを探求することが重要だと考えます。

個々の事象を深く探求する姿勢と、その事象を下支えしている原理の意義と目的について学ぶという両面が私達が向き合う姿勢として望ましいのではと考えています。

118 It behooves us then to study Principle instead of focusing all of our attention upon the effects of Principle (source of origin). When we direct our attention towards that inner guiding force we become fully awake and feel the inter-relationship of all life. There has never been a time when one released the personal ego to this inner force that he has not seen some immediate result of action; so as one becomes more fully aware of his oneness with the All-Intelligence his faith is increased and consequently his fear is decreased. Faith is the result of one's unity with the Whole, and such unity cannot take place until every thought of selfishness with its whole category of resultant fears steps aside and leaves the highway of understanding free of barriers. So we may see that absolute faith is not of easy attainment - it must come through a gradual growth just as all things change by degrees. Faith is actually an expansion of conscious awareness to include more knowledge and certainty of action.

118 ですから私達はその注意をすべて法則（源泉）の結果物に集める代わりに、法則を学ぶべきということとは当然なのです。私達はその内なる導きの力に向かって注意を向ける時、私達は完全に覚醒し、全生命の相互関係を感じ取るようになります。人が個人的エゴをこの内なる力に解き放つ時、行動の直ちに起こる結果を見ないままで終わることはありません。ですから、人が自身が全英知と一体になっていることに、より完全に気付くようになるにつれて、その者の信仰は増し、その結果、その者の恐怖は低減します。信仰とはその者が全体と一体になった結果であり、このような一体化は全ての結果に及ぶ利己的なあらゆる想念が脇にどいて、理解の王道から障害が無くなるまでは有りえません。ですから、私達は絶対的な信仰というものには達成できるものではないことは分かると思います。それは、丁度、全ての物事が少しずつ変化するのと同じように、なだらかな成長を通じて実現する筈です。信仰とは実際には、行動に対するより大いなる知識と確かさを含む意識的知覚力の拡張であるのです。

【解説】

Faith（信仰）のまとめです。前項（117）でも述べられていたように、私自身の内側、即ち、自分の手足よりももっと近く、私という存在の近くに力強い導きの力があり、その力こそ万物を支配する法則を司っているという訳です。

そのような恵まれた環境の中に私達が居る以上、外側の現象化済の世界にのみ心を奪われることなく、内なる存在に対し、敬意を払ってその導きを信じることが大切です。

また本文にあるように、この法則は現象世界を統制している以上、そこを通じての理解は直ちに実現力のある想念波動として物質界に作用し、具体化する筈です。それ故、本文にも速やかに結果として表れると表現されているのです。

私達の進化の道は着実に一步一步の歩みが必要で、毎回の成果を確認しながら、前進することになります。

11 TO BE BORN AGAIN

119 "Verily, verily, I say unto you, except a man be born again he cannot see the kingdom of God." (John 3:3)

第 1 1 章 再び生まれるために

119 「まことに、まことに私は貴方に言って置きます。人は再び生まれなければ、神の王国を見ることは出来ません」(ヨハネ3:3)

【解説】

イエスはニコデモに対して、人間は再び生まれなければ因の世界を見ることが出来ないと言ったとヨハネ伝は伝えています。一説に、アダムスキー氏はこれを伝えた使徒ヨハネであったとも伝えられていますが、イエスの身近な言動の持つ意味を2000年後の今日の宇宙哲学として伝えなおしている点は、地球人にとって進歩の道は長いものだと感じさせます。

人の誕生はいわば、因の世界から結果物である物質の世界に生まれ落ちることですが、本項ではその後、再び因の世界に覚醒しなければ、即ち再び生まれ出なければ因を理解することは出来ないと言っています。しかし、これは一度に起こる訳ではなく、前項(118)にあるように、長い時間を掛けて次第に覚醒が進むということです。ある程度以上の理解が進んだ段階で、目覚めが起こるのかも知れません。そのような因の世界を自覚し、覚醒することが必要だという訳です。

120 Thus spoke the Christ, to whom Life had revealed her mysteries. This statement has been made the very foundation of religion, but Nicodemus of old, who asked of the Master, "How shall this be? Can a man enter the second time into his mother's womb?"(John 3:4) is not alone in his ignorance of the second birth.

120 生命がその持つ神秘を明かした相手であるキリストがそのように話されたのです。この声明は宗教の基礎とされていますが、年老いたニコデモは、導師に「どのようにすれば、これが為されるのですか。人は自分の母親の子宮に二度目に入ることが出来るのですか（ヨハネ3：4）」と尋ねましたが、それは彼一人がこの第二の誕生について無知であった訳ではありません。

【解説】

実は2000年経っても「神の王国」、即ち、因の世界についての私達地球人の認識についての進歩は無いのかも知れません。また、私達のように「生命の科学」を学ぶ者も、未だ肝心のポイントを十分には理解せず、環境や結果物に支配された生活を送りがちではないでしょうか。

この最も近い存在である因、宇宙意識の存在を自覚するために、イエスは「再び生まれなければ」と表現されたのです。その意味は「誕生する」という中にあるように思います。私達は最初、この地上に各自、何処の星からか、或いは何処かの地からやって来て生まれ落ちたと考えます。それは第一の誕生ということになります。再びの誕生とはこのような肉体の誕生を意味するのではなく、更に因の世界に生まれ出ることだと思っています。つまり、第一の誕生の場合、生まれ来る赤子は何の抵抗も無く、全てを委ねてこの世界に生まれ出るのであり、その存在の全てをこの世界に委ねるような心境かも知れません。その中でこの世界の一員としての生命が始まる訳です。

それと同様に、「神の王国」、因の世界に生まれることは、何の抵抗もなく身を委ねてその世界が今後、自らを守って呉れることを信じて、その世界の一員としての生活を始めるということかと考えています。赤ちゃんがすやすや眠る光景は、何の心配もなく生まれ落ちた世界を信じ切っている姿を表現するものであり、私達も因の世界の加護と恩寵を頼りとして生きて行くべきことが求められているのだと思います。

121 The Master said, "No man ascendeth up to heaven except he that came down from heaven, even the Son of Man which is in heaven." (John 3:13) Meaning that the second birth is the conscious return into the original Cause state out of which all things proceed into the world of form. Man has descended from Cosmic Cause and he has the privilege to return again to that impersonal state of conscious awareness of Cosmic Cause. When he was born into the world of form he became lost in the appearances of matter and no longer understood the vast Cosmos. He has given himself over to the dictation of the senses and his mind is slow to accept the guidance of the soul. His understanding of the universe has become limited to the effective world - his whole attention is given to the analysis of form and he has been blinded to the Cause back of form. So before he can come into his own original self, he will have to be born again - born into the unlimited perception of the All Intelligence. As the first birth has given man an understanding of the form world like himself the second birth will expand his awareness of the unmanifested Cause world. Man's duty now is to burst the bonds of ignorance - to emerge from the matrix of earth and perceive the vastness of Cosmic Cause.

121 その導師は言いました。「天から降りて来た者以外に天に昇る者はいないのだ。天にいる人の息子でさえも。」（ヨハネ3：13）それは第二の誕生は全てのものが形ある世界に向けて進行して来た源の原初の因の状態に意識的に帰って行くことを意味しています。人は宇宙的な因から降り来たものであり、人は宇宙的因の非個人的な意識的気付きの状態に再び帰る特権を持っています。人が形ある世界の中に生まれた時、人は物質の外観の中で迷子になり、広大な宇宙をもはや理解しなくなりました。人は自分をその諸感覚の指図に差し出してしまい、人の心は魂の導きをなかなか受け入れようとはしません。人の宇宙への理解は結果の世界に限定されるようになり、その関心の全ては形あるものの分析に注がれ、形あるものの背後にある因に対しては盲目になっています。ですから人が自分自身の原初の自分になるには、再び生まれる、即ち全英知の無限の知覚の中に生まれる必要があるのです。最初の誕生は人に自分自身のような形あるものの世界についての理解を授けたように、第二の誕生は未だ現象化していない因の世界についての気付きを拡げることでしょう。今日の人の義務は無知の束縛を破裂させること、地球の地殻から抜け出て、宇宙的因の広大さを知覚することです。

【解説】

このイエスの言葉を素直に読めば、「現在、他惑星にいる人々も元々は地において天に昇って行った人々である」、言い換えれば本章で言う再び生まれた人間だと言うことが出来ると思います。その天に帰ることがどういうことかを本項では詳しく説明しています。

とりわけ本項で強調しているポイントは、私達は生来、因を知覚するに十分な能力を有していたのですが、結果の世界、即ち物質の世の中に生まれてからは物質のみに心を奪われて、その物質を生み出す原動力である因については何ら学んで来なかったことです。その原因は私達の判断全てが私達の肉体の4つの感覚によって為され、自分の感覚で把握出来るもの以外は信じないという私達自身の問題が大きいことが分かります。

これに対して、因の存在、即ち宇宙意識の導きを信じて、人間にとっては時折示されるその指示に従う中で、次第に万物を生み出す因の作用を学ぶ中で、私達は再び天に帰る存在になることが出来ます。何よりも因に対する知識と信頼が必要で、そうする内に文字通り、因に通じた人間、不老不死の存在になるものと考えます。

122 The second birth does not necessitate the death of any form of consciousness nor the death of the body; it necessitates only the uniting of the two phases of consciousness into the awareness of oneness. The second birth produces unlimited awareness, uniting heaven and earth. The sense consciousness and the all inclusive consciousness become equally balanced and man begins to learn about the Cosmos.

122 第二の誕生は意識の如何なる形式の死も、肉体の死も必要とするものではありません。それは唯一、意識の2つの側面を一体性の自覚の中に統合することだけを必要とします。第二の誕生は無限の気付きを作り出し、天と地とを一つに結び付けます。感覚の意識と全てを包含する意識は互いに等しくバランスし、人は宇宙を学び始めるのです。

【解説】

本章冒頭（119）にあったイエスの言葉「第二の誕生」について、アダムスキー氏は本項で更に説明を加えています。第二の誕生を「生まれ変わり」とも言い換えることが出来ますが、その意味は因との統合性にあるとしています。因である「天」と現象（物質界）である「地」とを一つに結びつけることだと述べられています。

筆者の力量の限界から、詳しく表現することは出来ませんが、古来からその一体感とはどのようなもので、そのような心境、或いは視界になるのか、関心が集まっていたものと思われます。即ち、イエスや仏陀の周囲に集まる人々、更にはそのような悟りを得たと称する数多くの教祖に人々が魅力を感じるのも同様です。

もちろん、教師に付くことは早道かと思いますが、信頼できる教師が見当たらない昨今の状況では、各自、自らの内側にある因の導きを頼りに自習することです。また、本項を読むと分かることは、とかく現世のものを捨てることで達成するかという話もありますが、本項ではそのようなことを一切、推奨するものではなく、物質と因との両方を等しくバランスさせよとしている点に注意が必要です。私達はとかく、"1"か"0"かのどちらかを選択しがちですが、物質と意識を等しく融合させる心境が重要だということでしょう。

123 Not until the teachers understand this can they save anyone or themselves. Many scientists are closer to the second birth than is any so-called spiritual student. One of our greatest scientists made the remark, "When I am fatigued with mental effort and have ceased to ponder over a problem I find that is the time when the truth of the question is most clearly revealed to me." This is a glimpse of the second birth-when the mortal consciousness is released into the hands of the vast consciousness the veil of limitation is rent asunder and truth is vividly perceived.

123 教師達はこのことを理解するまでは、誰もまた自分自身も救うことは出来ません。多くの科学者達はいわゆる霊的学者より、この第二の誕生に近づいています。今日最も偉大な科学者の一人はこのような所見を述べました。「私が精神的努力で疲れ切り、問題について考え込むのを止めた時が、その問題の真理が最も明瞭に現れる時になることは分かっています」。これは死すべき肉体の意識が広大な意識の御手の中に解放され、制限のベールが引き離され、真理が鮮やかに知覚される第二の誕生を瞬間的に見たことなのです。

【解説】

この分野の教師たる者、或いは道を求める者が修得して置かなければならないのは、このポイントにあると著者は指摘しています。

「宇宙意識と一体になる」云々と語られることが多いのですが、その具体的な方法論については、あいまいに終わることが多いものです。それに対し、本項では「ある科学者」の言葉として、心による問題解決への格闘を諦め、心が鎮まった時、解答が来るとする例をあげています。

つまりは、この科学者は経験上、物事への執着を取り払い、心自体がその問題解決に対し無能であることを認めた時、答えが来ることを「知っている」ということが大事なところなのです。

問題に行き詰ったら、散歩をするとか、気分転換を図る方が良いとする「街の経験則」もそれに類似したものでしょう。心自体では解決等が見当たらない時は、いち早く心自体のガムシヤラな労苦を中断し、因の助言をお願いすることです。俗に言えば「困った時の神頼み」ですが、大事なのはその後だと考えています。つまり、解決策を与えられ、喜んだ後は自らに与えられた因からの援助に感謝し、益々因の力の偉大さを学ぶということが、より重要です。

とかく当面の事態が解決したことだけでほっとして終わってしまいがちですが、それではこれら貴重な体験は生かされず、遠からず再び同様の問題を抱えることとなります。貴重な体験から学び生かすことが進歩に繋がると考えています。

124 It is man's duty to be a happy child in his Father's house, and to do this he will have to be aware of the house. He must be aware that he is now in the heaven that he is seeking to enter and that within his form of self is the ever present all-inclusive intelligence.

124 自らの父の家の中で幸せな子供になることは人の義務であり、それを為すためには、人はその家の存在に気付かねばなりません。人は自分が現在、入りたいと求めてきた天国の中に居ること、また自身の形あるものの内側に全てを包含する永続する英知があることを気付かねばなりません。

【解説】

私達は創造主から愛されている存在であることに、まず気付く必要があります。恵まれた存在であり、必要な全てが既に与えられているという訳です。しかし、いくら創造主が息子のことを思って支援を続けていても、肝心な息子達はそのことに気付かぬまま自分達の概念の中に留まっています。

日々、生きているありがたさ、毎日安らかに眠り、翌朝爽やかに目覚めて一日を働くことが出来る喜びは当たり前なのですが、病に倒れた後はそのありがたさが良く分かるものです。私達の普段の生活の中に創造主の御手の計らいが満ちていることに、まずは感謝したいものです。

これまで本章では、再びの誕生について学んで来ましたが、それにあたって必要なことは、私達の従来への生活はそのままに、丁度蝶の成虫への脱皮のように、新しい自分、新しい概念の中で生きようとする一大決心が必要だということでしょう。

これまで、自分の肉体の内側に心があることは承知して来ましたが、本項ではそれと同時に宇宙までも包含する英知が合わせて存在することを指摘しています。即ち、再びの誕生に必要な条件は全て整っており、後は各自の脱皮の行動だけだという訳です。

125 Here lies the answer to the question as to the constant urge in the heart of every human to know more about the composition of forms as well as the cause and purpose of action, for it is the Cause Parent impressing the effective child to know more about the vast possibilities so that he may enjoy all that the Father has to give.

125 ここにあらゆる人間の心の中に行動の理由と目的と共に、形あるものの構成について更に知りたいとする絶えざる衝動に対する答えがあります。何故なら、結果である子供が父が与えるべき全てを楽しめるよう、広大な可能性について知りたいとする印象を子供に与えているのは因の親であるからです。

【解説】

私達はこれまでも万物の創造主の存在を只漠然と「父」と呼んで来ましたが、それは2000年前にイエスがそう呼んだことから、それを真似ているに過ぎません。その「父」なる言葉の意味を深く考えたことは無いように思います。本項では私達人間各自に対し、等しく創造主が働き掛け、現在人が思う以上に素晴らしい世界の中に暮らしていることを認識させようと仕向けている「宇宙的生命の親」の姿について述べられています。

ここで私達は、既に自分の内側に広大な天国の要素が用意されており、私達は只それに気付くだけで良いのだとしています。細胞のDNA分子には知識と記憶の数々が含まれているのかも知れませんが、私達の持つ意識体の中には既に十二分な英知が詰まっています。私達は他に外に向かって求める必要は無く、心を鎮めてひたすら自分の内側に耳を傾け、印象に鋭敏になれば良いということでしょう。第二の誕生は、従来の心中心、感覚本位の生き方から、意識中心、印象中心の生き方への一大転換を必要としています。

12 EMOTIONAL BALANCE

126 As we all know there is a great unrest all over the world. The conditions existing in the national, home, and personal life all display quite clearly the loss of equilibrium which now exists. Each individual feels the need for security and the people of the earth are demanding something that will bring about more stable conditions. The desire for equality and balance and some feeling of assurance have caused some people to return to the churches and many to follow the teachers who profess to know all of the answers concerning the new dispensation. Unfortunately there are extremely few individuals who are equipped with this type of knowledge.

第12章 感情のバランス

126 私達全てが知っているように、世界中を大きな不安が覆っています。国家や家庭そして各人の生活の状況は皆、明らかに今や均衡を全く失っている事態を示しており、実際そうになっています。各自は安心の必要性を感じており、地球の人々はより安定な状況をもたらすものを求めています。公平さやバランス、そして確かさの幾分かの感じへの願望は人々を教会に立ち戻し、また多くの者をその新たな摂理に関する全ての答えを知っていると称する教師達に従わせています。しかし、残念なことにこの種の知識を備えている者は極めて少ないのです。

【解説】

本書が執筆された1960年代の状況について詳しくは分かりませんが、戦後の東西の陣営の軍拡競争の中で世相は不安定であったようです。しかし、事態は50年経った今日でも大きな改善はなく、むしろ地球規模での自然災害の増加や原子力発電所の事故等により、不安定さは増しているように思います。

実は本項で述べられている「教師」についての問題は、残念ながらアダムスキー哲学についても言えることです。道を求める人はいつの時代にも多いものですが、肝心の真理を伝え得る教師は少ないものです。日本ではアダムスキー哲学を直接、アダムスキー氏から薫陶を受けた者はいませんし、殆んどが氏の著作を通じて学んだ者となっています。

また、ある一面を理解したからと言って、その教師が人間的に勝れているということはなく、全人格を受け入れるに値する教師を探すのは極めて困難です。その結果、私達は氏の著作を通じて、アダムスキー氏が何を訴えていたのかを学び、必要な知識を自分なりに整理する方法しか、学ぶ道はありません。各自がその中で体験した真理をたとえ小さくても後に続く者に伝えること、一人一人の成果を積み重ねることしか、方法はないのです。

127 We find that students who have studied under one teacher or another are very confused and living in a state of dissatisfaction concerning the world they must call home. They are looking to the day when they will be privileged to become the inhabitant of another planet. They can see no beauty in this world, being conscious only of the pain and misery which exists.

127 私達はある一、二の教師の下に学んできた生徒達が大変混乱していて、自分達が我が家と呼ばなければならない世界に関して不満足な状況の中で暮らしていることに気付きます。彼らは自分達が他の惑星の住人になれる日を待ち望んでいます。彼らはこの世界に何らの美しさを見ることは出来ず、そこにある苦痛や悲惨さのみを意識しているのです。

【解説】

宇宙文明との関わりについての研究の場合、問題になるのは学習者はとかく自らの欠点はさて置いて、問題の原因を地球という惑星の状況や支配階層のみの問題に集約することだと思います。もちろん、そのような要素もあり、アダムスキー氏の言うサイレンスグループが活躍する場であることについては否めません。

しかし、そのこと以上に、民衆の一人一人の自覚の問題があること、また、一方では地球も神の創造物として十二分に美しいことも揚げてなければなりません。

とかく教師達は、自分の生徒を引き付けて置くために危機感をあおったり、他のグループの欠点を指摘しがちですが、生徒は先ず、その教師の本質を把握して、自分を託せる相手であるかどうかを見極める必要があります。これはコンタクティーだと称する人間の出現についても同様です。そもそも真に教師たり得る人物を探すことは容易ではありません。

それよりは、各自自身の中に居る創造主とのチャネルの拡大を第一に考え、私達創造物に期待されていることを、日々実行する方がゴールに近い気がしています。

128 Teacher and students have made the mistake of separating heaven and earth and so have been carried from one false balance to another. The impersonal man will unite heaven and earth; will incorporate idealism and practicality; will bring the peace and beauty of the celestial into the concrete materialism of the earth. Anyone who cannot live a happy useful life here in the present world will find it no easier in another world. The Father, by whose breath we live, has but one Law that governs all things. He created this planet as He created all others, and the same principle directs its action. All worlds in the cosmos are alike in principle and to one who lives according to the Law there is no division of perfection.

128 教師と生徒達は天と地とを分離するという過ちを犯しており、その為の一つの誤ったバランスからもう一つの誤ったバランスに運ばれているのです。非個人的な人は天と地を結びつけますし、理想主義と実践主義を結合させ、天上の平安と美しさを地上の確固たる物質主義の中に注入します。現在の世界で幸せで有意義な生涯を送ることが出来ない者は誰一人、他の世界でも決して容易ではないでしょう。私達がその息で生きる父は全てのものを統括する一つの法を持っています。神はその他の惑星と同様にこの惑星を創造し、それと同じ法則が法則の行動を指揮しています。宇宙のあらゆる世界は原理において同様であり、その法則に従って生きている者にとって、完全さに何らの分裂はありません。

【解説】

私達が暮らす地上と宇宙空間には境目はありません。私達が呼吸する空気は宇宙空間そのものでもある訳です。UFO問題に関心のある多くの人達は、他惑星におけるあまりに違う社会システムや科学レベル、テレパシーをはじめとする人間としての発達レベルの差に驚き、あこがれる余り、地上の生活を何ら意味のないものとしてしまう傾向も多いものです。しかし、そのような視点では、苦しむ人々に真の解決策を示すことは出来ませんし、イエスが行ったようにその時代の人々に分かり易く、実用的な手法を説明する必要があります。

この時、重要なことは「明るさ」だと考えます。もちろん現実には先行きの問題も多く見えるのですが、そのような悲観的な想念ばかり抱いては、その方向のみが実現することとなり、本来の宇宙的な活動が失われてしまいます。

大震災の翌日、海は何事も無かったように静かな日常を取り戻し、鳥達も平静さの中で暮らしていたように、安定的でより大きな宇宙法則が実際には支配的です。私達は結果に左右されず、常に因となる現象の起動力に軸足を置いて、宇宙を動かす根本原理を自らの拠り所としなければなりません。そうすれば、各自、現状の境遇を楽しむ余裕も出るのではと思う次第です。

129 In Matthew 5 :34-35 is the admonition against division plainly given: "But I say unto you, Swear not at all; neither by heaven; for it is God's throne; nor by the earth; for it is His footstool; neither by Jerusalem; for it is the city of the great King."

129 マタイ5：34-35には、この分割に対する訓戒が平易に授けられています。「しかし、私は貴方に言う、天にかけて誓ってはならない、それは神の王座であるからだ。また地にかけて誓ってはならない、それは神の足台であるからだ。またエルサレムにかけて誓ってはならない、それはその偉大な王の街であるからだ。」

【解説】

本項で言う「〇〇にかけて誓う」とは、「〇〇」が自分の自由になる所有物で、「もし誓いを破ったら、それを失ってもよい」という意味合いで用いられているものと思われます。そこには、そもそも「〇〇」自体を特段、他のものと区別して、独自の存在として認識すること自体に誤りがあると言っているようです。

イエスの指摘は、「天」と「地」、「社会」各々に区分して、一方だけを取り上げることが誤りだとしています。私達の目からは各々独立したように見えますが、実際には、それらが相互に作用し合い、切っても切り離せないと観るべきものと考えます。これまで私達は「天」は極美の世界である一方、「地」は汚く粗野であり、まして人の住む「社会」は醜いものであると区分していました。そうする中で、高貴さを求める者は神学、宗教の道を、富を獲得しようとする者は娑婆の商売により他人から利益を得ようとして来た訳です。

このように善悪、美醜に区分して理解しようとすることを誤りだとしている訳で、実際にはあらゆる所に両方の要素が潜在しています。野生動物が獲物を捕らえたりすることを残酷だと決め付ける訳には行かないのと同じです。美しい自然ではありますが、一たび津波が来れば、多くの命を奪って行く脅威になるのと同様、全てのものにあらゆる要素があるということです。

130 Neither heaven, the place of cause, nor earth, the place of effects, nor Jerusalem; symbolically used to represent the earth's inhabitants, can be called one greater than the other. These instructions were given against discriminating or calling one part better than the whole, Heaven and earth are not two but one, each expressing the other; man is no lesser for he is both, an integral part of the Whole. Divisions exist only in man's opinions when he calls one greater than the other, for in so doing he is judging and setting himself above the Creator.

130 因の場所である天も、結果の場所である地も、地球の住人達を代表させるべく象徴的に表現されたエルサレムもどれ一つ他のものより偉大だと見なすべきではありません。これらの訓戒は差別したり一部分が全体より優れていると見なすことに対して授けられ、天と地は二つの存在でなく一つであり、互いに他を表現しているのです。人は劣るものでなく、両方の存在、全体の統合された部分であるからです。区別は人が一方のものを他より、より優れたものとして見なす時の人の意見の中にのみ存在します。何故なら、そうすることによって人は裁きを行い、創造主より上位に自分を置いているからです。

【解説】

そもそも「天と地」、「善と悪」等々に区分すること自体に誤りがあるという訳です。以前にも述べられていたように、実際にはあるものがそのいずれか一方に属するとすることは出来ません。もちろん問題となるのは人の取扱いです。善人と悪人と二分することは出来ないことは容易に分かります。分けようとするのは「好き嫌い」を好む心の性質による訳で、様々なレベルが連続した中で各自が存在するということでしょう。

本項では更に進んで、因と結果物についてどちらが優れている訳ではないと言っていることが重要です。これまで因が大事と言って来たのは、従来の私達の認識の中に目に見えない因の要素が皆無であったからであり、決して結果物が劣るという訳ではなかったのです。優れた芸術家の魂を因とすれば、その作品である絵画（結果）も同様に、その抜き出た感性を表現したものでありますし、芸術家（因）が心を込めて表現した結果物が作品（結果）に表されていることは良く分かります。

ここでの問題は、私達の心が物事を全て「善悪」「美醜」に分けたがる傾向があり、それが自分（心）が創造主（因）の作品を勝手に裁いていることにある訳です。

131 From the heavens comes the cause and power of creation and yet the earth, being the Father's footstool, it is the foundation upon which He stands. So instead of desiring to live elsewhere one should learn all there is to know concerning his present earth home and recognize it as a garden of beautiful, heavenly things, the actual garden of the Father.

131 諸々の天から因と創造の力がやって来ますが、それでも地球は父の足台であり、父が拠って立つ基礎です。ですから、何処か他の地に住みたいと願う代わりに、人は自分の現在の地上の家庭についての全てを学ぶべきであり、それを美しい天上の事物の庭、父の実際の庭として認識すべきなのです。

【解説】

ガガーリンが人類初めて宇宙から地球を見てから50年が経ちました。広大無辺な暗黒の宇宙空間の中で輝く私達の生命を支える惑星が大変貴重であり、また美しい存在であることについては、この文明が過去の如何なる文明より理解していることは確かです。宇宙から撮影された青い地球を見る時、本項で言う「美しい父の庭」という表現はよく分かります。

それほどに「父」が丹精込めて創り上げた楽園を私達は汚してはなりませんし、その美しさを探求すべきことは明らかです。作者は自分の作品を人々に見て欲しいものですし、人々に中身を考え、作品の意図を汲み取って欲しいものです。私達の暮らすこの地球もその要素の一つ一つに込められた製作（創造）の意図を学び、人々にその豊かで美しい環境を楽しんで欲しいというのが製作者（創造主）の切なる希望です。

132 Innately every human feels an ideal life that he is seeking to find but each individual wants this heaven to be according to his specifications. Many groups have started with high ideals but when the personal opinions prompted by the ego of some of its members have not been accepted the ideal was lost in the fog of emotional differences.

132 生まれつきあらゆる人は自分が見出したいと求めている理想的な生活を感じ取っていますが、個々人はこの天国が自分の明細仕様に従ったもので有って欲しいのです。多くのグループが高尚なアイデアを持ってスタートしましたが、そのメンバーの何人かのエゴによって促された個人的な意見が受け入れられない時には、その理想は感情の相違という霧の中に失われてしまいました。

【解説】

日本でも理想を求めてこれまでも多くの人達が会を作ったり、集団生活を始めたこともありました。もちろん、こうした集団活動はリーダーの人格に大いに影響されるものですが、どれもが長続きしなかったように思われます。最初は理想的な生活や活動が始まるのですが、次第に互いの志向が異なることや、自分が常にリーダーでありたいとの思いや金銭上の問題、その他日常的な問題が顕在化し、結局はその活動が破局するという例も多いものです。

残念ながら、これはアダムスキー哲学の学習者にも当てはまるようです。その証拠に過去日本でも数多くのグループが出現しましたが、長続きはしませんでした。ここにも私達各自の感情の問題があると著者は指摘しています。本来理想に燃えてスタートした筈のグループ活動も、遂にはその構成員の感情のコントロールの問題から仲たがいをしてしまうという訳です。

このように私達のエゴを安定化させることが最重要であり、あらゆるものに対してエゴを小さくして素直さと謙虚さを身につけることが王道を歩む基本条件だと考えます。

133 The everlasting spark of life which allows man to express as a form is never separated from Cosmic Cause; when man controls his mortal sense mind to think beyond apparent effects he begins to understand the purpose of life and gain a margin of emotional balance.

133 人を形あるものとして表現させる生命の永続する輝きは、決して宇宙的因から離れることはありません。人が自らの死すべき感覚心をコントロールして外観上の結果物の背後を考えさせる時、人は生命の目的を学びはじめ、感情のバランスの余裕を掴みはじめます。

【解説】

因とはどのようなものかを理解しようとする時、役立つのが冒頭の言葉です。即ち、私達はとかく因とは音も無く、姿も見えない為、静かな存在だと思って来ましたが、それが実は誤りであることが本文から分かります。文中にあるように因は私達の身体を維持させている生命のほとばしる程の力であると明示されているからです。

私達の感覚からは把握できませんが、因は生命体が生命を体現させている大変活動的なものであることに気付かねばなりません。その生命への探求が進む中で、各生命の存在目的を学ぶことが出来るとしており、その意義が分かれば、もはやこれまでの各個人の感情の相違等の問題はとるに足らないものとなり、余計な争いは消滅すると言っているのです。私達自身の生きる目的、創造主から期待されている役割を果たすことが、創造主から環境を与えられた私達の義務でもある訳です。

134 The emotional force which rises in the mind when one's will is crossed by another's is very destructive for it draws the actor into a whirlpool of unbalanced action, and he is blinded to reality.

134 ある者の意志が他の者の意志と行き違いになった時、心に起こる感情の力はとても破壊的です。何故なら、それは役者をアンバランスな行動の渦の中に引き込み、その者は現実が見えなくなってしまうからです。

【解説】

これまでの学習から、私達の抱く感情は私達の身体や周辺環境に大きな影響を与えることを学んで来ました。特に「怒り」のような攻撃的な感情は発した本人を混乱の最中に陥れるほどの力を持っているのです。その「怒り」のもともとの発生は、本項に例示されているように各々の思いの行き違い等、ほんのわずかの差異でも発生するという訳です。

この種の感情が本人を支配すると冷静さを失い、心の中はそうした破壊的な想念でかき回されることとなり、本人はもとより、周辺の者にも大きなマイナス影響を与える為、注意が必要です。

私達の抱く感情は、ある時には芸術家の創作インスピレーションから来る非利己的で有益なものもあるでしょうが、私達の段階ではほとんどの場合、バランスを欠いたものになりがちです。「怒りは敵と思え」という言葉が伝わっていますが、感情の起伏を抑えて、バランスのとれた状況にしておくことが静かなる生命波動を感受する上で必須の条件になるものと思われます。

135 All that man is in reality - is the thought that he is consciously aware of for the moment. Each moment follows the preceding moment and the key, if there be one, is to keep constant vigil over our reactions so that the next thought will be one that we can enjoy entertaining in our mental house.

135 現実における人の全ては、その人がその時、意識的に気付いている想念なのです。各瞬間はその前の瞬間の後を付き従っており、もしカギがあるとすれば、それはその次の想念が私達が自分達の心の家で楽しむことを可能とさせるものであるよう、私達の反応を絶えず見張り続けることです。

【解説】

人の本質は、その者が抱く想念にあると言うのは至極の言葉と言えるでしょう。肉体は各自何らの違いは無く、人が他人と異なるのはその者が抱く想念が異なるからに他なりません。人格を成すのが各自が抱く想念だとすれば、各々の人格形成、人間向上の上で最も重要視され、注意されなければならないのが、日常の想念である訳です。

本項では、その想念監視を毎秒継続的に行い、不適切な想念を私達の心に入り込ませないよう見張ることがカギであると教えています。つまりはこのような時々刻々の継続した「想念観察」によって、取り入れるべきでない想念を排除し、私達の心を常に爽やかに保つことが最も大事だとしている点に注意して欲しいのです。

一方では、地球の支配層はその住民を習慣や恐怖の奴隷に留める為、暴力的な想念や諦めの思い、更には恐怖心を植えつける為、さまざまな仕組みを使ってそれらの想念を人々の心に植えつけようとしています。テレビやゲーム機等で殺人の疑似体験を行なわせる等はまさに悪事と言って良いでしょう。

しかし、それら巷に溢れる想念に対して、それを心に取り入れるかどうかは本人の選択次第であり、選択の自由は本人にあります。そうした意味でも、常に自らの心をキレイに保つことが大変重要であり、それこそが世間で暮らす上での生きた修行なのかも知れません。本講座を学ばれている方は、その修行の成果を踏みしめながら、一步一步前進する中で、泥の田から蓮の花咲く存在になって戴きたいと願っています。

136 There is so much bickering over personal opinions, and what does it profit man? Nothing, for it is a consumer of time and energy. This does not mean that there should not be an intelligent discussion about a subject but when the mortal sense mind is quiet and receptive it can see the picture clearly.

136 各自の意見に対してあまりにも多くの口論が為されておりますが、それは人に何の利益をもたらすのでしょうか。何もありません。何故なら、それは時間とエネルギーの浪費であるからです。これはテーマに対する知的な議論をすべきでないということではなく、死すべき感覚心が鎮まり受容的になる時、感覚心は状況をはっきり見ることが出来るということです。

【解説】

今日では日本でもディベート (Debate) という言葉が聞かれるようになりました。相手の意見や主張を言い負かす、その手法は日本でこそ、人気が出ませんでした。世界各国に広がっています。現に最近、中国で見たテレビ番組の中でも見たことがあります。本書が書かれた1960年代のアメリカには既に初期の類似した傾向があったものと思われま。

さて、この種の議論について、本項は互いの闘争心を増長させ、結局は互いに得るものはないということを明言している訳です。エゴを強める為の訓練でしかないようです。

これに対し、日本にはこれらの論議を好まない、或いはその意味の無さを民族の基調として十分わきまえているふしがあります。争いを好まず、円満に解決しようという傾向が強いようです。

一方で、このような傾向は談合を好むという欠点もありますが、そうした争いを好まない傾向は地球上では貴重なる存在として大事に伝えて行くべき特徴だと思っています。自らのエゴの主張を打ち出さないう奥ゆかしさは、現代では失われつつありますが、自然万物に対する畏敬の念と同様に、日本人の特徴として大事にして行きたいものです。

137 Emotional balance maintained under all conditions is essential if one wishes to have lasting happiness and good health.

137 永続する幸せと健康状態を持つとするなら、全ての状況の下で感情のバランスが保たれることは必須です。

【解説】

心の平静を保つことは身体保持や周辺環境を良好に保つ上での基礎です。私達の心の中に抱く想念は様々な事物や人に作用して、それを反映した現象を作り上げます。怒りや悲しみはその思いを抱く人の表情を作り出すことから始まって、その人の身体や周辺環境にも作用を及ぼしているという訳です。

もちろん、各自の事情により、そのような感情を持つに至る経緯はあるのですが、そのようなマイナスの想念を心に取り込むかどうかは本人の選択です。本講座を学ばれる方々は、こうした想念の力を学んでいる以上、積極的に心を統制して、湧き出る想念の質を見定める必要があることはお分かりになる筈です。

どのような状況においても、平常心を保ち、明るく振舞えるのは、私達が生来、創造主から愛され、必要な財産は生来既に、各自が使い切れない程、授かっていることを知っている人です。自らを低レベルの想念の表現者に陥れることなく、より高次の存在に保つ努力が求められているところです。

138 Any emotional extreme disturbs the normal frequency action of the chemicals of the body. Excitement, whether it be caused by extreme joy or fear or anticipation, allows the normal amount of certain chemicals that go into the blood stream to be changed; thereby changing the normal action of the heart. This in turn affects the nervous system and the cells of the body and causes one to feel weak or ill.

138 如何なる感情の過度も肉体の諸化合物の正常な振動活動を妨げます。興奮はそれが喜び或いは恐怖、予感によって引き起こされるに係らず、血流に入るある種の化学物質の量に変化をもたらします。その結果、心臓の正常な動きを変化させるのです。この結果、それは神経系統が肉体の諸細胞に影響を与え、その者に疲労感や体調不良を感じさせます。

【解説】

如何なる事態に遭遇しようとも、落ち着いた対応をとれることが人物的な価値の物差しになる筈です。危機管理の基本は冷静さを保ち、全体を見通して必要な決断を迅速に出すことにありますが、指示をすべき本人が恐怖心に自らを奪われては、こうした冷静な対応は出来ません。

その人の肉体をコントロールしているのは、その人の心であり、抱く想念であることは前項（135）で学んだ事項です。その理由は想念が具体的には各肉体細胞に作用して不順な代謝作用を促すため、肉体はその影響を受け、各器官が異常な活動状態に陥り、体内にアンバランスを生じるという訳です。

心が不安定であるということは、絶えずこのように肉体を自ら痛めつけることが日常的に行われる結果、不健康になったり、老化を早めたりすることになるのでしょう。長生きの秘訣には、いつも楽しい想念を抱き、物事に興味を持って探究心を忘れないことがあると思いますが、それに通じる内容となっています。

139 This change is similar to a high precision motor that causes a frictional deterioration on all of its parts when it is not properly synchronized. Each emotional unbalance curtails the free life flow and causes damage to the body, until the mortal sense intelligence comes to the realization of its limited and destructive influence and releases its personal ego to the Cosmic Life Force.

139 この変化は高精度なモーターが適切に同期が取られていないと、その全ての部品に磨耗を引き起こすのと類似しています。死すべき感覚の知性がそれ自身の限界と破壊的な影響を自覚するようになり、宇宙的な生命力に個人のエゴを解き放つまでは、感情のアンバランスの一つ一つが自由な生命の流れを短縮し、肉体に損傷を与えるのです。

【解説】

人体は精密な機械に例えられるという訳です。感情のバランスが保たれなければ、人体各部に摩擦や不調和を引き起こし、ひいては人体の寿命を縮めることとなります。

時代の進歩とともに、人間の平均寿命も伸びていますので、少なからず、この文明はより良い方向に進みつつあるようですが、個々に見ると未だ課題も多いように思われます。

その一つがエゴに対する認識です。科学の進歩により、病気への対策技術や身体維持のための科学的知見は増え続けており、衛生状態の向上と相まって長寿命化を実現させて来ました。しかし、肝心の想念レベルになると課題は山積しています。所詮、エゴには限界があることや、全体至上の創造的原理についての理解は未だ不十分です。これらを克服した後、初めて天上の慶びを得ることが出来ることとなります。

13 FREE WILL OR SELF-HYPNOTISM?

140 The choice is yours, for the acts of today bring the rewards of tomorrow. Enjoyable rewards will come to those who are living according to the laws set in motion by Cause Intelligence - giving honor to the All-Creative Principle of Life, and such honor does not incorporate the characteristics of emotionalism or self hypnotism.

第13章 自由意志か自己催眠か

140 選択権は貴方自身にあります。何故なら、今日の行動は明日の報いをもたらすからです。因なる知性によって起動させられている諸法則に従って生きる者、生命の全ての創造的法則に栄誉を捧げている者には、喜ばしい報いが訪れることでしょうし、このような栄誉は感情主義の性質のものや自己催眠とは組することは無いのです。

【解説】

各自の一日の過ごし方が、翌日の環境を作り上げることは、これまで学んできた原因と結果の法則そのものです。その際、大事なことは、私達は自分の肉体に属する感覚器官では把握できない因なる知性、創造主に感謝し、そのお蔭で私達が生きていることを素直に喜ぶことだとしている点です。

ガムシャラに働くばかりでなく、仕事を与えられたことを喜び、万物と意思疎通を進めながら、自らの役割を果たして行こうとする心意気が大切で、そうした思念が再び巡り巡って自らや関係者の環境にも作用して、無駄の無い環境作りが行われるものと思われまふ。

人の発する思念の力は、良くも悪くも大きな実現力を持っています。思念の力はマジックのようにその場で直ちに人を驚かせることは無いのですが、一定程度の時間経過の後には、必ず成果を私達に示して呉れるように思います。何より大切なことは、日々良質な思念を発することが、諸々の人々や事物に作用し、着実な成果をもたらすことです。

141 Religion and so-called spiritual teachings have not, in most cases, brought true realization to the heart of humanity. Some of these organizations practice rituals and affirmations which produce a temporary intoxication during the performance of the rites but tend towards a tremendous "let down" after the service has been completed. Most of the individuals attending, upon returning to their worldly pursuits revert to the old ways where the survival of the fittest attitude takes over, and man continues to take advantage of his brother instead of being his brother's keeper. In the religious sanctuary the individual feels that he would help any one according to their needs and where hate had been, there arises an emotion that is interpreted as love, but outside of the sanctuary these emotional influences change, which proves that they were nothing more or less than a form of hypnosis induced by the service that he attended.

141 宗教そしていわゆる精神主義的教えは、ほとんどの場合、人間の心の底に真の悟りをもたらしては来ませんでした。これらの組織のいくつかでは、その間だけの一時的な陶酔を作り出す儀式や宣誓を実施しますが、その礼拝が完了した後は、とてつもない「落ち込み」をもたらす傾向があります。出席している個々人のほとんどは、それぞれの世俗的追求の場に戻るや、適者生存の原理が支配する昔ながらの方式に復帰してしまい、人は自分の兄弟の後見人になる代わりに自分の兄弟を利用し続けるのです。宗教的な聖域の中では各自は必要があれば誰をも助けようと感じ、憎しみがあつた所でも愛と解釈される感情が湧き起こるのですが、その聖域の外側ではこれら感情の影響は変わってしまい、自分が出席した礼拝によって誘引された催眠の形態以上の何物でもなかったことを立証するのです。

【解説】

本項では既存の宗教あるいはスピリチュアル（精神主義）といわれる組織は、多くの場合、巧みな儀式により集まった人々を催眠状態に陥れており、その結果、真の自覚（悟り）には達していないことを警告しています。この「催眠」については、今日的には「マインドコントロール」等のより、悪質なものも含まれるものと思われます。

宗教あるいは精神運動について、発足の当時は純粋なものでしたが、時間を経るにつれて、組織維持の為の収奪が始まるのが常となっています。集まった道を求める人々に道を指し示す役割を果たすべきなのですが、多くの宗教はそれ自身の維持拡張の上から集まった人達を子羊のまま留めようとしていると言えるでしょう。宗旨を拡げるために相手を時に動揺させ、またある時は理想が実現するかのような夢を見せる等して、人々を集めようとするものです。本項はこれらのある種の自己催眠だと警告しています。

真に求められている生き方とは、全ての日常の中に自分の生き方として四六時中、宇宙の英知を信頼する生き方です。以前、ある人から「自分は映画を見たりしない。そのような一時的な心の高まりは良くない」という主旨のことを話されたこと、また別の人からは「講話を聞いている内に分かった気になって涙を流すほどであったが、後から考えて見て何を分かったのか良く分からないことがある。その時、分かった気になっただけだ。」というある和尚さんの話も伺っています。

一時的な感動があつたからといって、その団体や会の教えが正しいとは限らないという訳で、当たり前な程に宇宙的知性を身近に知覚することを最優先にしたいものです。

142 Is it not true that when a hypnotist wishes to put a subject under his control he suggests something which he asks him to hold steadily in his mind? If the subject does this he becomes the victim of the hypnotist's will and is forced to obey whatever thought is presented to him. The hypnotist can make his subject believe anything that he tells him. He can cause the individual to eat onions thinking that they are apples and he will not discern the difference, which proves that the subject has lost his reasoning as well as his will power.

142 催眠術者が被術者を自分の支配下に置こうとする際、術者は被術者に何かを自分の心に常に保持しておくようほのめかすことは、本当に行われていることではないでしょうか。もし被術者がこのようなことをするなら、被術者は術者の意志の餌食になり、自分に示されるどのような想念にも従わざるを得ないこととなります。催眠術者は自分の被術者を自分が語るどのようなことをも信じさせることが出来るようになります。術者はその者にタマネギを食べさせ、それらがリンゴであると思わせることも出来ますし、その者が違いを見分けることはなく、そのことは、自分の意志力同様、推論の力も失っていることを示しています。

【解説】

カリスマ宣教師が聴衆を魅了し、人気を博する光景は必ずしも好ましいものではありません。大衆の支持を受けることを目的とする主張は、大きな誤りに導く場合さえある訳です。今日のマスコミ操作も、こうした流れの中にあるのかも知れません。

多くの人々は能力者に憧れ、その者が人格的にも優れた者と思い込みがちです。また、その者が教える近未来の出来事に強い関心を持っているものです。

しかし、ある特定の個人に心酔できるものかどうか、判別することは、特に地球においては難しいものです。それほど、地球は人的資源に関する限り、劣悪な環境なのかも知れません。これまで多くの事例を見てきましたが、金銭上のトラブルや異性関係等、あらゆる要素がこうした宗教や信仰の中にも存在する訳です。それらトラブルの影響で本来の道から離れてしまった残念なケースも多いように思われます。

これに対して、私達は、このような類のものから離れ、自分の力で真実を見つける必要があります。丁度、野生動物や野辺の草木が唯一大自然からの恵みを楽しみながら、誰も見守る者のない環境の中でも、変わりなく自らの美しさを表現しているように、私達は直接、創造主にアクセスし、その指導を受けなければならないのです。

143 Religion in the early days held the upper hand over the masses through such actions as this. The Soul-seeking populace were thrown into a state of emotional hypnosis which made them an easy prey to the more clever individuals who perpetrated such methods of worship.

143 初期の頃の宗教は、これと同様な行動を通じて大衆を支配しました。魂を求める民衆は感情的な催眠状態に陥れられ、このような礼拝の方法を実施したより悪賢い者達へのたやすい餌食になってしまったのです。

【解説】

古来行なわれていたことは、今日にも続いていると思うべきでしょう。私達の身の回りにある既存の宗教組織は、皆そのような要素を持っているのかも知れないと考えた方がよいようです。まさに道を求める私達子羊を食い物にする悪人が横行していると、著者は1960年代に警告している訳です。

この地球という世の中には長年の経緯から、あらゆる所に、まさに「死すべき (mortal)」仕組みがあり、民衆から収奪するようなシステムが出回っています。人々の嗜好を刺激し、時間とお金を費やさせるゲームや携帯電話等々の普及は、人々に自分自身や生命を考えさせる機会を奪う、大衆扇動も多いように思います。

このような中であって、じっくり落ち着いて自らの身辺を見直し、宇宙と自分との関係に思いを致す存在になろうとすることは、大変貴重な存在と言えるでしょう。私達一人一人は大きな宇宙から見れば砂浜のほんの一粒の砂の存在でしかありませんが、ひとたび太陽の光に照らされれば、その砂粒だけが輝くことは明らかです。その輝きは上空からでも容易に認めることが出来るでしょう。

本講座を学ぶ一人一人が小さいながらも、宇宙創造主から受けた光を周囲に照らす存在になり、周囲に影響を与える一粒になって欲しいと願うばかりです。

144 Did you ever attend a camp-meeting where the participants threw themselves into such a high emotional state that they were finally hypnotized into performing things they could never have done when in a normal state of consciousness? After coming out of this emotional spell they were asked if they knew what they had done and the answer would be a negative one. All that they were conscious of was the fact that the Holy Spirit had them under control. This proves that they were under an imposed influence which deprived them of their power of reasoning and will.

144 貴方はこれまで、参加者達が、このような激しい感情状態に陥った結果、最終的には催眠状態にかかり、正常な意識状態では出来ないような事柄を成し遂げるような野外集會に参加したことはありますか。この感情の魔法から抜け出した後、彼らは自分達が何を成したかを訊かれますと、否と回答するでしょう。彼らが意識していたことの全ては、聖なる魂が自分達を統率していたという事実だけです。このことは彼らが自分達から推論と意志の力を奪った、ある押し付けられた影響力の下にあったことを示しています。

【解説】

米国ではこのような野外集會が多く開催されているようです。先日、韓国に出張で行った際にも、若い人達が短期間、仏教寺院の宿坊に宿泊し、座禅等の体験をすることが盛んになっていると聞いたことがあります。おそらく、様々な面で厳しくなって来た現代社会において、より精神的な修養を求める若者も増えているように思います。

他方、このような道を求める人々が多い中で、本項で指摘するような好ましくない活動事例も広がっていることが懸念されます。詳細については知りませんが、原子力発電所の事故や震災以来、様々な警告を発するサイトが目立つようになりました。中にはもうすぐ日本全土が無くなるような警告を掲載し、日本から離れるよう指示する所もあるほどです。

不安を抱える人々に対し、様々なグループが真理をもたらすものとして近づいている訳ですが、私達はそれらの招きに対して、全身全霊をもってその本質を見極める賢さが必要です。「ハトのように穏やかに、ヘビのように賢明に」の例えの通りです。

古来、民衆には知識が無く、一部の支配階層に従うだけでしたが、これからの時代、民衆には十分な知識と情報がある訳で、本項のような催眠パフォーマンスにお金を払うことや魂を捧げることの無いよう、それらの本質を見抜くことが必要です。時代は末期に近づいていることから、悪は悪をより鮮明にし、善は善をより鮮明になるよう、時代が移り変わるものと思っています。

145 Some self-acclaimed Truth Centers are using this emotional hypnosis, induced by various methods. Innumerable individuals are testifying to healings but permanent healing or the regeneration of the body must be attained through an understanding of the conditions to be dealt with, and the execution of all actions must be taken in a free and conscious state of will. True faith is not a state of self hypnosis, it is a knowing, a willing of the personal ego will to the guidance of the All Intelligent Cause Will. The Will is the man and if the Will is restricted or held in dominance by another the individual ceases to exist as a thinking, reasoning being. Man must understand the forces of his being and control those forces to bring about the desired effects in his life.

145 幾つかの自称真理センターは、様々な方法で誘導される、この感情催眠を用いています。無数の個人が癒しについて証言していますが、永続的な癒し或いは肉体の再生は取り扱われるべき条件を理解した中で得られるものであり、全ての行為の実行は自由で意識的な意志状態の中で行われなければなりません。真の信仰は自己催眠の状態ではなく、知っていることであり、個人的な自我の意志が全知の因意志の導きに喜んで従うことです。意志とは人そのものであり、もしその意志が他の者によって制限を受け、或いは支配下に捕捉されるようなことがあれば、その者は考え、推理する存在ではなくなります。人は自分自身の存在の諸々の力を理解し、自分の生涯の中で望ましい結果をもたらすようそれらの力を制御しなければなりません。

【解説】

著者は催眠術が危険であることを、様々な箇所で繰り返し述べています、いわゆる「宗教」を求める人々に対して、多くの団体が行っている祭事や行の中には、催眠を基本とするものも多いのではないかと、私も懸念しています。

結局のところ、それらに従った本人は、その意志をその団体の主催者の意志に支配されている訳で、本人の自由意志が望み、決定した事柄でない以上、仮に成果を得たとしても、その経験は本人に何の役にも立ちません。

一方で、私達は、その自由意志をエゴ（自我）の好き放題の世界とすることも誤りな訳です。悟りとは、自ら内容を理解した上でその意志を創造主の意志に従うという、極めて冷静な心の状態を必要とします。とかく私達は自我主体の生き方か、他の者の言いなりの生活かのいずれかに片寄りがちですが、真実は自我自らが自分を捨てて、自我の部分に創造主の意志を受け入れることと言うのだと思います。

悟りとは、静かに全体を見通す中で、自らを道具として創造主の表現者になり切っている状態を指すものと考えています。私達一人一人には大きな能力が備わっており、その力を本来の方向に発揮すべく、コントロールすることが必要だと本項は指摘しているのです。

146 It is true that many effects similar to the desired actions can be produced through self-hypnosis but when the person has returned to his normal state of mind he is unaware of the process by which he gained the experience. It therefore does not benefit him for he is never able to contact that particular experience again, and he has weakened his will. The Will is the controlling element of man's being - the element that makes the individualized consciousness a man or a beast, god or devil.

146 望んでいた行動と類似した多くの結果が、自己催眠を通じて作り出され得ることは確かですが、自分の心の正常な状態に戻れば、その者は自分がその体験を得たプロセスに気付くことはありません。それ故、その者にとって恩恵をもたらすものではないのです。何故なら、その者がその特別な体験と再び接触することは出来ず、その者は自分の意志を弱めてしまったからです。意志とは人の存在を支配する要素であり、個々の意識を人にするか野獣にするか、神にするか悪魔にするかを決める要素なのです。

【解説】

そもそも、どのような想念を抱こうとしているのかによって人間の価値は決まるという訳です。その想念を選択し、自らの心情とするのは意志であり、あらゆる種類の催眠的要素はその意志を抹殺するものだとは本項は警告しています。

私達の日常は、失敗や成功から出来上がっているとも思えますが、重要なのはその結果に至るプロセスです。うまく行った時はそのような心境、心構えの下、その行為を行ったのかを十分反省することも重要です。私達は不変の法則の下で生きており、物事は全く同じでないにせよ、再現性があることに気付く必要があります。つまり、同様な行動は同種の結果をもたらすこととなります。

そういう意味では、催眠術なものは本人の自覚が無い中での出来事であり、気付いたら結果のみ得ていたということで、本人にはプロセスの記憶はなく、それでは再現性は望めません。

一方地道な精進により、学習を進めた結果、実を結ぶ結果を得た場合には、後日、自分がどのような心境の下でその行為を行ったかを振り返り、再現すれば、再び同種の成果が得られることでしょう。まさに成功体験を活用して自身を発展させることが出来る訳です。

昔、ある人から、UFOを目撃した時、どのような心境であったかと訊かれたことがあります。彼ら宇宙人がどのような時に出現したのかを記憶しておけば、再び見える機会も多くなるものと思われます。私達の精神状態に呼応して活動する傾向もあるからです。

147 Success in any endeavor comes not through self-hypnosis but through self-control. The perverted will is the cause of all mortal suffering but that suffering cannot be permanently lessened by a mere suppression of the will through any form of hypnosis. The will and understanding must be united to produce a worthwhile life of service and accomplishment. Emotionalism can very easily produce illusionary effects and lift an individual into a temporary state of ecstasy but it will never bring about the regeneration of the mortal body or the changing of the ego-will to the cause-will which is necessary for an all-inclusive understanding of life and the cosmos. There is but one way, into the sheepfold and that is through the expansion of conscious awareness in the field of understanding and a systematic training of the will rather than the deadening of the will.

147 どのような努力においても成功とは自己催眠を通じてではなく、自己統制を通じてもたらされます。墮落した意志が全ての死すべき苦難の原因ですが、その苦難はどんな形をとるにせよ、催眠からの意志の単なる抑制からでは永久に緩和されることはありません。意志と理解は有意義な奉仕と業績の人生を作り上げる為に統合させなければなりません。感情主義は大変容易に幻想上の諸効果を作り上げることが出来、個人を一時的な恍惚状態に引き上げることが出来ますが、死すべき肉体の再生や生命と宇宙の全包含的理解に必要な自我の意志の因の意志への転換をもたらすものではありません。目的とする羊の囲いには唯一つの道しかなく、それは理解という分野における意識的気付きの拡張を通じてであり、意志を強めるのではなく、意志を系統的に訓練することによるのです。

【解説】

本項で表現されている「羊の囲い」は、私達が目指すべき目的地として述べられていますが、それは聖書で言う迷える子羊達を羊飼いが集める先にある囲いであることを意味しています。その囲いの中入ることが出来れば、より安全で安定した生涯を送れるという訳です。

さて、本項で度々出現する自己催眠 (self-hypnosis) については、多少考える必要がありそうです。著者は単に催眠術について述べているのではなく、自己催眠と規定しているからです。「自己」という言葉には「自分で自分を」という意味合いがあるように思います。つまり、自我が自我自身を催眠状態にするという意味も含まれているように思うからです。古来から日本でも念仏を何度と無く唱えれば成仏するという教えがありました。その中身として念仏を唱えることで、自己催眠的な状況に陥るのであれば、本項に言う問題が発生することになります。

実は、さまざまな宗教の中には、こうしたある種の行を通じて、恍惚感を得る要素が多いのではないかと懸念しており、それぞれの主張は異なるものの、やっていることは皆同じということも考えられます。中でもある特定の人物に帰依することで、自己の意志を弱めてしまうことは危険だと著者は指摘しており、自我を無くすということだけでは良くないということが分かります。

それに対して、自我を自分で統制し、生命の包括的理解に向けて訓練することが最も必要だとまとめています。意思を強くするのではなく、拡げること、様々な分野を積極的に受け入れ、自分の間口を広げることを目指せと言っているように思います。

148 The Christ said, "Fear not the man that slays the body but fear the man that slays the soul." This individualized soul is the reasoning and will-power of man.

148 キリストは言いました。「肉体を殺す者を恐れず、魂を殺す者を恐れよ」と。この個別化された魂とは人間の推論と意志の力のことです。

【解説】

初期のキリスト教徒が迫害を受けた際に、思ったであろうキリストのこの言葉は、今日の私達についても当てはまる言葉となっています。

多くの迷える者が存在する中で、巧みにそれらの者を取り込んで、自分達の組織の働きバチに仕立てようとする者も覆い筈です。私達は、油断も隙も無い世の中に暮らしている訳で、全ての情報については、鵜呑みにせず、自ら考える（本項でいうreasoning推論する）こと、例えどのような誘いがあっても自ら選択する意志の力を発揮することが必要です。

先日もある会でお話したのですが、最近"George Adamski A Herald For The Space Brothers"という本がオランダで出版されていることが分かりました。早速、入手したところ、これまでになくアダムスキー氏の著作が数多く紹介されており、著作のリストも整備されていて好感が持てました。念のため、英国の友人にこの本について問い合わせた所、思わぬ返事が返って来たのです。

その友人によれば、その内容はアダムスキー氏の著作を紹介していて一見、好意的に見えるが、肝心な所でその主旨を捻じ曲げており、その著者の信奉する別の団体の主張に誘導しているという訳です。

実は、最近、日本でもアダムスキー氏に類似した主張をするUFO団体が多く存在するようです。私自身はそれらの個別の内容について知るものではありませんが、例え「言葉の上では」同じような主張をしているからと言って、100%それらを鵜呑みにして信じることは危険です。自らの魂、意識の声、印象に従って、真実を見抜くことが必要です。これについては、そのイギリスの友人は"How to know a space person"というアダムスキー氏の著作を参考資料として送ってくれました。それはアダムスキー氏が土星旅行に行く前の頃、パロマーの自宅に当時、宇宙人が訪ねて来た時の話で、宇宙人は決して自ら、身元を明かすことはなく、各自自分の意識でそれを感じ取る必要があると述べられています。

自分の道は自分で切り開くということかと思えます。

149 Newness, constant action, progression of thought, substitution and replacement of ideas keeps one in pace with life. If you seek a broader understanding of the cosmos you need not affirm or deny but use your emotional power with reason for the betterment of yourself and others. Control your emotions instead of being a slave to them, for uncontrolled emotion which is temporary self-hypnosis is the cause of crime. You may never take the life of a fellow-being but if you indulge in self-hypnosis you will be guilty of killing your own soul.

149 新しさ、絶えざる行動、向上する想念、アイデアの交換や取替えは人を生命に遅れず付いて行かせます。もし貴方が宇宙のより広い理解を求めるなら、貴方は貴方の感情の力を肯定も否定もする必要はなく、貴方自身と他の人達の向上の為に用いる必要があるのです。貴方は感情の奴隷になるのではなく、それらを制御するのです。何故なら、制御されない感情は一時的な自己催眠であり、犯罪の原因であるからです。人は決して仲間の命を奪ってはならないのですが、もし貴方が自己催眠に身を任せるとしたら、貴方は貴方自身の魂を殺す罪に問われることになるからです。

【解説】

章の最後にあたり、著者は「自由意志」対「自己催眠」について、ポイントをとりまとめて私達に示しています。

宇宙に流れる生命力は私達に多くの恵みをもたらして呉れますが、その生命力に追いついて行く為に、或いはその生命力に同調する為に、私達は何をしなければならないかを示したのが、冒頭の言葉です。

宇宙に流れる生命力は実に活発であり、常に新たな展開を見せる等、創造的な波動であると言えるでしょう。それ故、私達がそれと同期して、恵みを多少なりとも受けるには、新鮮さや活発な行動性、更には想念活動、思考活動を自由で柔軟なものに保つ必要があります。そのように呼応出来る波動を保つことで、身体はより健康状態を保つ訳で、全身の細胞が歓びで湧き立つような充実した生涯を送ることが出来ます。

一方で、このような状態を保つ上での課題は、私達自身の持つ不安定な感情です。これらは内外ともに大きな力を持っていることから、それらを野放しにするのではなく、制御することが必要だとしています。この場合、重要なのは本文で示されているように、それらを統制した状態の中で、その力を有益な方向に活用するということでしょう。これらの感情を否定したり、肯定したりして自分を決め付けることは意味がないことも述べられています。私達が持つ感情の力をより良い目的の為に活用すべきだとしている点も注目したい所です。

14 RELAXATION

150 One of the most ascribed methods of attaining physical and mental well-being is the development of the ability to relax. Psychology, medical science, athletes, etc., all acknowledge the beneficial results obtained when the body is not tense, but the average individual finds it difficult to relax at will.

第14章 リラクゼーション

150 身体的及び精神的健康を達成する上で最も要因となる方法の一つは、リラクゼーション能力の発達です。心理学、医学、スポーツ選手その他全てが、肉体が緊張状態に無いときに有益な結果が得られることを認めています。平均的な個人は、思いのままにリラクゼーションすることを難しいことだと思っています。

【解説】

日常、ストレスが多い生活をしていると身体的にも精神的にも疲労は増し、遂には取り返しがつかない程、心身を痛めることにもなりかねません。私達はこれらの状況からいち早く抜け出て、リラクゼーションした状態を保持するすべを身に付ける必要があります。

本件については、既に感情のバランス等、ある程度は学んで来ているのですが、本章では改めて生命波動に従うとはどういうことかを学んでいきます。

その中でも心身を自由自在にフリーな状態にしておき、心配事や緊張の要素を解消しておくことが重要です。リラクゼーションを如何に維持するかは競技前のスポーツ選手の課題でもあります。元凶である緊張状態が如何に多くの障害を身体にもたらすかは、各自それぞれの体験をお持ちだと思いますが、先ずは、リラクゼーション状態における疲労感が無く、爽やかな心身状態を自ら創り出そうとする努力が重要なのです。

151 I believe that there is a misconception regarding relaxation. It is often thought of as a state of inertia, and people will be heard to remark, "Oh, I haven't time to relax; my work keeps me busy every minute." If relaxation were truly understood such ones would realize that there is oftentimes much greater relaxation in work than in so-called periods of rest. The law of nature demands purposeful action and if a person is intensely interested in his work he is making of himself an open channel for the free expression of energy which is always waiting to be used. In other words, a person who has lost himself in some particular piece of work forgets to set up the usual mortal resistance to free-flowing energy and so opens himself automatically to its benefits.

151 私はリラクゼーションに関しては誤解があると思っています。しばしばリラクゼーションは慣性状態のように考えられており、人々は「ああ、私にはリラックスする時間が無い。仕事が休む暇なく忙しくさせている」と言うのを聞くことがあるでしょう。もしリラクゼーションが本当に理解されるなら、このような人はいわゆる休んでいる間よりは、しばしば働いている時の方がはるかにリラクゼーションにあることに気付くでしょう。自然の法則は目的のある行動を要求しており、もし人が自分の仕事に対して情熱的な関心を抱く場合は、その者は常に使用されるのを待っているエネルギーの自由な表現の為の経路に自分自身を成しているのです。言い換えればある特定の仕事の断片の中に自分を没入させた人物は自由に流入するエネルギーに対する通常の死すべき抵抗を打ち立てることを忘れてしまい、自分自身を自動的にその恩恵に対し開くのです。

【解説】

「どうぞゆったり、リラックスして」と言われるように、雑事から離れ、静かな環境の下、のんびりひと時を過ごすというのが、これまでのリラックスでした。「何もしない」というのが、リラックスだとしていた訳です。これに対して、本項ではそれはリラックスではなく、「慣性（惰性）」の状態であり、真のリラックスではないとしています。

私達が日頃、何故疲れるのか、或いは何故ストレスが溜まるのかが問題な訳ですが、そのような疲労原因は私達自身による葛藤や恐れが本来の生命の流れを阻害し、抵抗を作り出していることにあると本項は示唆しています。

それに対して、そのような自我本来を無くす、即ち没入させて何かの行動に当たっている時は、文字通り、疲れを知らず打ち込める状況になり、それらは本当のリラックスだとしています。

本項を注意深く読むと、夢中になって何かに打ち込むことの中では、潜んでいる宇宙エネルギーが次々に湧き起こり、その者の意図を助けることも読み取れます。ある程度は肉体をいといつつも、熱中する意欲が生命の流れを呼び込む心身のリラックスに繋がるということです。

152 Relaxation should be used as a process of reestablishing harmonious, non-resistant action; the true way of expressing those words of the Christ, "Not my will but Thy Will be done."

152 リラクゼーションは調和ある無抵抗の行動を再構築する過程として用いられるべきです。その道はキリストの言葉、「私の意志が行われるのではなく、汝の意志が行われるのだ」が表す、真の道です。

【解説】

さて、本項では著者は自我を没入させる行動は、自我の力を誇示する為ではなく、本来の調和的で宇宙源泉からの生命活動を抵抗なく流れ込ませる過程として、活用すべきだと言っています。

私達には元来、未活用のままスタンバイしている生命活力が各自にある訳で、それが自我の抵抗から言わば堰き止められている訳ですが、その抵抗が無くなれば、自ずと流れ込むこととなります。

前項では、自己催眠について警告して来た所ですが、他方、自らの意志により、自我の抵抗態度を取り払い、自ら進んで宇宙の生命活力を受け入れるという自発的献身態度の中では、リラクゼーションとして価値ある行動になるという訳です。本項に言うキリストの言葉とは、「その選択はあなた自身が行ったもの」「その行為の成果はあなたのものだ」と言われているように思います。

153 Relaxation is not inertia! A person may be very quiet and still not be relaxed. It is possible to be in a state of lethargy which may be interpreted as relaxation but such a condition is no more than the effect produced by loss of equilibrium which lowers the frequency of the body cells and puts them in a state of partial coma. Such a condition is to be avoided for it is actually destructive. Relaxation does not include the creation of a mental vacuum or the cessation of action. It is the means by which the mortal consciousness releases itself to the greater action of the Cosmos and therefore should not and cannot produce a dormant condition in any part of the body. If a person is not aware of a finer and more intense activity taking place within his being he can assure himself that he is not relaxed but has merely dropped into a state of indifference.

153 リラクゼーションは惰性状態のことではありません。人はとても静かであってもリラックスしているとは限りません。リラクゼーションと解釈されるかも知れない無気力状態もあり得ますが、このような状態は肉体細胞の振動数を下げ、それらを昏睡状態にさせるような均衡を失ったことによってもたらされた影響でしかありません。このような状態は避けなければなりません。何故なら、それらは実際には有害であるからです。リラクゼーションは精神的空白や行動の中断を作り出すようなことは含み得ません。それは死すべき意識が自分自身を宇宙のより大きな行動に解放する手段であり、それ故、身体どの部分にも休眠状態を作り出すことはありません。もし、ある人が自分自身の中により精緻で、より激しい活動が生じていることを感知しないのであれば、その者はリラックスしているのではなく、単に無関心の状態に落ち込んでいるに過ぎません。

【解説】

真のリラックスとはどのような状況かを本項では解説しています。とかく私達は日常のストレスが多い生活から一時的に逃れる為に静養と称してのんびりひと時を過ごす手法をとりがちです。そのこと自体は心身の過度の疲労を回復させ、静かな環境の中で過ごすことによって心身を癒す効果があることも確かです。

しかし、このように何もしない生活を続けて行くことが良いことではないと本項は指摘しています。全てのものに無関心になれば、何かからも煩わされることなく、自分だけの世界に生きて行けるかも知れませんが、それは万物との相互関係を広げたい私達の生きる道とはハズレているということでしょう。その証拠に、定年を過ぎ、何もする仕事が無くなった後の多くの人達が急速に老化の道を辿る例が多いことがあります。

以前、本講座の本文（139）に私達を精密なモーターに例える表現がありましたが、私達の心臓が終始、動きを止めることがないように、私達自身の生命活動は中断ということではなく、従来のももしい休養法は一時的、緊急避難的な位置付けでしかありません。私達はたとえどのような環境の中にあっても、自身の内部にある静かでより活動的な生命波動に心身を合わせて、疲れを知らない存在を保つよう、自我の余計な緊張を解放しなければなりません。自然界を見ても、何一つ静止し、活動を中断しているものは見当たりません。生命を終えたものさえも、速やかに視野から消えて行き、常に生きているもののみが自然界に存在しているように思えるのです。

154 A person may quiet the body through a form of self-hypnosis, but this is not relaxation, for it destroys the free action of the body elements. The body is composed of tiny cells in each of which there is a spark of potential energy capable of unlimited radiation. This spark or nucleus within each cell is the animating energy of the body, but because the particles surrounding this central force are generally held in the tense state they act as barriers or resisters to the energy within. When this tense condition is released the outer substance composing each cell becomes receptive to the energy at its center and is set into a higher frequency through the action of the interpenetrating force.

154 ある人は自分の肉体を自己催眠の形を通じて鎮めるかも知れませんが、それはリラクセーションではありません。何故なら、それは肉体の構成要素の自由な活動を破壊しているからです。肉体は小さな細胞から構成されており、それら一つ一つの中に無限の放射能力が秘められたエネルギーの生気があるのです。この生気、もしくは細胞核は各々の細胞の中であって、肉体の活動的エネルギーとなっています。しかし、この中央の力を取り囲んでいる粒子群が極度の緊張状態にあって、内側のエネルギーに対する障壁や抵抗になっています。この緊張状態が解放されると、各細胞を構成するその外側の物質は中央部にあるエネルギーを受け入れることが出来るようになり、その貫通する力の活動を通じて、より高次な振動数にセットされるのです。

【解説】

本項で述べられている事柄は、この「宇宙哲学」を通じて、最も大事なことのように思います。物事の相似性、相関性については、これまでも繰り返し述べられてきたところですが、私達の肉体細胞について言えることを本項では、さり気なく述べられています。

それは「核」という要素が、配下の他の要素を活性化させる原動力であるということです。大は太陽系の中心である太陽が各惑星を養い、小は原子の構成の中心の原子核が莫大なエネルギーを秘めていることは私達も学んでいるところです。その中間の生物体においても各細胞には細胞核があり、核酸と言われる遺伝情報物質をベースに細胞を増殖させたり、様々な生命活動を担っていることは、私達の知るところです。

更に、問題となる私達の精神行動が、それら細胞レベルに影響を及ぼしているとする点が重要なのです。特に細胞核を緊張した分子が取り囲んで、細胞核からの生気の放射を妨げていること等、私達の身体に染み付いた旧来の生き方が、本来の生命力の発現を妨げているとしている点は重要です。

このように、単なる精神主義でなく、私達の精神活動が実際の現実世界と如何に繋がっているかを学んで行く点が、アダムスキー哲学の優れている所です。まさに「生命の科学」という表現に相応しい内容となっています。

155 Relaxation reduces the friction within the body by eliminating the resistance of one cell-form to another. For instance, if a large number of fish were placed in a very small bowl there would be constant friction due to the inevitable contact between them, and the action of each would be retarded because of the congested condition existing within the bowl; but if these same fish were released into a large pool they would swim about easily without interference with one another. They would be in a position to use the potential energy which they possess. The cells in the body act in the same manner and it is the mortal sense mind which must release them for free execution of their purpose.

155 リラクゼーションは、細胞と細胞との抵抗を取り除くことによって、肉体内の摩擦を低減します。例えば沢山の魚がとても小さな鉢に置かれたら、それらの中には避けがたい接触に起因する恒常的な摩擦が生じるでしょうし、各々の行動はその鉢の中の混み合った状況のため、遅らされることでしょう。しかし、これら同じ魚が大きな池に放たれるなら、魚達は互いに干渉されることなく、たやすく泳ぎ回ることでしょう。彼らは自分達が持つ秘めたエネルギーを用いる立場になることでしょう。肉体の中の細胞も同様な行動を取りますし、細胞もそれらの目標に向けて解放しなければならないのは、死すべき感覚心なのです。

【解説】

金魚の例えは他（「テレパシー」逐次解説の段落283,284,285）にも出ているところですが、私達の肉体細胞も同様に、密集した状況の中であって、互いに牽制しあって活動が鈍っているということでしょう。

これに対して、リラクゼーションによって、それら細胞同士の緊張が解けるのだと、本項は述べています。

そもそも細胞の緊張は私達の感覚心が原因とされています。私達の細胞は感覚心を主人として忠実に従っているという訳です。肝心なその心は多方面で不安定なため、その影響は全身くまなく及ぶこととなります。そもそもの緊張を取り除けば、もっと自由に各細胞が活動を始め、より健康な心身に生まれ変わることも可能です。

その為には、肉体を支配している心を適切に管理し、宇宙生命本来の方向に導く必要があります。哲学の勉強は真理の探究に他なりません、学習を続けるにつれて、肉体もその健全さを増して来るように思います。

156 The average individual does not realize how completely he is bound and limited by his own opinions. Tenseness is wholly a condition caused by the personal ego; possessiveness, greed, fear, covetousness and self desires all produce a set and unyielding condition within the body. The person who is of a very positive nature finds relaxation a most difficult accomplishment, for relaxation consists of releasement and non-resistance. It is a natural state of being which should be maintained at all times but cannot be held by one who is absorbed in self interest only.

156 平均的な人間は自分が如何に自分自身の意見によって完全に縛られ、制限を受けているかが分かっていません。緊張状態は個人的なエゴによってもたらされた全くの状態なのです。所有欲、欲張り、恐怖、どん欲そして自己願望、これら全てが一派を作って頑固な状態を肉体内部に作り出します。とても独断的な性格の人はリラクセーションを最も達成が困難なものだと思っています。何故なら、リラクセーションは解放と無抵抗から成り立っているからです。それは常時保持されるべき自然な状態なのですが、自己の関心のみに没入している人には掴むことは出来ません。

【解説】

誰でも自分をリラックスさせ、気持ちよく過ごしたいと思っていることでしょう。しかし、そうならない自分自身に何処が原因であるかを本項は示しています。リラクセーションはある意味、柔軟性や余裕という語感が伴います。それは細胞レベルにまで及ぶ原因があることは、前項（154）で学んだところで

リラクセーションに対峙する概念は緊張状態と言えますが、その原因はすべて自我の欲望であると本項は断言しています。また独断的な人は自らの進みたい欲求が強すぎて、それらの願望から離れられず、リラクセーションが難しいとも指摘しています。更には、もっぱら自分の関心事のみに没入している人も本来のリラクセーションとは遠いとも言っています。

物欲その他の願望から離れて、より広い無欲の中に身を置くことの大切さは、長らく仏教の中では教えられて来ました。また、老子の中にも柔軟性を保ち、物事に捉われないことが教えられています。リラクセーションはご自身の身体細胞の状態を感じれば、良い状態か悪い状態かは容易に判断できます。自分自身のことは自分で責任を取る必要がある訳で、私達各自は、自分がリラックスできる為には、どのような精神状態を保つべきかを毎日の生活の中で記憶し、応用することが大切です。

157 In the beginning, man dwelt in the state of contentment and relaxation for he knew no "thine and mine" - he was guided totally by the Father and his every conscious thought was executed freely and perfectly in its pure state of perception. It was only when man set up resistance to free-action that he became tense; the results of which are pain, disease and death.

157 原初において、人は満足とリラクゼーションの中で暮らしていました。何故なら、「貴方のものと私のもの」という概念を知らなかったからです。人は父によって全てを導かれ、人が意識するあらゆる想念は、その純粋な感受の下、自由かつ完全に実行されていました。人が緊張状態になったのは、唯一人が自由な行動に対して抵抗を打ち立てた時なのでした。そしてその結末は苦痛、病そして死なのです。

【解説】

先日テレビ番組で、ある照明デザイナーがホタルが集まる木をこの目で見ようと、ニューギニアの離島を訪れた際のドキュメンタリーがありました。電気の無いその島は、村人が共同でヤシの実から油を取り、ランプを灯して唯一の明かりを得る生活です。日本から見ると、文化レベルが低いように思われがちですが、実際はそのようなことはまったくなかったのです。漁師の夫人は海に映える夕焼を眺めてその美しさを語る姿や、村の長老が夜、山深くまで案内してホタルの木を見せて語る自然への畏敬の心は、現代人が忘れかけている大切なものを、これらの人々が受け継いでいることを示していました。

自他の区別、自分のものと他人のものの識別は、今日では当然の概念ですが、地球開闢の頃は、その区別は無かったという訳です。もともと自然自体は誰のものという訳ではないのですが、今日の私達は自分のものが失われぬよう気を配り、常に相手を敵と思って騙されないよう用心する、自分の失敗が非難されないよう責任を転化する等して、自分を守ることに汲汲としています。

その結果、様々な障壁で自分を取り囲み、その中で不自由な生活を送っているのが、私達なのかも知れません。もっと自由に、また、不要な束縛を解放してリラックスした生活を送らなければ、生命を長持ちさせることは出来ないのです。

158 When relaxed one is flexible and receptive to unlimited conscious energy which is free to all who draw upon it. Life and energy are limitless but we can have only as much as we are willing to accept.

158 リラックスしていると人は柔軟になり、それを求める全ての者に自由に与えられる無限の意識的エネルギーを受け入れられるのです。生命とエネルギーは無限ですが、私達は受け入れようとするだけしか得られないのです。

【解説】

何事も余裕がないと広く考えが浮かばないものですが、そもそも原理的には自らの各肉体細胞を束縛や緊張から解放し、各々中央の細胞核からの英知に受容的になれば、従来にない物事を達成する可能性があります。

書道家が自由に筆を走らせ、音楽家が自在に指で鍵盤をたたくように、真に自由な状況になると様々な才能が芽を出すように思われます。ある意味、迷いが無く、自らを湧き起こる知性の表現者として解放する姿がそこにあります。

これらの才能の開花は、その人の心がより素直になり、抵抗を差し挟むことを止めると生まれ出るように、次々にその成功体験から、自分がどのような心境の時にそれを達成したかをよく覚えて置けば、次のチャンスには、それを更に容易に実現することが出来るように思われます。スポーツ選手の練習も、芸術家の修練も、そのイメージをどう自ら構築して行くか、工夫しているように私には思えます。自分自身の心の状態を自ら静かにチェックし、良い状態を保つことがポイントです。

159 The people on Venus live this law and thereby do not have to endure the unpleasant conditions that we must contend with on earth.

159 金星の人々はこの法則に生きており、それ故、地球で私達が向き合わなければならないような、不愉快な状態を耐え忍ばなければならないということはありません。

【解説】

自我の問題の解決を終えている金星人にとって、およそ苦痛というようなものはなく、安寧な生活を送っています。仏教で言う数多くの仏国土の存在は、こうした進化した惑星が宇宙には莫大な数、存在していることを古来から、地球人に知らせるものでした。

これに対し、地球ではその存在を憧れるだけで、その実現に何が必要かについてまでは、長らく考えが及ばなかったように思われます。

本講座をはじめ、アダムスキー氏が伝えた精神科学や、単なる概念ではなく、現実の生命科学に結びついた生きた科学として、具体的な人間の生き方と生命活動、精神活動が結びつけられていることを明らかにしています。人間の瞬間瞬間の想念が現実を作り出していることを学ぶことによって、私達はますます、自我の統制に力を注ぐべきことが分かります。

先日、夜海辺で空を見上げていますと、次々に飛行機が空港に近づいて行く様子が見えました。それらは海外から日本に就航する飛行機なのですが、いつの将来にか、これらが他の惑星からの宇宙船に置き換わり、次々に他の天体からの訪問者がこの地球を訪れるようになれば、この文明も大きな変化を遂げることだろうと思った次第です。

160 Man is capable of expressing the fullness of life but he must become non-resistant to cosmic energy if he would have it express through him. He has lost the true course of action by exalting the personal ego; he has created the habit of believing that all accomplishment is brought about through the exertion of personal effort. He fatigues himself unnecessarily by trying to force conditions which will come about perfectly in a natural way if allowed to do so. Much energy is wasted because of personal dominance. It is difficult for the mortal to understand that impersonal non-resistance allows a free flow of energy, that in peace there is more intense activity than in friction. Man has become so aware of the coarser frequencies that he cannot realize action in its finer, more quiet and peaceful state. One who does live the non-resistant, receptive attitude has found the highway of true happiness, for he knows no fatigue, no pain, no disappointment.

160 人は生命の完全さを表現できる能力を有していますが、それを自分を通じて表現するには、宇宙エネルギーに対して無抵抗にならねばなりません。人は各自のエゴを高ぶらせた結果、真に歩むべき行動の道を見失ってしまいました。人は全ての達成物は各自の努力の行使を通じてもたらされると信じる習慣を作り出してしまいました。人はもしそうすることが許されれば自然と完璧に訪れるような状況に対して、無理強いすることで、不必要に自身を疲労させています。より多くのエネルギーが個人の優位のために浪費されています。死すべき者にとって、非個人的な無抵抗がエネルギーの自由な流れを与え、平穏の中には摩擦状態よりはるかに強烈な行動があることを理解するのが難しくなっています。人はより粗雑な振動に対してあまりにも敏感になってしまったため、より精緻でより静かな平穏な状況における行動を知覚することが出来ないのです。こうした中、無抵抗で受容的な態度で断固生きる者は真の幸福の王道を見つけています。何故なら、その者は疲れや痛み、失望を知ることはないからです。

【解説】

最近のハイブリッドカーは静かに加速する一方で、周囲の迷惑も顧みず荒い騒音を撒き散らして急発進するバイクがあるように、人の生き方も様々です。自分の進む道は自分で開拓すべきことは確かですが、私達はこれまで余りにも自我を強めて来てしまったため、行動の動機が自我（エゴ）を高めるために設定していました。その結果、困難の中、無理な努力の中で成果を得られず落胆に終わる事例を積み重ねてしまいました。

一方、自然界を見れば、このような無駄な動きが一切無いことに気づきます。どうしてかは分からないものの、皆、精一杯働いてはいても、その表情に苦労は見えません。野生の動物や植物等、皆、与えられた生命を楽しんでいるように見えてしまいます。厳しい自然環境の中でこれらの生物達に適切な忠告を与える存在とその声に素直に従う生き物があって初めて成り立つ世界が自然界にはあります。

ものに名前を付ける権利、全ての創造物を統括する権限を与えられた人間は、本来、もっと落ち着いた有意義な生き方が出来る筈ですが、それが出来ない原因は、自我の高まりだという訳です。自我を統制して、素直に印象に従う中において、もっとスムーズに宇宙本来のエネルギーを活用して生きる道が拓かれることとなります。

161 The idea that one must become strenuous in outward action or must display an appearance of great personal effort in order to accomplish outstanding things is a false belief. The person who reaches the greatest heights of accomplishment is he who holds all of his actions in a serene and peaceful state, recognizing the fact that he is not the instigator or projector of intelligence but only the form through which it flows into manifestation; and the more fully the recipient is cleared for action the greater the action will be.

161 人は顕著な物事を達成する為には、外に向かったの行動に奮闘し、或いは大いなる個人的な努力をしている姿を示さなければならないとする考えは誤った信念です。最高位の達成に行き着いた人は、自らの行動を澄んで平安な状態に維持し、自らを英知の扇動者や計画者としてではなく、自分が創造物に流れ込む形あるものでしかないという事実認識をしている者です。そして受容者が行動の為、より完全に空になればなる程、より大いなる行動が起こることになります。

【解説】

いわゆる自らの意志を行なうのではなく、自分は宇宙根源から湧き起こる宇宙的な想念が発現する媒体、即ち、単なるパイプとして宇宙意識に献身することで、真の人間の可能性が発揮されるとしています。

そのためには、自我の主導による無益な努力に身を置く必要はありません。自我による労苦の中で精神まで疲れる必要はないというものです。適時的確に事を行なうには、心を平安かつ鋭敏な状態に保ち、宇宙源泉から来るヒントを感受して無抵抗に対応することが必要となります。創造主は、元来、その子供達には労苦を与えることなく、常に楽しく暮らせるよう、配慮されていると思うべきです。

「野のユリは、……」の一節にあるように、人間以外の生きもの達は皆、各々の生涯を厳しい自然界の中でも謳歌しています。今の時分はセミの声も多く聞こえますが、数年間の穴倉生活の後、地上に出てきたセミ達にとって暑さは元気の源であり、ほんの小さな身体から驚くべき大きな声を発し、生命を精一杯楽しんでいきます。自らが宇宙意識の表現者として日常を生きるという点に関しては、セミ達から学ぶことも多いように思います。

162 It is not the exertion of the personal will but the releasement of the personal to the impersonal will which brings increased energy and wisdom into our lives. We need only to remove the barrier of "self"-ishness and a tide of understanding will flow in and through our being until we become immersed in its activity

162 エネルギーの増加と知恵を私達の生活にもたらすのは、個人的意志の行使などではなく、個人的意志の非個人的意志への解放によって行われます。私達は只、自己中心的障壁を取り除くだけでよく、そうすれば理解の潮流が流れ込むようになり、遂には私達を通じてその活動の中に没入することになります。

【解説】

リラクセーションの本来の目的と意義を、本項では最後に要約しています。私達は従来、疲労した心身を休めるために一時的な心身の弛緩としてのリラクセーションを取扱いがちですが、リラクセーションの本来の意味は、より深い所にあることを学んで来ました。即ち、リラクセーションとは自我の意志をより大きな宇宙的意志の下に完全に従わせて、心身の緊張状態から解放することによって、自身を創造の流れの中に没入させる際の条件作りであった訳です。

何事も言葉に表される段階以前の想念の塊の状態から反応することが重要なようで、これら先行するアイデアの段階から自身の身を置いて行動する中で、後から見て、その時は宇宙意識的指導があったと気付くことが多いのではないのでしょうか。私達地球人にとって、想念は未だ大変微妙なものでしかなく、その感受性を高める上で、リラクセーションの状態を保持することが重要となっています。

15 THE LANGUAGE OF THE COSMOS

163 In recent years there has been a greater trend towards the brotherhood of man than ever before in the history of this civilization. The advent of radio, television, etc., have united the world into a common relationship. There has been much discussion among the learned men of every nation regarding the possibility of formulating a common language so that intercourse between peoples of different nations may be facilitated.

第15章 宇宙の言語

163 近年、この文明の歴史の中でこれまで以上に人間の兄弟愛に向けてのより大きな傾向が生まれています。ラジオやテレビその他の到来は世界を共通の關係に結びつけて来ました。異なる国々の人々の間での交流を促進できるよう、共通の言語を形成する可能性に関し、あらゆる国の学者達の間で沢山の議論がなされました。

【解説】

以前、何処かでアダムスキー氏は、これからは英語が世界共通語になると語っていたことを思い出します。それから40年以上も経過した中で、事実、その通り、多くの場面で英語が共通言語として用いられるようになっていきます。本章は更に進んで、宇宙的共通言語は何かという点について学んで行くことになる筈です。

既に「テレパシー講座」において、私達は印象の伝達に関するメカニズムについて学んで来ましたが、本章では、それらのおさらいになるものと思われます。

音声に依存するコミュニケーション、文字に基づく意志伝達は、人間だけの能力ですが、自然界を見ると他の生きもの達は、これら手段を持たないにも拘らず、何ら不自由なく生活しています。ある国で飼われていた犬が別の国に引き取られたとしても、何らの不自由なく暮らして行けることは確かです。同様に、あらゆる生きものが互いに自分の意志を伝え合い、互いに理解し合っていることに私達は気付く必要があり、何故、そのようなことが可能なのかをよく考える必要があります。

お知らせ [2011-08-17]

明日から今週一杯、夏休みの為、本講座の更新をお休みいたします。

再開は週明けからになる予定です。ご了承下さい。

164 Although few men are aware of its existence there is a universal language - a language which includes not only the expressions of man but that of every living thing; a language so simple that even a new-born babe can understand.

164 ほんのわずかの人しか、その存在に気付いていませんが、宇宙普遍の言語は存在するのです。人間による諸々の表現のみならず、あらゆる生きものの表現を含んだ言語で、あまりに簡単なため、生まれたばかりの赤ん坊さえ理解することが出来ます。

【解説】

音声或いはその発展形である文字によらない言語について、本項は述べているものと思われます。元来、人が想起するアイデアが未だ通常の言語に翻訳される前の言わばアイデアの塊の段階で、直接認識し、理解する能力のことを指しているように考えます。

これらの能力はあらゆる生きものに元来、備わっており、その結果、人間以外の生きものはこのインスピレーションを把握し、その結果、何ら特別な言語を持たなくても互いに十分な理解を図ることが出来る訳です。

細胞同士のコミュニケーション、他の種との意思疎通、更には宇宙根源からの示唆等、ありとあらゆる場面で活用されているのが、この想念感知能力です。

人間も言語を学ぶ前の乳幼児までの段階は皆、これと同じ能力を有していたものと考えます。またその頃は印象の記憶も確かで、誰でも幼児期に受けた印象は生涯忘れずに残っているものです。こうした言葉を覚える以前の生活は、本来の宇宙共通言語を修得する一歩であったかも知れないという訳です。

周囲の雰囲気や察知する能力は、これら想念に鋭敏になることと同意語であり、私達一人一人がこれから宇宙的な生き方を歩む上で必要な要素と言えます。

165 We have conceived the idea of a universal language among men because we are aware of being able to understand the human voice and have developed the habit of expecting the voice of man to interpret for our benefit the thought which passes through his mind, but we have not included in our efforts of unification any but the man kingdom. Why should this be so, for are the sounds which make up the various languages so different than those of nature itself? As the different races of men speak with various sounds and combination of sounds; each form of life in this world does the same, yet we do not seek to understand them. Man has limited himself to one phase of life and has closed the door upon the vastness of the Cosmos. This is due to the fact that he has given recognition only to the mortal senses which gain their impressions from outer things. He expects to hear only those sounds that are coarse enough to affect the physical organ of hearing and so he loses the ability to interpret the cosmic language as a whole. And what is this cosmic language? It is conscious feeling - the voice that speaks through every form and which, therefore, unites All into an inseparable unit. There is nothing in the cosmos that cannot speak to man with the voice of conscious feeling and there is not one thing that cannot understand that language. It speaks as clearly through the smallest thing as it does through the greatest.

165 私達は人間の間にある宇宙普遍の言語についてのアイデアを思い付いて来ました。何故なら私達は人間の声を理解出来、自分の心を通過する想念を私達のためになるよう翻訳しようとする習慣を発達させて来たからです。しかし私達は私達の統合化の努力を人間界のみに留めて来ました。何故そうなってしまったのでしょうか。様々な言語を作り上げる音は自然自体の音とは違い過ぎるからでしょうか。様々な異なる人間は異なる音や音の組み合わせで話しますし、この世界の各々の生きものも同じことをしますが、私達は彼らを理解しようとはしません。人は自分自身を生命の一つの側面に限定させており、宇宙の広大さのドアを閉めているのです。これは印象を外部のものから得る死すべき感覚のみに認知を与えて来た事実によるものです。人は肉体の聴覚に影響を与える程の粗い音声のみを聞き分けることを期待しており、その結果、全体としての宇宙的言語を翻訳する能力を失っています。そしてこの宇宙的言語とは何でしょうか。それは意識的フィーリング、あらゆる形あるものを通じて語られる声であり、それ故、全てを離れられない単位に結びつけるものです。それは、最も大きなものを通じるのと同様に、最も小さなものを通して明確に話し掛けています。

【解説】

私達人間が言葉を理解する能力とその努力がどのように行われて来たかについて述べた後、実は私達が発達させて来た対象が人間に限定して来たことに問題があるとしています。即ち、私達は人間については関心を持って臨みますが、他の生きものについては同種の関心はなかったということです。

もっとも、本書が書かれた西洋文化ではそうなのですが、アジアその他の古来からの宗教文化が残っている地域では若干異なるのかも知れません。アミニズムと西洋世界からは蔑視される自然崇拜の根源には、自然界の生きものの全てに生命の尊厳を認め、時には人間以上に敬う精神風土があるからです。

アダムスキー氏は直接的にこのような古来の日本神道の要素を引用することはありませんでしたが、本項で書かれている生きとし生けるものにあまねく語り合う精緻な想念波動、即ち宇宙的言語の存在に気付くことが必要だとしています。

166 You are related to everything in the cosmos. The language of consciousness is spoken by all, and if you will be continuously aware of this fact the time will come when you will understand every living thing. The leaves upon the trees, the chirp of the birds, the croak of the frog, the hum of the bees - all will speak to you and you will understand life as it manifests through each individual channel. Every slightest sound will become a voice no different than the voice of another human and you shall partake of the consciousness of each thing that lives.

166 貴方は宇宙の中のあらゆるものと関連しています。意識の言語は全てのものによって話されており、貴方がこの事実絶え間なく気付いていれば、貴方があらゆる生きものを理解する時が来ることでしょう。木々の葉、鳥達のさえずり、カエルの鳴き声、ミツバチの羽音、これら全てが貴方に話し掛けるようになり、貴方は各々の経路を通じて生命が現れることにより生命を理解するようになるでしょう。一つ一つのわずかな音が他の人間の声と何ら変わらない声になることでしょうし、貴方は生きるものの意識を分かち合うことになる筈です。

【解説】

自然の中を歩く時、私達は様々な音を耳にします。朝であれば夜明けを喜ぶ鳥のさえずり、昼には草むらの中で鳴く虫の音、夕方には、この時期、日暮蟬の鳴き声など、数多くの音を聞くことができます。

私達は日頃、何故蟬が鳴いているのか、何を訴えているのか等、人間以外の発する声について、あまり関心を抱いては来ませんでした。しかし、本項はこうした各々の生物が発する音も人間が発する声と何一つ異なるものではないとしています。各々の発する声はその音であり、私達自身が関心を持たなかったために、それらを単なる音として長年見なしていたに過ぎないということです。どこかで聞いた話には、フランス語をはじめとする多くの西洋言語には、虫の音を表現する単語が無いとのこと。鈴虫やウマオイ等、古くから日本では虫の音を愛でる文化があり、それらの音の違いを聞き分けていた訳ですが、これらは日本文化が受け継いでいる世界に誇れる感受性の高さと言えるものでしょう。

167 Why is one affected by music, for instance? It does not speak words as a human speaks and still one melody will produce a feeling of great joy, another of sadness, and still another will carry one into a state of exaltation. It effects a person who has never studied the science of harmony just as it affects the one who is a musical master. Music is a universal language for it is interpreted through the Cardinal Sense of Feeling.

167 例えば何故、人は音楽によって影響を受けるのでしょうか。音楽は人間が話すような言葉を語ることはありませんが、それでも一つのメロディーは至福感を作り上げ、他のメロディーは悲しみを、そして更に別のものは聞く者を高揚感の中に導きます。それは和声学を学んだことのない者も、音楽の巨匠である人に作用するのと同様に影響を受けるのです。音楽とはフィーリングの中枢感覚を通して翻訳されるが故に、一つの宇宙普遍の言語と言えるのです。

【解説】

よく見かける光景に、若者の多くが音楽携帯プレーヤーを聞きながら通勤・通学をしている姿があります。音楽に惹かれるこの年代は本項で言う音楽の持つ本質的な特徴に基づいていることが分かります。おそらく感受性の高い年代においては特に音楽に惹かれるということなのでしょう。

音楽については特段学んだことはありませんが、そのメロディーは人間に直接的に作用することは間違いないように思います。心をゆったりさせるヒーリングメロディーから怒りをぶつけるハードロック調まで、その音楽を聞く者に少なからず影響を与えるものです。

宇宙的な音楽と言えば、皆様もよくご存知の映画「2001年宇宙の旅」の中の地球と月との間の宇宙定期船の中で流れるヨハン・シュトラウスの「美しく青きドナウ」があります。大宇宙での楽しい調和した生命賛歌として用いられているものですが、それもアダムスキー氏が何処かであつて、これらのワルツ曲が宇宙的なのだと言っていたことを思い出します。

日頃から良い音楽や楽曲に心を調律して置くことが、自然界から聞こえて来る様々な音に対しても心を開ける人間になれるということでしょう。

168 Why is one very joyful in the springtime and vibrant with life? Why does the feeling of quiet releasement come with the fall of the year? Because nature speaks the cosmic language and man, though he realizes it or not, understands that language and is affected by it.

168 何故、春に人はとても楽しく生気に溢れるのでしょうか。何故、秋とともに、落ち着いた解放感がやって来るのでしょうか。それは自然がその宇宙的言語を語っており、人は認識するしないにかかわらず、その言語を理解し、それに影響を受けているからです。

【解説】

実は私達は知らず知らずの内に大自然の語る言葉、示唆する内容に反応しているという訳です。心が理解しなくても、心とは別の部分がこれら大自然から発せられる印象に応答し、それに従っているということが大切なところですよ。

私達は、自然と対面する時、外観だけ、つまりは肉眼で見える範囲、或いは耳で聞こえる範囲だけで判断しがちでしたが、それらを超えて更に高いレベルでの流れる印象にこそ鋭敏であらねばならないということでしょう。

多くの自然界の生きものは今後来る気象の変化も鋭敏に感じ取って準備を進めているように思います。例えばカマキリの親は冬に卵が雪に埋もれないよう、高い所に卵を産み付けるとか、あるいは災害に逢って沈没する前には船から多くのねずみが船から逃げ出す等、多くの事例があるのではないかと思います。

自然が語る言葉を理解しようと努めることは、いつかご自身にもこれら野生生物の予知能力が育つことにも繋がるものと思っております。

169 If it were not true that a universal language exists how is it possible to train animals to act according to man's command? Even a little insect like the flea can be trained to perform perfectly. It is certainly not the human voice or the words spoken in French, English, Spanish or any other tongue that guides their actions; it is the voice of conscious feeling which speaks more clearly than any audible word.

169 もし、宇宙普遍の言語が存在するということが真実でなかったとしたら、どうやって動物達を人間の命令に従って行動するよう訓練することが可能となるのでしょうか。ノミのような小さな昆虫でさえ、完璧に演技するよう訓練され得るのです。彼らの行動を導いているのは人間の声、或いはフランス語、英語、スペイン語その他の言語で話された言葉ではないことは確かです。それは耳に聞こえる言葉よりも更にはっきり話される意識の声なのです。

【解説】

日本では馴染みのない「ノミのサーカス」のことを指しているものと思われます。

昆虫とのコミュニケーションについては、秋の夕べに庭で鳴く虫の声を愛でながら、眠りに就く等は、現代では風流を超えた贅沢な生活なのかも知れません。その虫達の合唱に耳を傾ける中で、草むらで鳴いている虫と部屋の中でそれを聞く者との間に、虫の声を通じた何らかのコミュニケーションが成立しているということでしょう。互いに分かり合っているという関係です。

さて生きものとのコミュニケーションの例の中で、思い出されるのはアッシジの聖フランチェスコが小鳥と会話したとされていることです。全ての地上の所有物を捨てて創造主に従ったとされるフランチェスコについては日本でも良く知られているところですが、自然界の生きもの達と同一レベルの意識状態にまで昇華できた背景には、それだけ印象の世界にも熟知するまでの修練があったものと思われます。

仏陀をはじめ、多くの聖人が地球を訪れ、教えを授けて来ましたが、そのどの師も生きとし生けるものと何ら隔たりのない会話が出来、周囲の者を驚かせたことが伝えられています。仏様の歩いた跡には花が咲き、様々な聖人が生まれた際には奇跡的な事象が起こったとすること等は皆、生きもの全てがその聖人の存在を知覚し、喜んだことを意味しています。私達は決してこのような能力を開発することを目的とするものではありませんが、学習を続ける内にそのような多くの生きものと自然に意思の交流をするようになるのです。

170 The language of the cosmos is the vibration or frequency of sound, of light and of thought. It is all one voice - the great voice of feeling. It speaks with deep reverberation in the thunder and it speaks in the silence of our deepest repose.

170 宇宙の言語は音、光そして想念の振動ないし周波数です。それら全ては一つの声、フィーリングの大いなる声です。それは雷鳴の深い反響と共に、また私達の深い安らぎの沈黙の中でも語っています。

【解説】

本文中の「それらは全て一つの声、フィーリングの大いなる声」としている点に注目したい所です。言い換えれば、音に表現される声も光も想念波動も、皆振動であり、その振動こそが同じ宇宙的言語に属するとしている訳です。「振動」という要素が「言語」ということになります。

前項等で述べられて来た音楽の普遍的機能もそうですが、このような振動的要素が普遍的言語であるということです。

更に解釈すれば、人が声を発する時には、声と同時に想念波動も放出していることと想われますが、それら音声から想念波動までの振動は皆、発信者の意図を表現している訳です。音声の届く範囲には限りがありますが、想念の方は限界がないということでしょう。このように私達は多重化した仕組みの中で生きているということでしょう。

171 Man's greatest power lies in his recognition of this cosmic language, for when he realizes that every tiniest atom is able to comprehend the language he speaks he will impersonally command with greater certainty and all lesser forms of life will obey him. Man, himself, will rise to vaster heights of accomplishment for he will know the greatest and the smallest and can guide them into united action.

171 人の最大の能力はこの宇宙的言語の理解の中にあります。何故なら人があらゆる最小の原子は人が話す言葉を理解することを理解するや、人はより大いなる確かさで非個人的に命令を下すことでしょうし、人より下位の全ての生きものは人に従うだろうからです。その結果、人は自分自身、達成のはるかの高みに昇ることでしょう。人は大いなるものも小なるものも合わせて知り、それらを結束した行動に導くことが出来るからです。

【解説】

私達一人一人が宇宙哲学の学習の結果、何を達成することが出来るかを本項では明快に示しています。また、そもそも人の能力開発とは何かについても本項は明らかにしています。

私達の身体には60兆もの原子が存在し、それらが小は原子分子の反応から、大は肉体各器官による連携運動等、密接につながりあった活動があり、それによって肉体が維持されている訳でもあります。この活動を支えている原子分子の知性は人知を超えるものがあります。その深遠なる知性と人の心が意思疎通を図ることが出来れば、人はその結果、驚くべきスピードで知識を増やして行けることでしょう。

また、各原子が人の意見に従うようになれば、病が無くなるのはもちろん、着実に好条件の環境が用意され、最高位の創造物の一員として、幸福を享受することが出来ることとなります。もちろん、それ以上にそれらの能力を身に付けた者は各々の才能を開発させ、後から来る他の者への手本となるような業績を残せることになる筈です。

172 We have spoken about this language as it expresses through the medium of sound, which is one of the lower voices of consciousness, but let us now consider thought. Here we have taken a step higher for through this form of communication we have eliminated time and space. Through the medium of thought we are able to speak to another although we are thousands of miles away and the contact is made almost instantaneously. Through this means of transmitting a message we can contact another person even though their body is in the state of sleep. Conscious thought is a messenger that works unhampered by time, space or conditions.

172 私達はこの言語というものについて、意識の低次な声の一つである音の媒体を通じて表現されるものとして語って来ましたが、更に想念を考えて見ましょう。ここでは私達は一段高いステップに立っています。何故ならこのコミュニケーションの形態を通じて私達は時間と空間を取り払っているからです。想念の媒体を通じて私達は何千マイル離れていても他者と話すことができますし、その接触はほとんど瞬間的に行われます。このメッセージを発信する手法を通じて私達は相手の肉体が睡眠状態にあっても相手と接触することが出来ます。意識的想念は時間や空間、あるいは状態に妨げられることなく働くメッセンジャーなのです。

【解説】

言葉として意思が発せられる際には、先ず想念が湧き起こってそれを言語に翻訳した後に音声として発せられる訳です。即ち、音声の発せられる所、想念があることとなります。しかし、音が放送設備等の伝送装置を用いなければ、また、相手も同様の装置を持たなければ遠い所には届かないのに対して、想念は距離に関わりなく、瞬時に伝わります。それは目や耳等の感覚器官にではなく、直接肉体細胞のレベルに伝える為、相手が眠っていても伝えることが出来ることとなります。

想念は意識的である為に、全宇宙に伝わる波動であり、各自に優れた受信能力があれば、距離に関わりなく何処でもその発信者の意図を感受することが出来るという訳です。

なお、本文中に想念が「時間や空間」に関わりなく、伝播するとありますが、この「時間」に関わりないということについては、一度発信した想念は多少減衰するにせよ、以後永遠に空間に反響を続けて残留することを指すと解釈しています。

つまり、各自の発する想念は同時代の人に影響を与えるばかりでなく、将来の世代にも影響を与える力を持っているとも解釈出来ます。かつて地球に居られた、或いは遠く離れた天(惑星)に居る多くの導師(マスター)の発心の恩恵も私達は受けているのではないのでしょうか。

173 It has been said that such form of communication cannot be relied upon but that is untrue. We are being guided constantly by the voice of conscious thought, whether projected from a cosmic source or through a personal channel. There is no man who is not to some extent aware of his power of intuition which is nothing more or less than the voice of consciousness.

173 このようなコミュニケーションの形成は信頼できないとされて来ましたが、それは真実ではありません。私達は宇宙的源泉から投影されたものにせよ、個人的な経路からにせよ意識的想念の声によって常に導かれています。意識の声以外の何物でもない自らの直観力について幾分かも気付いていない者は誰一人居ないのです。

【解説】

そもそも何かについて考える時、発端となるアイデアは何処から来るのでしょうか。通常の私達の心は選択肢があった際にどちらが得か損かを比べるのは得意かも知れませんが、発想自体を生み出すことは苦手です。殆んどの場合、思いつくアイデアは何処からともなく湧き上がるもので、それは意識的想念に由来していると本項では解説しています。

つまりは既に私達は自覚しないままに意識的想念を頼って問題の解決を目指していることになります。

しかし、最もこの意識的想念を活用しているのは芸術家ではないかと考えています。今まで誰も試みていなかった斬新な手法を取り入れて白いキャンバスや木や石の塊から姿形を造り上げて行く過程には、必ず意識的な閃きが必要だと考えています。

そのように自らの身体を通じて、これら意識的な想念を再発信すること、自らを意識の通り道とすることでますます感受性が高まり、併せて作品という結果を収めることで更にその能力を育むことが出来るものと考えます。日頃から私達自身もこれら直観力を大切に取り扱い、その能力を高めることにより、各々の仕事の成果の芸術性も高まることになることでしょう。

174 When the Christ, made the statement, "I and the Father are one" He was professing absolute knowledge of the cosmic language, for the Father is All and how could the Christ be one with all unless he was able to enter into communion with it and acknowledge his relationship to it.

174 キリストが「私と父とは一つだ」と述べた時、キリストは宇宙的言語についての絶対的な知識を持っていることを明かしたのです。何故なら父は全てであり、キリストはその中に一体化して入って行き、自分とそれとの関係を自覚していなければ、どうして全てと一体になることが出来ることになるのでしょうか。

【解説】

2000年以上も前の地球の人々にキリストのこのような言葉がどのように理解されたのか、また今日の人々に対してどのように受け取られているかについて考えて見る必要があります。

言い換えれば、私達がこれから進もうとしているはるか先を既にマスターしていた導師が2000年以上も前に居たということ自体、驚くべきことです。他惑星の文明のレベルは私達の想像できないくらい進化していることを先ずは理解する必要があります。

また、キリストは当時の人々に何かの品物、例えば何らかの工業製品を見せて、進化を促すことはありませんでした。人々と同じ暮らしをし、同じ衣食住を過ごす中で、なお「父」の存在とその持つ偉大な力について人々に語っています。つまりは当時の人々と何ら異なることのない条件の中で、個人の能力として「父」（創造主）との一体の中で、多くの奇跡を人々に見せ、その力の偉大さを示したということでしょう。

このことは機械文明の発達した今日の地球についても状況は同じです。心や意識についての現状の私達の知識は2000年間、何らの目だった進歩は無かった訳です。「私と父とは一つだ」という言葉が、誰でも発せられるようにするには、先ずは各自で「父」に直面し、「父」を信じることから始めなければなりません。

175 The Great Ones who have performed so-called miracles in the controlling of elements could not have done those things if they had not understood the language of feeling and realized that every living thing also possessed the same awareness. Intuition in man, instinct in animal, affinity and attraction of atoms in matter are all evidence of the cosmic language. Every smallest frequency in the whole system is a word spoken by the voice of consciousness and when man has alerted his mortal sense mind to the place where it becomes aware of even the slightest motion of energy he will have torn away the veil of mystery that separates himself from the Cosmic Halls of Wisdom.

175 元素群を制御する中でいわゆる奇跡を演じた偉大なる者達は、もしフィーリングの言葉を理解せず、あらゆる生けるものもまた同じ知覚を有していることを自覚していなければ、そのようなことを成し遂げられはしなかったでしょう。人間における直観、動物における本能、物質における原子の親和性と引力は全て宇宙的な言語の存在の証です。全体体系の個々の最小の周波数は意識の声によって語られた言葉であり、人が自らの死すべき感覚心をほんのわずかな動きのエネルギーにも気付ける場所に注意を喚起する時、人は自分自身を宇宙的な智恵の感覚から切り離して来た神秘のベールを引き裂いていることでしょう。

【解説】

本項は世の中に能力者が起こすいわゆる奇跡というものがどのようにして生まれるのか、その秘密を明かしています。一般には奇跡は神の御業として尊ばれ、成し遂げた本人は聖人や能力者としてこれまで、人々の崇拜の対象となって来ました。

それら能力がどのようにして生まれたのかについて語った例は、本講座以外に私は知りません。

著者は実は私達でも、意識の声に着目し、元素群と同じ感覚になれば驚くべき程の成果を上げることが出来るとしているのです。私達一人一人にとって何故、この学習が必要なのかを本項は明確に語っています。

16 THE CHEMICAL UNIVERSE

176 There is nothing in this world that does not speak the universal language and reveal the secrets of the Cosmos if we are alerted to the frequency of that which we observe. It is through this small world of ours that we can gain our understanding of the cosmos, and such knowledge can come through unceasing research regarding the elements which compose our earth, atmosphere, and the various forms upon the earth.

第16章 化学的な宇宙

176 私達が観察するものの周波数に私達が機敏であれば、この世界で宇宙普遍の言語を語り、宇宙の神秘を明かさないものは何一つありません。私達が宇宙の理解を得ることが出来るのはこの私達の極微の世界を通じてであり、こうした知識は私達の大地や大気、そして地上における様々な形あるものを構成する元素に関して絶え間ない研究を通じてもたらされることが出来るのです。

【解説】

私達が生きる上で最も必要な知識は各元素の声とも言うべき微小な波動から来るとしています。それも単なる紙の上の知識でなく、直接的に各元素が持つ英知とも言うべき知識にアクセス出来ることが重要な点です。

また、注目すべきはその道に至るには自らの心をこのような極微の動きも察知出来るよう鋭敏にして置くことの重要性です。心が騒いでいても、また心の関心事が他に向いていても、この極微の動きには気づきません。

そのように考えると人の価値はこの感受性にあることがわかります。同じ作品を見て、感動を覚える人と何らの関心も示さない人とでは大きな違いがあることがわかります。小さな生き物を見て、自分自身との関係を実感出来るか否かは大きな違いです。昆虫画家、熊田千佳慕氏の絵本の中の昆虫達は、それ自体、人間よりも大きな存在として描かれています。この絵本作家はミクロな世界にも卓越した感性を持っていたように思います。

177 The Cosmos is ever active, constantly changing, and regardless of how little interest the average layman has in scientific subjects there is not one individual in the world who is not conscious of that ceaseless activity which is going on about him every moment. The growth of flowers and trees, the falling of rain and snow, the evaporation of liquids, the expansion of metals under the influence of heat and their contraction under cold, the fermentation of vegetable matter, the oxidation of minerals, the perpetual construction and disintegration of forms cannot possibly escape the attention of even the least observant of men. If we were to carefully gather all the gases that rise from a burning log and the ashes that were left after the fire had done its work we would find that nothing had been lost in the process of transmutation. There is no such thing as total destruction. The religionist looks more or less indifferently upon all of this changing phenomena, labels it the "work of God" and accepts at its surface value but the men of science have gone beyond the surface and uncovered the interesting and illuminating fact that life as a whole is the effect of an eternal process of chemicalization and that in the knowledge of Cause chemistry lies the victory over life and death, creation and recreation, joy and pain. The universe is nothing more or less than an immense chemical laboratory in which elements are combining constantly to produce the innumerable forms of expression or manifestation. The water, fire, earth, air, and the inconceivably fine ethers above the atmosphere of the earth are all chemical compositions. Light and darkness, love and fear are all chemical reactions.

177 宇宙は永久に活動的であり、常に変化し、平均的な通常人が科学的課題に対して如何にわずかしか関心を持たなかったとしても、自分について毎瞬起こっている休むことのない活動について意識しない者は、この世界に誰一人居ません。花々や木々の生長、雨や雪の落下、液体の蒸発、熱の影響下の金属の膨張や寒さの中でのそれらの収縮、植物性物質の発酵、形あるものの永久的な形成と分解は皆、どんな鈍感な観察者の注目をも見逃されることはあり得ません。もし、私達が燃える丸太から立ち上る気体を全て集め、火がその仕事を終えた後に残った灰を注意深く集まるなら、私達はその変質過程において何一つ失われたものが無いことに気付くでしょう。完全な破壊というようなものは存在しないのです。宗教家はこの変化の現象の全てを多少とも無関心に眺め、それを「神の御業」とレッテルを貼り、表層的な価値を受け入れますが、科学に根ざす人はその表層を越えて、全体としての生命は化学作用の永遠なる過程の結果であることや宇宙的化学の知識の中に生死や創造と再生、喜びと苦痛を超えた勝利があるという興味深く啓発的な事実を発見して来ました。宇宙空間とは諸元素が無数の表現の形あるものや現出物を常に結合させている巨大な化学実験室以外の何物でもありません。水、火、土、空気そして地上の大気の上にある思いもよらない微細はエーテル体等、全ては化学的化合物です。光と闇、愛と恐怖も皆、化学反応なのです。

【解説】

万物が流転すること、宇宙は絶え間ない変化・活動の中にあることは大空に湧く雲が刻々形を変え、瞬く間に移行行くことから知ることが出来ます。本項の主題である物質の化学変化は、これら諸々の活動が外観上は消失したり、破壊されるように見えるとしてもその実際は、内部の元素同士の結びつきが変化しただけで、これら化学的変化が宇宙を支配していることを意味しています。

このような変化は人間についても言えることです。私達の肉体は心が休止していても休むことはありません。一刻一秒休みなく身体組織は所期の役割を果たしています。また、私達が毎日摂取する食べ物や毎回呼吸する空気は私達の身体を通り過ぎる元素とすることが出来ます。それらは一時期、人体を構成し、再び排出されて別の生き方に進んで行く元素達です。

私達自身もそうする中で様々な体験をしながら、進化の道を歩むという訳です。

本項の主題である宇宙におけるこうした変化の源は原子間の結合、分裂作用、即ち、化学作用なのだとことです。本項は、私達は表面的な現象の奥にあるこれらミクロのより本質的な活動に目を向けなければならないと教えています。私達の身体を介して様々な元素が通り過ぎて行きますが、それら元素達への感謝の気持として出来る唯一の礼儀は、私達自身が良い想念、感謝の気持を保つことや各元素を優れた体験を経験させることにあることが分かります。

178 Even our thoughts are of chemical composition. We are well aware that our bodies are composed of numerous chemicals; we are also aware that our bodies will not act except when permeated with a conscious thought. When a man is in a state of unconsciousness his body is inactive. It is true that the organs of the body continue to function due to the slight chemical reaction which takes place between the composing cells of the structure but even this will not continue indefinitely. The movement of any body will not take place without a chemical reaction of the elements composing the body, for it takes chemical reaction to produce energy. Potential force exists as the Father-Mother Chemical within each atom of matter but it is the reaction of these elements that produces what is known as kinetic energy which is necessary to the service of any form-action. Only another chemical will produce chemical reaction and the fact that thought is necessary to the action of the body means, then, that thought itself is chemical. For instance, when a person is in a peaceful state of mind he can partake of food and his body will assimilate the minerals without the least opposing reaction, but eat a good meal and then take into the body a highly concentrated thought of hatred or fear - the reaction of the chemicals will very soon demand either the doctor or a good dose of bicarbonate of soda. Fear, hate, selfishness, envy, etc., are elements which produce violent reactions when incorporated with the chemical contents of the body. A fit of anger, which is nothing more or less than a chemical combustion, will tear down the body structure to a surprising degree and produce what is known as pain. If the scientist in his laboratory combines certain elements according to the law of affinity and produces a harmonious result he is rewarded, but if he mixes the wrong chemicals he may blow himself to bits. Just as logs placed upon a fire serve their purpose and their elements are changed but not destroyed, the original elements of any form are eternal. A place where water has been may become dry but the hydrogen and oxygen which compose the liquid go on forever and may at any time return into form. It is the action and reaction of chemicals that produce the personality which consequently must be ever changing, but the soul which is the sum total of the original elements remains forever the same - indestructible and eternal.

178 私達の想念さえも化学的組成物です。私達は私達の身体が無数の化学物質から構成されていることを良く知っていますし、私達の身体が意識的想念で染み込まない限り、行動しようとしなくても気付いています。人が無意識の状態にある時、その身体は不活発です。それでも身体の諸器官は構造を構成する細胞間で生じるわずかな化学反応により機能を継続することは確かですが、これさえも無期限に続くことはありません。如何なる身体の運動も身体を構成する諸元素の化学反応抜きに起こることはありません。何故ならエネルギーを作り出す為には化学反応が必要だからです。各物質の原子の中には父母性の化学としての潜在力が存在しますが、如何なる形式の活動奉仕にせよ必要な動的エネルギーとして知られるものを作り出すのはこれら諸元素の反応なのです。唯一、別の化学物質が化学反応を作り出し、身体の行動に想念が必要だという事実は、想念自体が化学物質であることを意味します。例えば、人が平安な心の状態に在る時、人は食物を摂取し、その身体はわずかの反対する反応もないまま鉱物を同化するでしょうが、良質な料理を食べ、その後、憎悪或いは恐怖で高濃度に集中した想念に身体を置いた場合、化学物質の反応は直ちに医者やかなりな量の重曹を必要とさせることでしょう。恐れ、憎しみ、我がまま、妬みその他は身体の化学成分に一体化した暴力的反応を作り出します。怒りの発作は化学的燃焼以外の何物でもなく、身体の構造を驚く程、引き裂きますし、痛みとして知られるものを作り出します。もし、実験室内の科学者が親和の法則に従ってある種の元素を組み合わせ、調和的成果を作り出せば報われますが、誤った化学物質を混ぜれば、自分自身を粉々に吹き飛ばすことになるかも知れません。火に置かれた丸太がその目的を果たすように、それらの元素は変化を受けますが、破壊はされず、如何なるものも元の元素は永遠です。水が有った所は乾くかも知れませんが、水を構成する水素や酸素は永遠に継続し、いつかは再び形あるものに戻って来ることでしょう。常に変化し続けることになる個性を作り出すのは化学物質の作用であり、反応ですが、元来の元素の全体合計である魂は永遠に同じまま、破壊されることなく、永続するのです。

【解説】

私達一人一人が動く化学工場、化学実験室だという訳です。各種の原料が様々な分野から搬入され、各々の受け入れ装置を経て体内に導入されるや、様々な設備が所定の反応操作を実行し、それぞれの中

間製品を作り上げます。その中では古くなった部品の交換に活用されたり、設備自体を運転する為のエネルギーも生み出すこととなります。（「ご飯一杯150g、約250キロカロリー」は食物の燃料表示です）

このように私達の体内で起こっている作用は化学反応なのですが、私達の発する想念も化学的組成を有していると解説されています。現代の脳科学でもセロトニンをはじめとする脳内物質が人間の感情に関連していることを明かしていますし、精神科で処方される治療薬にも様々な化学物質が用いられているようです。ある物質が精神状態を鎮めたり、逆に興奮させたりするという訳です。

私達の日頃の精神活動に伴って、様々な化学物質が体内で生成され、それらが具体的な身体細胞に影響を及ぼしているということでしょう。

まさに私達自身、動く実験室であり、毎時間の自分の心の状態が身体やその他の環境にどのような影響を及ぼしているかを実感することが大切です。私達が出来るとは、自分の心にどのような想念を取り入れるかであり、良い結果をもたらすためには、常に自らの心の状態を監視し、本来の方向性を保つ必要があるのです。

17 ANCIENT WISDOM OR MODERN PROGRESS?

179 There is some strange characteristic of the human mind that seems to find a great satisfaction in glorifying the past. The Oriental has expressed this characteristic in his ancestor worship; the Occidental has always had its hero-worship for deceased greatness; the patriarch of all nationalities sits back in his easy chair and reminisces on "the good old days." Perhaps it is that time assuages the actual realities of the past and leaves only the colorful pictures of self-created images. Perhaps it is that distant fields look greener on which ever side of us they lie, but, in any case, we find so many people living in the past that we wonder what good the present is doing at the present time.

第17章 古代の知恵か現代の進歩か

179 人間の心には過去を賛美することに非常に満足を感じるような何か奇妙な性質があります。東洋では自分の祖先を崇拝することにこの特徴が表わされていますし、西洋では死去した偉人に対し常に英雄崇拜があります。全ての国の民族において長老はその安楽椅子に背を寄りかけて「古き良き時代」の思い出にふけています。おそらくは時間が過去の実際の現実を和らげ、自ら作り上げた華やかな映像のみを残しているということでしょう。おそらくは何処にあらうと、遠くの畑は緑がより深く見えるでしょう。しかし、いずれの場合も私達はあまりに多くの人々が過去に生きている為、私達は現代が何か良いことを成していないか不思議に思ってしまう程です。

【解説】

これまで学んで来た事柄の一環として何故、ここに古代の知恵について章が設けられているか、私達学習者は一度考えて見る必要があるように思います。その考察は、いずれ後日、述べることとして、ここでは人間の特徴として古きを尊ぶことについて述べられています。

人間も成長期を過ぎ、人生の後半にさしかかると、昔を懐かしく思うものです。もちろん、今だけ良ければという刹那的な生き方よりはましなのですが、過去に心を奪われて生きることにも問題があります。

本項は過去が美しく見えるのは、時間経過とともに不都合なことが忘れ去られ、本人にとって美しいことだけが記憶として残っているからとしています。

実際には過去は現代よりもより問題が多かった筈です。私達は現代更にはこれからの未来に向けて生きることを選択すべきです。現実を逃避し、仮想の世界に生きることは、宇宙を直視する生き方とは反するものです。日々新しい体験、新しい想念を取り込むことが若さの維持にもつながることでもあります。

180 Among many religious groups, and particularly those of an occult nature, we hear much about the great wisdom of the ancients. "If you expect to evolve to a state of masterful action," we are told, "you must go back and study the teachings of the old." It sounds a little twisted, doesn't it? To evolve we must go back! But why? Evolution is an expansion, a growth. Does the tree in its process of attaining maturity grow backwards into the roots? If it did I am sure we would never taste its fruits. I suppose no man ever appreciates the thing that he has in his hand, and while it is right that he should reach out for something new let it be an advancement, not a retrogression. Why dig up the peaceful past - it has served its purpose. It brought us to the present day - let it rest. The works of the past cannot serve us now and so far as the laws of the past are concerned we are now using them, for there is in the whole cosmos only one principle of action. It is used in the billions of varying manifestations but itself never changes. The only way in which we can prove the principle is by the effects produced and surely we are producing effects on a much vaster scale than did the ancients. In those days if a man discovered something of use to humanity he was considered divine and his revelation a miracle. Today we have a new invention almost daily and think nothing of it.

180 多くの宗教グループの中で、とりわけ魔術的性質を持つものの中にあつて、私達は古代人達の偉大な知恵について多くを聞かされます。「もしマスターの行動状態にまで進歩したいと思うなら、立ち戻つて昔の教えを学ばなければならない」と教えられます。しかし、それは少しねじれた考えではないでしょうか。進歩する為に立ち戻る必要があるなどということがです。しかし何故でしょう。進化は拡大であり成長です。成熟を達成する過程にある樹木が根の中に向かって下に伸びるのでしょうか。もし、そうなら私達はその果実を味わうことは出来なくなることは確かです。私は誰も自分が手にしているものを享受していないのではないか、また何か新しいことに手を伸ばすことが正しい時には進歩があるべきで、退化することはありません。何故平穩になっている過去を掘り起こすのでしょうか。それはその目的を務め終わっているのです。それは私達を今日にもたらしたのであり、休ませましょう。過去の業は今日の私達に仕えることは出来ず、過去の法則に限って、私達はそれらを用います。何故なら全宇宙の中には唯一つの行動原理しか存在し得ないからです。何十億もの異なる創造物に用いられていますが、それ自体は決して変化しません。私達がその法則を証明できる唯一の方法は、作り出された結果によってであり、確かに私達は古代人が成したより、はるかに広いスケールで結果を作り上げています。当時、もし人が人類に有用な何物かを発見したとすれば、その者は聖なる者であり、その者の発見は奇跡と見なされました。今日、私達は毎日のように新しい発見をしますが、それについては何ほども考えはしません。

【解説】

先日、機会があり、佐倉（千葉県）の国立歴史民族博物館に立ち寄りました。当館は古代から近代までの人々の生活の様子を発掘物の展示とともに再現しています。中には平安時代の下級役人の日記や当時の権力者、藤原道長の備忘録等、実物の資料や生活環境の模型が展示されており、当時の生活がよく分かります。その中でも目立ったのは当時の貴族の屋敷の大きさです。庶民が長屋にひしめく中で、大きな屋敷の中には優雅な貴族社会があった訳です。

このように人々の生活には大きな格差があり、各階層の壁は本人の努力で越えられるようなものでは無かったと言えるでしょう。現代社会は様々な問題はあるにせよ、当時と比べれば格段に進歩していることには誤りありません。仮に何か特定の人物が優れていたとしても、遠い昔の社会が良かったとは言えないのです。

私達は科学的視点を持って、宇宙をその物質から精神作用に至るまで統一的に理解しようとしています。その際に重要なのは、現在起こっている状況に注視することであり、今を大切にすることです。想念は宇宙あらゆる所を同時に湧き起こっていることを理解することの方がはるかに重要だと言うことでしょう。

181 "We have not yet been able to discover the whole greatness of the Ancient Wisdom," we are told. Well that may be true, but I dare say if a few of the ancients suddenly found themselves in one of our big cities today they would stand aghast at the miraculous works of our people. They would probably assume that they had reached some World reserved for especially advanced minds, and after having lived here for a while and trying to adjust themselves to our present understanding would decide that they were not of the elect and must have stumbled into this amazing place by mistake.

181 「私達はまだ古代の知恵の偉大さの全容について発見し得ていないのだ」と私達は告げられて来ました。それは真実かも知れませんが、敢えて言えば古代人の何人かが突如、今日の大都会の一つに身を置いたとすれば、彼らは私達の人々の奇跡的な業に驚嘆して立ち尽くすでしょうと言いたいものです。彼らはおそらく自分達が特に進化した心の持ち主のために用意されていた世界に到着したと思込みますが、しばらくここで暮らした後に、自分達自身を私達の今日の理解に適合させた後は、彼らは自分達が選ばれたのではなく、誤ってこの驚くべき場所に転がり込んでしまったと判断することでしょう。

【解説】

確かに過去に素晴らしい導師がこの惑星を訪れ、人々に教えをもたらす偉業を成したことでしょう。しかし、それだからといって、古代社会が現代より優れていたとは言えないのです。日本でも遠い古代に憧れを抱く人も多いのですが、それはみやびな王朝文化ややんごとなき貴族階層の一握りの恵まれた人達の生活を憧れているに過ぎません。

社会の隅々にまで目を向ければ、明らかに現代の方が格段に優れていることが分かります。同様に私達が進化した他惑星の一つに連れて行かれたとすれば、同様の驚きに見舞われることも間違いありません。これは地球上の国々に行った場合も類似したギャップを感じることも同様です。

本項の主旨とは少し外れますが、人間というものの、時々とは異なる環境に身を置いて見ることも必要に思います。外国で体験した暮らしと現在の自分の生活とを比較して、学ぶことも多いからです。他の進化した惑星人が時折、ひっそりと地球のような惑星を訪問するのも、その理由の一つではないかと考えています。

182 Why should we base our life of today upon ancient philosophies? Should we enjoy going back to the ox-cart? I am sure that a great percentage of the population of the world would starve with only ox-cart transportation. Some of our so-called spiritual students are starving on the meager supply of mental food that is carried to them on the slow-moving vehicle of ancient myth and ritual. We are moving faster than we have ever done and we are compelled to keep up with our existing state of progress. Our mental expansion must coincide with and support our mechanical progress. Those who live too much in the past ask why we are rushing and where we are going; may I answer in this way, we do not need the aimless rushing but we must keep pace with the fast moving events of life.

182 何故、私達は今日の私達の生活を古代の哲学の上に基礎づけるべきなのでしょう。私達は牛車に立ち戻ることを楽しむべきなのでしょう。私は世界の人口の大部分が牛車の輸送によっていては餓死してしまうことを確信しています。私達のいわゆる霊的学徒はゆっくり動く太古の神話と儀式の乗り物に乗って来る精神的食料の貧弱な供給に対し飢えています。私達はこれまで成したよりも速く動いており、私達は現在ある進歩に追いつかざるを得ないのです。私達の精神的拡大は私達の精神的進化に呼応し、それを支えなければなりません。過去に対し、余りにも多くを生きている者達は、何故私達が走っているのか、何処に私達が行こうとしているかを問います。それに対して私はこのように答えても良いのでしょうか。私達は無目的に急ぐ必要はありませんが、生命のすばやく動く出来事にペースを合わせ続ける必要がありますと。

【解説】

本項で興味深いのは、昔の牛車の時代に戻ったら、多くの人々が深刻な食糧難に陥ることに加えて、私達の精神的な食料にも飢えるとしていることです。

言い換えれば、私達が生きて行く上で、肉体を養う材料の他に、精神を育む材料も必要としているということです。

今日では自宅のパソコンから国を問わず様々な知識を知ることが出来ますし、瞬時に遠隔地にメールをすることも行われています。こうした社会環境は従来にはなかったことで、例え一部の特出した人物による教えはなくても、各自の意欲さえあれば、必要な情報源にアクセスすることは可能になって来ました。

このように考えると、時代は確実に進歩している訳で、私達は現代社会の動きについて行く必要があります。本講座もこのような精神を育む材料の一つになればと思う次第です。

183 There are those who prophesy that this civilization is nearing its destruction because of its lack of wisdom. Well perhaps, but what would it profit us to go back and study the wisdom of the ancients? You could say that the ancient civilizations did not heed the words of wisdom that were given to them, and that is true. Lemuria, Atlantea, Egypt and Rome, were all great civilizations and they are gone. This is a new day with new problems and the door to the Cosmic Storehouse of Wisdom and Knowledge is wide open for each individual to enter. Our present problem is to maintain our balance; living in the world of effects and understanding causes.

183 この文明は知恵の不足から破滅に近づいていると予言する者達があります。たぶんそうかも知れませんが、しかし、私達が立ち帰って古代人の知恵を学んだからといって、私達に何の利益があるでしょう。貴方は古代の文明は与えられた知恵の言葉を心に留めなかったとも言えるでしょうし、それは確かです。レムリア、アトランティス、エジプトそしてローマは皆、大いなる文明でした。そしてそれらは過ぎ去ったのです。新しい日には新たな諸問題があり、英知の宇宙的倉庫への扉は入る人、一人一人に対し広く開いています。私達の現在の問題は私達のバランスを保つことです。結果の世界に生きながら、因を理解することです。

【解説】

社会全体を見る限り、決して「昔は良かった」ということはありません。各自がそう思うのは以前に本文に書かれていたように都合の悪い記憶が薄れることに他なりません。

本項では特段、歴史学の意義を否定する訳ではないのですが、私達は前進することに意義があることを強調していることに注意が必要です。宇宙には今だけがあり、その今なるものを造るための因が未来として先行しているとでも言うべきなのかも知れません。

その中で私達は毎日、地球が回転するように、毎日、新しい課題に直面して行きます。その課題を逃げることなく受け止めて、確実に処理することが求められています。その際、問題に対する当面の解決策等については、宇宙の英知が用意してくれているとも述べられています。結果としての問題に振り回されることなく、因の世界、印象の世界も同時に意識することで、的確な解決策にアクセス出来るということも重要なところですよ。

私達は今を生きること、現在の恵まれた環境に感謝し、問題の解決に自分自身が役立てることに感謝したいものです。

お知らせ [2011-09-16]

暑さ厳しい残暑が続いていますが、皆様お元気ですか。

私の方はこの連休を利用して、来週 2 1 日頃まで、伊豆七島に出掛ける予定でおります。

その間、記事の更新をお休みさせて頂きますので、ご了承下さい。

184 The Hindus have a saying to the effect that the more wood you pile on the campfire at night the greater becomes the illumination but greater also becomes the circle of surrounding darkness. Our present wisdom like the light of the campfire is great and the more we learn the greater becomes our scope of perception regarding the possibilities we have not yet deciphered. The more knowledge we acquire the more we know how much there is yet to learn. Our field of perception has become so vast that the encircling darkness is almost appalling but the very fact that we have such a vast perception of unproven things means that they shall one day be proven. We have had the perception of ships traveling through space to other planets and that day is not too far in the distance when this becomes a reality just as jets and airplanes are now a common means of conveyance.

184 ヒンドゥ教には要約すると、夜キャンプファイアにマキを積み上げる程、その輝きは増すが、周囲の暗闇の輪もまた大きくなるという格言があります。そのキャンプファイアの光のような私達の現在の知恵も大きなものですが、私達が更に学ぶ程に、私達がこれまで解読して来なかった可能性について私達の展望はより大きくなります。私達が身に付ける知識が多くなる程、私達はこれから学ぶべきことが如何に多いかを知るのです。私達の知覚分野がそれ程に広がると、取り巻く暗黒はぞっとする程のものとなりますが、私達がこのような広大な未検証の物事を知覚していることは、それがいつの日にか証明されることを意味しています。私達は宇宙空間を他の惑星に向けて航行する宇宙船を知覚したことがありますし、今日ジェット機や飛行機が皆の輸送手段であるのとまさに同様に事実になる日は遠く離れたものではありません。

【解説】

知識の深まりは、また同時に未知の領域の広がりでもあります。知れば知るほど不思議な事象、生命の神秘に触れることとなります。一方、正反対に何らの関心を持たない者は、そもそも知ろうとする意欲も薄れ、小さくまとまっただけの人生に終わるとも言える訳です。

私達は「同乗記」の中で進化した他惑星人達が移動実験室を持っていたり、宇宙空間の観測を怠りなく続けている点にも留意しておきたいものです。地球の私達から見れば、遥かに進歩した彼らが更に研究を続けているということが大事なところですよ。

それほどに宇宙というもの、世界というものが奥が深く、かつ究明してもし尽くせない精妙な仕組みであるということです。

これら遠大な道筋に対し、著者は優しく、ビジョンはいつの日か必ず実現すると私達を励ましています。私達がこうあれと思い描くことで、イメージは因に作用して、以後は実現の方向に向けて動き出すことを私達に教えている訳です。

お詫び [2011-09-25]

台風の影響で帰宅が大幅に遅れてしまいました。

講座の更新は週明けから再開いたしますので、ご了承下さい。

185 We hear a great deal about the alchemists of the early days - Paracelsus, for instance, who was supposed to have transmuted baser metals into gold. "Miraculous!" the people say. Our scientists of today are able to produce gold from other substances; but the process is too costly to be of practical use.

185 私達は古代の錬金術師達についてとても多くのことを聞いています。例えばパラケルススは卑金属を金に変えたとされています。人々は「奇跡的だ」と言います。今日の私達の科学者達も他の物質から金を作り出すことが出来ますが、その方法は実用的使用にはあまりに費用がかかるのです。

【解説】

本項のテーマである「古代の知恵」の一例として錬金術を挙げています。私自身、パラケルスス（1493-1541）について知る者ではありませんが、その後の技術の開花や社会の発展を見れば、これら錬金術も、一部の能力者の個人的利益の為に行われたようで、社会や技術の発展には寄与することはなかったのではないかと考えています。

古代の知恵の多くは一部の能力者だけが温存し、他の者にはその秘密を教えず、その結果は普及することなく、朽ち果ててしまったものと思われれます。その背景にはこれらの出来事を個人の超能力が成せる業だとし、個人崇拜に利用していたことがある訳で、今日の超能力ブームも古代と何ら変わらない構図となっています。本来、何時でも、誰でも実行出来ることを目指すのが科学的手法であり、「生命の科学」についても同様な趣旨で設けられたものと推察しています。

186 The priests of the ancients were the only scientists of that day and whatever they achieved was used for selfish purposes of dominating character. It is said that they could prepare chemical substances which when used as incense would put an individual into a trance state, but what benefit was actually derived from such practice? No doubt there was quite a bit of benefit to the priests, for while their subjects were under such a spell they could be very easily relieved of all of their possessions and the act laid at the door of the most convenient gods.

186 古代の僧侶達は唯一の科学者でしたし、彼らが何を達成したにせよ、それは支配的性格の利己的な目的に用いられたのです。彼らは香料として用いられると個人を恍惚状態に陥れる化学物質を調製することが出来たと言われています。このような行為で何の恩恵が得られたのでしょうか。無論、僧侶には大変大きな恩恵がありました。何故なら彼らの臣民はこのような魅惑の下、容易に自分達の持ち物全てを捨て去り、その最も都合が良い神の扉に身を横たえたからです。

【解説】

今日でも類似した傾向がありますが、救いを求める人々に対して、様々な「能力」を誇示することで信頼を得て、遂にはやって来る人々から金品をせしめる輩も多いものです。まして、古代においては知識の少ない人々に対し、僧侶は知識において優位な立場にあり、人々を支配することも出来た訳です。中世の宗教は国家体制の一部でもありました。

これに対し、本項では触れられていませんが、誠実な真理の学徒も同時に居た訳です。キリスト教ひとつをとって見ても、民衆を支配する規範として国家体制の維持に使われる一方で、市街地から離れてひっそり建つ修道院の中には、ひたすら創造主と自分自身を見詰めなおす生活も続けられて来ました。「イエスに倣いて」(イミタチオ・クリスティ)はその代表作であり、修道士達が留意すべき事柄が丁寧に記載されています。

この宇宙問題についても同様で、真面目な取組みがある一方で、利己的な目的、更には妨害の目的を隠したまま近づいて来るものも多いように思われます。

187 Today our chemists make practical use of their knowledge. They produce new metals to meet the needs of increasing mechanical achievements and are harnessing the forces of nature to facilitate the turning of the wheels of progress. They whom the religionists have called godless men are today becoming the masters of the elements by acknowledging that One Principle governs all things.

187 今日では我々の化学者達は自分達の知識を実用的な用途に用いています。彼らは機械的性能を高める必要性に応える為、新しい金属類を作り出していますし、進歩の歯車の回転を促進させる為、自然の諸力を利用しています。彼らは宗教主義者からは神を否定する者達と呼ばれている一方で、唯一の法則が万物を支配することを自覚することによって、今日、諸元素の支配者になりつつあります。

【解説】

今日レアメタルやレアアースと呼ばれる様々な希少元素を加えることで、性能が高まる現象が様々な分野で実用化されていますが、本項はそれらの事象を述べているものと思われます。

詳しい知識はありませんが、最近の化学は分子構造から対応する触媒その他を設計するような物質を統制する段階にあるようで、現代の地球人は物質の支配者になりつつあります。

これら物質を熟知するようになった人類に対して、旧来の宗教主義者からは物質をあやつって神を冒瀆するものと非難される傾向があります。もちろん、家畜が人工受精によって新しい個体を産ませ食用に生育させる等、私達が行っていることは人間の都合によって全ての生きものを利用していること等については、本来、責められるべきものだと思います。

しかし、分子・原子レベルにおいては、人間は創造主の法則をよく学び、その結果、物質支配の手法を手に入れていると言えるようです。このような手法に対して、本項はその宇宙普遍法則が厳に存在することを自覚し、その普遍法則を前提に全ての事象を観ることが大変重要だとしています。

188 We are expecting an era of brotherhood among men of this earth and it is science that is making the greatest strides towards this accomplishment by unveiling the actual laws of action. Science is working under the law of relativity while religion is working under the law of divisions. The work of scientific research carries one into such a vast conception of the universe that there is no room for egotism, bigotry, fanaticism or intolerance. The individuals who really study creation are so absorbed in its unlimited activity that they become indiscriminating. They regard all men, whether they be black or white, as brothers and grant them the right to believe according to their ability to understand. They are not bound by the limited concepts of cast or creed or dogma but are always open to new revelations. They do not allow even the human form, itself, to block their path of research in the field of knowledge, for they are willing to sacrifice their own bodies for the benefit of other researchers and mankind as a whole.

188 私達はこの地球上の人々の間に兄弟愛の時代が来ることを予想しており、行動の実際の法則を明らかにすることによって、この達成に向けて大きな歩幅を成しているのは科学なのです。宗教が分裂の法則の下に作用しているのに対して、科学は相関性の法則の下に作用しています。科学的探究の作用は人を広大な宇宙の概念に連れ行き、自分本位や頑固さ、熱狂や偏狭の余地はありません。創造を本当に学んでいる各個人はその無限なる活動に没頭するあまり、その者達には差別が無くなります。彼らは全ての人間が黒人であれ白人であれ、兄弟であると見ますし、それらの理解力に応じて、彼らを容認します。彼らは階層や信条、或いは教義の限られた想念に制約されることなく、常に新しい発見の受け入れに寛容であり、率直です。彼らは人体でさえも知識の分野の研究を妨げることはさせません。何故なら、彼らは進んで自らの肉体を他の研究者や人類全体の利益の為に捧げるからです。

【解説】

一つ一つの細胞の中にある遺伝子はその個体を他のものから識別する程の詳細な情報を持つこと、即ち、肌の色、容姿の差などはこれら遺伝情報の極く一部にしか過ぎず、人と猿の間の差異もほんのわずかとさえ言われる程、これら遺伝情報は莫大な情報が秘められています。あらゆる生きものが皆、共通した遺伝分子を持つ中で、私達生物は文字通り兄弟姉妹の関係にあることとなります。

そうなる生物の中の差異は無くなる一方、身体の一部も見かけこそ違うものの、細胞レベルでは何一つ変わるものはないのかも知れません。外見上の識別は生命活動の上では何らの意味もなくなり、美しいもの、醜いものの区別も無くなる筈です。

一方、宗教は、天と地、善と悪の区別を助長し、敵・味方の識別を人々に求めています。その結果、経緯はとにかくとして、今日では世界中の争いの大半が宗教に関わっているということも出来ます。本来、人々に広い視野と寛容さを与えるべき宗教が、本来の役割を果たしていないと本書の執筆当時著者が指摘していたという訳です。

それから半世紀が経過し、再び私達は神秘的なもの、目に見えないものに憧れる気風が生まれつつあります。中には本物の志向もありますが、一足飛びに超能力を得たいという粗雑な気持から、あるいは現実逃避の心から生まれ出ているものも多いのではないのでしょうか。本項から分かるように、科学の発見から分かることを自分の視野に生かすこと、不安定な心に代わって冷静な法則の目が必要が必要です。

189 Science has progressed very rapidly in the last few years. Now, with the aid of fine instruments, the I.G.Y. research and the satellites, the scientists are able to delve deeper and deeper into the realms of Cause. They are beginning to understand and use Nature's Creative Mathematics; which is, one and one equals three. Old accepted theories are being replaced with more factual knowledge as the field of research broadens.

189 過去数年の間に科学は急速に発展しました。今や精密な装置やI.G.Y.(訳注：国際地球観測年)での研究、そして人工衛星のお蔭で、科学者達は宇宙の領域の奥深くまで掘り下げることが出来るようになりました。彼らは自然の創造的数学を学び始めています。その創造的数学とは $1 + 1 = 3$ というものです。古くから容認されて来た諸理論は研究分野が広がるにつれて、より事実に基づく知識に置き換えられています。

【解説】

文中の国際地球観測年（1957－1958）は地磁気やオーロラ、電離層や太陽活動、南極観測など、各国が互いに協力して多方面から地球を観測したものです。日本では「宗谷」による南極観測が行われていた頃のこと、著者は地球の文明にとって飛躍的に進化を遂げるきっかけになったと解説しています。

国際地球観測年の本来の目的は何処にあったのかは知りませんが、同乗記にも出ている通り、私達の太陽系の来るべき変動期に備えた一連のプログラムの一つであったのかと推測しています。

期間中、米国ではバンカードロケットによる宇宙探査が始まり、その後の有人月探査につながって行きます。

日本では、今日では月探査衛生の「かぐや」や小惑星イトカワからサンプルを採取して帰還した「はやぶさ」等、宇宙探査の技術も独自の歩みを見せているところです。

このような宇宙への関心が向かうことは、宇宙空間における様々な創造作用に直接触れることでもあり、人類により広い概念を与えることになります。今日、GPS衛星によりカーナビをはじめ、様々な恩恵を受けており、私達は「天と地」等、古い古代の概念から脱皮して、宇宙時代に生きているということが出来ます。

190 We can say that scientific research is allowing the people of the world to have a closer view of Cosmic Reality.

190 私達は科学的研究が世界の人々に宇宙の現実性についてより綿密な見識を与えていると出
来ます。

【解説】

本章の課題である古代の知恵に対し、現代の科学が宇宙の理解という面でも遥かに役立っているとして
います。

もちろん、伝統の文化は大事にすべきもので、故事に由来を置く伝統民芸はその民族の由来にも通じま
す。また、古来より営々と引き継がれた事物も大いに研究に値するでしょう。

しかし、宇宙を理解し、全てに共通して働く原理・法則を理解する上で、科学はそれ以上になくはな
らないものです。科学が基礎とする法則は時間も場所にも影響されず、差別なく働きます。その法則を
見出し、その意味を深く考えること、その法則に与える創造主の想いを汲み取ることが重要なのです。

私達一人一人の生命は永遠に続くにしても、身体はmortal（死すべき）と称されるようにはかないもので
す。限られた時間しか継続しません。その中で科学の成果を引き継ぐ為には明らかになったことを文字
に残し、後続の者に引き継ぐ必要があります。宇宙についての理解も、科学の手法と同様、自ら発見し
た法則性を文字として記録し、後に続く者にプレゼントすることが必要なのではないのでしょうか。

191 The science that we speak of here has reference to the abstract scientists who work from cause to effect; not the dogmatic orthodox ones who refuse to see beyond the effective world.

191 ここで私達が言う科学とは、因から結果へと研究する理論科学者に関連して述べており、結果の世界の先を見ることを拒否する教条的な正統派を指すものではありません。

【解説】

科学とは個別の事象について綿密に分析し、その中で得られた法則性を明らかにすること、更には万物一般に適用できる原理を見出すことだと考えます。そういう意味では、哲学も科学も同じ方向を向いていると言えるでしょう。とかく科学は全てを実証することを求めますが、他方では、その原理が持つ意義についてまで、考察を深めることは希です。

例えば、雪は何故白いかという設問に対して、急激な熱の吸収を抑え、災害を防いでいるという意義にまで、考察を深めることは通常、「科学的」とは見なされていませんが、宇宙を統治する原理を探求する上からは、十分納得できる解釈例となる訳です。本項で言う理論科学は、更に奥深い原理の存在意義にまで遡ろうとする意欲がある取組み姿勢を指しているものと思われます。

相対性原理がアインシュタインによって提唱され、その後の私達の宇宙に対する見方を変革したように、因に対する私達の研究態度が真摯なものであれば、より深遠な宇宙の姿が現れるに違いありません。

192 Perhaps I should explain why one and one equals three in Nature's Creative Mathematics. When a positive and a negative get together there is a manifestation; in electricity it is light, with male and female it is an offspring and so it is with all nature. In order to understand a manifested effect the conditions that caused it to be must be understood.

192 おそらくは、ここで自然の創造的数学においては、 $1 + 1 = 3$ になるかを説明すべきでしょう。陽と陰は結合した時、創造の現出が起こるのです。電気においては光、男性と女性の場合は子孫ですし、自然全てについて同様です。現出した結果を理解する為には、それをもたらした諸条件が理解されねばなりません。

【解説】

$1 + 1 = 3$ ということは、反応前の $(1 + 1)$ に創造的な反応が起こると $(1 + 1)$ の各々はそのままだけに、更に新たな (1) が生まれるということです。陰と陽が結びつくことで、もう一つの結果が生まれるという訳です。

無から有を生じるということは、私達の日常でも経験することでもあります。電光や雷、雨や雪等、天候に関わるものは皆、そのような宇宙空間の創造作用の現れと見るべきでしょう。物質的には大気中の水蒸気に変化した形態ということも出来ますが、あまねく大地に水の恵みで潤し、植物の生長を助けるその姿は日々行われている創造の現れとすることが出来ます。

どのような目的で、それらの創造に至ったのか、その深遠なる条件とは、等々、思いを寄せることが必要だと言っています。

18 PAST CIVILIZATIONS

193 I have recently reread the accounts of Lemuria and the Triterian race, and will give them to you for whatever points of interest you may find in them. My friends from other planets have told me that many of the people living on their planet at present have lived upon the earth.

第18章 過去の諸文明

193 最近、私はレムリアとトリテリア族の記事を読み返した所なので、貴方が興味がありそうな点について何なりとお伝えしようと思います。他の惑星からの私の友人達は私に現在、彼らの惑星に住む多くの人達がかつて地球に住んでいたと教えてくれました。

【解説】

レムリアとトリテリアについては、後続の項で本文による説明がある為、ここでの説明は割愛しますが、重要な点は進化した他惑星人がかつて地球に住んでいたことがあるとアダムスキー氏に述べていたということです。

宇宙は学校のようなもので、その人それぞれの学習段階により、惑星から惑星に進級して行くというようなものなのでしょう。そういう意味では、私達が今、ここ（地球）に居る目的を十分わきまえて日々を過ごすべきことに気づきます。いたずらに遠くの教室を願うのではなく、今この地で学ぶべきことを大事にすべきという訳です。

また、宇宙の中で、このような状況にある惑星は良しにつけ悪しきにつけ貴重なものであり、そこに行かなければ味わえない事柄も多いものです。そういう意味では、この惑星が存在する間に、体験すべき魂も数多く地球にやって来ているのかも知れません。

一人一人がどのようにこの惑星での生涯を過ごすかが重要であり、その間に何を学んだかが、次の段階の生涯に役立てられるというものです。

194 In the cosmic book of memory, often referred to as the Akashic Records, there lies the story of action as it has passed through millenniums of time. The ever-active fingers of consciousness have inscribed upon the Primal Essence of the Cosmos the indisputable and indestructible pattern of all motion and manifestation. The history of man as written upon the tablets of stone or upon parchment or paper is but a limited record of existence and is easily lost to the knowledge of future generations, but the Cosmic Record is a permanent structure and he who is able to read therefrom need have no missing pages in the history of life.

194 しばしばアカシツレコードと称される宇宙の記憶の書の中には、何千年もの時を経る行動の物語が眠っています。常に活動的な意識の指先は宇宙の根本的本質の上に全ての行動と創造の現出のパターンを刻み付けて来ました。石板や羊皮紙あるいは紙に書かれた人間の歴史は存在が限られた記録でしかなく、将来の世代の知識に対して容易に忘れ去られるものですが、その宇宙的記録は永久の構造を持ち、そこから読み取ることが出来る者にとっては、生命の歴史において如何なるページも失われることはありません。

【解説】

アカシツレコードが何処にあるか、それがどのようなものであるかについて、私自身は体験もなく、残念ながら知る者ではありません。しかし知る者が居ることは確かであり、何より、こう述べたアダムスキー氏をはじめ、進化した他惑星人にとっては容易にアクセス出来る位置にあるもののようです。

その記憶の形態については全くの推測ですが、本文中の著者の「パターン」という表現に注目すべきかと思われまふ。ご存知のように生物の遺伝情報はDNAやRNAといった核酸物質によって保持・伝達されますが、その内容はA, G, C, Tと略称される4種の塩基の並びから構成されるという、ある意味、簡単な仕組みになっています。これら4種の塩基の配列パターンが全ての遺伝情報を持っている訳です。

また、「生命の科学」の段落¹⁶⁰に「科学者は生命における体験の記憶はその身体の細胞内に記録されることを最近発見しています。そして人体は何兆もの細胞からなっているのです。そして個々の細胞は過去と現在の行動や未来の行動に関する記憶パターンとを運ぶ何千もの分子から構成されています。」と述べられているように、人間の記憶についても分子に記憶されると述べられています。そして更には、こうした分子・原子の振動数の中に本項で言う、アカシツレコードが記録されているのかも知れまふ。

195 Out of the Book of Memory, which the scriptures tell you shall be opened unto all, we have read the story of Lemuria, that mysterious land which sank beneath the dark waters of the Pacific Ocean.

195 聖書が言う全ての者に開かれるとされる記憶の書から、私達は太平洋の暗い水の下に沈んだ神秘の大陸、レムリアの物語について読んだことがあります。

【解説】

レムリアについては、その位置関係からも日本と当然関わりがあるものと思われませんが、残念ながら本章ではレムリアと古代日本とのつながりは述べられておりません。

一方で、現代文明の存続について、足元が揺らいでいることも確かでしょう。そもそも1952年のデザートセンターでのアダムスキー氏のコンタクト自体が、今となれば来るべき地球の変化の時代に備えたものであったと解釈できる状況に至っているように思われます。

こうした中で私達は、実は太古の文明がどのようにしてその存続が失われたのか、宇宙の記憶を辿る中で知ることが出来るとされています。宇宙における記憶が何処に存在しているかは不明ですが、少なからず私達各自がそこに到達出来る能力が備わっていることは確かです。深く心を鎮めて、宇宙における時の流れを遡ることで、これらがどのような経過を辿ったかをいつか知ることが出来るものと思われま

す。過ぎてしまった事象は現実であった以上、様々な所に記憶の痕跡を残しているものです。このような人間の知覚力を高めて行く学習を続ける中では、印象・想念に鋭敏になることはもちろん、宇宙に刻み付けられた光景や想念を感じ取る能力も高められるということになります。

196 Lemuria was a vast continent which included most of the islands of the Pacific - Hawaii, the Easter Islands, New Zealand, the Philippines and other smaller island groups. These islands were at one time the highest mountain peaks of the now submerged land. Lemuria was at one time a civilized part of the world; her people were highly cultured and possessed advanced knowledge of cause and effects. They lived not for self but for the All, recognizing each form as the expresser of Cosmic Intelligence. Each individual knew himself as a servant of the universal force. They went about their duties in a peaceful manner without thought of one man being greater than another, or of one piece of work being more important than the rest. No jealousy or greed existed among them - Lemurian land was the home of one happy family where discord was unknown and equality reigned.

196 レムリアは太平洋の島々のほとんど、ハワイ、イースター島、ニュージーランド、フィリピンその他を含む広大な大陸でした。現在のこれらの島々はかつては海に沈んでいる大陸の高い山の頂でありました。レムリアは一時期、世界の中で文明が栄えた地域でした。その人々は高度な教養を持ち、因と結果について進歩した知識を持っていました。彼らは自分の為に生きるのではなく、各々の形あるものが宇宙的知性の表現者であると認識し、全てのものの為に生きていました。各個人は自分自身が宇宙普遍の力に対する下僕であることを知っていました。彼らは自分達の仕事をするに、一人の人間が他の者より優れているとか、一つの仕事が他よりもより重要だとかの考えを持ちませんでした。彼らの間には嫉妬や貪欲は存在しませんでした。レムリア大陸は不協和音を知らず、平等が行き渡る一つの幸せな家族の家であったのです。

【解説】

ヒマラヤの山奥に海に住む貝の化石があったり、海から離れた中国内陸部にアンモナイトの化石があることは、私達の住む大地には過去に大きな地殻変動があったことを意味しています。また私達の住む日本でも気をつけて見渡すと住宅地の造成現場には地層があり、それらが歪んでいる等、大地は一見、動かないように見えますが、実際には絶えず変動の途上にあることが分かります。

本項で述べられているいわゆるムー大陸の記述は、現代の地球物理の見解とは必ずしも一致していませんが、前項で述べられたアカシックレコードに基づくものであり、真実を指摘しているものと思われま。太平洋の島々に散在する民族が平和で因を理解する民であったことは、今なお、ハワイ島その他に伝承されているものと思われま。

このような巨大な大陸が海に沈んでしまったことは当然、犠牲者も莫大であり、大きな悲しみであります。イエスの「天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は決して滅びることがない。(ルカ21:33)」と言われた意味が、宇宙に流れる原理はこのような結果の変化に係らず、常に一定に作用するものだと述べていたことが分かります。

197 The Lemurians were of the brown race and their average height was about five feet three inches, while here and there a giant would appear. The Alaskans of today resemble them more closely than any other race.

197 レムリア人は褐色人種で、彼らの平均身長は5フィート3インチ（訳注：160cm）である一方、そこに大柄な人物も現れました。今日のアラスカ人が他の如何なる人種よりも似ています。

【解説】

本項で言うアラスカ人とはエスキモー、或いはイヌイトと呼ばれる人々を指すものと思われますが、いずれにしても太古のレムリアには褐色の多少、小柄な民が住んでいたということになります。元来、同一惑星上に多様な人種が発生すること自体、不可解なことですが、同乗記にもあるように、地球は更生施設として様々な惑星から問題児が送り込まれた事情に原因があるように思います。

アラスカといえば、機会があり一昨年オーロラの写真を撮りにフェアバンクスを訪れたことがあり、その中でアラスカ大学の付属博物館を見学したことがありました。その中で驚いたのは、マンモスは温暖な草原や森に暮らしていたという説明パネルが展示されていたことです。日本ではシベリアの凍土からマンモスの氷漬けが見つかったというニュースを聞いたことがありますが、実は、当時、急激な気候の変化があり、絶滅したことが分かりました。

レムリアが太平洋に沈んだ時、多くの人々が周辺の陸地に逃れたものと思われますが、日本人のルーツもそこに起源がある可能性もあるでしょう。「豊葦原に秋津（トンボ）が舞う」地に新しい国作りを求めたのかも知れません。

198 They were a very industrious and active people, highly sensitive and intuitive. They were able to converse with each other through a form of mental telepathy and their actions were mainly guided by the greater intelligence of their being so they were able to obtain marvelous results. They were highly advanced in the science of the cosmos and through their understanding of the laws of action they had a remarkable control over the elements of the earth.

198 彼らはとても勤勉、活発で、高度な感受性を持ち、直観力がある人々でした。彼らは精神的テレパシーの形態を通じて互いに会話することが出来、彼らの行動は彼ら自身の存在のより大いなる知性によってもっぱら導かれていたために、彼らは驚くべき結果を得ることが出来ました。彼らは宇宙の科学において高度に進歩しており、活動の法則の理解を通じて、地球の各元素に対する驚くべきほどの統制を行っていました。

【解説】

本項で書かれているレムリアについての内容は、太陽系の歴史にもかかわる大きな出来事であり、アカシックレコードはもとより、他惑星によって実資料としても記録されているものと思われます。これら知見についての出典もこれまでの他の能力者達のリーディングに由来するような不確かなものではなく、しっかりした記録に基づいているものと思います。

文字通り、レムリアの黄金時代の様子が述べられていますが、注目したいのは広大な大陸全般にわたって高い精神文化とそれに調和した物質文明があったということです。よく、一部の秀でた人々の能力、優れた精神的指導者の逸話については、現文明も引けを取らない部分があるかと思いますが、社会全体としてこのような高いレベルにあったことは大変重要です。そもそも私達の努力の目標がそこにある筈で、一たびそれを達成するやその文明は以後、安定的に発展することでしょう。社会における格差の解消、貧困の撲滅、倫理観の醸成は私達最大の目標です。

身近な例で言えば、かつて日本においては、戸締りをしなくても安全な暮らしが当たり前でしたが、西欧社会からは特異に見られたと伝えられています。アメリカインディアンをはじめ、環太平洋に分布する人々の心情の中には、これら太古のレムリアの気性が受け継がれているのかも知れません。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第18章 段落199 [2011-10-17]

199 Because of their alerted feeling the minerals in the earth were not hidden from them and they made use of all of the elements.

199 彼らの鋭敏なフィーリングの為、地球内部の鉱物は彼らから隠されることなく発見され、彼らはそれら全ての元素を活用しました。

【解説】

前項（198）でレムリアでは人々は互いにテレパシーで会話が出来たとされていましたが、そもそもテレパシーを用いることが出来るということは、人以外にもあらゆる生き物と意思疎通が出来、更には鉱物をも感知出来ることとなります。本文にあるように地下深く存在する鉱脈を探ったり、未知の科学法則に気付くことが出来たものと思われま

す。こうしたテレパシー能力の高さはやがて文明が滅び、生活の土台となる陸地が消滅した後も、その出身者には受け継がれて行ったものと思われま

200 Their architecture and works of art were magnificent in structure and beauty. Their temples were not so much for worship as they were a monument of beauty dedicated to the All-Power whom they served in their daily actions. For these ancient people needed no temple in which to worship - they recognized the All-Being dwelling in themselves and in every form of life upon the earth. Their idealism in the beginning was the virtue of God which was meant to be expressed in man, and because of this idealism they were bestowed with powers unknown to man today. The Lemurians did not abuse or misuse the laws of nature and while they were building up their empire it was an actual heaven upon earth. But like practically all civilizations they had their downfall in time. Virtue became lost in greed and selfishness, and towards the end of their existence they were no different than the present civilization. At last nature took a hand and sunk the land beneath the waters of the Pacific ocean.

200 彼らお建築と美術作品は構造や美しさにおいて壮麗なものでした。彼らの寺院は彼らが日常行動において仕える全能者に捧げられた美の記念塔であった為、拝礼の為ということではありませんでした。何故ならこれら太古の人々は中に入って拝礼する寺院は必要無かったからです。彼ら自身及び地上のあらゆる生命体の中に全能者が住んでいることを認識していたのです。初期における彼らの理想主義は人間に表現されるべき神の徳目でありましたし、この理想主義により、彼らは今日の人間には知られていない諸々の力を授けられていました。レムリア人達は自然の諸法則を乱用したり誤用することはありませんでしたし、彼らがその王国を建設している間、それは地上における本当の天国でした。しかし、実際には全ての文明と同様、やがて没落の時を迎えました。徳目は利己主義の中に失われ、彼らの存在の終り近くには、彼らは今日の文明と何ら変わりなくなりました。遂には自然は手を挙げてその大陸を太平洋の水の下に沈めたのです。

【解説】

ここで述べられているレムリアの寺院については、今日の寺院とは随分と異なるものであることが示唆されています。寺院は通常、本堂の中央奥に拝礼の対象物が祀られています。これは仏教寺院の例ですが、キリスト教会の多くも同様な形式だと考えています。

一方、日本の神社は何故か様子が異なります。拝殿の中には自らを写す鏡がある他は、拝礼の対象物となるものはありません。従来、神道の説明としては、あらゆる物に神宿る中、特別な像など作ることは出来ないとされて来たように思われます。しかし、もし、本文にあるように私達自身の中に全能者が住んでいることを古来の日本人が熟知していたとすれば、神社の社殿は単に心を落ち着けて自然・万物に祈る場としていたのかも知れません。レムリアの文化を私達日本人が引き継いでいるかどうかは分かりませんが、祈りの像を必要としない日本神道は、何か本項の記述に近い要素があるように思います。

さて、もう一方の文明の没落についてですが、現代文明がレムリア最期の頃と似ているとする点についても要注意です。著者アダムスキー氏はこの文明の行く末についても暗に懸念を示していると思われるでしょう。

201 The Golden Age of the Lemurians lasted for approximately three thousand years. During this time they were in contact with Egypt and in fact all of the Asiatic countries but it was not until the fourth of the thousand year periods that their country was invaded by self-seeking individuals from other parts of the world. At that time there were people who came from the territory that is now known as Greece and Rome and settled in Lemuria. These people were of the lighter races; they won the confidence of the Lemurians, intermarried with them and gradually perverted the pure thought of the happy people. This foreign element slowly took upon themselves the rulership of Lemuria. They were hard, fearful rulers and greedy for wealth and power. They began to show favoritism and to instill in the minds of the Lemurians the thought of inequality. Where the people had once served each other for the love of action they were now forced to serve to enrich and empower the few. They learned the meaning of rebellion and selfishness and greed - those things which had never before found place among them. They learned to follow the example of their rulers and work for self instead of the All. They closed themselves to the guidance of their creator and turned into the mortal channel of expression.

201 レムリアの黄金時代はおおよそ3000年続きました。この間、彼らはエジプトと、また実際にはアジア諸国の全てと接触していましたが、4期目の1000年を迎える頃、彼らの国は世界の他の地域から自己を追求する人達によって侵入を受けたのです。その当時、今日ギリシアやローマとして知られる領域から来て、レムリアに定住した人々が居ました。これらの人々は肌の色が薄い人種でした。彼らはレムリア人達の信頼を勝ち取り、彼らと混血し、次第にその幸せな人々の純粋な想念を墮落させて行きました。この外来の要素はゆっくりレムリアの支配権を獲得して行きました。彼らは厄介な恐ろしい支配者で、富と権力に対して貪欲でした。彼らはえこひいきを表し始め、レムリア人の心の中に不平等の考えを染み込ませて行きました。かつて人々が愛の行為として互いに尽くしあった所に、今や彼らは少数の者を富ませ、権限を与える為に奉仕することを強制されました。彼らは反乱の意味や利己主義、貪欲について学んだのです。彼らは支配者達の例示に従い、全ての者の為ではなく、自身の為に働くことを学んだのです。彼らは自分達の創造主の導きに対して自らを閉ざして死すべき表現の経路に向きを変えてしまいました。

【解説】

今日、あらゆる分野にグローバル化の波が押し寄せていますが、一説にはその正体は欧米の市場経済主義、個人主義が新たな富を求めて国の壁を越えて少しでも利益がある場所に侵入しようとしていることだとされています。国際化と言うと聞こえは良いのですが、内容は経済戦争と言うべきもので、国内外の企業が存亡を掛けて戦っていると言うべきものでしょう。

まして太古の国においては、人々は遥かに純粋、従順であったと思われまし、そこに外来の合理思想が入り、自我を高める気風が出来てしまったということでしょう。

一方で、本文に書かれている内容は太古レムリアのみならず、近代アジアについても同じ構図が成り立っているように思います。つまりは失われたレムリアの子孫達が後年、再び西欧文明の侵入を受けるというパターンです。その結果は、従来倫理観や道徳心が薄れ、個人主義、拝金主義が台頭する世の中になりつつあります。その中でもし、私達がレムリアの末裔であるとすれば、私達本来の純粋素朴な精神的特質を生かすべきで、一大家族、相互融和の精神に一日も早く立ち戻る必要があります。

202 This went on for several hundred years until at last the forces of nature demanded payment for their unbalanced conditions - the payment of suffering. They were given warnings of their future destruction if they continued in their unbalanced state but they heeded them not, so the elements turned against them. The earth became unsteady beneath their feet; tidal waves swept their shores and eventually a steady trembling took hold of the entire Lemurian country. For approximately seven months the earthquakes continued and gradually the land began to sink. The waters rushed in and covered the one-time Heavenly kingdom and another civilization was lost.

202 この状態は数百年進行し、遂に自然の諸々の力は彼らの不均衡な状態に対する代償、苦痛の償いを要求しました。彼らはもしそのような不均衡な状態を続けていたら将来は破滅するとの警告を受けていましたが、彼らはそれを心に留めることはありませんでした。その為、諸元素が彼らに反抗したのです。地面は彼らの足元で不安定となり、大波が彼らの海岸を一掃し、遂には間断の無い揺れが全レムリア国を支配しました。約7ヶ月その地震は続き、次第に大地は沈み始めました。水がなだれ込み、一時期天国のようであった王国と文明の一つが失われたのです。

【解説】

今般の東日本大震災では東北地方沿岸部を大津波が襲い、また広範囲に地盤が沈下しました。更に規模も大きく、長期間の揺れがレムリア大陸を襲ったということでしょう。多くの人達が死亡し、大陸自体が消えたということです。太古の文明の消滅はアトランティスについても同様なことが伝えられているところ です。

このように実は大地は決して揺るぎないものでなく、地上の人間の想念レベルに対応して浮き沈みするという事です。また、一方で、常識的に考えれば、片方で広大な大陸が沈むということは、もう一方で何処かが隆起するという事になるでしょう。今日見るヒマラヤの岩の中に貝の化石があることや地層が湾曲している等、巨大な力が加わった痕跡が見える等の証拠は、太古における地球規模での地殻変動があったことを物語っています。

また、このような大きな変動は一方で地球のバランスを崩すことから、自転軸の移動も同時に起こったものと思われます。つまりは北極や南極、赤道も大きく変化したとすれば、棲息する生物種の多くも絶滅したことも考えられます。

このような変動期を迎えるに当っては、当然、様々な兆候があったものと思われますが、現世に汲々としていた人達には自然の警告が耳に入らなかったのかも知れません。今日の私達の状況も類似したものかも知れません。各自が災難を避ける為にも、大地から発せられる印象類を大切に心構えが必要です。

203 The earthquakes and the sinking of the continent were due to natural causes. A shift or change of the surface of the earth comes at certain intervals, but the people of Lemuria had become so immersed in the mortal world of effects that they paid no attention to the warnings given by nature. Had they been alerted to these signs they could have moved to safer territory.

203 地震や大陸の沈下は自然の原因によるものです。地球表面の移動や変化はある間隔でやって来ますが、レムリアの人々は結果である死すべき世界にどっぷり漬かってしまっていたために、彼らは自然によって与えられた警告に注意を払わなかったのです。彼らがこれらのサインに注目していれば、彼らはより安全な地域に移動することが出来たことでしょう。

【解説】

私達が生きる拠り所を何処に置くかということでしょう。土地や建物は一見、揺るぎないものに思えますが、過去の歴史を見ても、末代の子孫や栄華は長続きするものではありません。その一方で、イエスの言葉、仏陀の教えは宮々と人々に伝えられ、大切に受け継がれています。結果の世界のものは、基本が物質であり、一時期確実なように思われても、時の経過とともに色あせ、また変貌して行くということでしょう。万物は流転するの本旨です。

一方、私達の命を支える生命力は常に活動的であり、物質である肉体は老化するにしても、生命力自体は次々に新しい肉体に宿り、活動を継承して行きます。この生命力、生命波動にこそ、永遠性の本流があると言わざるを得ません。この生命波動を身近に感じ続けて行くことが永続性、即ち若さを保つポイントです。

204 In the bible of every race there is an account of creation and the suggestion of an Eden where man dwelt in the perfect state of being, but there is little more than the suggestion and it has been accepted by humankind as a beautiful bit of mythology that has an indifferent effect upon the progress of man in his present state of being. In the annals of consciousness, however, is revealed the truth concerning a race of God-men and their Edenic homeland.

204 あらゆる種族の聖典の中には、創造の記述と人間が完全な状況の中で暮らしていたエデンの園と呼ぶべきものの示唆が書かれていますが、それは示唆以上のものですが、これまでは人間の今日の状態への進歩にどうしても良い程度の神話の美しい小片でしかないとされて来ました。しかしながら、意識の年代記の中では、神人族とそれらのエデンの母国に関する真実が明かされています。

【解説】

自分達の祖先が何処から来たのか、各々の民族の神話は伝説を伝えています。わが国で言えば天孫降臨であり、旧約聖書ではアダムとイブがエデンの園から出たことが発端とされている訳です。

本項では、全ての民族神話の中に、かつて祖先はいわゆる天国に暮らしていたことが記されていると解説しています。つまりは、当初の人間は何一つ不自由の無い環境に暮らしていたことを意味します。これについては同乗記その他で、自然豊かな地球環境に様々な惑星から問題のある人達が連れて来られたと記されていたことを思い出します。まさに禁断の惑星で、十二分に暮らして行ける温暖な環境の中に人々が置かれ、本来の精神的進化を求められたことと繋がっているかも知れません。

しかし、実際には良い所まで昇ったものの、前項 (201) で記されているような問題からレムリアのように消滅してしまった文明もあったということでしょう。このような太古の出来事が伝承されて、エデンの園のような一時的な天国の暮らしの物語が伝わっているという訳です。

205 This civilization was called the Triterian race and from the memory of those people rose the Triton God of the early Greeks. This Grecian god was pictured as half man and half fish, symbolically corresponding with the cosmic record which speaks of the Triterions as the "people of the waves." They were not, of course, half man and half fish but they were the masters of both the waters and the earth.

205 この文明はトリテリア族と呼ばれ、これらの人々への思い出から、初期ギリシャのトリトン神が起こりました。このギリシャの神は半人半魚として描かれ、トリテリア人達を「波の人々」と称する宇宙的記憶に対応しています。彼らはもちろん半人半魚ではなく、水と大地の両方の支配者であったのです。

【解説】

レムリアとアトランティスも結局は所期の道筋から大幅に離れた方向に進んでしまい、文明を継続させることは出来ませんでした。また、今の文明も過去には二度の地球規模の戦争や原子力兵器の使用等の為、崩壊寸前になったことがあるとされています。また、映画「13 days」に描かれるように、実際のキューバ危機（1962年）には米ソの核戦争の間際までの状況になったところ、宇宙兄弟達の尽力があって、戦争が避けられた等、その実態は甚だ危ういものと言うべきでしょう。

しかし、地球上で所期の学習レベルを達成し、揺るぎない進化を遂げた人達がいたということは私達にとって、救いでもあります。また、このことは文明を構成する全ての人間が実はグループ集団として取り扱われることを意味しています。つまり、一人一人が優秀で他の惑星に進化を遂げるにしても、大事なのはグループ全体の動向です。文明が滅んでしまっても元も子もないからです。継続して後から来る者達の場を提供することが重要です。丁度、野生動物にとって群れの存在が重要であるのと同様に、多くの者を受け入れる場所が大切だということでしょう。

本項の場合、トリテリア族がその後、地上を去ったということは、他惑星人達の援助を受けて、全員、別の惑星に移ったことが想定されますし、必要に応じて支援が与えられることをも示唆しています。

206 Idealists have ofttimes visualized the perfect man as an etheric being who dwelt only in the planes of celestial glory and had powers to overcome the laws of nature, but we find the Triterians to be dwelling on the earth in physical bodies and cooperating fully with the laws of nature.

206 理想主義者達は、しばしば完全なる人間を天上の栄光の中にのみ暮らし、自然の諸法則を征服する力を持つ靈妙な存在のように思い描いて来ましたが、私達はこのトリテリア人達は肉体を持って地上に暮らし、自然の諸法則と完全に強調していたことに気づきます。

【解説】

私達人間の最終的な生きる姿は何処かの靈的空間に生きるようなものではなく、常に肉体を持って自然の中に暮らしながら、創造の世界を流れる諸法則を理解し、それに従うことだと本項は明言しています。

即ち、良く聞かれるような靈的存在がある訳ではなく、無音の意識の声が存在するのみです。

そういう意味でも他惑星人こそ、私達の手本とするべき存在なのです。また一方では地球上では様々な宗教や思想が溢れていますが、それらに一つ一つ関わっていたら、どれほどの時間が必要か分かりません。私達は単刀直入に本項で示された道をまっすぐ進むのみです。

207 These were large people and their color may be likened to our bronze or rust, which was probably caused by the intensity of the sun's rays which shone upon the earth at that time.

207 これら（訳注：トリテリア）の人々は大柄な人達で、彼らの肌の色は今日で言う赤褐色もしくははさび色に近いかも知れませんが、それはおそらく当時、地球を照らしていた太陽光の強さから引き起こされていたのかも知れません。

【解説】

トリトン神について調べたところ、多くの想像画が検索され、そのいずれもが逞しい体型をしていることが分かりました。先に記述のあったレムリア人が比較的小柄なアジア系人種であったのに対し、それ以前に地球に住んでいたトリテリア人ははるかに大きい褐色の人達であったことが、本項の記述から分かります。

彼らが具体的に何処の地域を中心に住んでいたかの記述はありませんが、ギリシア神話に伝承されていることを考えれば、地中海沿岸に居たことも考えられます。また、今日、アトランティスやレムリアのように遺物や伝承が伝えられていない理由は、彼らが円満に地球を去ったことにあると考えています。

即ち、地球での本来の任務を全うし、他の惑星に向けて地球を引き払う時、彼らは後年、地球を訪れる人達の妨げとならないよう、自分達の文明の遺物、残骸を全て撤去したものと考えています。全てを自然に戻す形で地球を去ることが、美しい自然環境を保つことになるからです。

そのように考えれば、トリテリア人の痕跡がわずかな神話伝承しか残っていないことも納得が行くことになります。しかしながら、宇宙の記録、アカシックレコードには彼らの活動は記録されていることでしょうし、どのような文明であったかは、各自の能力に応じて探ることが出来るという訳です。

208 These master-men were cosmic beings and during the time they spent in gaining their earthly experience they did not once separate themselves from the Totality. They worked with the elements of the earth as men work with them today but they understood the cause of their manifestations. They were sent to this solar system to partake of the knowledge of matter and this they did under the guidance of Cause Intelligence. This was easy for them to do for they were aware of the natural laws governing all action and they were wise enough to use their knowledge without perversion. The Law of Affinity held no mystery for these people and the elements obeyed their commands to the fullest. The earth was a perfect expression of Edenic beauty.

208 これら達人達は宇宙的な存在で、彼らが地球上の体験を得る為に過ごした期間中、彼らは一度として自分達を全体性から分離させたことはありませんでした。彼らは今日の人々が働くように地球の元素とともに働きましたが、彼らはそれら創造物の因を理解していました。彼らは知識にあずかる為、この太陽系に送られ、彼らは因の導きの下、これを行いました。これは彼らにとって容易でした。何故なら、彼らは全ての行動を支配する自然の諸法則について気付いており、彼らは自分達の知識を誤用することなく用いる程に賢明であったからです。その親和の法則は彼らにとって神秘ではなく、これらの諸元素は彼らの命令に完全に従いました。地球はエデンの美しさの完全な表現となっていたのです。

【解説】

トリテリア人達が所期の目的を果たすことが出来た最も大きな要因は、「因を理解していた」ことにあったと本項は明確にポイントを述べています。人間の最も重要な点はその点にあると言っているのです。表層のみを見てははやがては没落の道を歩む他ありません。

もちろん、私達は物質の世界に身を置いており、その恵みを享受しています。しかし、その物質の真の価値や美しさは、それを絶えず支えている生命力にあると言っても良いでしょう。あるいはその人が創造主を感じ取っているか否かが、その人の価値を決めるとも言えます。

また、トリテリア人が暮らしていた頃の地球は、真にエデンの園であったことも述べられています。地上に住む人々の想念状態が自然環境全般に作用し、良くも悪くもその精神レベルを反映するという訳です。その影響範囲は地表のみならず、地殻深くにも及ぶことでしょう。レムリアの沈没もこの影響があったと解釈出来ますし、現代の文明においても各地で地震や自然災害が多発する状況も、私達の粗雑な想念レベルを反映したものと観る必要があります。

209 The Triterians had no religion as it is accepted today - they were a race of scientists, for they worked not on supposition or myth but on facts. They had no gods but recognized the all-intelligent force and themselves as expressers of it. They did not make the mistake of allowing their mortal mind to judge the creator for they understood cause and effect. They gave no thought to any division between themselves and the cosmic consciousness; they acted with a freedom and assurance of results. Therefore life was peaceful and harmonious. They were not bound by gods or devils for their only state of awareness was that of interblended action. They recognized the necessity of duality in creation but they did not separate the force into good and evil.

209 トリテリア人達には、今日認められているような宗教はありませんでした。彼らは科学者の種族であったのです。何故なら、彼らは想像や神話に基づいて働くことはなく、事実に基づいて働いていました。彼らには神がありませんが、全英知を認識し、自分達をその表現者であると自覚していました。彼らは自分達の死すべき心に創造主を裁かせる誤りをさせませんでした。何故なら彼らは因と結果を理解していたからです。彼らは自分自身と宇宙意識の間に如何なる分け隔てをするような想念を持ちませんでした。彼らは自由に、また結果を確信して行動しました。それ故、生命は平穏で調和あるものでした。彼らは神や悪魔に束縛されはしませんでした。彼らの知覚の唯一の状態は融和混合した行動のそれであったからです。彼らは創造における二元性の必要性を認識していましたが、その力を善と悪とに分離することはしなかったのです。

【解説】

地球上での数少ない成功事例がトリテリアであった訳ですが、彼らの生き方は本文に書かれているように、宗教と言うよりはむしろ事実の観察を通じて因を知ろうとする科学的な心情であったようです。今日で言う宗教的な要素は無く、冷静な科学者の心境であった訳です。

これはその後、時代を経てアダムスキー氏が他惑星人の支援を受けてまとめた「生命の科学」にも通じる所があります。むしろ、様々な経緯を経て、地球人に必要な要素として、古来からの宗教的アプローチではなく、科学的アプローチが適していることが分かった為、同書が取りまとめられたものと思われます。トリテリアの成功事例を参考に編集された可能性もあると考えています。

本項での大事な所は、彼らは常に自らの心の中に裁きに通じる想念や因に離反する印象が発生することを極力、監視し警戒していたことです。また、自然界で行われている食う食われる等の事象に対して、自分の好みで判断することを厳に慎んだことにあります。ありのままの現象に対して、より広い観点からその必要性を理解しようとしていたことにあります。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第18章 段落210 [2011-11-01]

210 Due to the lack of friction or resistance to the life force their bodies remained always youthful and death as we know it did not exist.

210 生命力に対する摩擦や抵抗が無い為、彼らの肉体は常に若々しく保たれ、私達を知るような死というもの存在しませんでした。

【解説】

現文明においても人間の寿命は伸びつつあります。日本では世界的にも長寿国になっています。肉体を若々しく保つ為の秘訣が本項にあるように、本来の生命力に対する素直さにあると示されている訳です。

この場合、太古のトリテリア人についての話でしたが、原理は今日でも変わることはありません。自らを宇宙的想念の自由な発露の媒体として解放することが、自らの肉体細胞を生き生き保つことになるのです。

一方、常にこのような状態を保つことは容易ではないことにも気づきます。いつの間にか生きがいや新鮮さ、感動が失われ、退化の道を歩みがちです。自分に与えられた生命を如何に大切にし、発展させて行くかが各自の大きな責任なのです。

ご連絡 [2011-11-02]

11月4日は、会社の有志の山登りに誘われており、そちらに参加することになりました。

ついては、次回の更新は11月7日になる見込みです。

211 There was no greed or selfishness among these masters of the earth. (In our terms of today we could say that they had achieved their Master's Degree in every subject.) They knew that the substance of the universe is unlimited and indestructible and that there would always be sufficient to meet every need. No man among them engaged himself in the accumulation of material wealth.

211 これら地球の達人達の間には貪欲や利己主義はありませんでした。（今日の私達の言葉を用いるならば彼らはあらゆるテーマにおいて修士の学位を達成したとすることが出来るでしょう。）彼らは宇宙空間の物質には際限が無く、破壊されることがないこと、そしてそれらは常にあらゆる需要に見合うに十分存在することを知っていました。彼らの中には誰一人として物質的な富を蓄積しようと忙しくする者はいなかったのです。

【解説】

私達の地上での生活はお金が必要なことは一面では真理ではありますが、一方で財産があれば安心という訳でもありません。居住する社会情勢や経済環境の変化は目まぐるしいものがあり、そのような環境下で如何に財産を守るかも地球人にとっては大きな関心事です。

これに対して、このような表面的な問題に対しても本項はあるキーを私達に授けています。即ちトリテリア人達は自分達には宇宙から十二分の資源が与えられており、わざわざ一生懸命に富を溜め込もうなどと時間を無駄に過ごすことはないと考えていたのです。宇宙を知るということは、何も星を見上げることばかりを指す訳ではありません。私達の身近の空間にも、既に十分な物質が出現を待っていると言べきなのかも知れません。

因の持つ絶大な力はそれを認める者に惜しみなく物質も更には有益な想念をも降り注ぐものであるからです。かつて、イタリア・アッシジの若き聖人が全ての財産、更には身に付けていた物全てを脱ぎ捨てて、創造の原点に戻ろうとしましたが、それは既存の財産を全て投げ打って、因の力に従ったからに他なりません。

212 There are no descendants of the Triterians, for they served their destined time on this planet earth and were transferred by space craft to another solar system. This is the race which dwelt upon the earth prior to the Biblical records. The fall of man was not brought about until the advent of the Lemurian race. The Triterians left the earth in a virgin state and went on for greater service, but all of the races who followed them are still endeavoring to regain their cosmic birthright. The Triterians worked with the cosmos through intuition and obedience; the other races have chosen to gain their perception through suffering and the observation of effects; living in the bondage of mortal concepts.

212 今日、トリテリア人達の末裔は居ません。何故なら彼らはこの惑星地球における彼らの定められた時間を勤め、別の太陽系に運ばれたからです。これは聖書の記録以前に地球に住んでいた民族です。レムリア族の出現までは人間の墮落はなかったのです。トリテリア人達は地球を原始の状態にして立ち去り、より大いなる奉仕の為に進んで行きましたが、彼らの後に続く全ての種族は未だに自分達の生まれながらの宇宙的な権利を取り戻そうともがいています。トリテリア人達は直観と従順さを通じて宇宙とともに働きましたが、他の種族は自らの認識を労苦と結果の観察を通じて得ることを選択し、死すべき概念の束縛の中に生きています。

【解説】

著者はあえて詳しくは触れていませんが、本文の内容から、宇宙には何らかの統合政府のような存在があり、惑星住民の移動等、重要な事業を担っていることが分かります。トリテリア人達を他の太陽系に移動させたということは、当時宇宙船までは有していなかった彼らに宇宙船団を差し向けて、別に用意された太陽系に移住させたと本文は示唆しているからです。

つまりは、地球という惑星の位置づけが本項から明らかになっていることも、私達は気付く必要があります。即ち、ある種の特別な教室、学びの場である訳です。何故、そのような条件が整っているのか、またその条件とは何かについては、美しい豊かな自然環境に恵まれた星であるとかの何らかの理由があるのかと思います。

いわば特別な役割を持つ惑星なのですが、それさえも十分にクリア出来ないレベルが現在の地球住民の段階と言えるでしょう。そういう意味では、もし、他惑星人が地球人に混じって暮らしているとすれば、彼らにとっては大変劣悪な環境で生きていることになり、相当の訓練になることは間違えありません。アダムスキー氏が事ある毎に宇宙兄弟達を守ったとされていますが、それはそれほどに宇宙兄弟達にとっては、大変住みにくい場所であったからと言えるでしょう。

213 Our return to our natural heritage shall be as glorious as that of the Triterians if we allow ourselves to awaken once more into the unification of all life!

213 もし私達が再び全生命の統合状態に自分自身を目覚めさせるなら、私達の自然の生得権への帰還はトリテリア人達と同様に輝かしいものとなるでしょう。

【解説】

興味深いのは聖書以前の太古の昔から現代に至るまで、人間に求められていることは何一つ変わらないことです。

物質的には太古のものと現代のものとは大きく異なるように思われますが、それは応用面であり、真髄である全ての生命力への帰還融合化は宇宙を貫く文字通り永久の人間昇華の原理と言うべきものです。

その道に達する為に私達は自然界における美しさを探求しようと様々な芸術分野に惹かれということでしょう。その道も本来は自分を通じて宇宙英知を発現する経路に結びつくものです。

その為に何が長年の課題、この文明の問題となっているかを一人一人考える必要があります。日常的な想念レベル、心の反逆と独断が如何に私達自身の進路を誤らせて来たか、各自が分析する必要があります。その道は一人の一生では十分ではないかも知れませんが、トリテリアの民に匹敵する進歩を成す為には、一歩ずつの前進が欠かせません。

214 The Brothers have told me that they have records that have been kept on their planet regarding the civilizations on the earth, and that these accounts of Lemuria and Triteria are correct.

214 宇宙兄弟達は地球上の諸文明に関して保存されて来た記録を彼らの惑星に持っていること、また、こうしたレムリアとトリテリアの記述は正しいと私に伝えてくれました。

【解説】

レムリアの文明は最終的にどのレベルで終りを迎えたのかは知りませんが、崩壊後は再び原始の時代からのやり直しであったことでしょう。太古から続く文明の変遷を見守り続けていたのが、近隣惑星の人達であった訳です。

長期間、地球上の社会情勢の変化を監視して行けば、当然、先々の推移は予見され得ることとなり、時々ポイントで止むを得ず支援の手を差し伸べることもあったと思われます。未然に文明の破壊を回避し、新たな成長分野に向かせる分岐点がその時と思われます。

アダムスキー氏がデザートセンターで最初のコンタクトをした当時、世界は冷戦と水爆実験の最中であつた訳で、再びの世界戦争、更には地球全体の破壊への道を歩んでいたことは、今日では誰の目にも明らかなことです。このように支援の手は差し伸べられることはありますが、基本的に惑星の問題はその惑星の中で解決すべきものであり、混乱と破壊を宇宙に持ち込むべきではありません。私達は各々出来ることを始めること、この惑星を真の進化の道に導く為に各自の任務を果たすことが求められています。

19 THE PARABLE OF THE APPLE TREE

215 It was a warm evening, the discussion which for me was all absorbing overshadowed the beauty of the night, as we relaxed in a patio in suburban Los Angeles.

第19章 リンゴの木の寓話

215 それはある暖かな晩であり、私達はロス・アンジェルスの郊外のある中庭でリラックスしながら、私にとって全てがその夜の美しさをも陰らすほど夢中になる議論でした。

【解説】

生前、アダムスキー氏の周囲には氏の精神的な支えとなるべく、多くの宇宙兄弟達が居たとされています。これら他惑星からの人達は通称、「ブラザーズ」と呼ばれていましたが、時に触れてアダムスキー氏を直接支援したとも聞いています。

本章はその中でも敢えて本文に残して置きたいと思った印象深い会合について記したものだと思われま

す。

私達は通常、宇宙兄弟達を何か私達とは異なる超人のように思いがちですが、事実はそのようなことはなく、外見上は極く一般の地球人と言うことでしょう。中には地球で事業を営む者もいる程です。大きく違う点は彼らは自分自身について良く理解しており、印象類に対する感受性が著しく高いものと思われ

れます。

こうした中、アダムスキー氏は時折、このような人々のグループに招かれ、知識を伝授されたり、彼らと情報交換をしたものと思われま

す。本書が書かれた時代、このような活発な支援活動がアダムスキー氏の周囲で行われていたという訳です。

216 Firkon and another gentleman had brought me to the home of some of their people who are living here.

216 ファーコンともう一人の紳士が私を、ここに住んでいる彼らの仲間の誰かの家に連れてきたのでした。

【解説】

以前にも申し上げたことですが、この地球文明は過去、何度もその存在の危機を迎えましたが、その度に宇宙兄弟達の支援を受けて乗り越えて来た訳です。これまでの一連の宇宙開発事業においても、陰ながら彼らの援助があったとされています。

こうした支援活動は、上空へ宇宙船を出現させることでは成し遂げられる筈もなく、同じ社会に混じって生活しながら、ポイントとなる者を直接指導するというやり方が一般的だと考えます。先進国がその経験や技術を途上国の人々に役立てる際、指導者となる人材を派遣することと似ています。

地球にも長年暮らしている宇宙人が居ることは前にも述べた所ですが、同様なことはかつてグアダラハラのレオポルド・ディアス博士を訪問し、帰国する私を空港へ彼の車で送り届ける際、ディアス博士が通りかかった家を指差して、ここは宇宙兄弟（ブラザーズ）が住んでいる家だと明かしてくれたことを思い出します。博士が亡くなってしまった今では真偽を確かめるすべはありませんが、温暖な地方で中庭（パティオ）のある家は宇宙人の好みのタイプかも知れません。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第19章 段落217 [2011-11-14]

217 Firkon addressing me said, "We had planned to have you meet the One you call the Master, who we call the Wise One, but as those plans were not possible to carry through, He asked me to give you this parable to be shared with the people.

217 ファーコンは私に話しかけてこう言いました。「私達は貴方を貴方がマスターと呼ぶ人物に逢わせようと計画して来ましたが、そうした計画が実行出来なかったため、その方から私がこの寓話を貴方に贈って人々に分かち合っ欲しいと頼まれたのです。」

【解説】

本文中のMasterやHeと大文字ではじまる表現から、著者は一般的な意味というより、何か特別な存在を意図していたことが分かります。どのような方か、私達には想像も出来ませんが、数々の人生を歩まれる中で進化を遂げられた方と言うことが出来る筈です。このような人物との出会いは、アダムスキー氏のみならず宇宙兄弟達の間でも、大変貴重な機会とされていることは、同乗記に記載の通りです。

このような方は仏教では菩薩あるいは如来と称されており、その方への思慕の気持は、その面影を慕うと同時に自らの近くにその存在を意識したいとの思いから、仏教では多くの仏像が建立され、祈りの対象となって来ました。

このような英知や慈悲を体現されている大師（マスター）を人は古来から求めてきたと言えます。道を求める人にとって人生の師とすべき人と出会うためには、遠い距離も厭うことはありません。宇宙哲学を学ぶ私達一人一人にも各自の学びに時折、的確な助言を戴けるような師が現れることを願うものです。

218 "The apple tree lends itself very nicely as a symbol of creation and re-creation. The tree as a parent for the apple started from a seed within whose heart was the cosmic urge to express.

218 「リンゴの木というものは、創造と再創造の象徴として、大変良く自らを役立てています。そのリンゴにとって両親となる木は、その内部の芯の中に表現したいと促す宇宙的衝動がある一つの種からスタートしました。」

【解説】

今、はからずも日本はリンゴの収穫の季節を迎えています。エデンの園でリンゴを食べたことから園を追われたアダムとイブの話のように、何かと人間の根本的課題に引用される等、リンゴはある意味、象徴的な果物と言えるでしょう。

私も以前、リンゴ園でその見事な実を付けたリンゴの木々を間近に見たことがあります。人間と大変、つながりがあるリンゴですが、リンゴ農家でない限り、どのようにリンゴが実るのか、よく知らないのが実情でしょう。

本項はその中の出発点として、リンゴの木の由来は小さなリンゴの種であることを改めて確認せよとしています。10mmにも満たない小さな種の中で、宇宙的な衝動が詰まっていて、それがリンゴの大樹まで生長を促しているとしています。誰もが分かる内容ですが、改めて小さな種に含まれる因の力の大きさを認識するものです。

本講座を含め、よく因を知るように、気付くようにと言われていますが、その内容は決して摩訶不思議な世界に入れというのではなく、極めて明らかな事象に気付くことから生まれるように思います。

「奇跡のリンゴ」の著者、木村秋則さんは、長年、無農薬のリンゴ作りに奮闘し、最期には大成功を収められましたが、植物や動物と会話し、自然界の神秘を学ぶ徹底した姿勢に学ぶ所も多いものです。

219 "From the bosom of mother earth the seed grows to a beautiful and productive tree expressing its full potential in bringing forth fruit. According to the seasons., tender new leaves grow into maturity, delicate blossoms proudly display their color and fragrance attracting pollen and the elements required for the growth of the individual apples. Slowly the blossoms release their beauty that the fruit bearing the re-creative seed may fulfill its purpose.

219 「母なる大地の胸元から、その種は一本の美しく、そして果実をもたらす完全な潜在力を表現する木に成長します。季節に従って柔らかな若葉は成熟へと成長し、繊細な花々が誇らしくそれらの色や香りを表し、花粉やその他の一つ一つのリンゴの成長に必要な要素を引き寄せます。花々はゆっくり、その再創造の力を持つ種が、その目標を成就するよう実を付ける為、その美しさを解放します。

【解説】

リンゴの木の一生、一年の生活はどのようなものかについて本項では解説しています。

種から芽を吹き成人したリンゴの木は春には花を咲かせ、夏には葉を繁らせ、秋にはその実を膨らませます。こうした一年の中で、やがて冬が近づく頃、一年の成果とも言える成熟した果実を実らせる訳です。

大切なことは、一つ一つのリンゴが一年を通じて親の木が時には身を削って育んだ愛情を一身に集めたものであることです。同様なことは人間も含めて、自然界全てに言えることで、親の愛について異論を唱える者は居ない筈です。

更に、より重要なことは、これら実を付けること、増殖や生殖という行為自体が宇宙における再創造の作用を担っていることで、本文中にもリンゴの実を成らせる為に親木が努力するのは、そのリンゴの実が再創造の役目を果たす為だとしています。つまりは子供が自立し再び、自ら再創造の経路として任務を果たすことが出来る為だという訳です。

以上、リンゴについて話して来ましたが、これは人間にも当てはまるように、全ての創造物について言えることだと思われれます。

220 "When the fruit is fully mature it is either picked from the tree, or it drops to the ground - thus it is separated from the parent. If the apple were like man it would exult in its own beauty and free-will, developing the self ego in the world of effects only, forgetful of the Cause parent.

220 「その果実が完全に成熟する時、それは木からもぎ取られるか、地面に落ちることになります。そのように両親から離されます。もしリンゴを人間とするとしたら、それは自らの美しさに有頂天になり、自由意志は自己のエゴを結果の世界のみに発達させて宇宙的な両親を忘れさせることでしょう。」

【解説】

本項の内容は私達一人一人について言えることです。私の出生の発端は何かを考える時、それは誤り無く一つの受精卵に遡ることは明らかです。そのわずかな受精卵から今日の肉体に分化し、発展を遂げた訳です。しかし、本項で言うリンゴの例のように、私達は自分達の肉体を成長させ、遂には誕生の時、その肉体に魂を吹き込んだ宇宙を貫く生命の衝動、更にはその英知なるものに何ら気付くことなく、毎日を送っています。

そもそも私の正体は何なのか、私の使命、創造の目的は何かについて、突き詰めて考えることはして来ませんでした。各々のリンゴが将来、そのリンゴとしての表現発揮が出来るだけの備え即ち種を身に付けさせ、十二分に成長を遂げた後に枝から落ちるように私達も受精の段階から生誕に至るまで十分な慈しみを受けて来ました。そして誕生の後、肉体の両親による支援と各自の責任により、成人となった後は、各々の責任による更なる成長と役割の発揮が望まれているという訳です。

これら私達一人一人が何の目的で生まれ、今日存在しているかを考えて行けば、自ずと各々に対して宇宙生命から期待されている事柄に気付くようになるのではないのでしょうか。

生誕から今日まで、ある意味、エゴの自立心の影響から放浪を続けては来ましたが、本シリーズを学んでいる私達は、ようやく真の目的に気付き始め、その道に一步を踏み出しているところかと思えます。

221 "Man has not experienced the full potential of his being, for he too is forgetful of his cause parent. As a result he wanders in a maze of effects, ever searching for that which has lasting value.

221 「人間は自分の存在の最大限の潜在能力を経験したことはありません。何故なら、彼もまた自分の因の両親を忘れたからです。結果として彼は結果の迷宮の中をさまよひ、価値が長続きするものを求めていつも探しているのです。」

【解説】

私達一人一人はリンゴのようなものであり、親木から今後の全てに対応できる能力を授かった後、この世に生まれて来ました。私達の中には宇宙生命の表現者たらんとする宇宙的衝動を持った生命波動が存在しているという訳です。

私達が行うべきは、私達に託された親木（宇宙意識）の意図を理解し、自らの才能を適切に応用し、創造表現の担い手、経路になることです。

しかし、それらの大切な事柄について教える者が居ないことや、各自のエゴがそのような謙虚さを失っている為、これら大切なポイントを掴み損なっています。その結果、自分達の安定した拠り所を求めて、結果の世界をさまよっているということでしょう。今日、世界各地で起こっている経済問題等の中で、各々自分の財産や生存をどうすれば安定的に確保出来るか、求めて動いていることは、本項の指摘の通りです。

本来、私達はこの世界に生まれ出た時、無一文、無一物で誕生しましたが、その時点で既に私達は十二分の才能と知恵を創造主から受け継いでおり、それらを活用することだけが求められてきたという、生来恵まれた存在である訳です。

222 "Untold opportunities are granted to man to return to his Father's household for there is no smallest part of essence or intelligence that is lost or is not ever active. When the garment known as the body, releases the flame of life to continue its activities elsewhere, the cell intelligence is busy changing the elements of the body into the dust from whence they came. But the flame of Cosmic Intelligence has found a new vessel which contains renewed energy, in which to express. Thereby continually granting to individualized portions of matter the opportunity to evolve to a higher state of service and understanding."

222 「人には自分の父の家庭に戻る為の明かされていない機会が認められています。何故なら、失われたり永久に活動しない真髓や英知はどんなに細かい部分と言えど無いからです。肉体として知られている衣服がその活動をその後何処かで続けるべく生命の炎を解き放つ時、細胞の知性は肉体の諸元素をそれらがやって来たチリに変化させるべく忙しくしています。しかし、宇宙的知性の炎はそれを表現すべき再生したエネルギーが入っている新たな容器を見つけています。その結果、各個人に分かれた物質に対して奉仕と理解においてより高い状態に進化する為の機会を与え続けているのです。」

【解説】

本項では人の臨終の時に起こっている状況について語られています。私達一人一人は各々の人生の中で少しずつの進化しか出来ないものです。限られた結果の世界の中では思い通りに行かないことも多いものです。

しかし、一度きりの人生だったとしたら、私達は到底その与えられた時間の中で、託された真の目的を達成することなど出来ず、進化の道は閉ざされたままになってしまいます。

これに対し、創造主は連続した人生を与えることで、人間に与えた潜在能力の発揮を促し続けている訳です。即ち、臨終の時、肉体は身体の細胞の分解処理を急いでいる一方で、宇宙的な魂は次なる肉体を見つけ出し、移行の準備を進めているというのです。こうして次々に生命力の真髓が伝承されて行く中で、人間の持つ潜在力が次第に開花するとしています。

本講座において度々、「Mortal（死すべき）」という言葉が出てきましたが、これは本項に述べられるように、やがては臨終を迎え、分解する運命にある「その肉体に属する」要素、成分という意味であり、一方、「宇宙的」とは未来永劫、永続する要素を指しています。

223 Firkon continued, "As we have told you before, your book of records that you call the Holy Bible, contains these laws that we tell you of, for did not Jesus the Christ say to the thief on the cross beside His, 'Verily I say unto thee, Today shalt thou be with me in paradise.'? * (Luke 23:43). Therein expressing immediate rebirth.

223 ファーコンは続けた。「私達が以前、貴方にお話したように、あなた方が聖書と呼ぶ記録の書には、私達が今お話しているこれらの法則が記述されています。何故なら、イエス・キリストは傍らの盗人に向かって『まさに私は汝に言うておく。本日、汝は私とともにパラダイスに居るだろう（ルカ23：43）』と言ったではありませんか。その言葉の中には即座の復活が表されているのです。」

【解説】

今、まさに磔の苦しみの中にあっても、イエスには傍らの囚人に死後速やかな再生があり、その者の転生先がイエスと同じ天国のような惑星になることが分かっていたということです。痛みや苦しみはこの地上の肉体に帰属するもので、その人の本質部分である魂とは関わりの無い要素であるということでしょう。

もちろん、各自の人生はその次も恵まれた地に用意されるからといって、今期を粗末にして良いという訳ではありません。様々な事情により、今回の人生ではその意図が成就しなかったり、地上の社会では理解されなかったりして、十分な評価を受けなかったとしても、転生の際に問題となるのは、地上の評価でなく魂のレベルの評価ということでしょう。即ち、聖書の例のようにたとえ罪を犯したとしても、十分改心を遂げ、魂が純粋に昇華した者は、次のステップの環境に暮らせるようになるという訳です。

しかし、何と言っても今の人生こそ、各自が期待され、与えられたチャンスであり、自分自身と同時に周囲の人達にも好影響を与えることが臨まれています。十分自己の役割を果たすことが出来れば、次なる人生にも道は繋がって来ることに留意したいものです。

224 "Tomorrow you will be privileged to meet the one that you have known as your earthly wife. She is now a young woman living on Venus. She will not recognize you as her husband, but rather as a Cosmic brother. Neither will she wish to be reminded of her life upon earth, for her present life is free from the bondage of self and self interests."

224 「明日、貴方は貴方の地球での奥様であった方にお会いすることが許されるでしょう。彼女は今、金星で少女として生きています。彼女は貴方を夫としてではなく、宇宙的な兄妹の一人として受け止めることでしょう。また彼女は地球上での自分の人生を思い出したいとも思わないでしょう。何故なら、彼女の現在の生活は自己や自己の興味による束縛から自由になっているからです。」

【解説】

本講座のまとめに臨んで、著者アダムスキー氏が私達に伝えたのは、人間の真の生命の継続性についての例示です。もともと「生命の科学」をはじめ、一連の学習書には学習者が自ら悟ることを重視しており、敢えて証拠というようなものが示されていなかったように思われます。言い換えれば、何か一つ証拠を示せば、人々の関心はもっぱらその証拠の分析に集中してしまい、本質的なテーマへの関心は薄れてしまうからです。

しかし、講座の最期にあたって、唯一、具体的な事例が明らかにされていることとなります。その理由は古来から転生については様々な概念が万延しており、正しい情報を明らかにしておく必要があったからと考えます。つまり、霊界等の別世界が存在する等の誤った概念を一掃する為にも、事例紹介が必要であった訳です。前項（223）同様、死後、瞬間の転生があること、更には転生には空間を越えて他惑星にも及ぶことなど、本事例の示す意味が大きいと言えます。

225 On the following day this promise was fulfilled. It was an experience that I shall never forget and proof positive that we never die.

225 翌日、この約束は果たされました。それは私が決して忘れることのない体験であり、私達が決して死ぬことはないという強い証でした。

【解説】

かつてイエスが身をもって教えていたことが、20世紀になって再びアダムスキー氏の体験を通じて、地球人に与えられたということです。この間の出来事は、アダムスキー氏の「金星旅行記」に記載があるとおりです。

かつての夫婦が転生後、どのような関係になるか等、その再会時のストーリーは興味深いものがありますが、大事なことは一人一人が自らの進化の道を歩んでいるということでしょう。かつては生活を共にして互いに学ぶべきものを身に付けた後は、各々新しい人生を歩むという訳です。

さて、「宇宙哲学」の実質的な最終段階にあって、人間の転生、復活について著者は自らの実例を初めて示しながら、読者に確信を与えようとしています。生命の永続性を理解していないのは地球人だけなのかも知れません。肉体という結果のみに注目していれば、死というものに囚われることも分かりません。しかし、一般に人間以外の生物の最期は、日常的な捕食関係もあり、極めて穏やかなように思います。身内の死に当って多くを悲しまないのも、生命の連続性を知っているからではないかと思っています。

私達は一生の間で全てを達成することは出来ませんが、その永続する人生の中で、いつの日かイエスに期待される存在になることが出来るように思います。そういう意味でも、本項で言う転生の事例は大変意義深いものがあります。

20 CONCLUSION

226 The old accepted thought patterns of people all over the world are changing rapidly. The underprivileged are crying for peace and equal rights with those who have enjoyed the good things of life. Even the orb of earth is shifting her position and yielding to the influences that are playing upon her body. There is nothing awesome or supernatural in this change, it is an urge that is felt by the earth and the inhabitants upon it at the change of every cycle.

第20章 結び

226 全世界の人々の古くから容認されて来た思考パターンは急速に変化しています。恵まれない人々は人生のうまい仕事を享受して来た者達と同じ平安と平等の権利を要求して叫んでいます。地球の球体でさえ、その位置を変えようとしており、その惑星体へ及ぼす影響を生み出しつつあります。この変化には何ら恐ろしいことでも、超自然的なことでもなく、それは毎回の周期の変化において地球と地球上の住人によって感じ取られる一つの衝動なのです。

【解説】

この地球、或いはこの太陽系全体が大きな変化を前にしているのかも知れません。しかし、それは宇宙における一つの周期の終りにさしかかっているに過ぎないことを本項は伝えています。地球全体が変化しようとしているのです。

それにつけても本項で記述されている事項は50年前の記述（「宇宙哲学」の執筆は1961年とされています）とは思えない程、現代の世情を描いていることが分かります。即ち、現在、米国で起こっている「格差是正」の要求デモは平等の権利を求める一般大衆の抗議行動であり、「アラブの春」と呼ばれる中東の運動は既存の体制への反発で、両者ともに、本項の記述そのままの内容です。

また、日本をはじめ世界各地で比較的大きな地震が頻発すること等を考えれば、この地球自体が何か身をよじるような動きにあるように思われてなりません。やがては新しい姿勢に落ち着くものと思われませんが、まずは、こうした変化の時代に私達自身が生きていることを自覚する必要があると申し上げねばなりません。

227 We are in the Space Age and many of man's egotistical opinions will have to go to make room for our place as a member of the interplanetary family. Theories will be replaced with facts, and our perception will be broadened to encompass, to even so small a degree, the possibilities and purpose of life.

227 私達は宇宙時代の最中に居ますので、人間の自己中心的な意見は惑星間家族の一員としての私達の居場所を作り出す為にどけなければならないでしょう。諸理論は事実と置き換えられて私達の知覚は、ほんのわずかであったとしても、生命の諸々の可能性や目的を成し遂げるべく拡がることでしょう。

【解説】

この地球の大きな転換期に向かっている私達が目指すべきは、宇宙を中心とした世界観だという訳です。言い換えれば、現状の行き詰った諸問題の解決を与えるのが宇宙であり、宇宙進出だということです。

しかし、この宇宙進出も私達が惑星間家族の一員にならなければ、多くの発展は望めません。その為に、私達は自らの自己中心的な意見を捨てて、率直な姿勢でそのメンバーに加わるよう努力しなければならぬのです。

かつてアポロ13号が宇宙船の故障により月着陸を断念した事例がありましたが、それは一説に月に核物質を持ち込もうとしたため、宇宙人から阻止されたのだという話がありました。地球人は平気で武器を宇宙空間に持ち込もうとしています。これらは当然、彼ら宇宙兄弟達から阻止されることになる筈です。

解決は宇宙にある訳ですが、その宇宙に出て行くためには、私達地球人は宇宙に利己主義を持ち込むことのないよう、改心する必要があります。

228 Those who have accepted the reality of visitors from other planets are most desirous to meet these people and wonder how they can tell the real ones from the imposters.

228 他の惑星からの訪問者達の現実性を受け入れて来た人達は、これらの人々にとっても逢いたいと願っていますし、どのように本物を偽物から区別できるか思い巡らせています。

【解説】

昔から人々はコンタクトマン（宇宙人と交流を持つ人）や宇宙からの訪問者に憧れ、容易にその偽物を信じた結果、多くの人達が苦い経験をして来ました。まして社会情勢や地球環境が荒廃して来ると、不安感が掻き立てられ、わずかな真理の断片を見せられただけで、残念ながら多くの人々は容易に偽預言者の餌食になってしまうのです。

しかし、私達は世の中に出回っている偽物をしっかり見抜く力を身に付ける必要があります。如何に高尚なことを述べていても、ちょっとした所作で、その人物の本質が見えてしまうことも多いものです。もちろん、私達は洞察力やテレパシー能力が必要ですが、そのような高度は能力を用いずとも、人格としてのその人物を見れば、良し悪しは十分わかる筈です。

アダムスキー氏の協力者であった故エマ・マーチネリ女史から生前伺った話では、ある宇宙人は普通の電気店を営んでおり、時々エマを尋ねて来たとのこと。 「アイスボックス・チャーリー」とあだ名で呼ばれていたその男性は、特にエマの前では自分が宇宙人とは名乗らないものの、アダムスキー氏からはブラザーズの一人だとエマには打ち明けていました。時に彼はエマにクイズを出し、エマの洞察力を試したそうです。残されたエピソードからは、陽気な青年のように思われました。

本講座を学ぶ私達は、これらの宇宙人と出会う場面もあるかと思いますが、大事なことは私達が如何に相手の正体に気付くかであり、その為の感受性を維持しながら、日常生活を送る必要があるということです。

229 And the people may truly wonder, for our new friends will be recognized only by those who are consciously alerted to impersonal feelings; they will not be recognized by their personal appearance for they will be as any other person upon the street, but they may be known by their words which will be totally impersonal and without judgment of any condition or person.

229 そして人々は本当に思い巡らすことでしょうか。何故なら私達の新しい友人達は非個人的なフィーリングに対し意識的に警戒している人にもみ認識されるだろうからです。彼らはその個人の外見からは認識されることはないでしょう。彼らは通りのその他の人と変わりはないものの、彼らが話す全くの非個人的で如何なる状況や人物に対しても裁きを持たない言葉によって気付かれるかも知れません。

【解説】

UFO（宇宙船）に出会うことも、宇宙人（ブラザーズ）に逢うことも、私達の願いの一つであるかも知れません。アダムスキー氏存命中には、多くの協力者（コーワーカー）が氏の周辺にブラザーズの存在を目撃して来ました。アダムスキー氏の活動は氏一人で成し遂げられたのではなく、多くの宇宙兄弟達の支援によっていたという訳です。

アダムスキー氏の死後、はや半世紀に近づこうとしていますが、氏が打ち立てた「生命の科学」をはじめとする宇宙哲学の意義は、この混迷を深める地上にあっては、ますます重要なものとなっています。当然、この壮大なプログラムを担う宇宙兄弟達は今も何らかの形で、この計画を進めている、あるいは支援する態勢にあると思います。

そうした中で、この問題に比較的理解を得ることが出来た私達は、各自改めてそのプログラムの意義を思い、その担い手になるべく努力することが望まれています。その一環において宇宙船の目撃や宇宙人とのコンタクトを目指す場合は、彼らから有形無形の支援が得られるものと思います。彼らとの意思疎通は想念波であり、差別の無い心を整備して、その時に備えるということでしょう。

230 Appearances! what imps of deception they are!

230 外見！それらは何という騙しの小悪魔でしょう。

【解説】

聖書には弟子達に向かってイエスが自分を誰だと思うかと問うた時、ペテロだけが「キリストです」と答えてイエスから祝福されたとあります。それはペテロがイエスという肉体の内面にある本質を見抜くことが出来たことをイエスが喜んだことを伝えています。

また同様に聖書には、イエスの復活後の場面で、イエスが弟子達の前に現れても、弟子達はイエスに気付かず、しきりに十字架の痕跡を見せるようイエスに懇願する場面が記述されています。つまりは、この場合は一見別人のような姿に復活したイエスを弟子達は見抜くことが出来なかったことを伝えているのです。

私達はその認識の大部分を視覚から、即ち外見から下している為、そのものの内側の存在や価値に気が付いていないという訳です。内側の因に繋がる本質と、外側に表現された結果をバランス良く観ていないということが最大の問題点だとう訳です。

また、注目すべきことは、本講座の「むすび」に何故、著者は改めて宇宙兄弟達（スペースブラザーズ）との出会いについて記述したかを私達は考える必要があることです。そのことについては全くの私見ですが、私は講座を学ぶ人達には、究極の姿として、これら宇宙の友人達とのコンタクトし、彼らから引き続き多くを学んで欲しいと著者自身が望んでいたからではないかと考えています。

各自の次なる飛躍の為にそのようなステップが用意されているのかも知れません。

231 Shall we know the space people by the miracles that they perform? Shall we acclaim a man Messiah because he may walk through fire unscathed or multiply a loaf of bread to feed a multitude? No, for there are many magicians who can to all appearances to the physical senses do the same; and did not the Christ say of the latter days of his dispensation, "False Christs and false prophets shall rise and shew signs and wonders to seduce if it were possible even the elect." So we cannot tell a man's true value by his ability to read our mind or perform works of magic.

231 私達は宇宙人達を彼らが演じる奇跡によって知ることになるのでしょうか。私達はその者が火傷を負うことなく火の中を歩き、あるいは大勢の者に食べさせる為、一個のパンを増やしたりすることで、その者を救世主と称賛することになるのでしょうか。いいえ。何故なら、肉体の感覚にとってこれら全ての見せ掛けの同じことが出来る多くのマジシャンが居るからです。また、キリストはその時代の晩年にこう言われました。「偽キリスト達と偽預言者達が起こり、選ばれた者をも出来れば誘惑しようと、しるしと不思議を示すだろう」と。ですから、私達は人の真の価値をその者が私達の心を読んだり、マジックの業を演じる能力によって語ることは出来ないのです。

【解説】

これまでも多くの人達がいわゆる超能力者に惹かれて来ました。これから起こることを予言したり、肉眼では見えない筈のものを透視したり等、一部の人達はそのような能力を有していることは確かです。もちろん、マジシャン等、いわば偽者が多い中では、これら能力者の価値は十分にあることは確かです。しかし、本項で著者が述べたいことは、私達の師としてこれらの能力者が全て適しているということではないということです。

本当の人間の価値は、こうした単なる能力にあるのではないと著者は述べているものと思われます。地球を訪れている友好的な近隣惑星人は古くからの地球の歩みを見ており、私達が今、どのような局面にあるかを地球人自身より、はるかに理解しています。それ故、本当に現代の私達に必要な知識しか授けることはなく、まして自らの能力を見せびらかすパフォーマンスを行うこと等、考えられません。自らが一般の地球人ではないことを公衆の前で示すことは身辺上、極めて危険でもあるからです。

かつてイエスが無理解な当時の地球人によって磔刑を受けたように、地球の保守勢力は他惑星の文明の流入には過敏に反応するようです。宇宙人（エイリアン）が残虐であるとか、宇宙人の地球侵略に対抗するストーリーの映画が盛んに造られるもの、こうした動きの一環であり、正常な宇宙文明との交流の妨げになっています。

232 The space people will speak of nothing but the practical life - a life that is established upon earth, for earth is an integral part of the universe - a life that is livable here and now, for if there is to be heaven it must be established upon earth. No visitor from another planet has yet given any teachings that were impossible to live in this world; they all work according to the law of the Cosmos which is itself practical. They, as the wayshowers who have come before, will teach nothing that is mysterious or fanatical nor will they deal in emotionalism. They will speak of the unity of all life by the Breath of the Cosmic Father expressing through the forms made of the substance of the Mother Planet.

232 宇宙人達は実生活についてのことしか語ることはないでしょう。それは地球上で確立された生活についてです。何故なら地球は宇宙の統括された一部分であり、今日ここに生きて行ける生涯であり、もし天国というものがあるとすれば、それは地上において打ちたてられなければならないからです。他惑星からの訪問者は誰一人この世界で活かすことが不可能な教えを授けることはありませんでした。彼らは全て、それ自身実用的である宇宙の法則に従って働いています。かつて訪れた導師としての彼らは神秘的なものや狂信的なものは何一つ教えることはありませんし、過激な感情を授けることはないでしょう。彼らは母なる惑星の物質から作られた形あるものを通じて表現されている父なる宇宙の息吹による全生命の一体性について語ることでしょう。

【解説】

本項が「宇宙哲学」の本文の最後に記されている部分です。私達も含め全ての学習者が求める導師は、結局、一樣に同じ内容を伝えることになると本項は述べています。過去、何世紀にわたって地球には多くの教師が訪れ、私達にポイントとなる基礎知識を伝えて来たのです。

しかし、私達はとかく「奇跡を起こす」ような能力者に惹かれ、またそれらの者の言いなりになる道を選ぶ一方で、これら地道な教えには興味を示さないでいます。その結果、巷では神秘主義（サイキック）が流行し、空想に基づく娯楽が増える一方で、本当の意味で因について学ぶことは行われていません。

本項では他惑星人は仮にコンタクトしても個々人に対応した具体的な生活指導を行うとしています。私達が生きる人生に役立つ基礎知識しか授けることはないという訳です。

私自身、残念ながら、こうした宇宙人から直接指導を受けるような場面に出会うことは今までありませんでしたが、いくつかの場面で助けられたことはあるように思います。

随分昔の話になります。若い頃、米国に行った際、丁度、中西部の飛行場で便の乗り継ぎの場面でした。西海岸から乗って来た便から荷物を引き取り、広い空港ロビーをうろうろしながら次の航空会社のカウンターにようやくたどり着くと大勢の人ばかりでした。乗るべき便名の欄に「Cancelled」の表示。実は、当時、この表示が何を意味するか、分からなかったものです。やがて現地が雪で飛行機が飛ばないことがわかり、既に夜もふけている中、これからどうしたものか途方に暮れてしまいました。しかし、しばらくして一人の紳士が私に近づき、自分も同じ飛行機に乗る予定だったが、飛ばないのでレンタカーで行こうと思うが、一緒にどうかと私に声を掛けてくれました。私はこの申し出に感謝し、航空券の払い戻しを済ませた後、その男性が用意した車に乗り込み、陸路で目的地に向かいました。

今でも覚えているのは、真夜中、すっかり凍結した路面を手際よく彼が車を運転し、3、4時間後、私の滞在予定のホテルまで送ってくれたことです。彼自身は食品工場を経営しているようで、かつて日本にも行ったことがあると話していたことを記憶しています。

読者の中には、このような体験の中で、何処が宇宙人なのかと言う方もあるとは思いますが、ここで詳しくは語れませんが、その旅行の中で重要なポイントがその場面であり、私自身としては、まさに必要な時に手を差し伸べてくれたと今もって感謝しています。

実は、こうした私の対応は当時、今以上に不景気であった米国社会の中では一般的には大変危険な行為であったことが後から分かったのですが、支援を申し出た紳士を見た瞬間、私には何らの警戒心が起こらなかったのは事実です。私自身、当時、助けを受けたその人の身元を調査しようなどと思うことはなく、今日に至っています。

多くの皆様が、同様な体験を持たれているかとは思いますが、私達の側で他惑星からの訪問者を受け入れる態勢が出来ていれば、そのような機会も遠からずやって来るものと思っています。

21 PRACTICE

233 An easy method that you may use if you wish to keep a check on your thoughts through the day is this:

第21章 実践

233 貴方が日常を通じて貴方の諸々の想念をチェックし続けたいと望むなら、貴方が用いることが出来る簡単な方法があり、それは以下の通りです。

【解説】

結局のところ、私達が相手にすべきは自らの心ということになります。肉体上、私達は進化した他惑星人と同等の素材や機能を授けられており、彼らとの違いは自らの心の発達段階でしかないということです。

古来から仏教をはじめ、様々な教えの中で自らの心に対する対峙の重要性について説かれて来ました。本項はこれまで宇宙哲学の本文を学んで来た者に対して、日常実践できる一つの方法について示しています。

詳しくは次の項で示されますが、アダムスキー氏が推奨しているのが、想念観察の手法です。もちろん、私達は私達自身をも裁くべきではありませんが、大事なのはこれまでも本文中に度々出てきたように「警戒」の状態を作ることです。つまり、自分の心の中にどのような想念が湧き上がり、自らがどのような行動を起こそうとしているのかを観察せよということです。

丁度、チベット寺院に大きな目のシンボルが描かれているように、自らを観察することで、自ずと心が正常な道を歩むようになるという訳です。

先日、あるテレビ番組で瀬戸内寂聴さんが出家をする時、師匠の今東光氏から、「これからは一人を慎め」と言われたと述べられていました。自分自身を見つめる存在はもちろん、自分自身なのですが、それは自らに仏（ほとけ）の姿勢を取り入れ、精進する姿なのかも知れません。

234 Make a ledger -

On this side write _____ And on this side

Unselfish - Understanding. _____ Selfish

Thoughts that remind me _____ Disturbed

of my Cosmic Unity with All Life. _____ Dissatisfied

_____ Judgment of others. Seeing effects not causes

Become the observer of your own mental process and place a check under the column representing your thoughts. At the end of the day tabulate your score. If this is done over a period of time you will find that your old thought habits that caused confusion and disorder in the mind and body have disappeared.

234 帳簿を作りなさい。

こちら側には以下の内容を記入 こちら側には以下の内容

非個人的—思いやり 利己的

全生命との宇宙的—一体性を思い 不安感

起こさせる想念類 不満

他人への裁き。因を観ずに結果を見ること

貴方自身の心のプロセスの観察者になって、貴方の想念を代表する列の下にチェックを入れます。一日の終わりに貴方の点数を集計して下さい。これがある期間為されますと、貴方は心と肉体にこれまで混乱と無秩序を引き起こして来た貴方自身の古い想念習慣が消失しているのに気付くことでしょう。

【解説】

「宇宙哲学」の本文の最後に記述されているのが、この「実践」の内容です。いわゆる想念観察法というものですが、この取扱いの状況から、著者アダムスキー氏は読者に対し、あくまで一つの手法として紹介していることが分かります。

こうすることで心の習慣が解消しますと伝えている訳で、何が何でもこの実践法でなければダメだという訳ではないように思われます。

自分の心を客観的に見守る中では、時時刻刻様々な想念が行きかい、その中には貴重なアイデアもあれば、つまらぬ事柄にくよくよする自分の姿も見えて来るものです。また一方では、こうした観察だけで終わってしまい、行動を伴わない想念ばかりでは、新しい体験も増えず、学習の広がりもない等の問題も生じるように思います。掴んだ想念を実践する中で新しい体験を得ることが出来るからです。

自分自身の観察者や評価者になる為に、各自の工夫が必要だということでもあります。

IMPORTANT INSTRUCTIONS

235 To get best results from this book, keep a pencil and a sheet of paper hand, As you read each page and each line, jot down each impression that you receive. Do not read too much at one time. Best results will be obtained by reading one page and then writing down all your impressions before proceeding on.

重要な学習法

235 この本から最良の成果を得る為には、鉛筆と紙1枚を手用に用意しなさい。貴方が各頁、各行を読み時、貴方が受け取った一つ一つの印象を書きとめなさい。一時にあまり多くを読んではいけません。最も良い成果は1頁読んだ後、先に進む前に貴方の得た全印象を書きとめることによって得られることでしょう。

【解説】

実はこのシリーズでは、本項と同じ趣旨の内容をこれまで続けて参りました。本文では1頁とありますが、ここでは1段落毎に印象を書き記しています。

多くの「読む」という行為の中で、例えば新聞のようにニュースを知る、必要な情報を得るというレベルでは速読も役に立つかも知れません。試験の長文理解も素早く読むことが出来れば、その後の判断に役立つでしょう。

しかし、宇宙哲学をはじめとする神妙な分野では、頭の中、あるいは心の中に本文の言葉を記憶するだけでは、字面だけの浅い知識に陥ってしまいます。何よりも「言葉として覚えていることで、自分が理解している」と錯覚してしまう危険性があります。私達にとって重要なのは、何よりも著者がどのような理解や認識の下にそのような記述をしたかであり、著者の理解内容に迫る洞察力や感受性を身に付けることだと考えています。

そういう意味では、私達は本分の文字からどのようなことを連想し、重要と考えたか、一瞬一瞬やって来る印象類は読者に対する宇宙からの贈り物とも言えるでしょう。この贈り物を書き留めて(即ち、因から結果の世界に書き留めて)、他の人々と共有することが最も望ましいことは言うまでもありません。一人一人の理解を深める仕事が皆の理解にも役立つ可能性があるからです。

なお、本項「巻末参考」は「宇宙哲学」の本自体に記載があるものではなく、何故か同本に添付されていた一文です。重要なものとして合わせて本シリーズでも紹介するものです。

236 After you have read the whole book, read it again, This time you will notice that your impressions have changed, yet they will blend with the first impressions. This is the self-developing process. Read the book over and over, taking notes of your impressions each time. You will get new impressions with each reading.

236 一冊全部読み終わった後は、再び読むことです。今回は貴方の印象は違ったものになったと気付くでしょうが、それでもそれらの印象は最初の印象と混和したものになるでしょう。これが自己開発の手順です。その本を何度も何度も読んで、毎回貴方の印象類のノートをとることです。貴方は毎回読む毎に新しい印象を得ることでしょう。

【解説】

他惑星人によって伝えられたいわゆる哲学3部作（「テレパシー」、「宇宙哲学」、「生命の科学」）について、私達は未だ十分、その価値を認識していません。それらの内容は元来、深遠なものですが、文字として表現されている為、字面だけの理解では本来の深部の概念まで到達することはできません。

これに対し、少しでも本質に近づく為には、繰り返し少しずつ読む中で、自分が気付いた事柄を記録し、整理しながら、一歩ずつ前進することが必要となります。もちろん最初は浅はかな理解でしかありませんが、繰り返し学ぶ姿勢の中で真理は自ずと明かされるとしてあります。

従来、既存の宗教は教典を暗記することを重視して来ましたが、本講座においては自らキャッチした印象を大切に扱うことで自習効果を高めるとしてあります。これらの方法は教師が近くにいない中でも各自が取り組める手法であり、アダムスキー氏死後の私達にとって大いなる救いとなるものです。

毎回、ノートを取りながら、少しずつ読み進めることは、自分自身を宇宙深部でのアンテナとし、湧き起こる想念を汲み出す大いなる手法として大切に扱う必要があります。

237 This shows that you are evolving higher and higher as you read the book. In this way you become your own teacher. Don't forget to keep notes at all times. Read these notes over from time to time and see how they blend with one another. Keep doing this until you no longer receive new impressions from the book.

237 このことは貴方はその本を読むに従って、より高く進化して行くことを示しています。このようにして貴方は貴方自身の教師になるのです。いつもノートを取り続けることを忘れないで下さい。時々はこちらのノートを読んで、それらが互いに如何に融合しているかを見ることです。このことを貴方がその本からもはや新しい印象を得なくなるまで続けるのです。

【解説】

毎日読む中でノートをとることが如何に大切であるかを本項は解説しています。他人ではなく本と自分との対話の中で必要なことが次第に明らかにされるという訳です。もちろん、本来からすれば導師の指導を受けることがベストなのでしょうが、現実には難しいことです。他惑星人がこれら哲学三部作を地球に残したのは、このような自習の機会を授ける意図もあったものと思われま

す。本講座を通じてはからずも私が体験して分かったことは、当初の「生命の科学」を開始した頃の「解説」は今見ると恥ずかしい程の内容でしかないことです。回を重ねるにつれ、多少なりとも物の見方が深まったのかも知れませんが、継続することで少しずつ伸びるものもあるようですし、それが私達の希望の光でもある訳です。

238 In the meantime you have written your own book. To continue in the development of yourself, follow the same process with the notes you kept as you went along. In this way you keep developing as long as you live without any further help. You are using your REAL SELF as the teacher of your present self. There is no end to learning in all fields of life if you use these methods. GEORGE ADAMSKI

238 こうする内にも貴方はご自身の本を書いたことになるのです。貴方自身の発達を継続させる為にも貴方が進む際にノートをつけるという同じ手順に従うことです。このようにして貴方はそれ以上の助けを借りることなく、貴方が生き続ける限り、進歩し続けます。貴方は貴方の「真の自分」を貴方の今日の自己に対する教師として活用しているのです。もし貴方がこれらの手法を用いるなら、生命の全ての分野に学習の終りというものはないのです。ジョージ・アダムスキー

【解説】

本に記されている事柄を少しずつ読み進め、その際に自分が得た印象、納得した事柄についてこまめにノートをつけることが重要だという訳です。そうする中で、私達は自分自身の内側にある「真の自分」を自らの教師としていることが本項では明かされています。

つまりは、印象を記す作業の中で私達はいわば、私達に内側にいらっしゃる創造主を頼りにした生き方を始めているとも言える訳です。

よく日記をつける意義について語られることも多いように思われます。中でも私自身、その本の全部を読みきった訳ではありませんが、ローマ教皇であったヨハネ23世の「魂の日記」は有名であり、日々の生活の中で自らの心を統制し、全てを創造主に向けた生活を送る人の信仰の日常を、他の如何なる著作以上にそこから学ぶことが出来るとされているところです。同様に書物を読む中で毎回、自分でノートをつけることが進歩の上で大変良い方法であると著者アダムスキー氏が、読者に重要なポイントとして伝えているのです。

【ご挨拶】

長らく連載を続けて参りました本シリーズも、今回をもって一応の区切りを迎えました。

これまでお付き合いいただいた皆様、コメントをお送りいただいた方々には、改めて御礼を申し上げます。

今後、年内はしばらくお休みをいただき、年明けから再び、「生命の科学」から新たな再スタートを予定しております。また、その他、ご要望やご意見につきましては、コメント欄を經由してお寄せ戴ければ幸いです。

少しばかり早いのですが、皆様、良いお年をお迎え下さい。竹島 正

新ブログサイト開設のお知らせ [2011-12-31]

本ブログサイトは来年も「生命の科学逐次解説」としてアダムスキー哲学を中心に再開するつもりですが、それとは別に来年から新たに「ジョージ・アダムスキー アーカイブズ」と称して、限られた関係者以外知られていないアダムスキー氏に関する未公開資料を公開して行くこととしました。
(<http://georgeadamski.blog.fc2.com/>)

当初は故エマ・マーチネリ女史から戴いたアダムスキー氏からの書簡をご紹介しますつもりです。

何分不定期になると思いますが、本ブログサイトと合わせてご覧戴ければ幸いです。

2011年12月31日

竹島 正